秋田県文化財調査報告書第209集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI

―― 竹 原 窯 跡 ――

秋田県埋蔵文化財センター

1991・3

秋田県教育委員会

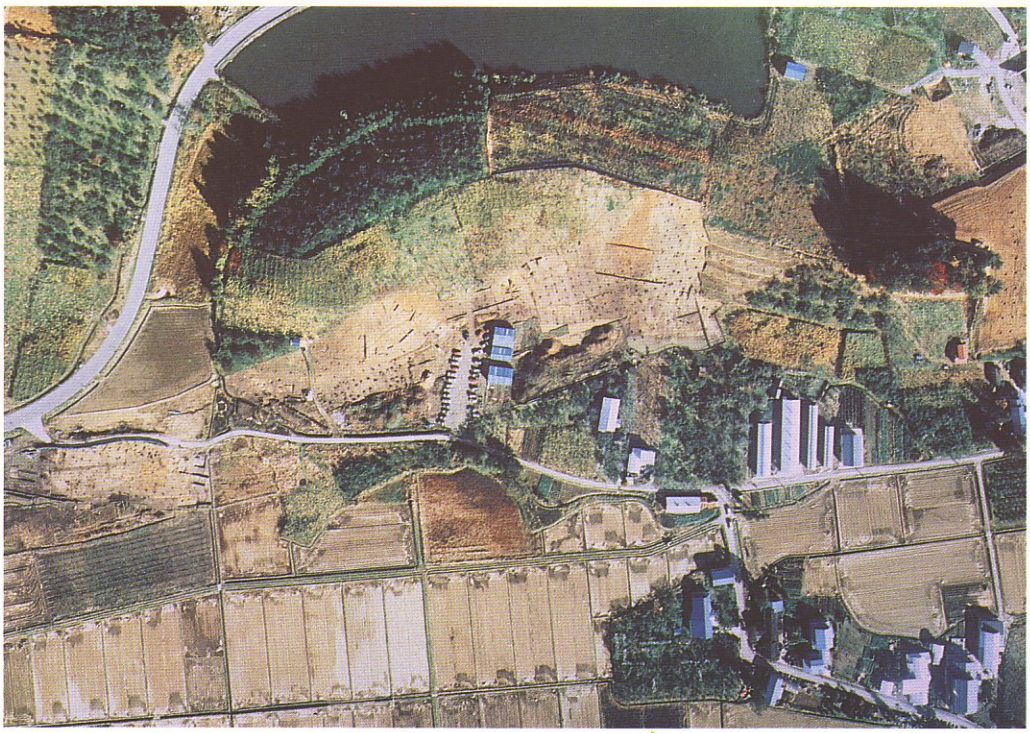
東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI

——竹原窯跡——

1991・3

秋田県教育委員会

1　竹原窯跡遠景（北▷）



2　竹原窯跡近景（西▷）

ＳＪ05近景（南西▷）

ＳＪ05断面近景（西▷）

1　ＳＪ07近景（南西▷）

2　ＳＴ17近景（南西▷）

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成３年度の完成を目指して着々と工事が進められております。秋田県教育委員会では、昭和60年度から路線内に存在する遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資料を得て逐次その成果を公表してまいりました。

本報告書は、昭和63年度に調査した竹原窯跡の調査成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、平鹿町教育委員会・横手市教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成３年２月25日

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1．本報告書は東北横断自動車道秋田線の建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書の第６章以外の執筆は利部修が行った。

3．第６章「自然科(化)学的分析」のうち、第１節の火山灰分析については、東北大学山田一郎・庄子貞雄先生、奈良教育大学三辻利一先生にお願いした。第２節須恵器の胎土分析も三辻先生にお願いし、窯体内劫の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。第３節の炭化材分析は元奈良教育大学嶋倉巳三郎先生にお願いし、パリノ・サーヴェイ株式会社にも依頼した。第４節の年代測定分析は学習院大学年代測定室に依頼した。

4．土色および土器の色調は、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を基本とした。

5．遺跡名は、当初竹原遺跡としていたが、遺跡の実態に即して竹原窯跡に変更した。

6．本報告書の作成にあたり以下の方々から助言、協力を得た。記して謝意を表する。

相京建史　穴沢義功　有吉重三　池上　悟　池野正男　伊藤孝明　宇野隆夫　遠藤政孝
大江正行　岡田茂弘　荻野繁春　金持健司　川畑　誠　木立雅朗　北野博司　国平健三
久保智康　倉田義広　倉田芳郎　桑原滋郎　後藤健一　小松正夫　斎藤孝正　斉藤吉弘
酒井清治　坂誥秀一　沢谷　敬　進藤秋輝　鈴木俊男　須田　勉　竹花宏之　楢崎彰一
服部敬史　日野　久　藤原妃敏　本間桂吉　吉田恵二　渡辺　一　渡辺博人　綿貫邦男
（敬省略、五十音順）

遺構の凡例

1．実測図は1/40と1/60を基本としたが、それ以外のものもある。

2．遺構の線は平面の下場を一点鎖線で表し、断面の下場と壁も同一表現とした。

3．遺構には以下のような略記号を付してある。

ＳＪ‥窯跡　　ＳＴ‥灰原　　ＳＩ‥竪穴住居跡　　ＳＮ‥窯状遺構
ＳＫ‥土坑　　ＳＤ‥溝　　ＳＸ‥性格不明遺構

4．挿図中のスクリーントーンや記号は火山灰を⁘、炭化物を▒、地山を〆　〆、地表面を✓　✓で表し、遺構外を表現するのに////を用いてある。

遺物の凡例

1．実測図は、古代の土器を1/4、それ以外を1/3で統一してある。

2．挿図中の遺物番号は通し番号である。また、写真の左下の番号は遺物の通し番号、右下の番号はプレート内での順番を示している。

3．異なる遺構間で遺物が接合した時の実測図は、どちらか一方だけの帰属にしてある。

4．作図にあたっては、以下の点に留意した。

（1）実測方法は4分割法を用い右側1/2には内面と断面、左側1/2には外面を記録してある。

（2）残存の良い土器は中軸を実線にし、欠損している部分については推定した線で表した。

（3）残存の悪い土器は、土器の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合の中心線は一点鎖線である。

（4）焼けひずみのある土器は、原形を復元できる場所をもとに作図したが、不可能なものは現状を作図した。

（5）轆轤の使用を表わす凹凸は、破線で、これと削りの境を実線で表わした。削りの範囲は実線を2ケ所で切った表現とし、回転篦撫でと考えられる痕跡も同様に表現した。

（6）沈線や掻目状の線は、実線や一点鎖線で表わし、強い稜やくびれも実線で表現した。

（7）断面には土器の割れ口も実測し、製作時の粘土紐の接合痕は点線で表現した。

（8）篦削りの表現では工具の動いた方向を矢印で示してある。

（9）火襷のある土器はスクリーントーンで表わし、最も良好な場所を当ててある。

5．実測図以外の拓本は、中央に右断面をのせた場合、右側が外面、左側が内面である。また、底部は上に内面、下に外面の拓本を貼付し、中を断面とした。

6．表の作成にあたっては以下の点に留意してある。

（1）法量の単位はすべてcmで、口、頸、底、高、天はそれぞれ口径、頸部径、底径、器高、天井までの長さを表わしている。また、高台部径も底で表記した。（　）付は、数字だけに付した場合は現状値、それ以外は推定値を表している。

（2）技法における、篦切、糸切、撫はそれぞれ回転篦切り、回転糸切り、撫での手法を表わしている。蓋の天井部と端部の間は、便宜的に体部と記した。

（3）焼成は堅緻、良好、不良の三段階とし、胎土は、砂粒の有り方を基準として観察した。

（4）色調は、素地の色以外に、釉の色を表現した場合もある。

7．坏と埦類の区別は、高台部を除いて深さと[(口径＋底径)÷4]＝[(1/2口径＋1/2底径)÷2]の比で表わすことにし、前者が後者と同じか上回る場合を埦、後者が前者を下回る場合を坏とした。甕は高さ30cm以下を小甕、60cm以上を大甕、この間を中型の甕とした。

目　次

序

例言・凡例(遺構・遺物)

目次(挿図・表・図版)

第1章　はじめに ……1
　第1節　調査に至るまで ……1
　第2節　調査の組織と構成 ……2
第2章　遺跡の立地と環境 ……3
　第1節　遺跡の位置と立地 ……3
　第2節　歴史的環境 ……3
第3章　発掘調査の概要 ……7
　第1節　遺跡の概観 ……7
　第2節　調査方法と経過 ……8
　第3節　調査日誌 ……12
第4章　奈良・平安時代の調査 ……13
　第1節　A地区の遺構と遺物 ……13
　　1 窯跡 ……13
　　2 土坑 ……27
　　3 窯状遺構 ……38
　第2節　B地区の遺構と遺物 ……38
　　1 窯跡 ……39
　　2 窯状遺構 ……127
　　3 溝状遺構 ……127
　　4 土坑 ……127
　　5 性格不明遺構 ……128
　　6 遺構外出土遺物 ……135
　第3節　C地区の遺構と遺物 ……163
　　1 窯跡 ……163
　　2 竪穴住居跡 ……179
　　3 窯状遺構 ……180
　　4 土坑 ……180
　　5 遺構外出土遺物 ……181
第5章　奈良・平安時代以外の調査 ……264
　第1節　遺構 ……264
　第2節　遺構外出土遺物 ……264
第6章　自然科(化)学分析 ……267
　第1節　火山灰分析 ……267
　第2節　胎土分析 ……273
　第3節　炭化材分析 ……278
　第4節　年代測定分析 ……282
第7章　まとめ ……284
　1　窯の構築について ……284
　2　須恵器の製作技法について ……285
　3　火山灰について ……286
　4　一括土器群とその変遷について ……288

挿図目次

第1図　路線計画図 ……1
第2図　竹原窯跡の位置と周辺の遺跡 ……5
第3図　遺構配置図 ……9・10
第4図　B地区灰原土層図 ……11
第5図　A・B地区遺構配置図 ……14
第6図　SJ01a・b平面図 ……16
第7図　SJ01a・b遺物出土状況図 ……17
第8図　SJ01a等高線図 ……18
第9図　遺構内出土土器(1)　SJ01 ……19
第10図　遺構内出土土器(2)　SJ01 ……20

第11図　遺構内出土土器(3)　ＳＪ01 ……21
第12図　遺構内出土土器(4)　ＳＪ01 ……22
第13図　遺構内出土土器(5)　ＳＪ01 ……23
第14図　遺構内出土土器(6)　ＳＪ01 ……24
第15図　ＳＴ03遺物出土状況図 ……26
第16図　ＳＫ02平面図 ……28
第17図　ＳＫ02遺物出土状況図 ……29
第18図　遺構内出土土器(7)　ＳＫ02 ……30
第19図　遺構内出土土器(8)　ＳＫ02 ……31
第20図　遺構内出土土器(9)　ＳＫ02 ……32
第21図　遺構内出土土器(10)　ＳＫ02 ……33
第22図　遺構内出土土器(11)　ＳＫ02 ……34
第23図　遺構内出土土器(12)　ＳＴ03 ……35
第24図　遺構内出土土器(13)　ＳＴ03 ……36
第25図　窯状遺構平面図 ……37
第26図　ＳＴ12遺物出土状況図(1) ……41
第27図　ＳＴ12遺物出土状況図(2) ……42
第28図　遺構内出土土器(14)　ＳＪ06、ＳＴ12 ‥43
第29図　遺構内出土土器(15)　ＳＴ12 ……44
第30図　遺構外出土土器(1)　ＳＴ12関係土器 ‥45
第31図　ＳＪ05･06、ＳＫ37平面図 ……51･52
第32図　ＳＪ05、ＳＤ28横断面図 ……54
第33図　ＳＪ05、ＳＤ28横断面模式図 ……55
第34図　ＳＪ05･06、ＳＫ37等高線図 ……56
第35図　ＳＪ05ｆ焚口付近遺物出土状況図 ‥‥57
第36図　ＳＪ05ｅ遺物出土概念図 ……58
第37図　遺構内出土土器(16)　ＳＪ05 ……59
第38図　遺構内出土土器(17)　ＳＪ05 ……60
第39図　遺構内出土土器(18)　ＳＪ05 ……61
第40図　遺構内出土土器(19)　ＳＪ05 ……62
第41図　遺構内出土土器(20)　ＳＪ05 ……63
第42図　遺構内出土土器(21)　ＳＪ05 ……64
第43図　遺構内出土土器(22)　ＳＪ05 ……65
第44図　遺構内出土土器(23)　ＳＪ05 ……66
第45図　遺構内出土土器(24)　ＳＪ05 ……67
第46図　遺構内出土土器(25)　ＳＪ05 ‥‥68
第47図　遺構内出土土器(26)　ＳＪ05 ‥‥69
第48図　遺構内出土土器(27)　ＳＪ05 ‥‥70
第49図　遺構内出土土器(28)　ＳＪ05 ‥‥71
第50図　遺構内出土土器(29)　ＳＪ05 ‥‥72
第51図　遺構内出土土器(30)　ＳＪ05 ‥‥73
第52図　ＳＴ19関係遺物出土状況図 ……74
第53図　遺構内出土土器(31)　ＳＴ19 ‥‥75
第54図　遺構内出土土器(32)　ＳＴ19 ‥‥76
第55図　遺構内出土土器(33)　ＳＴ19 ‥‥77
第56図　ＳＴ17遺物出土状況図 ……79･80
第57図　ＳＴ17関係遺物出土状況図(1) ‥82
第58図　ＳＴ17関係遺物出土状況図(2) ‥83
第59図　遺構内出土土器(34)　ＳＴ17 ‥‥84
第60図　遺構内出土土器(35)　ＳＴ17 ‥‥85
第61図　遺構内出土土器(36)　ＳＴ17 ‥‥86
第62図　遺構内出土土器(37)　ＳＴ17 ‥‥87
第63図　遺構外出土土器(2)　ＳＴ17
関係土器 ……88
第64図　遺構外出土土器(3)　ＳＴ17
関係土器 ……89
第65図　遺構外出土土器(4)　ＳＴ17
関係土器 ……90
第66図　ＳＪ07･08平面図 ……93･94
第67図　ＳＪ07･08、ST35横断面図 ……96
第68図　ＳＪ07･08、ST35横断面模式図 ‥97
第69図　ＳＪ07･08、ＳＴ35縦･横断面図 ‥98
第70図　ＳＪ07･08等高線図 ……99
第71図　遺構内出土土器(38)　ＳＪ07･08、
ＳＴ35 ……100
第72図　遺構内出土土器(39)　ＳＪ07･08、
ＳＴ35 ……101
第73図　遺構内出土土器(40)　ＳＪ07･08、
ＳＴ35･18 ……102
第74図　遺構内出土土器(41)　ＳＪ07･08 103

第75図　遺構内出土土器(42)　ＳＪ07･08 ……104
第76図　遺構内出土土器(43)　ＳＪ07･08 ……105
第77図　遺構内出土土器(44)　ＳＪ07･08 ……106
第78図　遺構内出土土器(45)　ＳＴ18 ……107
第79図　遺構内出土土器(46)　ＳＴ18 ……108
第80図　ＳＴ18･36遺物出土状況図 ……110
第81図　遺構内出土土器(47)　ＳＴ36 ……112
第82図　遺構内出土土器(48)　ＳＴ36 ……113
第83図　遺構内出土土器(49)　ＳＴ36 ……114
第84図　遺構内出土土器(50)　ＳＴ36 ……115
第85図　ＳＴ35遺物出土状況図 ……116
第86図　遺構内出土土器(51)　ＳＴ36 ……117･118
第87図　ＳＴ13･14･15平面図 ……121･122
第88図　遺構内出土土器(52)　ＳＴ13 ……123
第89図　遺構内出土土器(53)　ＳＴ13 ……124
第90図　遺構内出土土器(54)　ＳＴ14･15 ……125
第91図　遺構内出土土器(55)　ＳＴ15
ＳＸ09･10･29 ……129
第92図　遺構内出土土器(56)　ＳＴ30 ……130
第93図　土坑平面図(1) ……131
第94図　ＳＸ09･10平面図 ……133･134
第95図　ＳＸ09遺物出土状況図および
工具痕正面図 ……136
第96図　ＳＸ29平面図 ……137
第97図　遺構外出土土器(5) ……138
第98図　遺構外出土土器(6) ……139
第99図　遺構外出土土器(7) ……140
第100図　遺構外出土土器(8) ……141
第101図　遺構外出土土器(9) ……142
第102図　遺構外出土土器(10) ……143
第103図　遺構外出土土器(11) ……144
第104図　遺構外出土土器(12) ……145
第105図　遺構外出土土器(13) ……146
第106図　遺構外出土土器(14) ……147
第107図　遺構外出土土器(15) ……148
第108図　遺構外出土土器(16) ……149
第109図　遺構外出土土器(17) ……150
第110図　遺構外出土土器(18) ……151
第111図　遺構外出土土器(19) ……152
第112図　遺構外出土土器(20) ……153
第113図　遺構外出土土器(21) ……154
第114図　遺構外出土土器(22) ……155
第115図　遺構外出土土器(23) ……156
第116図　遺構外出土土器(24) ……157
第117図　遺構外出土土器(25) ……158
第118図　遺構外出土土器(26) ……159
第119図　遺構外出土土器(27) ……160
第120図　遺構外出土土器(28) ……161
第121図　遺構外出土土器(29) ……162
第122図　Ｃ地区遺構配置図 ……165
第123図　ＳＪ20平面図 ……166
第124図　ＳＪ20遺物出土状況図および
工具痕正面図 ……167
第125図　ＳＪ20等高線図 ……168
第126図　遺構内出土土器(57)　ＳＪ20 …169
第127図　遺構内出土土器(58)　ＳＪ20 …170
第128図　遺構内出土土器(59)　ＳＪ20 171･172
第129図　遺構内出土土器(60)　ＳＴ26 …173
第130図　遺構内出土土器(61)　ＳＴ26、
ＳＩ27 ……174
第131図　遺構内出土土器(62)　ＳＴ26 …175
第132図　遺構内出土土器(63)　ＳＴ26 …176
第133図　遺構内出土土器(64)　ＳＴ26 …177
第134図　遺構内出土土器(65)　ＳＴ26 …178
第135図　ＳＩ27平面図 ……182
第136図　土坑平面図(2) ……183
第137図　土坑平面図(3)およびＳＤ34 …184
第138図　遺構内出土土器(66)
ＳＫ23･24 ……185
第139図　遺構外出土土器(30) ……186

第140図 遺構外出土土器(31) ……266
第141図 竹原窯跡出土火山灰の
Rb-Sr分布図 ……269
第142図 竹原窯跡出土火山灰の
K-Ca分布図 ……269
第143図 竹原窯跡出土火山灰のFe量 ……270
第144図 重鉱物組成ダイヤグラム ……272
第145図 軽鉱物組成ダイヤグラム ……272
第146図 西ケ沢窯出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……274
第147図 竹原窯跡出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……274
第148図 西海老沢窯出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……275
第149図 成沢1・2号窯出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……275
第150図 福田遺跡出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……275
第151図 寒川II遺跡出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……276
第152図 十二林遺跡出土須恵器のRb-Sr
分布図 ……276
第153図 上の山II遺跡須恵器のRb-Sr
分布図 ……276
第154図 分析試料出土地点図 ……283
第155図 須恵器の比較(1) ……293
第156図 須恵器の比較(2) ……294

表目次

第1表 竹原窯跡と周辺の遺跡一覧表 ……6
第2表 土器観察表(1) ……187
第3表 土器観察表(2) ……188
第4表 土器観察表(3) ……189
第5表 土器観察表(4) ……190
第6表 土器観察表(5) ……191
第7表 土器観察表(6) ……192
第8表 土器観察表(7) ……193
第9表 土器観察表(8) ……194
第10表 土器観察表(9) ……195
第11表 土器観察表(10) ……196
第12表 土器観察表(11) ……197
第13表 土器観察表(12) ……198
第14表 土器観察表(13) ……199
第15表 土器観察表(14) ……200
第16表 土器観察表(15) ……201
第17表 土器観察表(16) ……202
第18表 土器観察表(17) ……203
第19表 土器観察表(18) ……204
第20表 土器観察表(19) ……205
第21表 土器観察表(20) ……206
第22表 土器観察表(21) ……207
第23表 土器観察表(22) ……208
第24表 土器観察表(23) ……209
第25表 土器観察表(24) ……210
第26表 土器観察表(25) ……211
第27表 土器観察表(26) ……212
第28表 土器観察表(27) ……213
第29表 土器観察表(28) ……214
第30表 土器観察表(29) ……215
第31表 土器観察表(30) ……216
第32表 土器観察表(31) ……217
第33表 土器観察表(32) ……218
第34表 土器観察表(33) ……219
第35表 土器観察表(34) ……220
第36表 土器観察表(35) ……221

第37表　土器観察表(36) ……222
第38表　土器観察表(37) ……223
第39表　土器観察表(38) ……224
第40表　土器観察表(39) ……225
第41表　土器観察表(40) ……226
第42表　土器観察表(41) ……227
第43表　土器観察表(42) ……228
第44表　土器観察表(43) ……229
第45表　土器観察表(44) ……230
第46表　土器観察表(45) ……231
第47表　土器観察表(46) ……232
第48表　土器観察表(47) ……233
第49表　土器観察表(48) ……234
第50表　土器観察表(49) ……235
第51表　土器観察表(50) ……236
第52表　土器観察表(51) ……237
第53表　土器観察表(52) ……238
第54表　土器観察表(53) ……239
第55表　土器観察表(54) ……240
第56表　土器観察表(55) ……241
第57表　土器観察表(56) ……242
第58表　土器観察表(57) ……243
第59表　土器観察表(58) ……244
第60表　土器観察表(59) ……245
第61表　土器観察表(60) ……246
第62表　土器観察表(61) ……247
第63表　土器観察表(62) ……248
第64表　土器観察表(63) ……249
第65表　土器観察表(64) ……250
第66表　土器観察表(65) ……251
第67表　土器観察表(66) ……252
第68表　土器観察表(67) ……253
第69表　土器観察表(68) ……254
第70表　土器観察表(69) ……255
第71表　土器観察表(70) ……256
第72表　土器観察表(71) ……257
第73表　土器観察表(72) ……258
第74表　土器観察表(73) ……259
第75表　土器観察表(74) ……260
第76表　土器観察表(75) ……261
第77表　土器観察表(76) ……262
第78表　土器観察表(77) ……263
第79表　竹原窯跡火山灰化学分析
　　数値表 ……270
第80表　重鉱物組成の内訳 ……272
第81表　軽鉱物組成の内訳 ……272
第82表　試料分析一覧表 ……278
第83表　竹原窯跡出土炭化材の樹種 ……281

図版目次

巻頭図版1　1 竹原窯跡遠景(北▷)
　　2 竹原窯跡近景(西▷)
巻頭図版2　ＳＪ05近景(南西▷)
巻頭図版3　ＳＪ05断面近景(西▷)
巻頭図版4　1 ＳＪ07近景(南西▷)
　　2 ＳＴ17近景(南西▷)

図版1　1 Ａ地区調査風景(南東▷)
　　2 ＳＪ01・ＳＫ02全景(西▷)
図版2　1 ＳＪ01全景(南西▷)
　　2 ＳＪ01・ＳＴ03(西▷)

図版３　１ ＳＪ01近景(北西▷)
２ ＳＪ01ａ遺物出土状況(西▷)
図版４　１ ＳＫ02遺物出土状況(東▷)
２ ＳＫ02近景(北▷)
図版５　１ ＳＮ04断面(北西▷)
２ ＳＮ04全景(南西▷)
図版６　１ Ｂ地区風景(1)(南▷)
２ Ｂ地区風景(2)(南西▷)
図版７　１ Ｂ地区灰原断面(西▷)
２ Ｂ地区地山排土断面(北西▷)
図版８　１ ＳＴ12遺物出土状況(1)(西▷)
２ ＳＴ12遺物出土状況(2)(北▷)
図版９　１ ＳＴ12遺物出土状況(3)(南▷)
２ ＳＴ12遺物出土状況(4)(南東▷)
図版10　１ ＳＪ05･06･07･08全景(南西▷)
２ ＳＪ05･06全景(南西▷)
図版11　１ ＳＪ05横断面(1)(南西▷)
２ ＳＪ05縦断面(西▷)
図版12　１ ＳＪ05横断面(2)(南▷)
２ ＳＪ05遺物出土状況(北西▷)
図版13　１ ＳＪ05ｅ遺物出土状況(北西▷)
２ ＳＪ05遺物出土状況(北▷)
図版14　１ ＳＪ05ｆ架構材(1)(南東▷)
２ ＳＪ05ｆ架構材(2)(南東▷)
３ ＳＪ05ｆ架構材(3)(北西▷)
図版15　１ ＳＪ05ｆ焚口付近遺物出土状況(南西▷)
２ ＳＪ05ｆ覆土遺物出土状況(南▷)
図版16　１ ＳＴ17遺物出土状況(1)(北西▷)
２ ＳＴ17遺物出土状況(2)(南西▷)
図版17　１ ＳＪ05･07と灰原(南▷)
２ ＳＪ07･08断面(南西▷)
図版18　１ ＳＪ07縦断面(1)(東▷)
２ ＳＪ07縦断面(2)(南西▷)
図版19　１ ＳＴ17･18遺物出土状況(南西▷)
２ ＳＴ18遺物出土状況(東▷)
図版20　１ ＳＴ36と地山排土(南西▷)
２ ＳＴ36遺物出土状況(南西▷)
図版21　１ ＳＴ35遺物出土状況(南西▷)
２ ＳＴ35断面(東▷)
図版22　１ ＳＴ13遺物出土状況(南▷)
２ ＳＴ13全景(南西▷)
図版23　１ ＳＴ14遺物出土状況(1)(南▷)
２ ＳＴ14遺物出土状況(2)(北西▷)
図版24　１ ＳＮ11全景(南▷)
２ ＳＮ11断面(南東▷)
図版25　１ ＳＫ37断面(南東▷)
２ ＳＫ37全景(南西▷)
図版26　１ ＳＫ16断面(南東▷)
２ ＳＫ16全景(南西▷)
図版27　１ ＳＸ09･10全景(南西▷)
２ ＳＸ09･10覆土断面(北東▷)
図版28　１ ＳＸ09横穴部分全景(南西▷)
２ ＳＸ09横穴部分入口(北東▷)
図版29　１ ＳＸ29全景(1)(南西▷)
２ ＳＸ29横断面(南西▷)
図版30　１ ＳＸ29全景(2)(南▷)
２ ＳＸ29遺物出土状況(北西▷)
図版31　１ ＳＪ20全景(南西▷)
２ ＳＪ20焚口付近断面(西▷)
図版32　１ ＳＪ20全景(西▷)
２ ＳＪ20工具痕(北▷)
図版33　１ ＳＩ27全景(北▷)
２ ＳＩ27カマド(南▷)
図版34　１ ＳＮ22断面(南▷)
２ ＳＮ22全景(北▷)
図版35　１ ＳＫ21全景(西▷)
２ ＳＫ25断面(南東▷)
図版36　１ ＳＫ23断面(南東▷)
２ ＳＫ23全景(南西▷)

図版37　1 ＳＫ24断面(南▷)
2 ＳＫ24全景(西▷)
図版38　1 ＳＫ31礫出土状況(南東▷)
2 ＳＫ31全景(北東▷)
図版39　1 ＳＫ32断面(北東▷)
2 ＳＫ33断面(西▷)
図版40　1 剝ぎ取り風景(1)(南西▷)
2 剝ぎ取り風景(2)(南西▷)
図版41　出土遺物(1) 坏蓋
図版42　出土遺物(2) 坏蓋
図版43　出土遺物(3) 坏蓋
図版44　出土遺物(4) 坏蓋
図版45　出土遺物(5) 坏蓋
図版46　出土遺物(6) 高台付坏
図版47　出土遺物(7) 高台付坏
図版48　出土遺物(8) 高台付坏
図版49　出土遺物(9) 高台付坏
図版50　出土遺物(10) 高台付坏
図版51　出土遺物(11) 坏
図版52　出土遺物(12) 坏
図版53　出土遺物(13) 坏
図版54　出土遺物(14) 坏
図版55　出土遺物(15) 壺など
図版56　出土遺物(16) 壺など
図版57　出土遺物(17) 壺など
図版58　出土遺物(18) 壺など
図版59　出土遺物(19) 横瓶・提瓶
図版60　出土遺物(20) 甕
図版61　出土遺物(21) 甕
図版62　出土遺物(22) 甕
図版63　出土遺物(23) 甕
図版64　出土遺物(24) 甕
図版65　出土遺物(25) 甕
図版66　出土遺物(26) 甕・壺・横瓶
図版67　出土遺物(27) 甕
図版68　出土遺物(28) 甕
図版69　出土遺物(29) 甕
図版70　出土遺物(30) 甕
図版71　1 出土遺物(31) 甕
2 出土遺物(32) 甕
図版72　1 出土遺物(33) 甕
2 出土遺物(34) 甕
図版73　1 出土遺物(35) 甕
2 出土遺物(36) 甕
図版74　1 出土遺物(37) 甕
2 出土遺物(38) 甕
図版75　1 出土遺物(39) 甕
2 出土遺物(40) 甕
図版76　1 出土遺物(41) 甕頸部
2 出土遺物(42) 甕頸部
図版77　1 出土遺物(43) 甕頸部
2 出土遺物(44) 甕頸部・体部・底部
図版78　出土遺物の技法(1) 坏蓋・高台付坏
図版79　出土遺物の技法(2) 坏
図版80　出土遺物の技法(3) 坏
図版81　出土遺物の技法(4) 坏・壺
図版82　出土遺物の技法(5) 甕
図版83　出土遺物の技法(6) 甕
図版84　出土遺物の技法(7)甕・横瓶・壺
図版85　竹原窯跡出土の炭化材
図版86　樹種の拡大(1)
図版87　樹種の拡大(2)
図版88　1 竹原窯跡検出火山灰の鉱物組成
2 ＳＪ05ｆ右壁の苅(No.8)

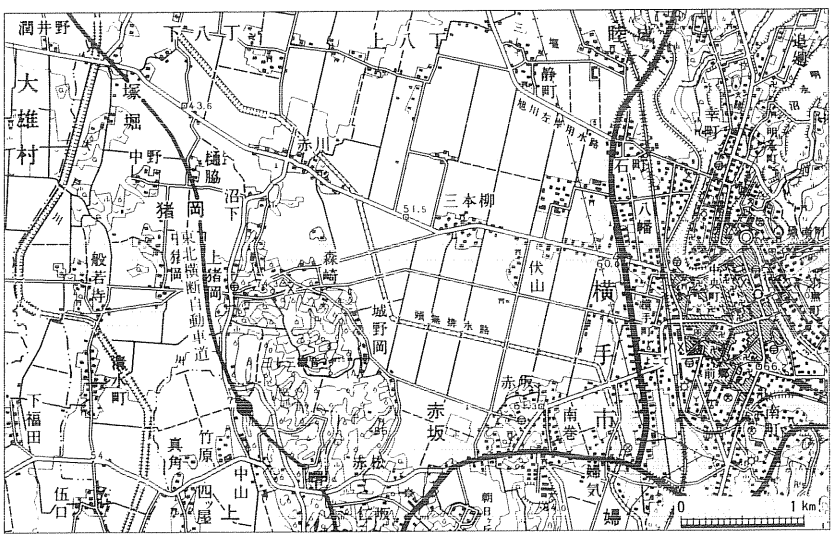
第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

東北横断自動車道は、秋田市－横手市－岩手県北上市を結ぶ高速交通体系の基幹となる道路であり、1978年11月には秋田市－横手市間の第８次施行命令が下された。これに呼応して、翌年日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった(第1図)。

これに対し、秋田県教育委員会では1980年と1981年の２ケ年にわたり遺跡の分布調査を実施し、44の遺跡が所在することを確認した(註1)。そして、秋田県教育委員会と日本道路公団はこの成果をもとに協議した結果、工事によって消滅してしまう遺跡について記録保存する旨で合意した。これを基に、秋田県教育委員会では1983年５～６月、同11月にかけて路線決定に基づいた分布調査を再度行い、37ケ所の遺跡を発掘調査することが確定した(註2)。

発掘調査は、以上の経過をたどって1985年４月から実施され、河辺郡河辺町の６遺跡を皮切りに順次横手方面に向けて進められた(註3)。竹原窯跡では1983年に行った分布調査の前年10月、秋田県立博物館による地域研究調査の一環として範囲確認調査と試掘調査が実施されている(註4)。これらの成果と1987年10～11月にかけての事前範囲確認調査を基に、1988年５月から竹原窯跡の本格的な発掘調査が行われるはこびとなった。



第１図　路線計画図

第2節　調査の組織と構成

所　在　地　秋田県平鹿郡平鹿町上吉田間内字竹原118～121

調 査 期 間　昭和63年5月9日～10月15日

調 査 面 積　9,200m²

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　利部　　修　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事

藤原　　司　同非常勤職員（現大曲市立大曲中学校教諭）

専門指導員　白石　健雄　秋田大学教育学部教授

戸沢　充則　明治大学文学部教授

林　謙作　北海道大学文学部助教授

吉岡　康暢　国立歴史民族博物館考古研究部教授

渡辺　誠　名古屋大学文学部助教授（現名古屋大学文学部教授）

（五十音順）

総務担当者　加藤　進　秋田県埋蔵文化財センター主査（現秋田県立博物館課長補佐）

佐田　茂　同　主査

高橋　忠太郎　同　主事

協 力 機 関　平鹿町・平鹿町教育委員会

註1　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982(昭和57年)

註2　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集　1984(昭和59年)

註3　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63年)

註4　庄内昭男「平鹿郡平鹿町中山窯跡発掘調査概報」『秋田県立博物館研究報告』第10号 1985(昭和60年)

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

秋田県南東部には、東の奥羽山脈と西の出羽山地に挟まれた、横手盆地がある。盆地西部の沖積低地を、雄物川が北流している。竹原窯跡は平鹿郡平鹿町上吉田字間内に所在し、横手盆地のほぼ中央東側の中山丘陵に位置している（第2図、巻頭図版１）。ＪＲ横手駅からは西へ直線で3.5kmである。

中山丘陵は金峰山地から北西へ延びた支脈が盆地面に埋没しきれず小起伏状に残ったもので、中小の沢が複雑に入り込んでいる。遺跡は中山丘陵北西部の西側から入った沢によって区切られた独立丘状で、丘陵西端の西面する斜面に立地している。中山丘陵の周囲にある水田は中山丘陵の南北線で2つの砂礫段丘に分かれ、西側の低い段丘は緩やかに沖積地へと続いている。(註1)

窯跡は上猪岡集落南のＹ字路から、水田際を南に下り中山集落に至る道の東側斜面にある。その斜面は長さ約400mの細長い小丘陵の北側に西面してあり、遺跡の範囲は長さ約270m幅15～80m、標高55～66mである。この小丘陵は北を調査区裏の人造湖から流れる沢で区切られ、ここが隣接する上猪岡遺跡との境界である。現状は東側斜面はりんご畑、その他の丘陵一帯はぶどう畑で、りんご畑は段々状の道による掘削部分があり、ぶどう畑は棚をつるアンカーによる撹乱が随所に見うけられた。また、この小丘陵の南東に位置する小丘陵と竹原・清水町集落の中間にある水田からは、良質の粘土が得られることで知られており、この地が古代から粘土採掘場として利用されていた可能性がある。

第２節　歴史的環境（第2図、第1表）

竹原窯跡(1)の位置する中山丘陵とその周辺には、旧石器時代から近現代と各時代を通じて多数の遺跡が分布しており、遺跡の性格も集落・墓・窯跡・館・城・条里・板碑・塚と多岐にわたっている。(註2)特に、古墳時代から古代にかけての遺跡は県内でも特筆される地域であり、以下では竹原窯跡を知る上でもこれらの時代に焦点をあて記述した。

県内でも希な古墳時代の遺跡としては、中山丘陵北西の段丘にあるオホン清水Ｂ遺跡(63)をあげることができる。ここからは竪穴住居跡・土坑とともに、5～6世紀前半と考えられている土師器と1点の須恵器高坏が出土している。また同丘陵中央部東端の丘陵裾上にある田久保下

遺跡(39)からは、6世紀代の土師器と須恵器蓋坏のほか鉄製品が副葬された8基の土壙墓が検出されている。これらの須恵器の存在は6世紀にはすでに畿内の文化がこの地に及んでいたことを示すものとして注目されよう。

奈良・平安時代の遺跡は現在水田になっている段丘上の集落と丘陵地の土器生産遺跡とに分けて考えることができる。集落は中山丘陵の北西側塚堀・猪岡・清水町地区、同北東の城野岡地区、同南西側の上藤根・年子狐地区を中心とする3地域に集中している。この中の手取清水遺跡(註3)(60)は、旧河道の中に墨書土器を含む多量の須恵器が捨てられており、付近に官衙遺跡が想定できる。また年子狐Ⅰ・Ⅱ遺跡(114・113)・中藤根遺跡(108)・上藤根Ⅰ・Ⅱ遺跡(111・112)のある六ケ村堰流域には、奈良時代中葉の竪穴住居跡と土師器・須恵器が出土し、この地域に律令制が定着し始めた頃の遺跡として注目される。横手市街地の西とこの中山丘陵の間に条里制遺構のあることが確認されている。したがってこの地域に古代の集落が多いのは当然と考えられるが、ほかに潤井野・樋脇・清水などの知名にもあるように豊富な水資源に支えられていたことも無視できない。

本遺跡周辺には土器生産遺跡が多くとりわけ須恵器窯跡は、その在り方から中山窯跡群と呼んでよいと思われるが、この窯跡群は大きく4支群に分けられよう。1つは中山丘陵北西に位置する独立丘の中央西側にある竹原窯跡と上猪岡遺跡(2)を含んだ竹原窯跡支群、2つめは同東側にある城野岡窯跡(10)を中心とする城野岡窯跡支群である。さらに同丘陵西麓の西ケ沢山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ窯跡(17～19)、西ケ沢前森窯跡(20)、西ケ沢窯跡(註4)(21)を含んだ西ケ沢窯跡支群、さらに郷土館窯跡(31)、富ケ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡(36～38)、田久保下遺跡(39)を含んだ富ケ沢窯跡支群とである。以上の中山窯跡群の４支群を比較すると、竹原窯跡支群は奈良時代の窯を含んでおり、他の3支群が平安時代だけの窯で構成されているのに対して、際立った違いを見せている。

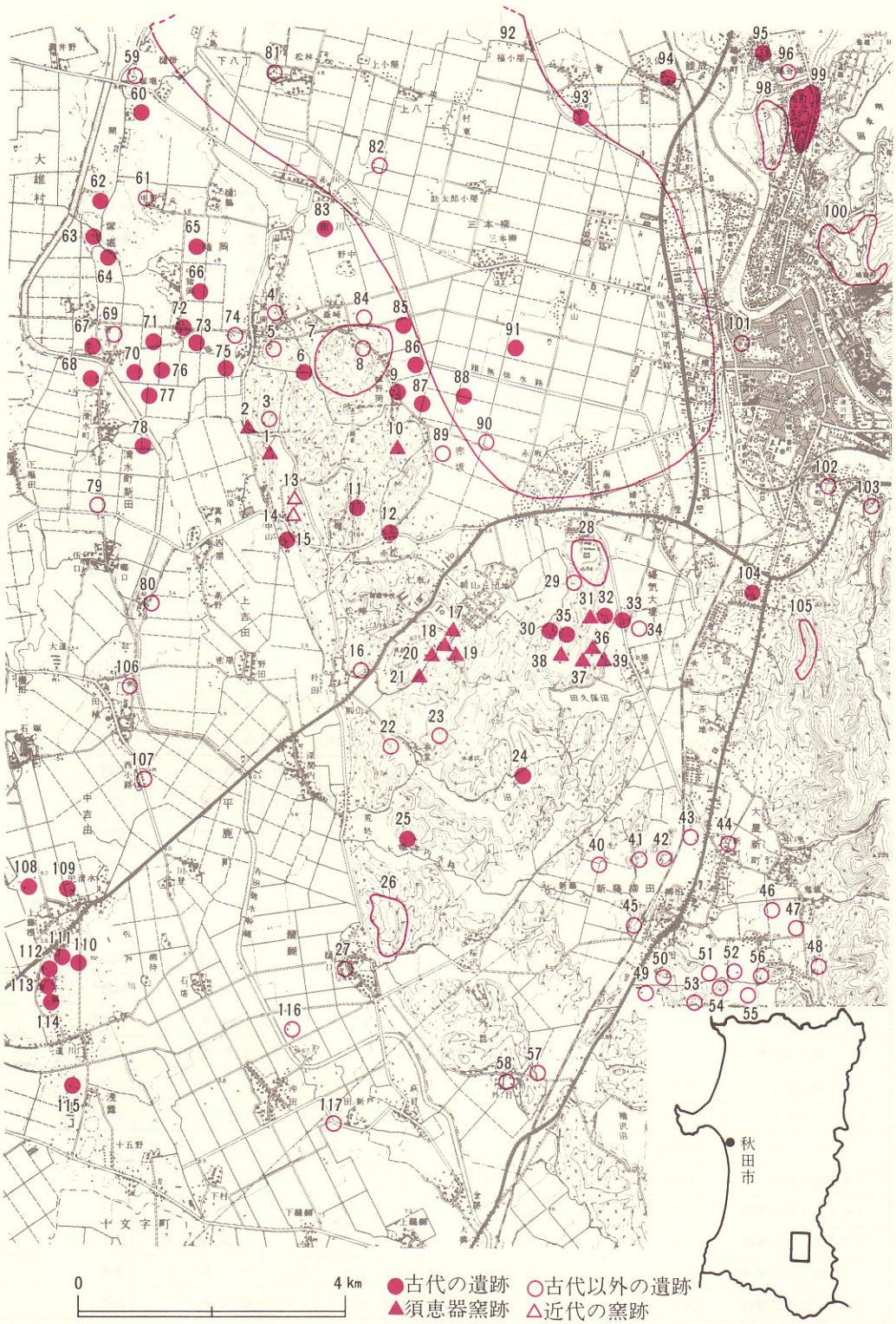
最後に平安時代末葉に関わる遺跡として横手市街地北側の独立丘陵にある大鳥井山遺跡(98)をあげることができる。この遺跡は奥州清原一族の光頼・頼遠父子によって築かれ、後三年の役で源義家・清原清衡の連合軍により焼失せられたとされている城柵である。ここからは、掘立建物跡・土塁・空堀・柵列などのほかに土師器・須恵器・陶磁器・木製品・銭貨などが出土し、中世社会への移行期の遺跡として重要である。

註１　関喜四郎他「横手」『土地分類基本調査』秋田県　1976(昭和51年)

註２　『秋田県遺跡地図（県南版)』秋田県教育委員会　1987(昭和62年)

註３　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』
秋田県文化財調査報告書第190集　1990(平成２年)

註４　冨樫泰時「中山丘陵西麓の窯跡群」『平鹿町史』　平鹿町史編纂委員会　1984(昭和59年)



第２図　竹原窯跡の位置と周辺の遺跡

第１表　竹原窯跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期・性格	番号	遺跡名	時期・性格	番号	遺跡名	時期・性格
1	竹原窯跡	古代	40	新藤柳田字中村	縄文	79	宮表	中世
2	上猪岡	縄文・古代	41	柳田Ⅰ	縄文	80	新城下	縄文
3	岩野沢Ａ	縄文	42	柳田Ⅱ	縄文	81	古館跡	館跡
4	猪岡館	館跡	43	小松原	縄文	82	赤川館	館跡
5	長瀞Ｂ	縄文	44	新町	縄文	83	野際	縄文・古代
6	猪岡	縄文・古代	45	礼塚	縄文	84	森崎	中世
7	城野岡館	館跡	46	掴ノ内	縄文	85	赤坂字高口	縄文・古代
8	城野岡塚群	塚	47	大屋寺内字寺村Ａ	縄文	86	城野岡前Ａ	縄文・古代
9	城野岡	古代	48	大屋寺内字寺村Ｂ	縄文	87	城野岡前Ｂ	縄文・古代
10	城野岡窯跡	古代	49	笹崎Ａ	縄文	88	赤坂字堤下	縄文・古代
11	明通	古代	50	笹崎Ｂ	縄文	89	橋本	縄文
12	沢口	古代	51	笹崎Ｃ	縄文	90	下喜連森	中世
13	中山Ⅱ	近世・現代	52	長谷下	縄文	91	柴崎	古代
14	中山Ⅰ	近世・現代	53	長谷山乙	縄文	92	条里制	条里
15	福島	古代	54	長谷Ａ	縄文	93	長田	古代
16	朴田館	館跡	55	長谷Ｂ	縄文	94	下久保目	古代
17	西ケ沢山Ⅰ	古代	56	寺内	縄文	95	鶴巻	縄文・古代
18	西ケ沢山Ⅱ	古代	57	前村Ａ	縄文	96	杉沢字吉沢Ｂ	縄文
19	西ケ沢山Ⅲ	古代	58	前村Ｂ	縄文	97	小吉山	旧石器・縄文・弥生
20	西ケ沢前森	古代	59	塚堀字塚腰塚	塚	98	大鳥井山	館跡
21	西ケ沢窯跡	古代	60	手取清水	縄文・弥生・古代	99	台処館	古代
22	家ノ前	中世	61	猪岡字萱原	縄文	100	朝倉城	館跡
23	本堂館	館跡	62	オホン清水北	縄文・弥生・古代	101	平城	館跡
24	大沼入	古代	63	オホン清水Ｂ	縄文・古墳・古代	102	前郷館	館跡
25	向内の目	古代	64	オホン清水Ａ	縄文・古代・江戸	103	大乗院塚	縄文・旧石器
26	樋ノ口城	館跡	65	鷹匠道下	縄文・古代	104	柳堤	縄文・古代
27	善福寺貞和碑	板碑	66	中堰西	縄文・古代	105	安田館	館跡
28	郷土館	館跡	67	般若寺	古代	106	吉田城	館跡
29	郷土館Ａ	中世	68	宮下	古代	107	古城	館跡
30	大沢沼	古代	69	薬師前	縄文	108	中藤根	古代
31	郷土館窯跡	古代	70	清水町新田字堤	縄文・古代	109	中谷地	古代
32	郷土館Ｂ	縄文・古代	71	中猪岡Ｂ	古代	110	中清水	古代
33	田久保下	古代	72	中猪岡Ａ	縄文・古代	111	上藤根Ⅰ	古代
34	中田	中世？	73	川口Ａ	古代	112	上藤根Ⅱ	古代
35	富ケ沢Ａ	古代	74	川口Ｂ	江戸	113	年子狐Ⅱ	古代
36	富ケ沢Ａ窯跡	古代	75	長瀞Ａ	古代	114	年子狐Ⅰ	古代
37	富ケ沢Ｂ窯跡	古代	76	猪岡字八幡	縄文・古代	115	一関向	縄文・古代
38	富ケ沢Ｃ窯跡	古代	77	大堰端	縄文・古代	116	松館	館跡
39	田久保下遺跡	古代・古墳	78	宮東	縄文・古代	117	餌酬館	館跡

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第3･5･122図、図版1-1、6)

竹原窯跡は、奈良･平安時代の須恵器窯跡を中心とした土器生産遺跡である。この窯跡の立地は斜面中腹の張り出し部分や斜面に凹凸の少ない地形を利用した3つの地点に集約でき、それぞれの窯跡を中心に南からＡ･Ｂ･Ｃの3地区にまとめることができる。各地区における遺構の年代は、Ａ･Ｃ地区は平安時代、Ｂ地区は奈良･平安時代、Ｃ地区の緩斜面で検出された時代不明遺構とに分けられる。その内容は奈良･平安時代では、窯跡6基、灰原が13箇所、竪穴住居跡1軒、窯状遺構3基、土坑6基、溝1条と性格不明遺構3基、奈良･平安時代以外では、土坑3基と溝1条が検出されている。

Ａ地区は、窯状遺構を除くとＳＪ01に関係する遺構のみで、窯跡にはａ･ｂ2つの新旧がある。このうちＳＫ02には窯の製品が多量に投棄され、その上を灰白色の火山灰が覆っていた。

Ｂ地区は数回の造り変えのあった窯跡を含む奈良時代の窯跡ＳＪ05･06･07･08を主体として、窯体の確認されていない別の奈良･平安時代の灰原と築窯時における掘削土が入り組んだ極めて複雑な状況を示していた。このうちＳＪ06窯跡は痕跡を留める程度であるが、その灰原は最も古い土器を含んでいる。ＳＪ05は6期の窯跡が重なり、合わせて11枚の操業面をもつ。3期の重なりを示すＳＪ07窯跡上位では灰白色の火山灰が厚く堆積し、間層を挟んだ上層からは土器がまとまって出土している。またこれら窯跡の脇には奈良･平安時代と考えられる性格不明遺構が集中しているがＳＸ09はＳＸ10底面の灰白色の火山灰を切っており、ＳＸ29は主軸がＳＪ05･07と同じ方向で奈良時代の土器を水平な床に敷いたものである。

Ｃ地区は窯状遺構を除くと半地下式窖窯のＳＪ20に関係する遺構のみで、Ａ地区と同様に単独窯としての在り方を示している。また土坑や窯状遺構からは灰白色の火山灰を検出している。

本調査では平安時代のＳＩ27竪穴住居跡が検出されたが、工房跡は見つかっていない。当初工房跡が存在すると見られた平坦部は、沢地形を呈して地山土がグライ化した竪穴住居跡構築の不適地である。一方、Ｂ地区北東にある尾根付近には造成した場所があり、その断面から須恵器を含んだ遺構の一部が検出されている。したがって、この場所に工房跡の存在する可能性がある。

Ａ～Ｃ地区に関わる層位(第4図)は、複雑なＢ地区のものと対称的にＡ･Ｃ地区では単純で、自然堆積土の基本層位は以下のようである。Ⅰ層表土。Ⅱ層黒色土。Ⅲ層茶褐色土。Ⅳ層地山

土で礫混じりの層（ａ）と、礫を含まない砂質の層（ｂ）とに分けられる。このうちⅣ層ａは地質学で言う礫質褐色森林土壌、ｂは細粒褐色森林土壌に該当している。

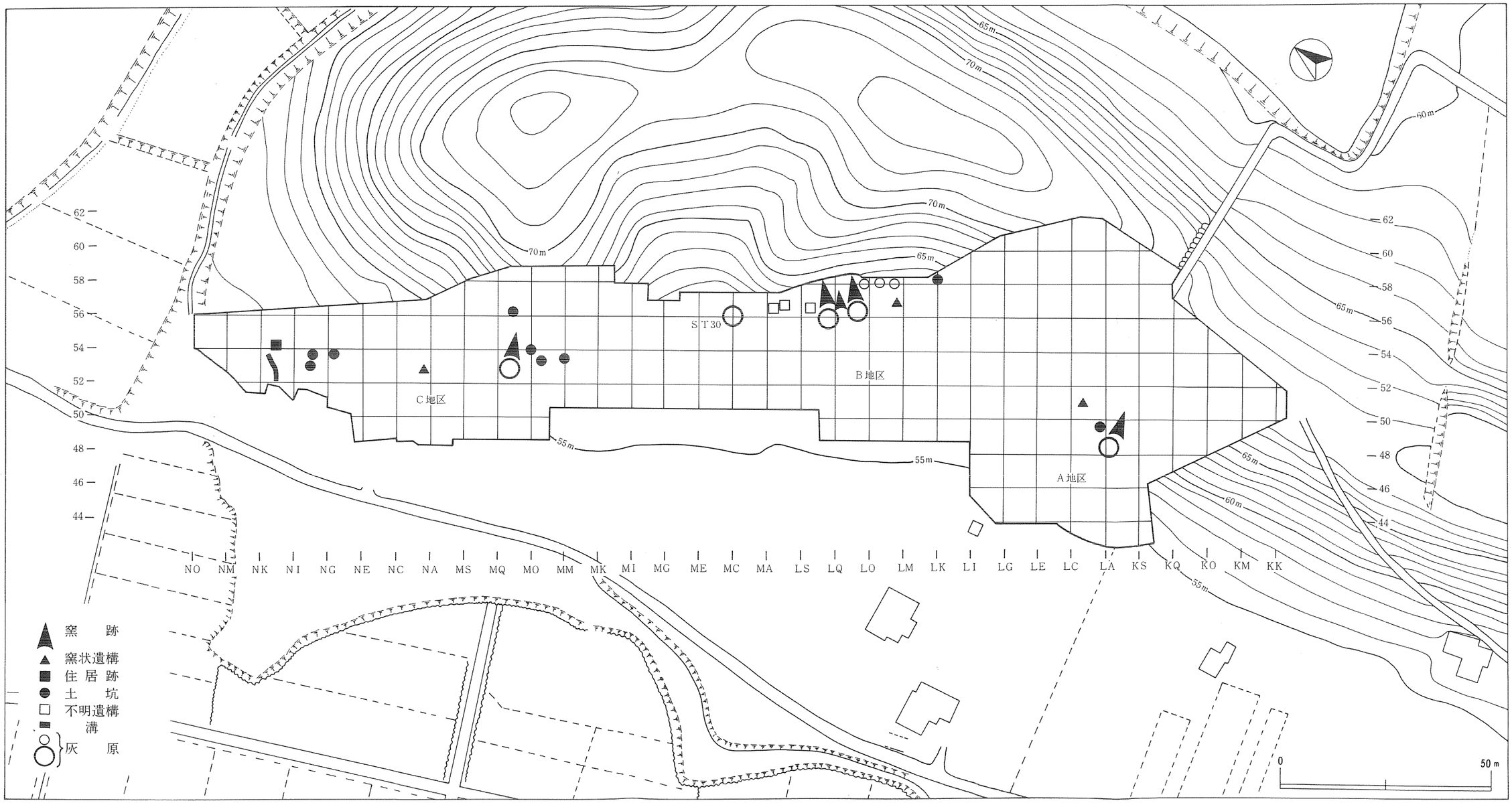
第２節　調査方法と経過(第3図)

発掘調査では、細長い調査区全域を4×4mの格子目状に組んだグリット方式を用いた。調査区は主に北西から南東に長い丘陵の裾部であるため、基線となる縦軸を斜面に沿う方向に求めた。そして路線内のセンター杭（ＳＴＡ61＋80）を原点ＭＡ50と定め、座標北から60°東へ偏じる縦軸の基線をＭＡ線（仮の南北）これと直行する横軸の基線を50線（仮の東西）とした。つまり縦軸では斜面側に43～62と算用数字で刻み、横軸では右から左へＫＪ～ＬＪと用いてある。このうちアルファベットの2桁目は、1桁目のアルファベットをＡ～Ｔまで用いるのに対して、これらをまとめた大区画を意味している。これを基に縦横両線でつくる小区画の呼称は仮の南東隅にある交点の記号で表すことにした。

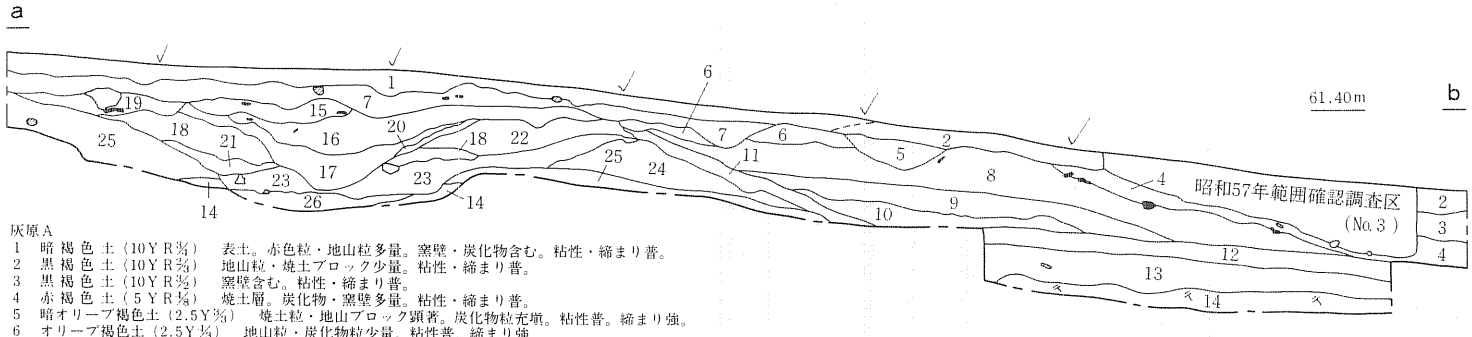
遺構の名称は検出された順に01、02‥と算用数字を用い、その性格が判明した時点でＳＪ（窯跡）、ＳＫ（土坑）などと略記号を付した。したがって、略記号と検出番号の組合せが各遺構の名称となる。ただし調査の進行に伴って、遺構の性格が変わり略記号を変更した場合や、遺構のつもりが窪地などと分かり番号を抹消した場合、整理段階で新たな遺構が生じて番号が必要となった場合などがある。また、ＳＴとした灰原は本来明瞭な形をつくる遺構とは性格が異なるが、人為的に形成されたことでは誤りはなく貝塚や土器捨場と同じ扱いをしてある。

遺構の調査にあたっては平面図、断面図、エレベーション図、等高線図を用い必要事項を調査日誌にとどめた。写真撮影は基本的に35mmのモノクロとリバーサルフィルムを用い必要に応じてネガカラーフィルムを使用した。また遺跡の等高線は空中写真測量により、遺跡の全景は航空写真撮影によった。一方、遺物の取り上げでは、遺構名・グリッド名・層位・日付を明記して取り上げた。

遺跡の調査経過は次のようである。はじめは、遺跡の全域にわたるよう斜面に直行する方向でトレンチを入れ、粗密をもって存在している遺構・遺物に対して大まかなあたりをつけることからはじめた。その結果斜面の張り出している所を中心に大きく3地点に窯場の在ることが判明、南からＡ・Ｂ・Ｃ地区と仮称しこの順で調査を進めることにした。調査は広範にわたるため表土除去と遺構の調査を並行させることにした。また遺構の調査についてもＡ・Ｂ地区を並行させる期間を考慮し、Ａ地区からやや遅れてＢ地区の調査に入った。その結果Ｂ地区には極端な遺構の集中が認められ、Ｃ地区の調査開始を繰り上げる必要性が生じＢ地区を長期間保てるような計画に変更した。結果、Ａ地区→Ｃ地区→Ｂ地区の順で調査を終了することができた。

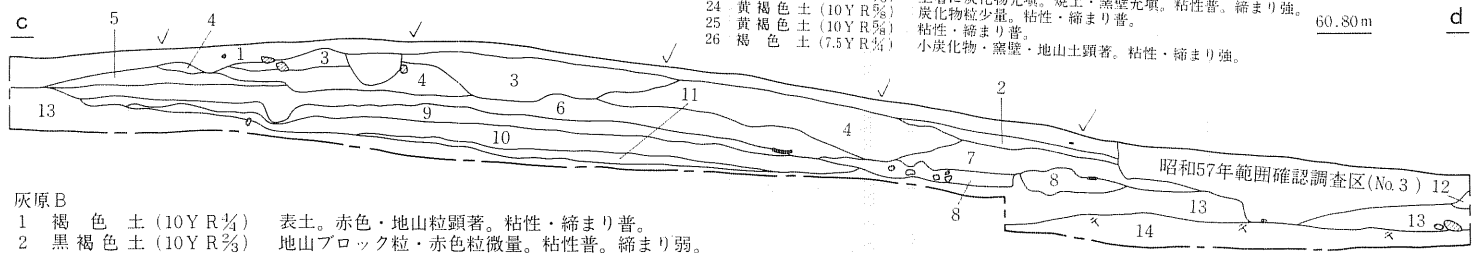

65m
70m
60m
62
60
58
56
54
52
50
48
46
44
ST30
B地区
C地区
A地区
55m
NO NM NK NI NG NE NC NA MS MQ MO MM MK MI MG ME MC MA LS LQ LO LM LK LI LG LE LC LA KS KQ KO KM KK
窯　跡
窯状遺構
住居跡
土　坑
不明遺構
溝
灰　原
0
50m

第３図　遺構配置図



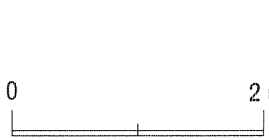
灰原A

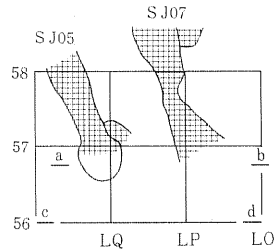
1	暗褐色土（10YR3/4）	表土。赤色粒・地山粒多量。窯壁・炭化物含む。粘性・締まり普。
2	黒褐色土（10YR2/2）	地山粒・焼土ブロック少量。粘性・締まり普。
3	黒褐色土（10YR3/2）	窯壁含む。粘性・締まり普。
4	赤褐色土（5YR4/4）	焼土層。炭化物・窯壁多量。粘性・締まり普。
5	暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）	焼土粒・地山ブロック顕著。炭化物粒充填。粘性普。締まり強。
6	オリーブ褐色土（2.5Y4/3）	地山粒・炭化物粒少量。粘性普。締まり強。
7	黒色土（10YR1.7/1）	炭化物少量。粘性普。締まり強。
8	明黄褐色土（2.5Y 6/4）	黄色白色の小地山ブロック少量。粘性・締まり普。
9	明黄褐色土（2.5Y 6/4）	黄色白色の小地山ブロック顕著。粘性・締まり普。
10	褐色土（10YR4/4）	小黄色ブロック粒少量。粘性・締まり強。
11	にぶい黄色土（10YR5/4）	小炭化物充填。地山粒少量。粘性普。締まり弱。
12	黒褐色土（10YR3/2）	赤色粒微量。粘性・締まり強。
13	暗褐色土（10YR3/3）	赤色粒微量。粘性・締まり強。
14	黄褐色土（10YR5/6）	粘性・締まり強。
15	黒褐色土（10YR3/1）	赤色粒・炭化物粒少量。地山粒顕著。粘性普。締まり弱。
16	黒褐色土（10YR1.7/1）	赤色粒・地山粒・炭化物粒少量。窯壁含む。粘性普。締まり弱。
17	明黄褐色土（2.5Y 6/6）	黄色白色地山ブロック充填。粘性普。締まりややあり。
18	黄褐色土（10YR5/8）	白色地山ブロック少量。粘性普。締まりややあり。
19	黄褐色土（10YR5/6）	白色地山ブロック少量。窯壁含む。粘性普。締まりややあり。
20	赤褐色土（5YR4/6）	炭化物粒・焼土粒顕著。粘性普。締まり弱。
21	赤褐色土（5YR4/6）	炭化物粒・焼土粒少量。粘性・締まり普。
22	黄褐色土（10YR5/8）	黄色ブロック・赤色ブロック顕著。粘性・締まり強。
23	赤褐色土（5YR4/6）	上層に炭化物充填。焼土・窯壁充填。粘性普。締まり強。
24	黄褐色土（10YR5/8）	炭化物粒少量。粘性・締まり普。
25	黄褐色土（10YR5/8）	粘性・締まり普。
26	褐色土（7.5YR4/4）	小炭化物・窯壁・地山土顕著。粘性・締まり強。



灰原B

1	褐色土（10YR4/4）	表土。赤色・地山粒顕著。粘性・締まり普。
2	黒褐色土（10YR2/3）	地山ブロック粒・赤色粒微量。粘性普。締まり弱。
3	明黄褐色土（2.5Y 6/6）	粘性・締まり弱。
4	黄褐色土（10YR5/6）	小赤色ブロック・小地山ブロック顕著。粘性普。締まり弱。
5	黄橙色土（10YR7/8）	炭化物粒微量。小地山ブロック少量。粘性普。締まり弱。
6	明褐色土（10YR3/4）	小炭化物多量。小窯壁少量。粘性普。締まりやや弱。
7	明褐色土（10YR3/4）	６層類似。小地山ブロック顕著。
8	明褐色土（10YR3/4）	窯壁充填。粘性普。締まりややあり。
9	明黄褐色土（10YR5/6）	７と類似。ややにごる。
10	黄橙色土（10YR7/8）	黄色白色小地山土充填。
11	明黄褐色土（10YR6/6）	粘性・締まり強。
12	明褐色土（10YR3/3）	粘性・締まり普。
13	暗褐色土（10YR3/3）	赤色粒・地山粒微量。粘性・締まり強。
14	黄褐色土（10YR5/8）	粘性・締まり強。





第４図　Ｂ地区灰原土層図

第3節　調査日誌

竹原窯跡の発掘調査は、1988年5月9日から同年10月15日まで実施した。調査は初めに大トレンチによってA～C地区の全体を大把みし、次に個別調査を行うという手順を踏んだ。以下には各地区の進捗状況にしたがった調査日誌の概略を記すことにする。

5月9日　現地で発掘作業についての説明を行い、作業環境の整備を行う。作業員の数は43名。

5月10日　遺跡全体の清掃を行い、調査前の撮影を行う。C地区にトレンチを入れ窯跡検出。

5月12日　A・B地区にトレンチを入れた結果、両地区に窯跡と灰原を検出。A地区では単独窯、B地区では多数の灰原が入り組み、複雑かつ広範であることが分かった。

5月18日　SJ01の調査開始。SJ01の表土除去によって、窯体右脇に多数の遺物が出土。併せてA地区斜面からB地区斜面にかけて表土除去。

5月27日　SJ01中軸断面図を作成し、写真撮影を行う。灰原遺物の実測。SK02の調査を開始し、多数の遺物とともに火山灰層を検出。

6月7日　工藤雅樹先生来跡。SK02出土遺物の実測。ST03出土遺物の取り上げ。

6月15日　B地区の調査を開始。B地区中央のLP・LQライン斜面上方から掘り進める。

6月20日　SJ05の調査開始。中軸上に土層観察用畔を残し掘り下げる。

6月23日　SJ07の調査開始。黒い落ち込みの範囲を窯と決めつけて中軸線を設定。

6月25日　白石健雄先生来跡。SN11を半截し、底面が赤く焼けているのを確認。

7月7日　秋山進午先生・宇野隆夫先生来跡。SJ07b窯跡の覆土を掘り下げる。

7月8日　戸沢充則先生来跡。SJ07焚口南に近隣して集中する遺物の撮影。

7月22日　C地区の調査開始。灰原から自然釉の付着している破片が多量に出土。

7月26日　ST17茶褐色土上面出土遺物の取り上げ完了。SJ05中軸直交の横断面を調査区境界付近で断ち割る。明瞭な炭化物層検出。SJ07炭化物層aの実測取り上げ完了。

8月5日　吉岡康暢先生来跡。SJ07中軸断面図作成。SJ05の掘り下げ。

8月8日　SJ20の中軸土層観察用畔を残して掘り進め床を確認。SK21に火山灰を検出。

8月23日　渡辺誠先生・岡田茂弘先生来跡。SJ20断面図実測完了。灰原遺物の実測。

8月26日　林謙作先生来跡。SK23覆土で火山灰を検出し、底部で甕を検出。

9月2日　倉田芳郎先生来跡。SJ05最古窯の焚口付近の調査。

9月5日　穴沢義功氏来跡。SJ05とSJ06の関係断面図作成。SJ07窯前の地山排土除去。

9月12日　SX29覆土除去。水平な底面から多量の遺物が出土。

9月22日　平鹿町吉田小学校生徒50名が来跡。SK31の礫出土状況撮影。

10月15日　現地説明会を行う。雨で不調であったが約40名が来跡。本日をもって調査を終了。

第４章　奈良・平安時代の調査

第１節　Ａ地区の遺構と遺物

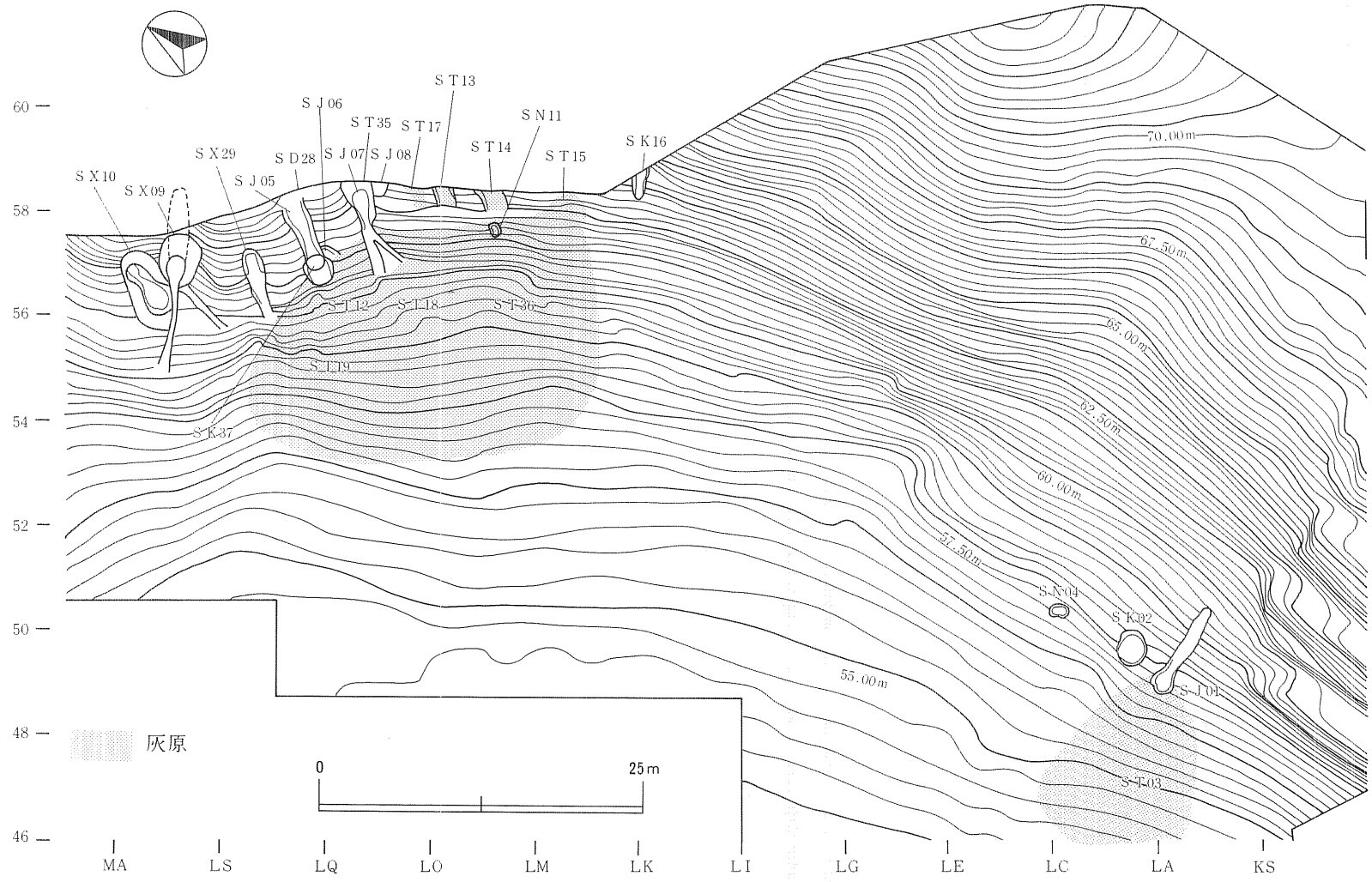
Ａ地区には須恵器を焼成した窯跡ＳＪ01ａ・ｂ、その下方に広がる灰原ＳＴ03、ＳＪ01の不良品を投棄した土坑ＳＫ02、それに窯状遺構のＳＮ04がある。これらは緩斜面から急斜面にさしかかる部分にまとまって存在し(第5図、図版1)、ＳＮ04を除くとそれぞれ有機的な関連性をもつ。

１　窯跡

ＳＪ01とＳＴ03(第6～8図、図版1～3)

ＳＪ01は標高57～59.5ｍの斜面やや北よりに構築された半地下式無階無段窖窯である。この窯は同じ主軸をもつａ・ｂ2つの重複があり、ＳＪ01ａが新しく、ＳＪ01ｂが古い。窯は煙道部が削平を受け消滅しており、燃焼部はぶどう棚に使うアンカーによって壁と床が掘りおこされていた。ＳＪ01ｂは中軸線がＳ－89°－Ｅを指し、現存する長さ7.45ｍ、中央部の幅が1.3ｍで焚口部が1.4ｍと広い特徴がある。この窯の先端よりも50cm斜面上方には、そこからさらに20cm四方に酸化焼成部分があり少なくともここまで窯底が続いていたことを示している。焚口から奥へ約2ｍの部分には、弧状を呈した摺鉢形の段が付き、手前に長軸55cm×短軸約40cmの小ピットがある。壁際からは、直径2cm前後で断面円形の炭化材が、多くは25～35cmの間隔をもって計15本検出された。それらはほぼ直立しており、天井構築のための架構材と考えられる。ＳＪ01ａは、ＳＪ01ｂの燃焼部を中心に造り変えており、その幅は中央部で1ｍと狭く、また床も掘り下げているが、窯尻と袋状の焚口部分はそのまま利用したと考えられる。床の勾配はＳＪ01ａでは急な所で30°で、どちらも床面が良く焼けており、壁は崩れた状態であった。遺物は、覆土、床面、床下からそれぞれまとまって出土している。また、ＳＪ01中央右側にもまとまった遺物が出土しており、ＳＪ01ａの構築時に掘り上げられたＳＪ01ｂのものである可能性がある。

ＳＴ03はＳＪ01の焚口下方の斜面に広がる灰原で、約7°の緩傾面に形成されている。この灰原は、主にＬＴ46～49・ＬＡ46～49・ＬＢ46～49区に広がるが、ＬＢライン北西側は攪乱された状態であった。灰原から出土した土器はＳＪ01のすぐ下方で濃密に分布し、離れるにつれて希薄になる。また総体的に小さな破片が多く、大きな破片を出土するＳＫ02とは対照的である。厚さ10～15cmの埋土は2層に分かれる単純層であるが、ＳＪ01ａ・ｂそれぞれに対応する層の見極めは不可能であった。



第5図　A・B地区遺構配置図

出土遺物

ＳＪ01からは坏蓋・高台付坏・坏・横瓶・壺・鉢・甕(1～125)が出土している。

坏蓋(1～13)(第9図、第2表、図版41-1～3)

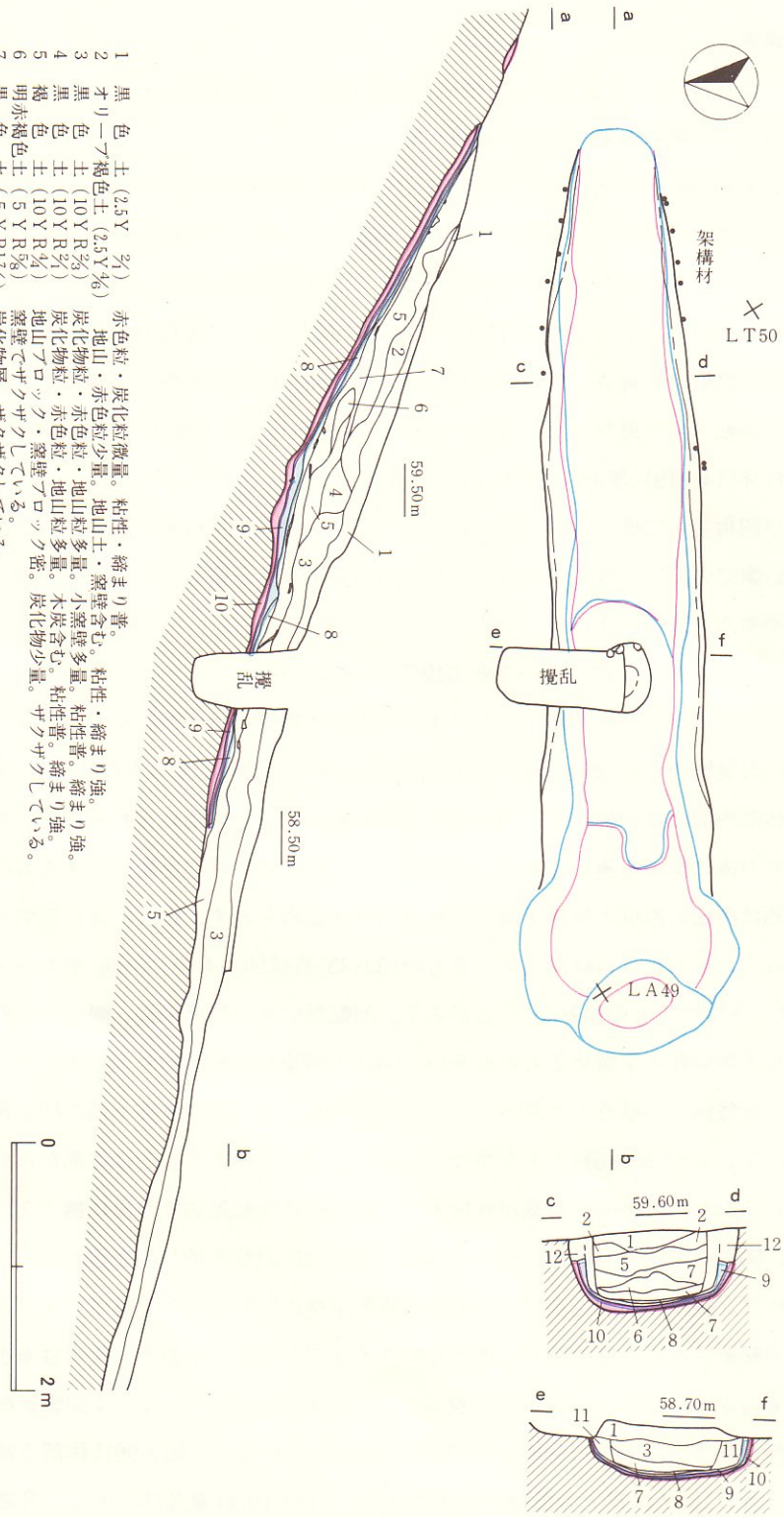
特に大きい13を除くと、天井が丸いもの(3・7・8)と平坦なもの(1・2・4～6・9)とがある。天井の平坦なものは大半が低い器高であるが、9のように高いものもある。端部は一旦水平か水平気味になり屈折するのがほとんどであるが、断面形が三角形状を呈したり(1・2)屈折部が丸味を帯びるものがある(3)。つまみはすべてボタン状を呈し、4と12のつまみの上縁には水平方向に無器用な面取りが施されている。1と2は回転篦切りの後に篦削りを施さない例である。13は天井部に回転糸切り痕を留める資料で、胎土・焼成から見ても他からの混入である。

高台付坏(14～19)(第9図、第2表、図版78-5)

高台が四角張って低いもの(15～17)と僅に高いもの(14・18・19)がある。14の底部には不定方向の強い撫での痕跡を残しているが、他は回転篦切り痕を留めている。15～19は高台接地部が中央でやや窪む特徴がある。

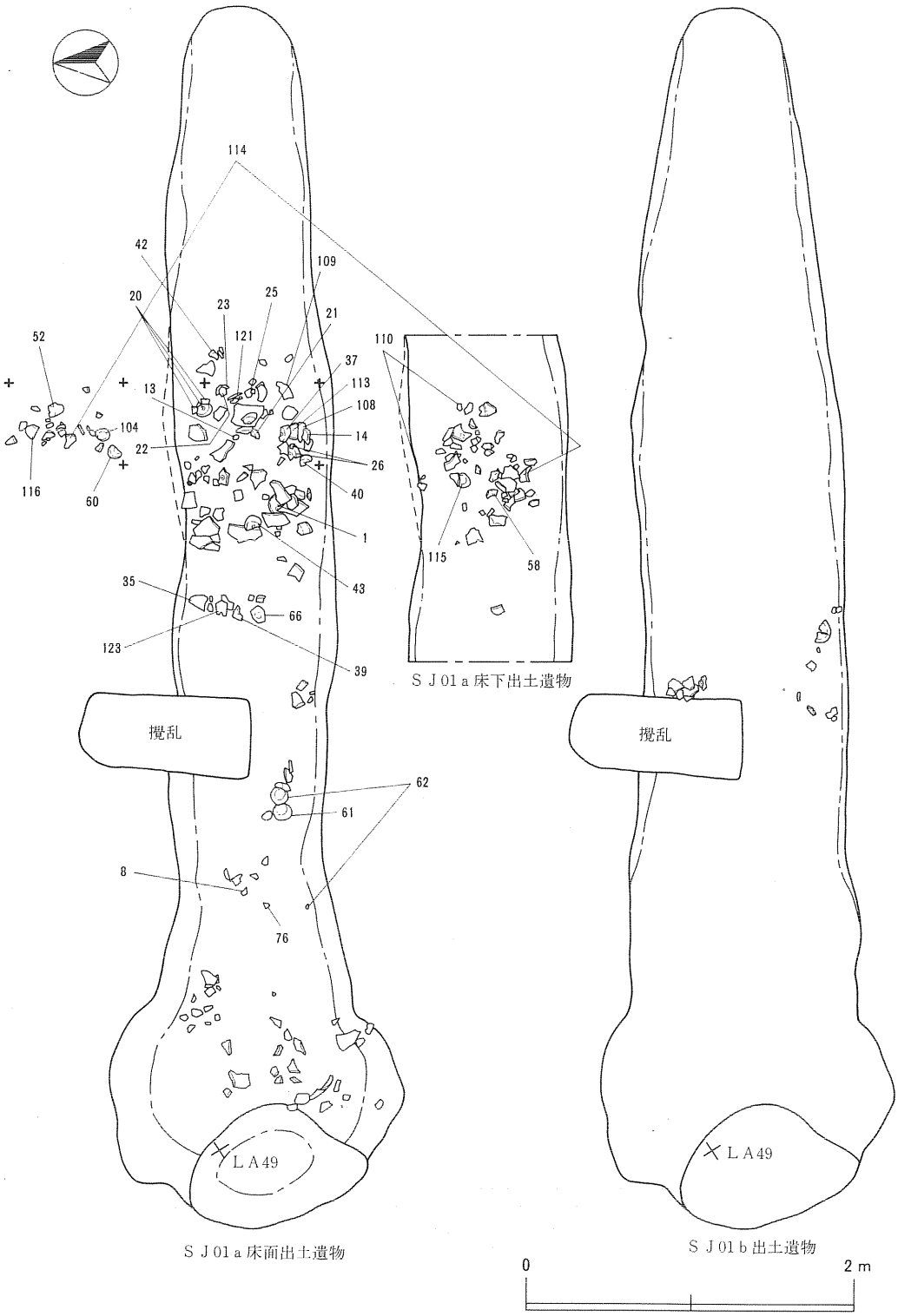
坏(20～107)(第9～12図、第3～7表、図版51-1・2、79-5・6)

20～27は全体が薄く仕上がり、やや浅く大ぶりで底部に篦切り痕を留めるタイプである。口縁には内弯気味のもの(20～23)や直線的なもの(24・25)や外反するもの(26・27)がある。これらの坏の体部内面には、細く浅い擦痕が1～3条轆轤目に沿って認められる特徴がある。底面は回転糸切りの後に撫でを施してあり、不明瞭ながら幅の狭い渦巻を観察できるものが多い。28～55・57・58は内面の擦痕と体部下端に回転篦削りが認められず、底面に回転篦切り痕を留めるものである。これらには口縁が内弯するもの(32・33)直線的なもの(35・36)やや外反するもの(44・45)大きく外反するもの(49・53)などがある。回転篦切りの底面には、幅の広い渦巻きや中央に篦先を示す浅い窪みを留めるものが多い。56は不明瞭な回転篦削りを施すタイプであり、この口縁は内弯気味の口唇直下で段がつくように膨らむ。59～64は体部下端に回転篦削りを施すタイプで、深いもの(59～61)とそうでないもの(62～64)とがある。64は体部から口縁にかけて大きく開いており、61と64は口縁が外反する。底部には回転篦切りの後に撫でを施すのが大半であるが、60には不定方向の強い撫でがある。65～94は回転糸切り痕を留める底部資料である。この中には、線の太い回転糸切り痕を留め体部下端に回転篦削りを施すタイプ(65～76)と、線の細い回転糸切り痕を留め削りを伴わないタイプ(77～94)とがある。後者は糸を体部下端でひきずるものが多い(77)。91は糸切り痕が二重に認められる。95～105は回転篦削り痕を留める底部資料である。この中には渦巻の明瞭なもの(104)がある。95と96は体部下端に回転篦削りが認められ、105では篦先の痕跡が明瞭である。106と107は双耳坏である。耳部は口唇直下に取り付けられる特徴があり、全面に篦削りが施され縁は面取りしてある。

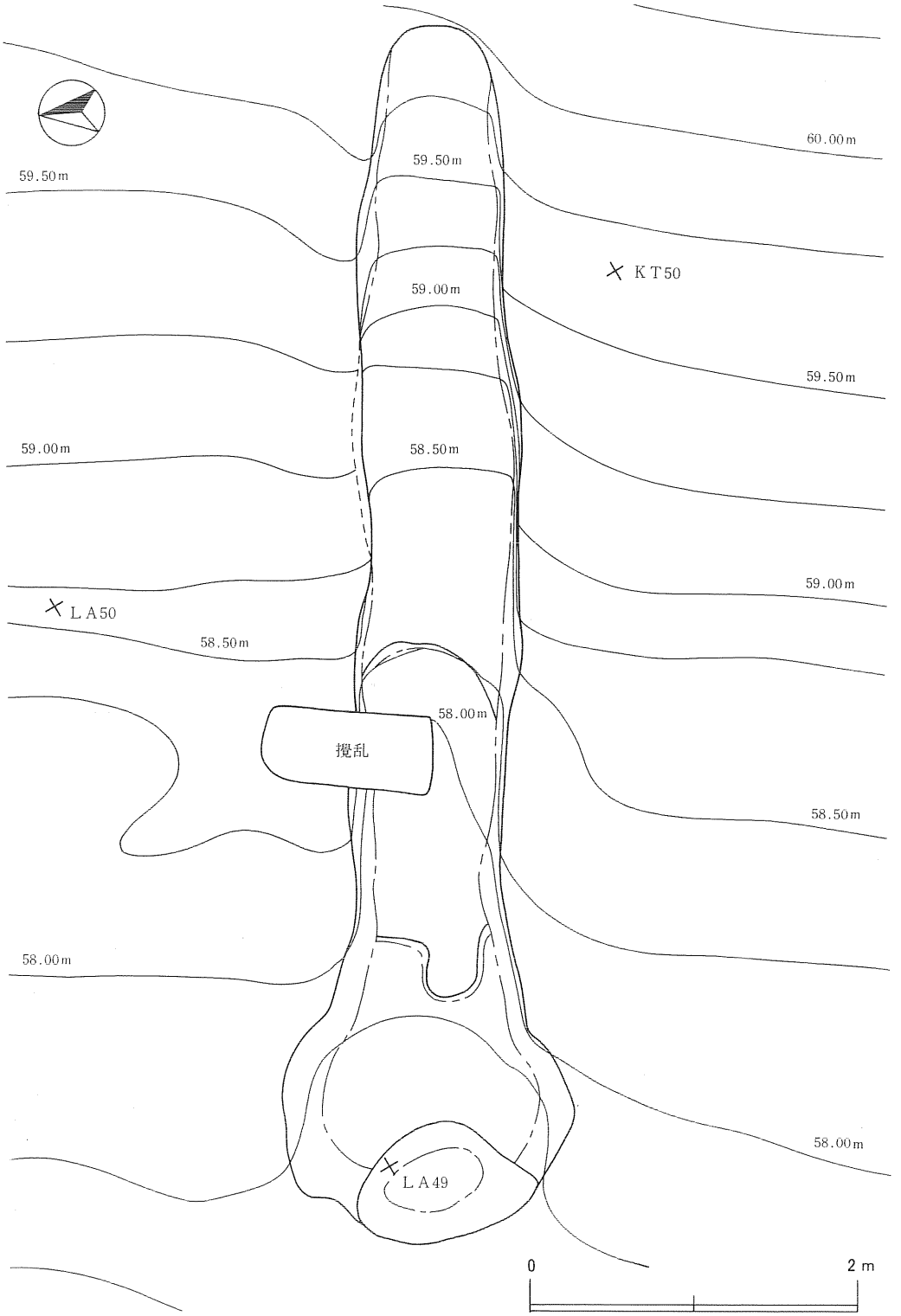


1　黒　色　土（2.5Y　2/1）　赤色粒・炭化粒微量。粘性・締まり普。
2　オリーブ褐色土（2.5Y 4/6）　地山・赤色粒少量。地山土・窯壁含む。粘性・締まり強。
3　黒　色　土（10YR 2/2）　炭化物粒・赤色粒・地山粒多量。小窯壁多量。粘性普。締まり強。
4　黒　色　土（10YR 2/1）　炭化物粒・赤色粒・地山粒多量。木炭含む。粘性普。締まり強。
5　褐　色　土（10YR 4/4）　地山ブロック・窯壁ブロック密。炭化物少量。ザクザクしている。
6　明赤褐色土（5YR 5/8）　窯壁でザクザクしている。
7　黒　色　土（5YR 1.7/1）　炭化物層。ザクザクしている。
8　環元粒層
9　灰　白　土（7.5Y　7/1）　床。粘性・締まり強。
10　赤　褐　色　土（2.5YR 4/6）　床。粘性・締まり強。
11　褐　色　土（10YR 4/4）　焼土ブロック・炭化物多量。粘性普。締まり強。
12　暗　褐　色　土（7.5YR 3/3）　粘性・締まり弱。

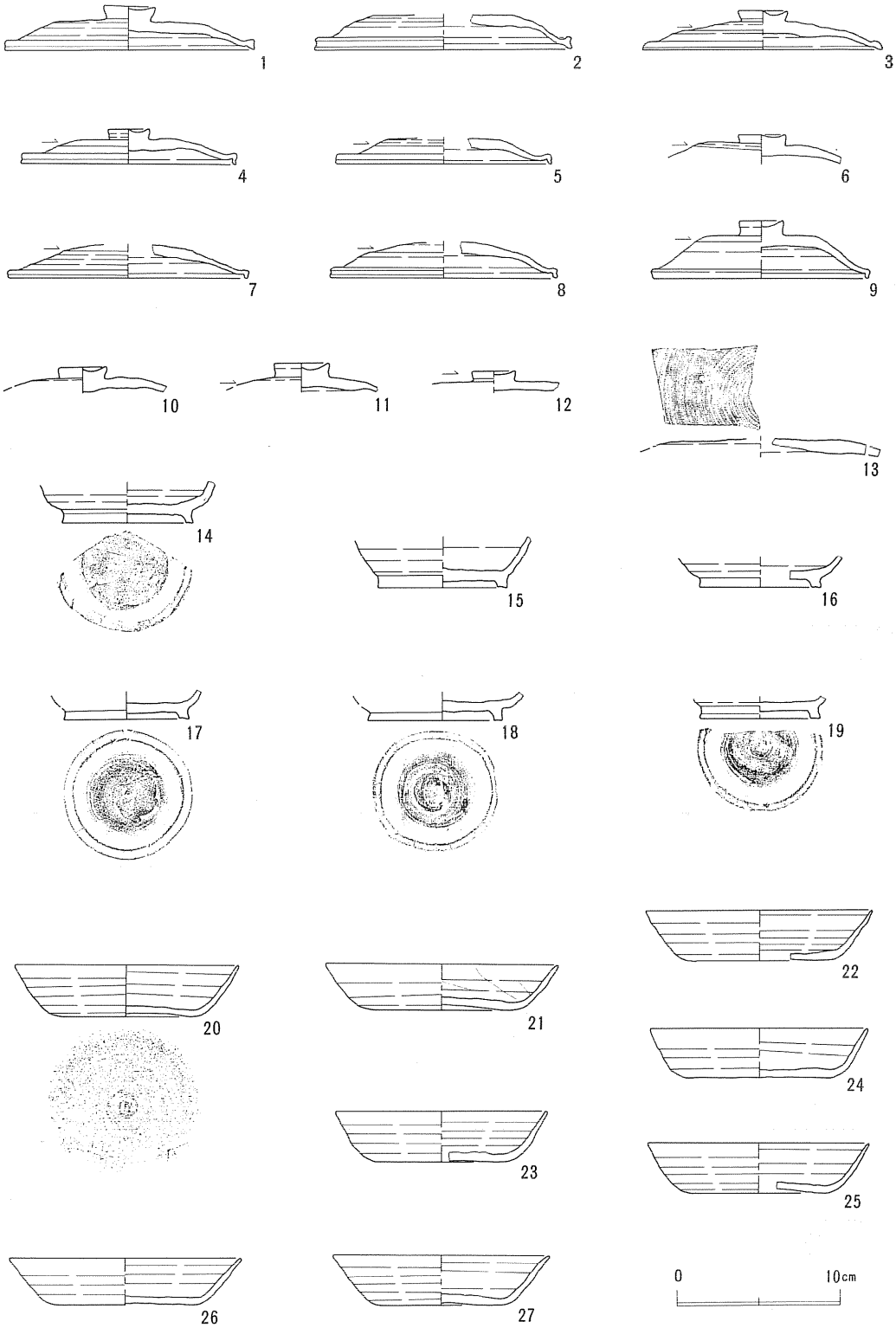
第6図　ＳＪ01ａ・ｂ平面図



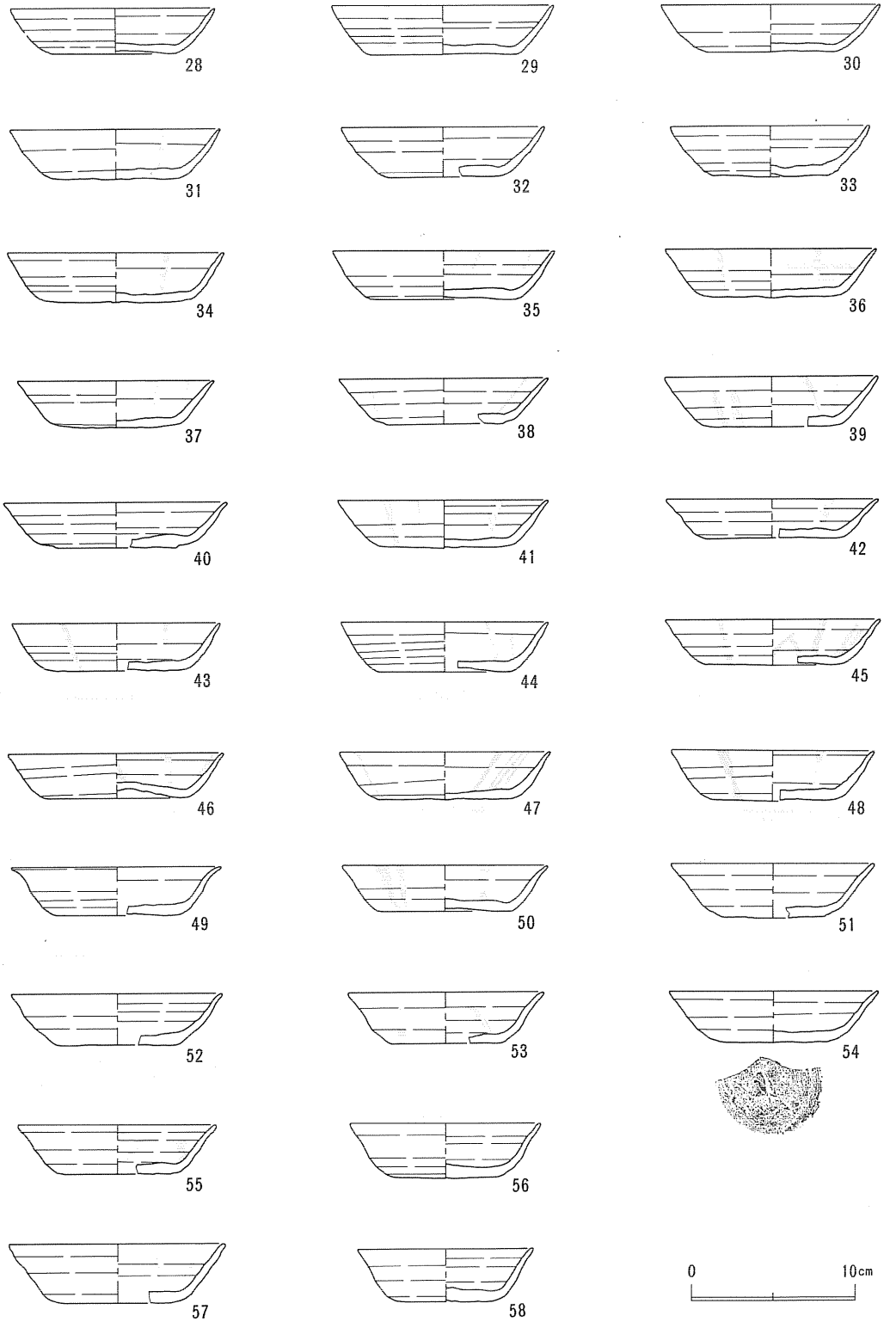
第７図　ＳＪ01ａ・ｂ遺物出土状況図



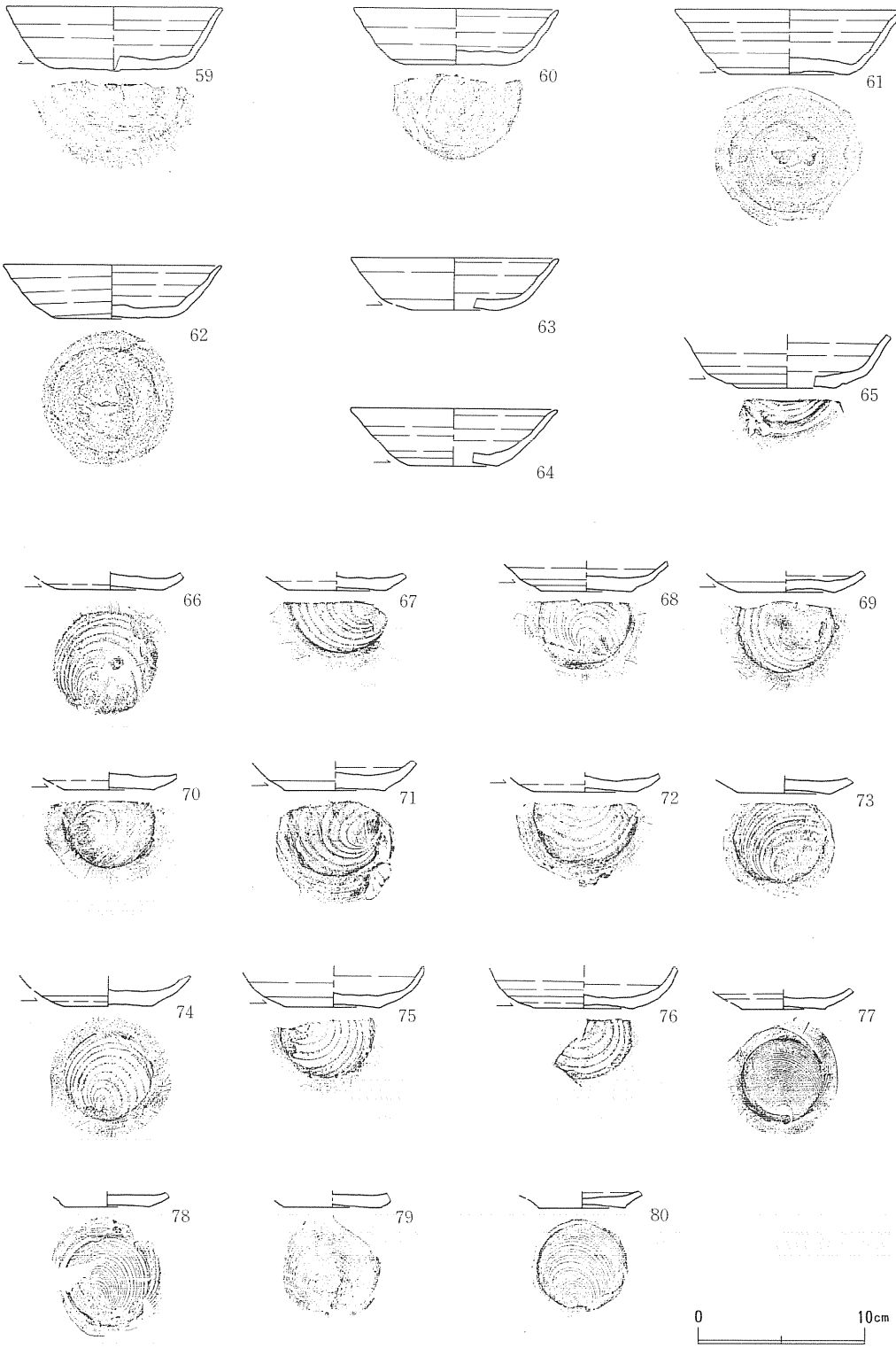
第8図　ＳＪ01ａ等高線図



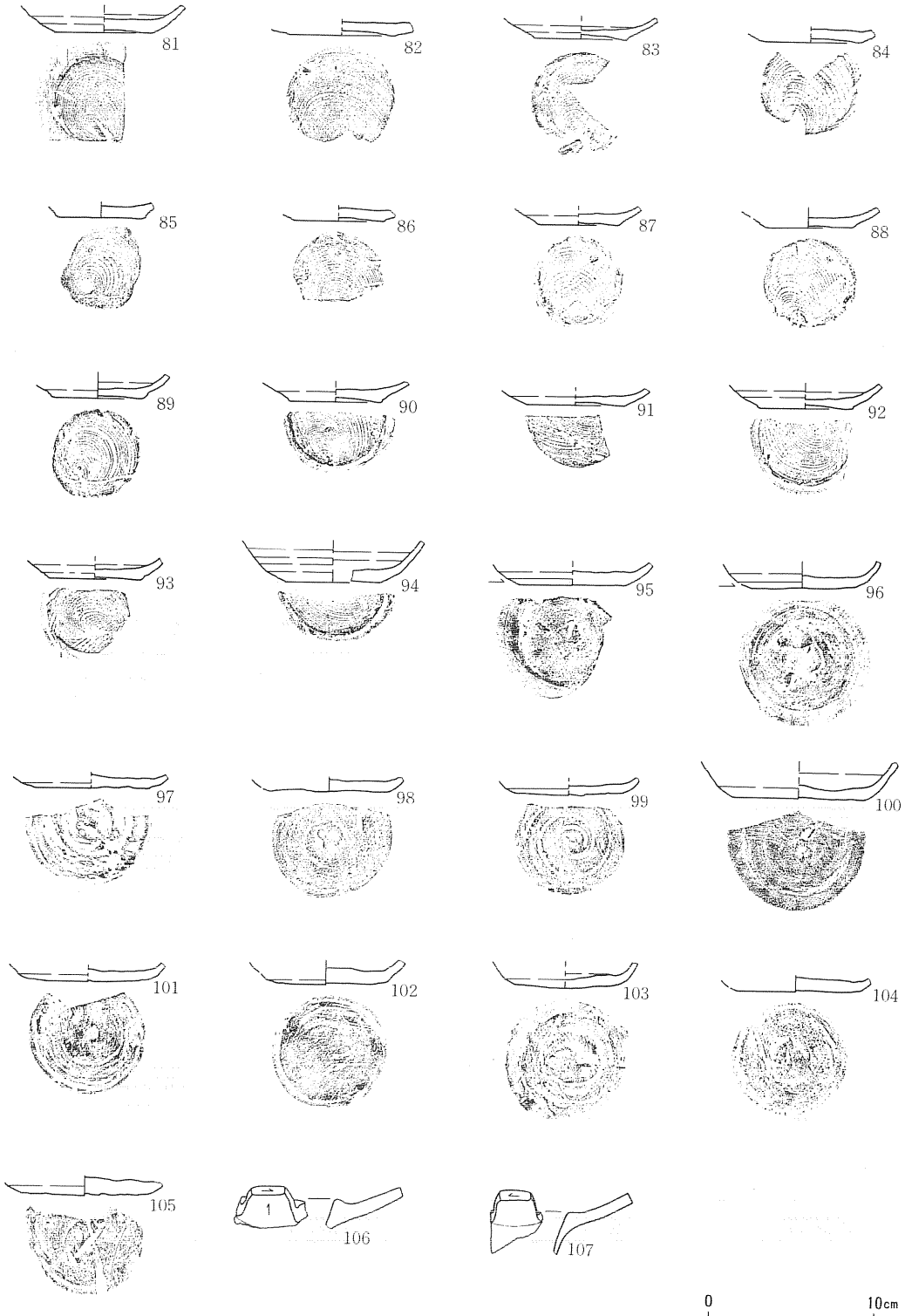
第９図　遺構内出土土器(1)　ＳＪ01



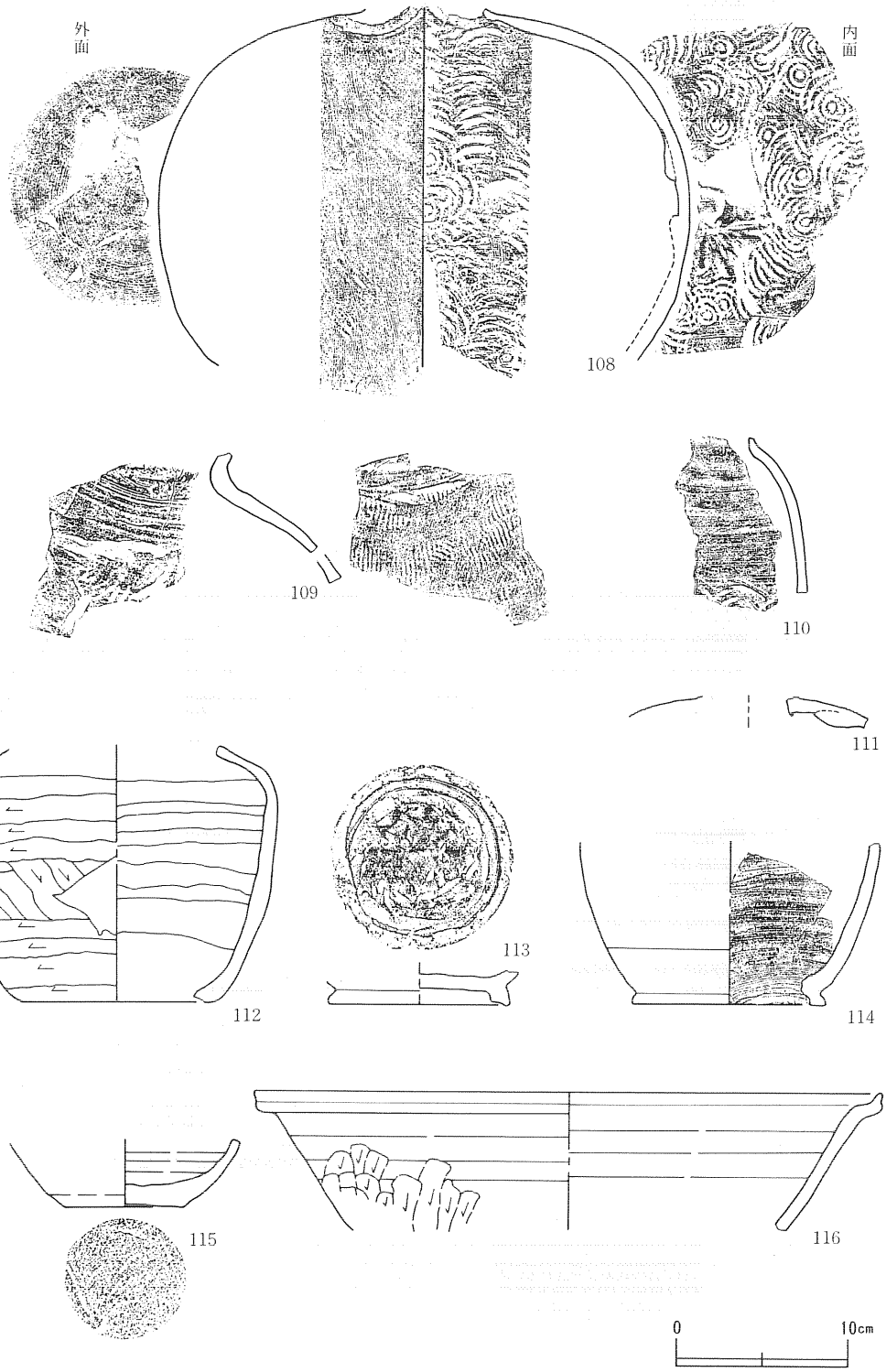
第10図　遺構内出土土器(2)　ＳＪ01



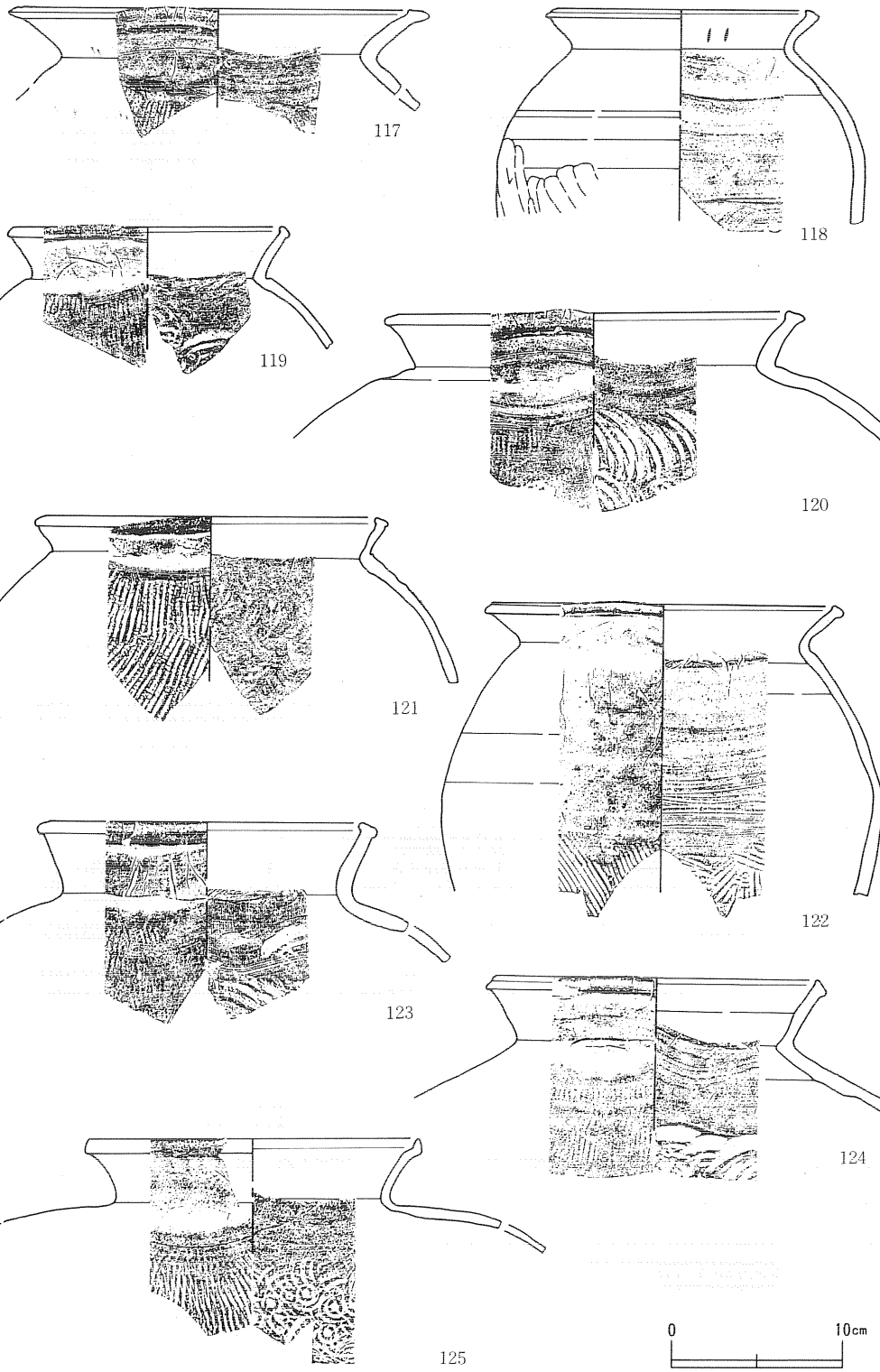
第11図　遺構内出土土器(3)　ＳＪ01



第12図　遺構内出土土器(4)　ＳＪ01



第13図　遺構内出土土器(5)　ＳＪ01



第14図　遺構内出土土器(6)　ＳＪ01

横瓶(108)(第13図、第7表、図版59-1)

体部中央で膨らむ俵形を呈し、側面の一方は閉塞された(被蓋)状態を明瞭に残している。口頸部は欠失し接合痕が残る。

壺(111～114)(第13図、第7表)

111は長頸壺で、成形時の三段構成が明瞭である。112は口縁がやや短く肩が強く張る壺で、体部全体に篦削りを施している。113と114は長頸壺と考えられ、高台は短く踏ん張る。

鉢(116)(第13図、第7表)

口縁は端部が直立する数少ないタイプで、体部には篦削りを施している。

甕(109・110・115・117～125)(第13・14図、第7・8表、図版60-1、67-1～5)

109と110は体部、115は底部、他は口縁から体部にかけての資料である。115は底面に回転糸切り痕をもち、体部下端に篦削りを施す。117～125の口縁部は内外に稜をもつ口唇に特徴があり、それが緩く傾斜するもの(117)、やや強く傾斜するもの(118～124)、直立気味に傾斜するもの(125)がある。内面の叩き目は同心円状のものが多いが、110と122は第21図217と同様の特徴的な叩き目である。

ＳＴ03からは坏蓋・高台付坏・坏・壺・瓶と227～277までの土器が出土している。

坏蓋(227～236)(第23図、第14表)

天井の平坦なもの(227～229・231)と丸いもの(230)とがある。前者は器高の低いタイプで占め、端部断面が三角形状のもの(227・228)と屈折して立つもの(229)とがある。後者の端部先端は丸く屈折し、つまみが扁平なボタン状を呈している。232～236はボタン状のつまみである。

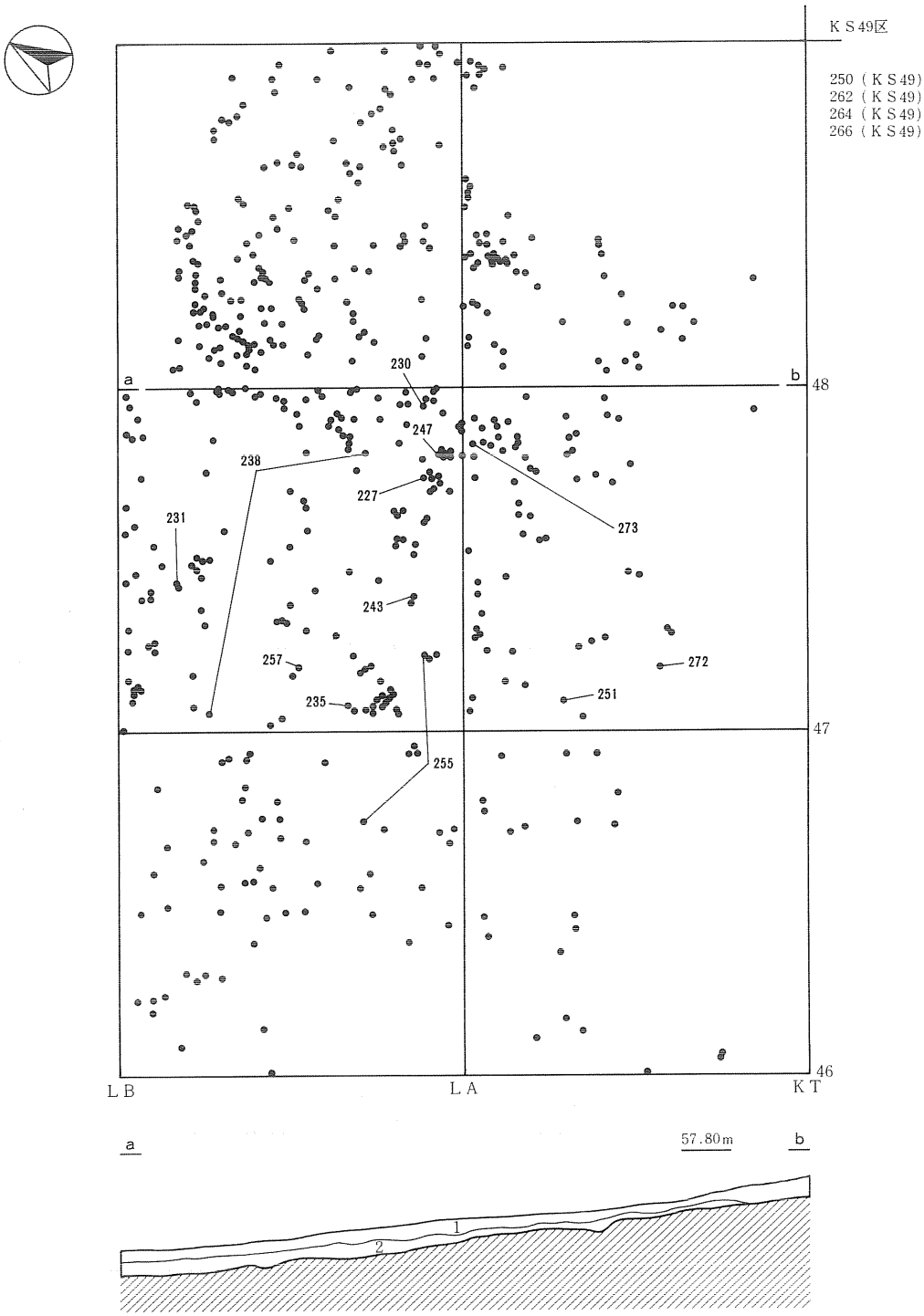
高台付坏(237～243)(第23図、第14表、図版46-1・2)

高台が四角張って低いもの(237・238・240～243)とやや高いもの(239)とがある。237の高台接地部は極端に窪んでいる。

坏(244～270)(第23・24図、第14～16表、図版79-3・4)

244～249・251は体部下端に篦削りをもたないタイプで、直線的かやや外反するもの(244～246)と外反するもの(247～249・251)とがある。250と252は体部下端に不明瞭な回転篦削りを施すタイプで、口縁は250が内弯気味252では内弯気味の口唇直下に段がつく形態である。253と254は回転糸切りをもち体部下端に回転篦削りを施すタイプで、255は回転篦切り痕と回転篦削りをもつタイプである。256～269は底部資料である。底部に回転篦切り痕をとどめるもの(256～258)、線の太い回転糸切り痕をもち体部下端に回転篦削りを施すもの(259～265)、線の細い回転糸切り痕をもつもの(266～269)がある。270は双耳坏で、耳の表裏には撫でと篦削りを施し縁を面取りしている。

壺(271～273・276)(第24図、第16表)



1．暗褐色土（7.5YR¾）　炭化物粒少量。粘性・締まり普。
2．暗褐色土（7.5YR¾）　炭化物粒少量。粘性・締まりややあり。

第15図　ＳＴ03遺物出土状況図

271は短頸壺272・273は長頸壺で、276は長頸壺と考えられる。272には成形時の三段構成が見られる。

瓶(277)(第24図、第16表)

277は、長頸瓶の底部と考えられるが判然としない。

甕(274)(第24図、第16表)

274は大甕である。焼台として使用されたと思われる。

２　土坑

ＳＫ02(第16・17図、図版4)

ＳＫ02はＬＡ49区を中心に、ＳＪ01から北へ1.5m離れた標高57～58mに位置している。この土器溜として利用された土坑は、アンカーによる2箇所の深い攪乱がある。規模は長軸2.6m短軸2.15m深さが約30cmあり、長軸がＮ－75°－Ｅを指す楕円形を呈している。中からは多量の須恵器と若干の土師器が重なり合う状態で出土した。これらの遺物は大きい破片が大部分を占めていることから、窯から取り出された製品が選別され悪いものが投棄されたものと考えられる。また覆土上位には、灰白色を呈した火山灰が斜面下方寄りを中心に約15cmの厚さで堆積しており、これが遺物を直接的に覆っていた。火山灰に覆われたこれらの土器は、ＳＫ02覆土一括出土土器群(**一括土器群Ａ**)として捉えることができるが、ＳＪ01ａ・ｂの両窯の製品を含んでいると考えられる。

出土遺物

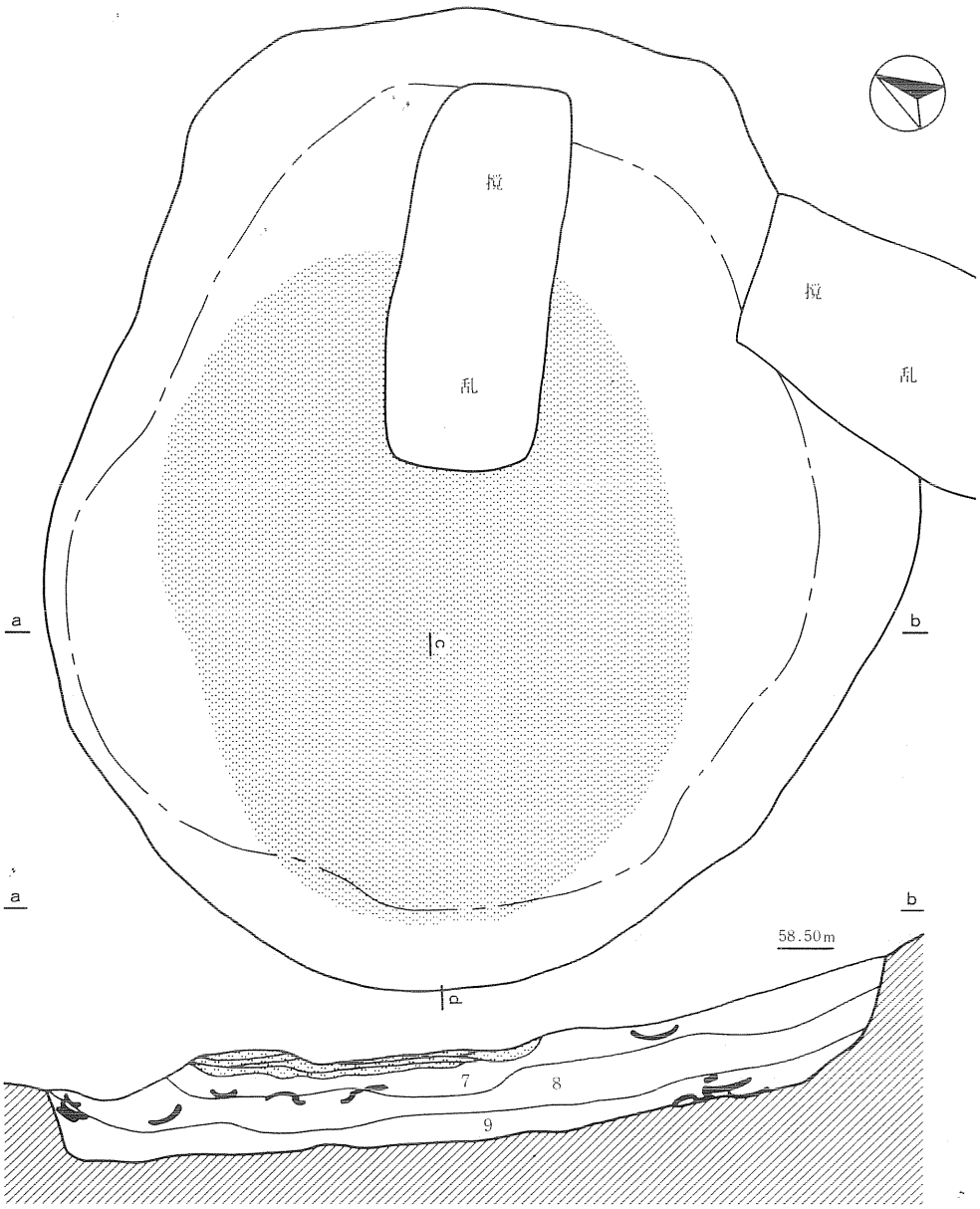
ＳＫ02からは坏蓋・高台付坏・坏・横瓶・甕と126～225までの土器が出土している。これらのすべては、一括土器群Ａとして捉えることができる。

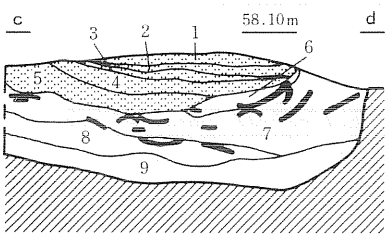
坏蓋(126～128)(第18図、第8表、図版41-4・5)

天井がやや丸味をもつもの(126・128)と平坦なもの(127)がある。127の天井は高く、127と128の端部は水平から屈折する。

坏(129～213)(第18～21図、第8～13表、図版51-3～12、52-1～4、79-1・2・7・8、80-1・2・8)

129～142は全体が薄くやや浅い大ぶりの形態で、底面に篦切り痕を留めるタイプである。このタイプの体部内面には、細く浅い擦痕が1～3条轆轤目に沿って認められる。これらには内弯もしく内弯気味のもの(129～140)、直線的なもの(141)、外反するもの(142)がある。143～170は内面に擦痕が認められず、底面に回転篦切り痕を留めかつ体部下端に回転篦削りのないタイプである。これらには口縁が直線的なもの(150・151)、大きく外反するもの(165・166)、内弯気味の口縁直下で段がつくように膨らむもの(170)などがある。171～174も口唇直下で段がつき底部に回転篦切り痕を留めるが、体部下端に不明瞭ながら回転篦削りを施すタイプである。175～186は底部に回転篦切り痕を留め、体部下端に回転篦削りを施すタイプである。内弯気味

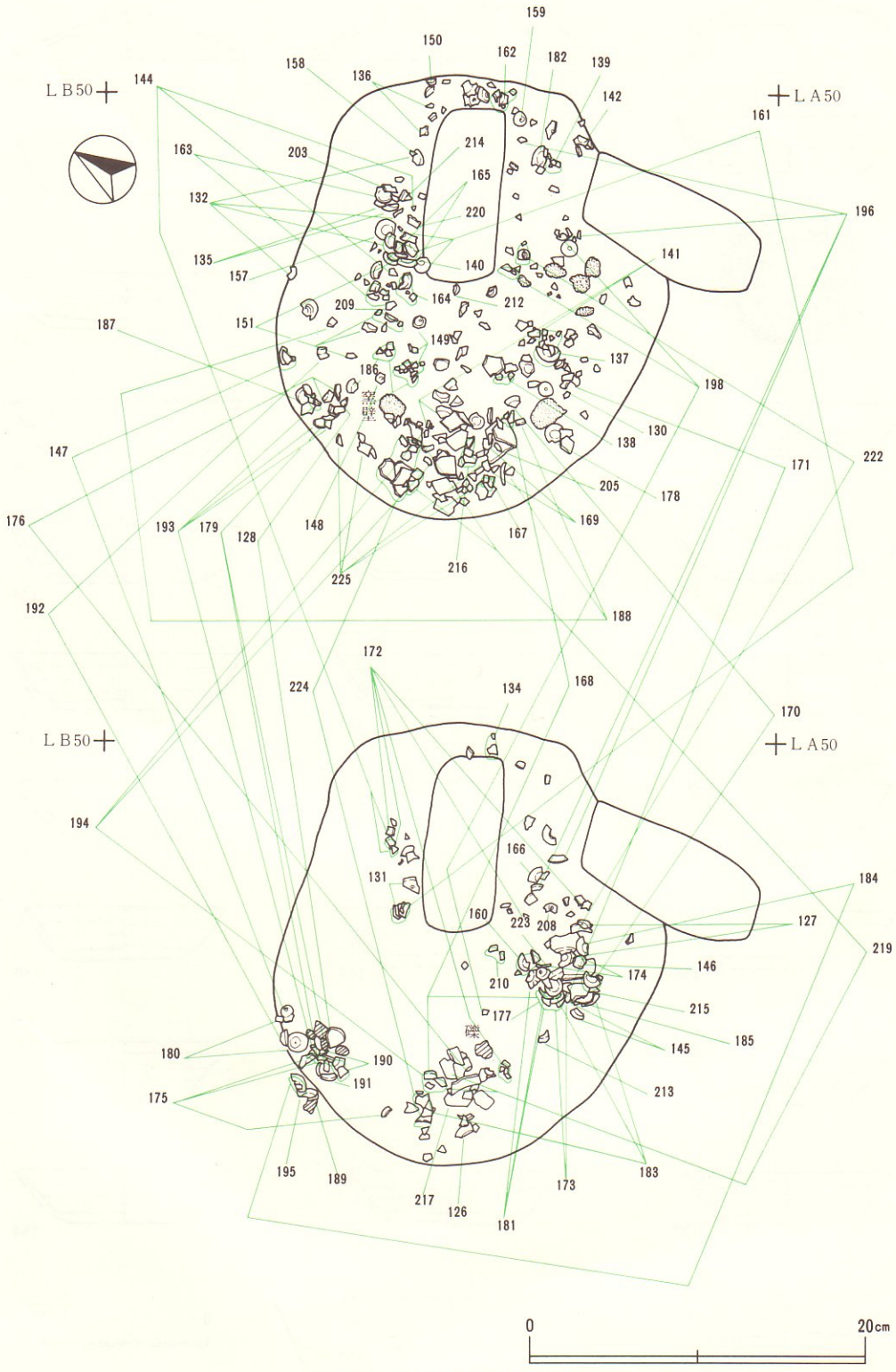




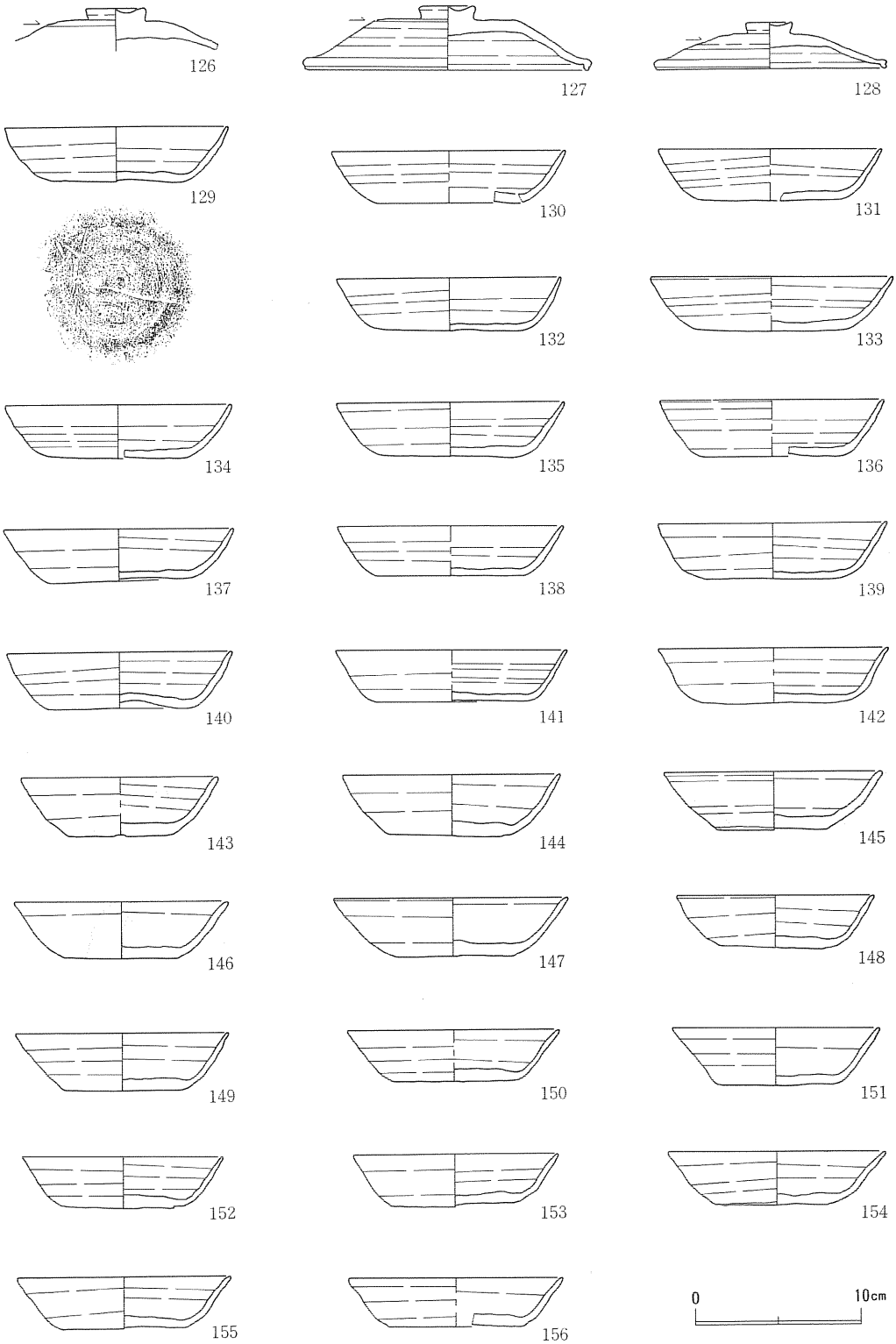
1　浅黄色土（2.5Y 7/4）　砂質。粘性弱・締まりややあり。
2　にぶい黄色土（2.5Y 6/4）　砂質。浅黄色土を縞状に含む。粘性弱。締まりややあり。
3　1と同類
4　3と同類だが線で区別できる
5　浅黄色土（2.5Y 7/3）　砂質。明黄褐色土を斑状に含む。粘性・締まり普。
6　オリーブ褐色土（2.5Y 5/4）　火山灰と明褐色土の昆合。粘性弱。締まり普。
7　明褐色土（10YR 5/6）　地山粒少量。炭化物微量。粘性・締まり普。
8　褐色土（10YR 4/4）　地山粒少量。炭化物微量。粘性・締まり普。
9　黒褐色土（10YR 2/3）　地山土・焼土・窯壁少量。炭化材少量。粘性・締まり普。

0　1m

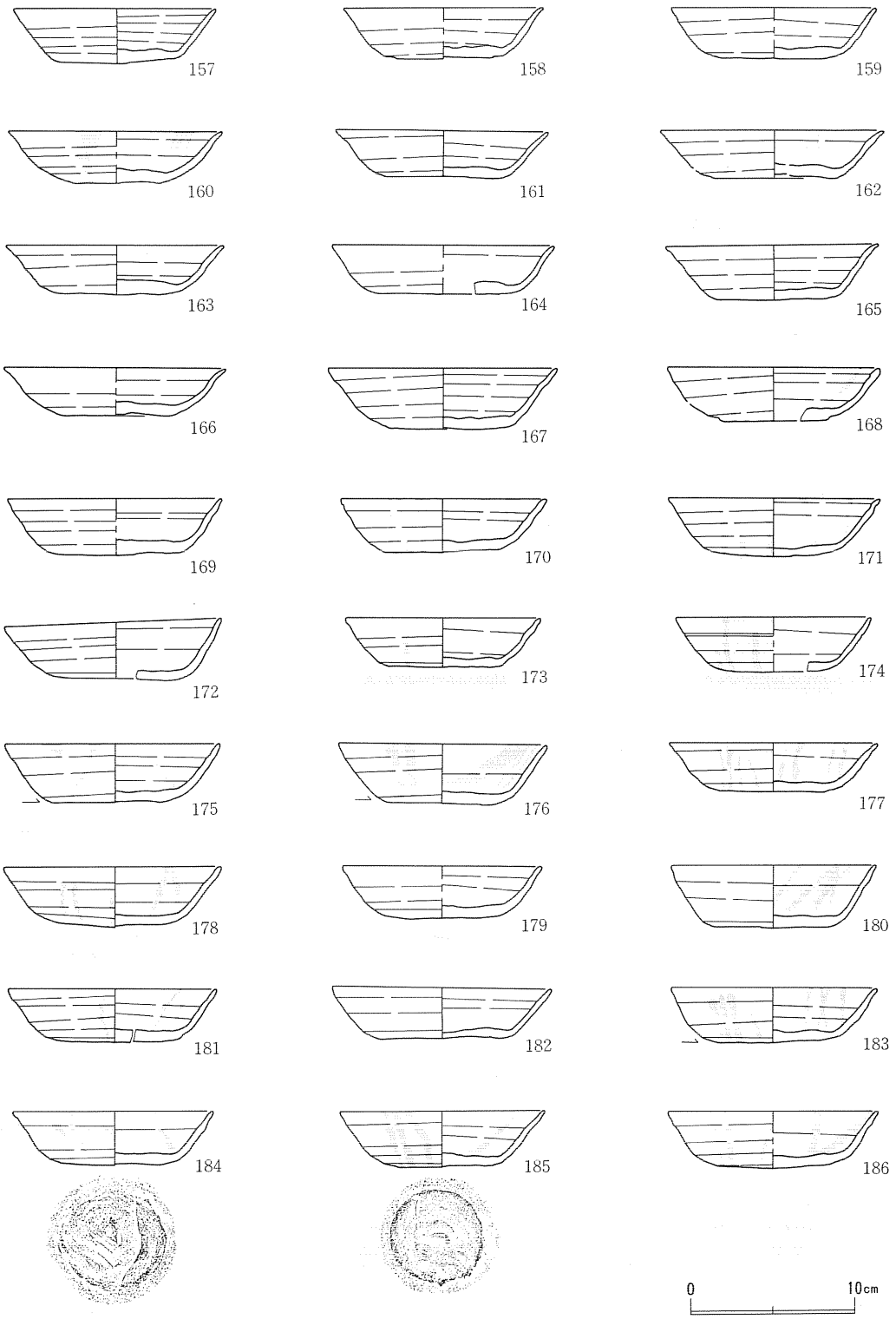
第16図　ＳＫ02平面図



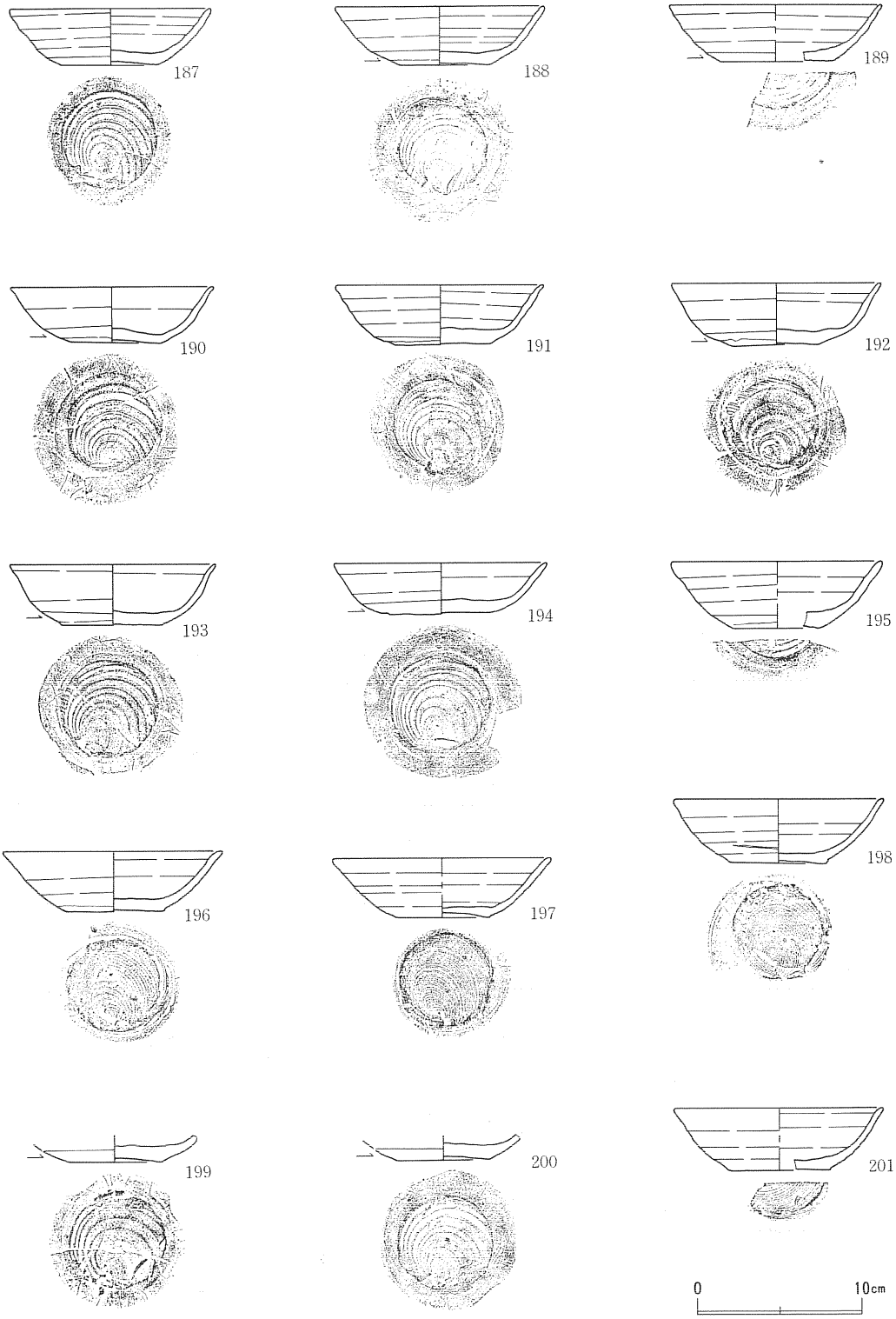
第17図　ＳＫ02遺物出土状況図



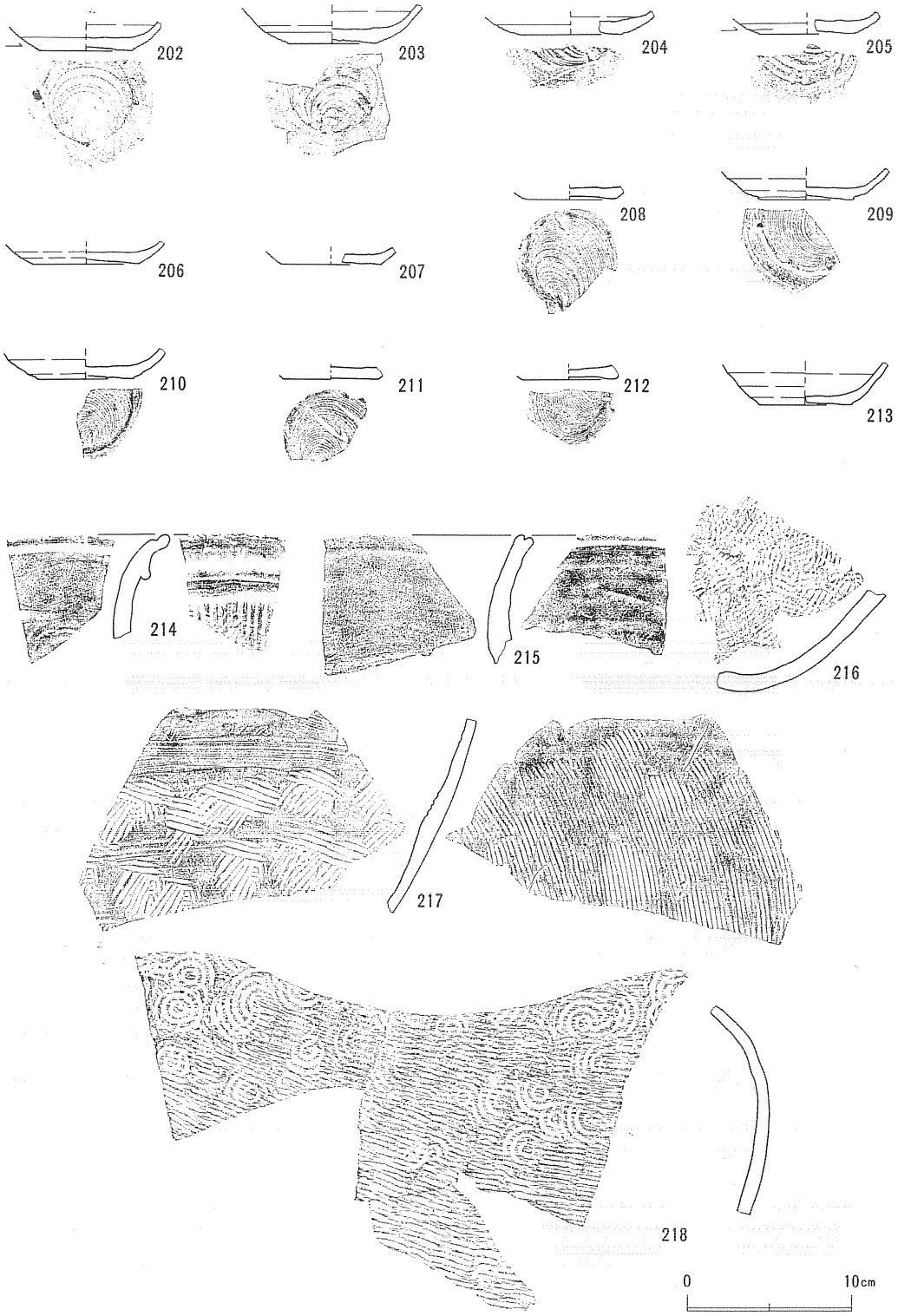
第18図　遺構内出土土器(7)　ＳＫ02



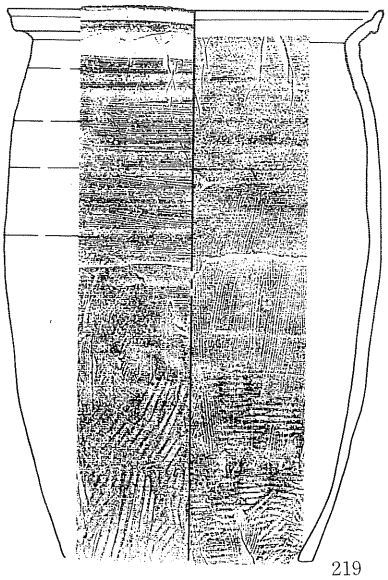
第19図　遺構内出土土器(8)　ＳＫ02

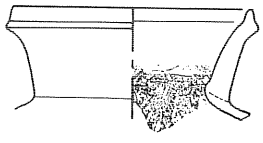


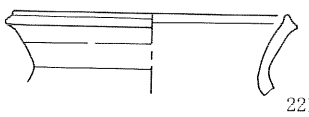
第20図　遺構内出土土器(9)　ＳＫ02

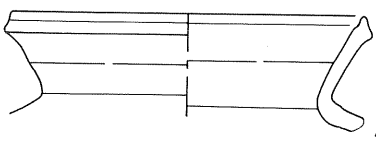


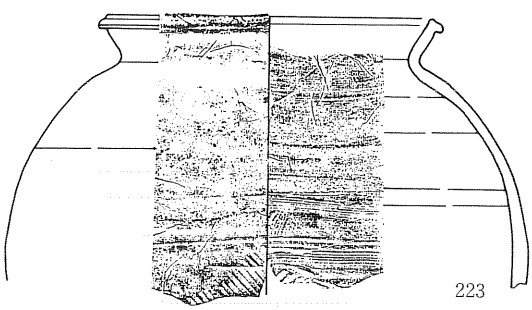
第21図　遺構内出土土器(10)　ＳＫ02

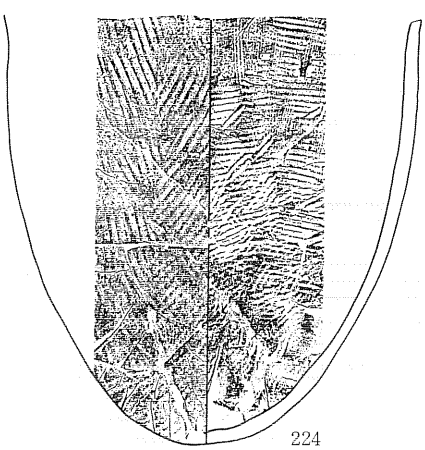

219

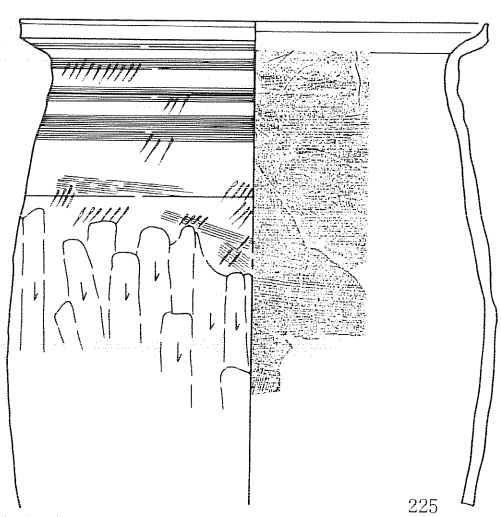

220

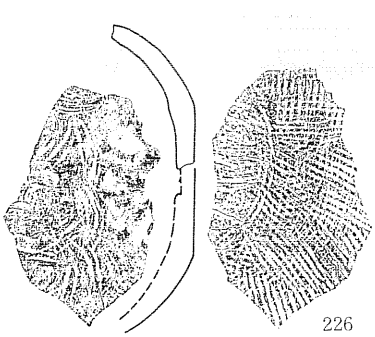

221

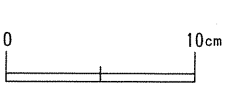

222


223

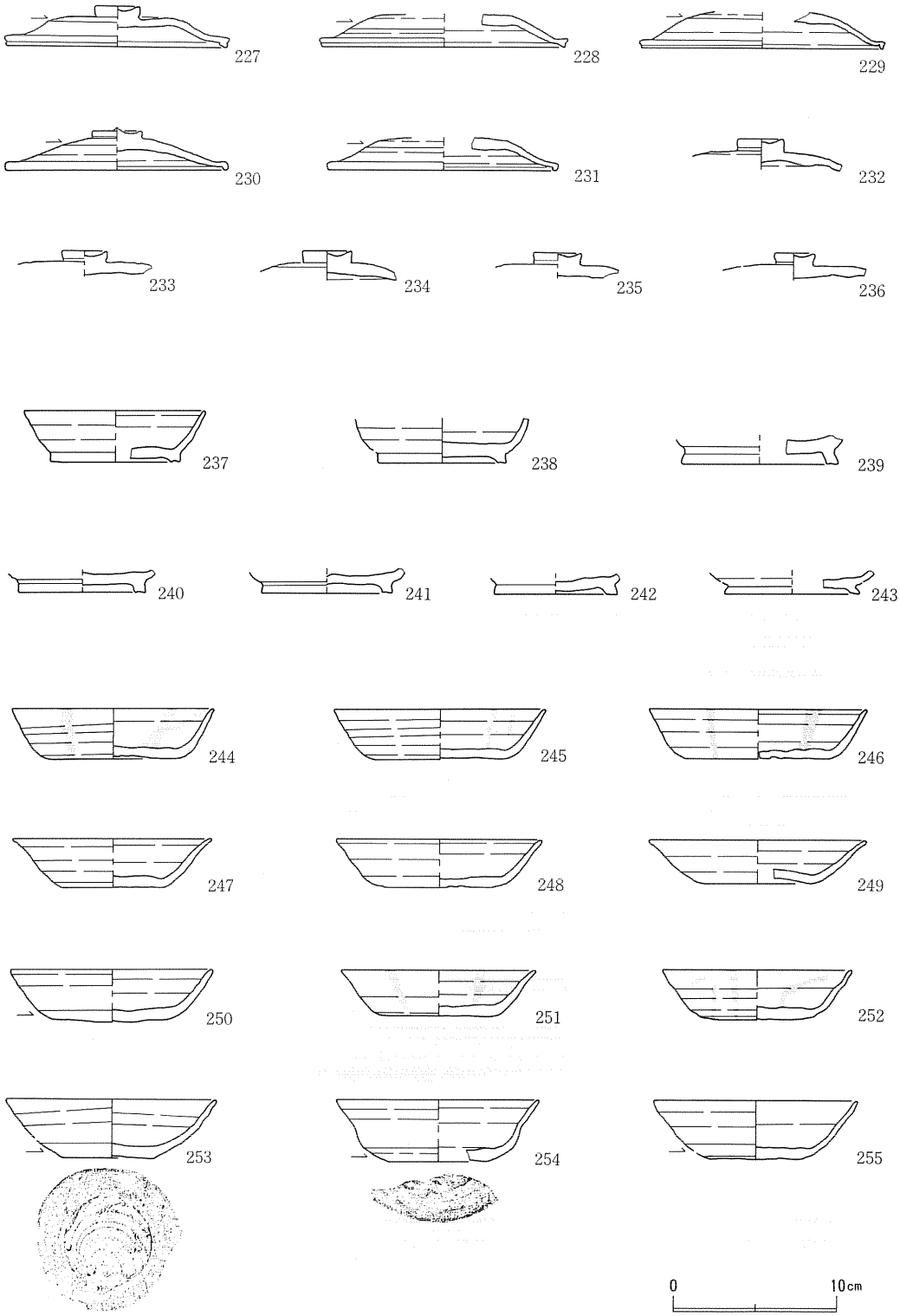

224


225

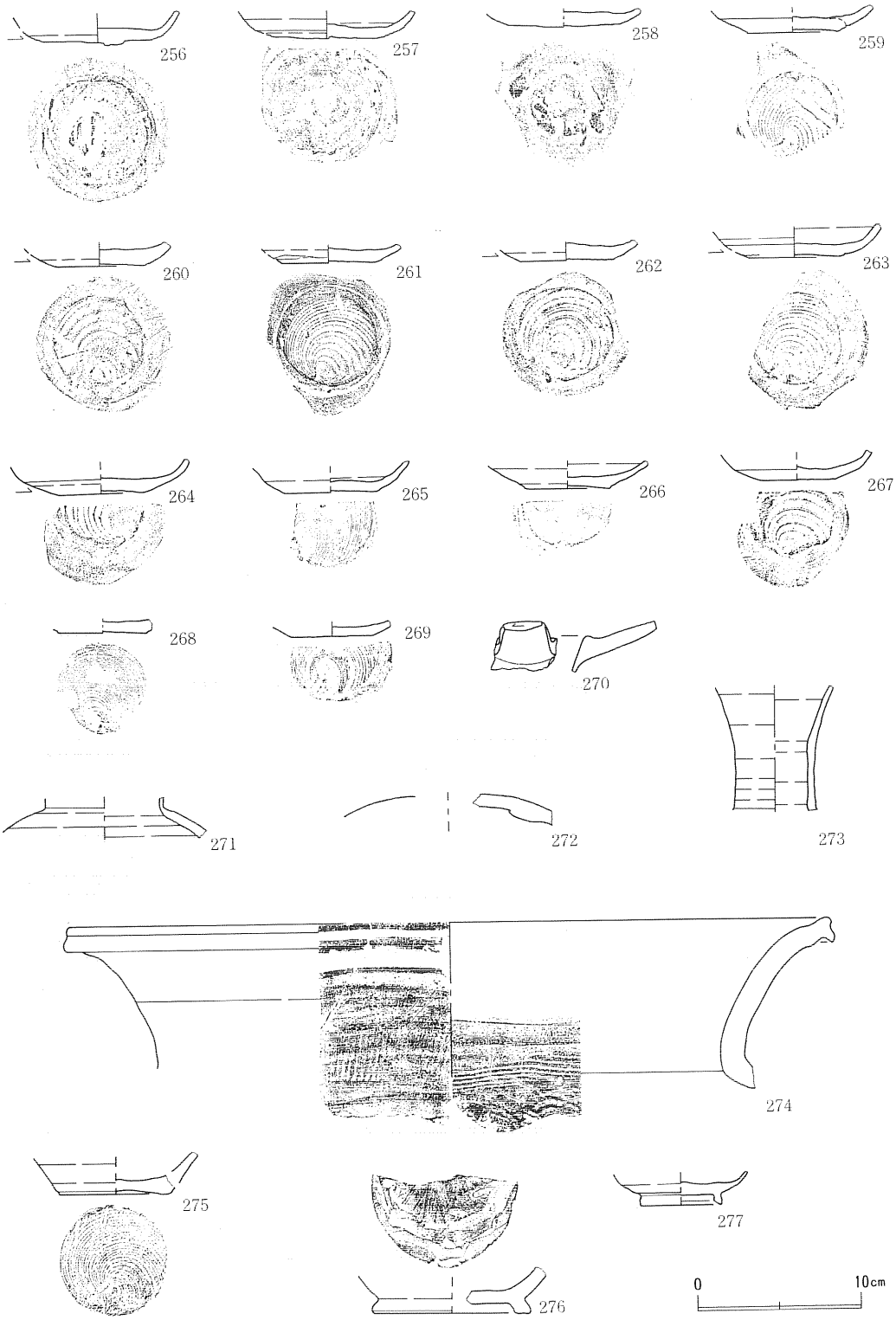

226



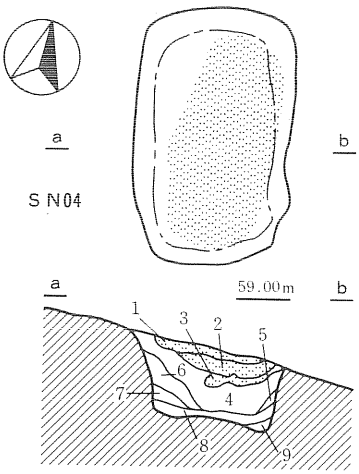
第22図　遺構内出土土器(11)　ＳＫ02



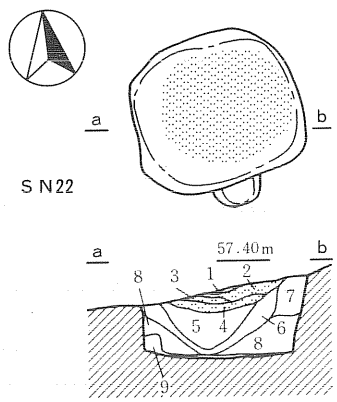
第23図　遺構内出土土器(12)　ＳＴ03



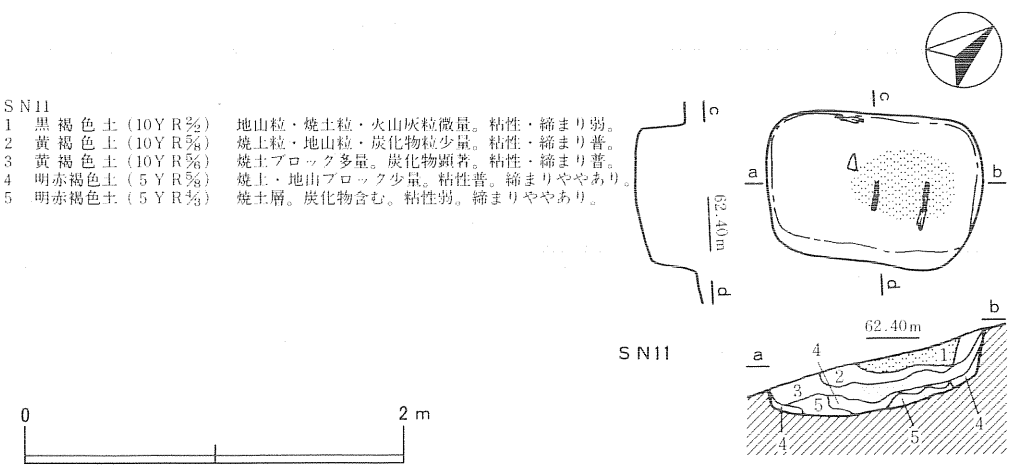
第24図　遺構内出土土器(13)　ＳＴ03



SN04
1　明黄褐色土（2.5Y　7/6）　火山灰。暗オリーブ褐色を含む。粘性弱。締まりややあり。
2　浅黄褐色土（2.5Y　7/3）　火山灰。粘性弱。締まりややあり。
3　暗褐色土（10YR3/3）　火山灰少量。粘性・締まり普。
4　黒褐色土（10YR3/2）　赤色粒・炭化物粒微量。粘性・締まり普。
5　暗褐色土（10YR3/4）　赤褐色土少量。粘性・締まり普。
6　暗褐色土（10YR3/4）　赤色粒含む。粘性・締まり普。
7　赤褐色土（2.5YR4/8）　焼土層。炭化物粒含む。粘性普。締まりややあり。
8　黒　色　土（10YR1.7/1）　炭化物層。焼土粒・地山粒・炭化物含む。粘性普。締まり弱。
9　黒褐色土（10YR3/2）　地山粒・炭化物粒多量。粘性・締まり普。



SN22
1　黄橙色土（10YR7/8）　火山灰。粘性弱。締まりややあり。
2　黄　色　土（2.5Y　8/6）　火山灰。粘性弱。締まり強。
3　明黄褐色土（10YR6/8）　火山灰。粘性弱。締まりややあり。
4　明黄褐色土（2.5YR7/6）　火山灰。粘性弱。締まり強。
5　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物・火山灰微量。粘性・締まり普。
6　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物・地山ブロック少量。粘性・締まり普。
7　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物・火山灰微量。粘性・締まり強。
8　褐　色　土（10YR4/4）　炭化物少量。粘性・締まり普。
9　黒　色　土（10YR1.7）　炭化物層。粘性・締まり弱。



SN11
1　黒褐色土（10YR2/2）　地山粒・焼土粒・火山灰粒微量。粘性・締まり弱。
2　黄褐色土（10YR5/4）　焼土粒・地山粒・炭化物粒少量。粘性・締まり普。
3　黄褐色土（10YR5/6）　焼土ブロック多量。炭化物顕著。粘性・締まり普。
4　明赤褐色土（5YR5/8）　焼土・地山ブロック少量。粘性普。締まりややあり。
5　明赤褐色土（5YR5/8）　焼土層。炭化物含む。粘性弱。締まりややあり。

0　2m

第25図　窯状遺構平面図

の口縁直下で段がつくように膨らむものが多い。187～195は底部に線の細い回転糸切り痕を留め、体部下端に回転篦削りを施すタイプである。口縁が弯曲するもの(187～189)、外反するもの(190～194)、直線的なもの(195)がある。また、これらの中には体部下端に浅く狭い円形状の顕著な窪みをもつものがある(191・192・194)。196～198・201は底部に線の細い回転糸切り痕を留めるだけのタイプである。口縁はやや外反するが、体部は大きく弯曲している。199～213は底部に回転糸切り痕を留める底部資料である。199～205は体部下端に回転篦削をもち、208～213はそれのないものである。206と207は、内面底部に同心円状の痕跡をもつが、体部下端の篦削りの有無は不明である。

横瓶(226)(第22図、第14表)

体部中央が平坦な特徴をもつ。この部分は閉塞された(被蓋)状態を明瞭に残している。

甕(214～225)(第21・22図、第13・14表、図版60-2～4、83-2・3・5・6、67-6～8)

214・215は口縁部、216は底部、217・218は体部破片である。220～223は口唇部が内傾し体部の膨らむタイプである。219・224・225は底部が砲弾形を呈するタイプである。口縁は頸部から外反しさらに直立する形態である。219は灰色、224は橙色、225は褐色で土師質である。

3　窯状遺構

ＳＮ04(第25図、図版5)

ＳＮ04はＬＢ50区にあり、ＳＫ02の北約4mに位置している。規模は長軸1.35m×短軸85cm深さが約40cmあり、長軸がＮ－13°－Ｗを指す隅丸長方形を呈している。床面は小さな凹凸が認められるものの全体的には平坦で、木炭を含む炭化物層が全面に3cm前後の厚さで堆積している。壁はやや斜めに傾き、その下位はほぼ全面が赤く焼けている。覆土には灰白色の火山灰が、中央部を中心に最大15cmの厚さで堆積していた。遺物は出土していない。

この遺構では土器がなく、底面に炭化物が充塡していたり壁が厚く焼けていない点などからして、伏せ焼きによる炭焼成遺構の可能性がある。しかし、方形状の丁寧な掘り方をもつ点から、それと断定するにも疑問の余地がある。したがって、ここでは窯状遺構として捉えることにし、以下同じような状況を示すＳＮ11・ＳＮ22についても同様に扱う。

第2節　Ｂ地区の遺構と遺物

Ｂ地区には、須恵器を焼成した窯跡ＳＪ05・06・07・08を中心として各種の遺構が密集している。これら窯跡の斜面下方には、灰原ＳＴ12・19・18・36(これらは互いに重複する場合もあるが、主に土器が集中する部分に対して便宜的に用いた名称である)などを含む大規模な灰原(東西約30m×南北20m)が形成されている。またＳＪ07・08の地点から同南東側斜面上方には、西から

灰原ＳＴ35･17･13･14･15、ＳＫ16土坑が並んでいる。そして、ＳＪ05の北西側には、性格を明らかにできなかった不明遺構ＳＸ29･09･10が存在する。また、ＳＪ08･ＳＴ35･17･13･14･15･ＳＫ16の北側は調査区外であり、今回の調査でその全貌を明らかにすることができなかったが、斜面がまた連続していることから、この他にもいくつかの窯跡･灰原などの存在することが予想される。なお、広大な灰原の中には、土器が特に集中する部分などがあり、それらには便宜的にＳＴ12･19･18･36などの番号を付した。

1　窯跡

ＳＪ06とＳＴ12(第26･27･31図､図版7-2､8･9･10)

ＳＪ05の調査中、ＳＪ05と重複し主軸の異っている窯跡の存在を知り、これをＳＪ06とした。

一部がＳＪ05右脇に存在するＳＪ06は、ＬＱ57･58区を中心に存在していたと考えられる。現状は標高61.5m前後のＬＰ57区北西部に、焚口付近の壁面と底面の一部が残存する。残存部を焚口付近としたのは、壁に赤変が認められる程度であることや、底面とした地山土の上を炭化物や窯壁を含む灰層が直接覆っていることによる。そして、ＳＪ05とＳＪ06の関係を示す横断面(第31図)によってＳＪ06がＳＪ05よりも古い遺構であることが分かり、ＳＪ06の大半はＳＪ05構築時に消滅したと判断できた。したがって主軸はＳＪ05の主軸に沿う方向と考えられる。また、下方にはこの灰原であるＳＴ12が広がっている。ＳＪ06は、ＳＴ12において劫入りの窯壁が検出されなかったことから地下式窖窯であった可能性がある。ＳＪ06の床の炭化物層からは、緑色の釉が掛かり、胎土の精製された極めて特徴的な破片が2点(第28図284･289)出土した。そしてＳＴ12からもこれと同種の須恵器が多量に出土し、その一部が前述破片と接合した。

ＳＴ12はＬＰ55･56区、ＬＱ55･56区を中心に広がり、特にＬＰ56区斜面下方から同55区斜面上方にかけて最も遺物が集中していた。この灰原はいくつかの時期の灰原が重複している中にあって、最も古い灰原として認識できた層である。この層からは、緑色の釉が掛かり胎土に大きな砂粒をまったく含まない黄白色系の精製された須恵器が、まとまって出土した。さらに上層をＳＴ17やＳＪ05の灰原ＳＴ19が覆っていることも判明し、これはＳＪ05･06窯跡間での在り方と一致することが分かった。この層には炭化物が多量に含まれ還元色の厚い窯壁や、ひしゃげた須恵器を含むことなどから、ＳＪ06の焼成温度がかなり高かったことが分かる。またＳＴ12の下には再堆積した純粋な地山排土の層があるが、これはＳＪ06構築時の地山掘削土がはき出されたものと考えることができる。灰原から出土し前述した特徴をもつ土器群は同一層の一括土器であり、ＳＴ12炭化物層土器群(**一括土器群Ｂ**)として捉えることができる。

出土遺物

ＳＪ06からは284の坏蓋と289の高台付坏が出土している。また、これらの土器の胎土は黄白

色で、発色の美しい緑色の釉が掛かっているが検討の結果自然釉と考えられる。

坏蓋(284)(第28図、第16表、図版41-9)

天井が丸味をもった扁平な形態で、端部は屈折して外傾する。

高台付坏(289)(第28図、第17表、図版46-5)

口縁は内反し、体部では平行な工具痕の筋を認める。高台はやや高くしっかりしている。

ＳＴ12からは坏蓋・高台付坏・壺蓋・壺・甕(278～283・285～288・290～304)が出土している。胎土が黄白色で、緑色の釉の付着しているのがほとんどである。ただし、296と297の釉は、褐色気味ににごった緑系の色で大部分が剥落し、他と異なる様相である。これらすべては、一括土器群Ｂとして捉えることができる。

坏蓋(278～283・285・286)(第28図、第16表、図版41-6～8・10)

天井が丸く高いもの(278)、やや低いいもの(279～283)、丸味をもつが扁平なもの(285・286)がある。端部は明瞭に屈折するもの(280・285・286)とそうでないもの(278・279・281・283)とがあり、屈折する端部の先端は外傾する傾向にある。つまみはすべて擬宝珠形で、天井部の回転篦削りはすべて深く施されている。

高台付坏(287・288・290～293)(第28図、第16・17表、図版46-3・4・6・7)

293を除くと口縁が内弯する。高台はやや高くしっかりしている。これらの体部には平行な工具痕が認められる。

坏(296)(第28図、第17表、図版52-5)

全体に薄いつくりで、底面に篦切りの明瞭な渦巻を残している。口縁は鋭く、外面体部下端に回転篦削りが施され、体部も工具で撫でられた可能性がある。内面体部には細かく平行な凹凸が認められる。

壺蓋(294・295)(第28図、第17表、図版55-1・2)

天井が平坦で高いもの(294)と丸くやや低いもの(295)がある。口唇部が丸く口縁が外傾する。

壺(297～301)(第28図、第17表、図版55-3・4、81-7)

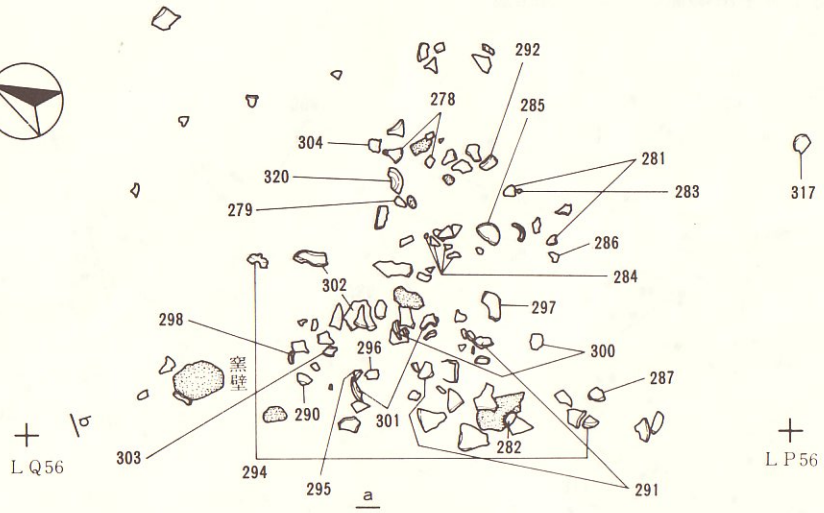
297は長頸壺で成形時の三段構成が明瞭である。298と299は短頸壺と思われる高台部。300は口径と高台径が同じで、体部に篦削りを施している。301は広口壺で口唇部が垂直に立つ。

甕(302～304)(第29図、第17表、図版83-4、84-5・6)

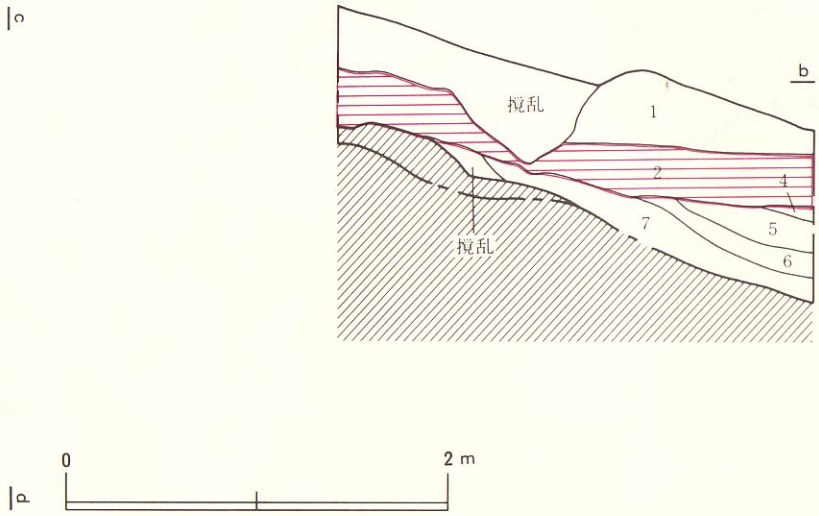
口唇部が垂直で(302)、口頸部は体部に嵌め込んで接合をしている(302・303)。304はいびつになった部分の図であり、実際は緩く開いた丸底である。

ＳＴ12の範囲外の広大な灰原中からも、ＳＪ06の製品と考えられる土器が出土している。305～325の坏蓋・高台付坏・坏・壺・甕がそれである。

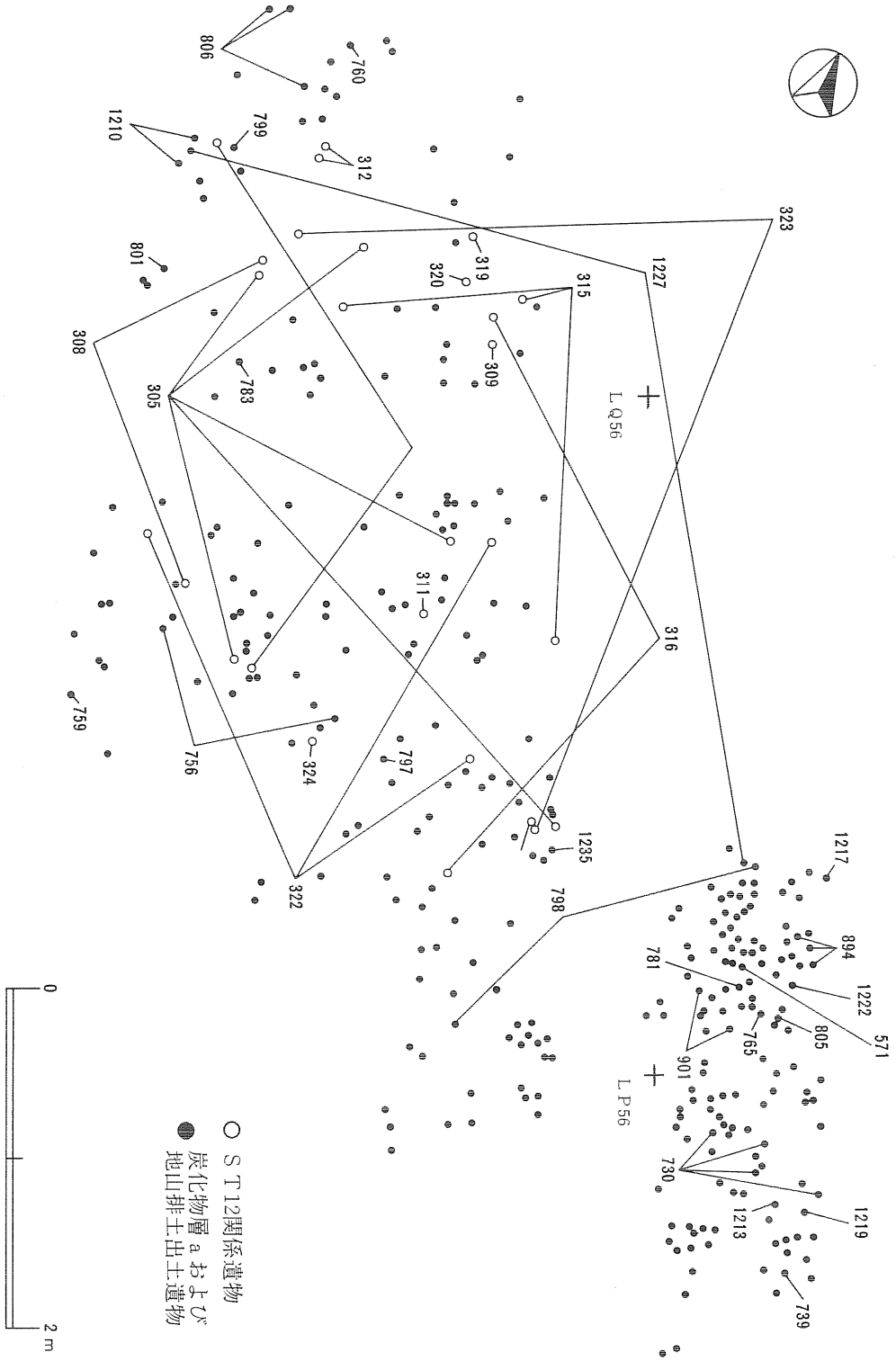
坏蓋(305～312)(第30図、第18表、図版41-11～15)



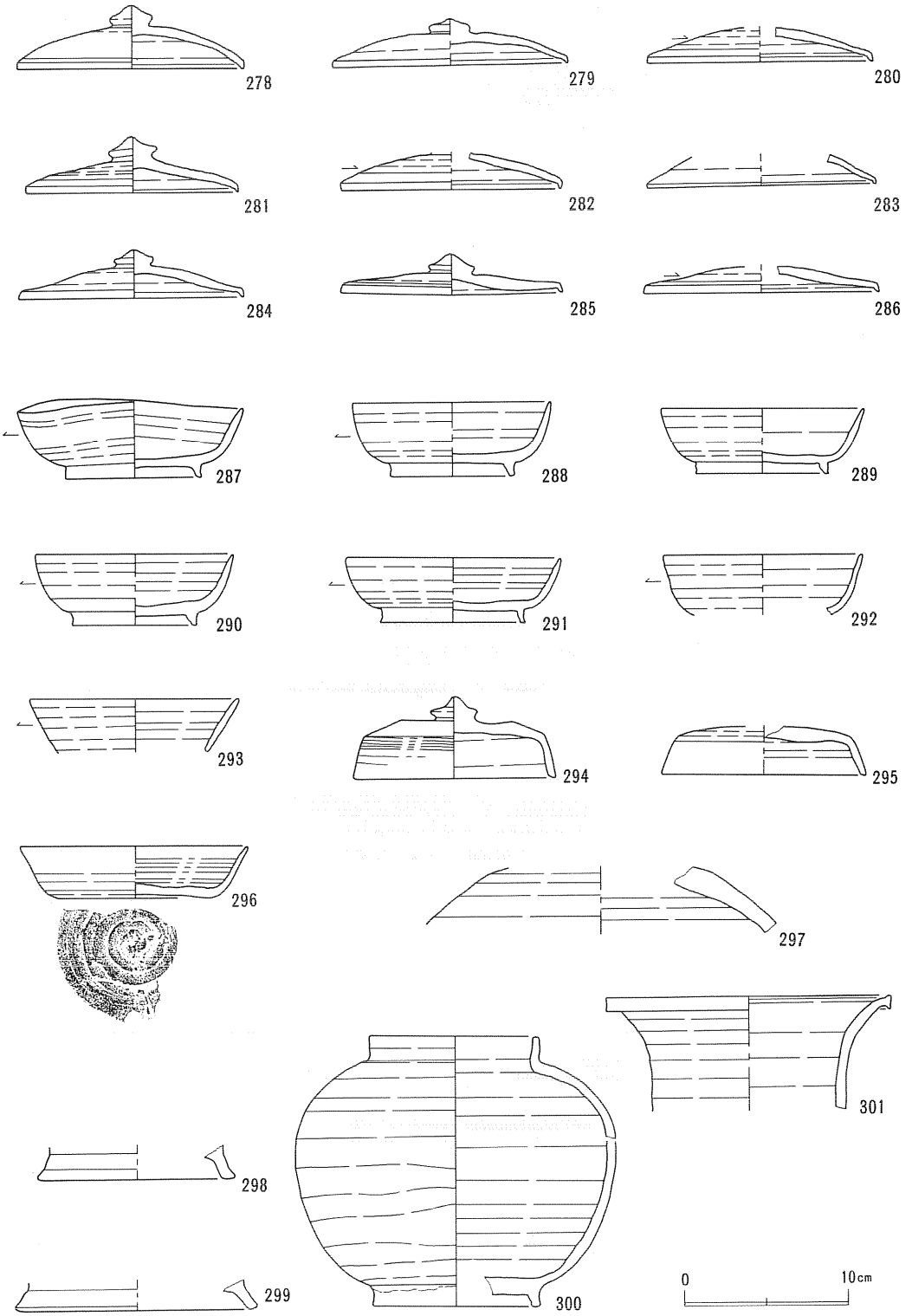
1	褐　色　土	(10YR4/4)	小地山ブロック・炭化物顕著。窯壁少量。粘性・締まり強。
2	明黄褐色土	(2.5Y　6/6)	やや砂質。粘性・締まり弱。
3	明黄褐色土	(10YR6/6)	小焼土ブロック・地山粒少量。粘性普。締まり弱。
4	黄 褐 色 土	(10YR5/8)	炭化物・赤色ブロック・地山粒少量。粘性・締まり普。
5	黄 褐 色 土	(10YR5/8)	炭化物・赤色ブロック・地山粒顕著。窯壁含む。粘性・締まり普。
6	明黄褐色土	(2.5Y6/6～5/8)	2と類似するが小白色ブロック均一に含む。やや砂質。粘性・締まり弱。
7	黄 褐 色 土	(10YR5/8)	明黄褐色土の地山粒少量。粘性普。締まりややあり。



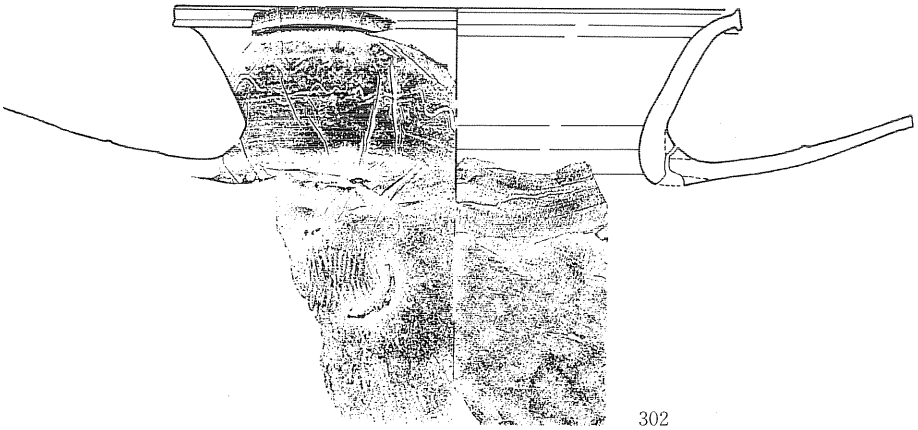
第26図　ＳＴ12遺物出土状況図(1)

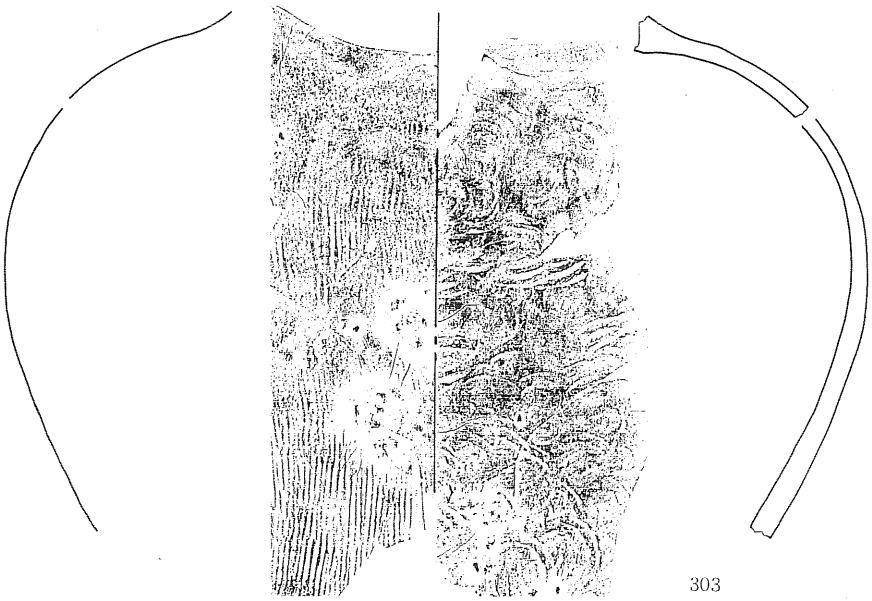


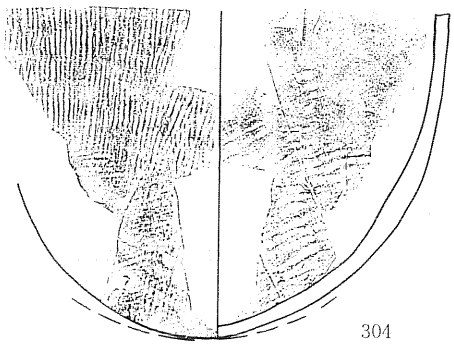
第27図　S T 12遺物出土状況図(2)

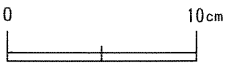


第28図　遺構内出土土器(14)　ＳＪ06、ＳＴ12

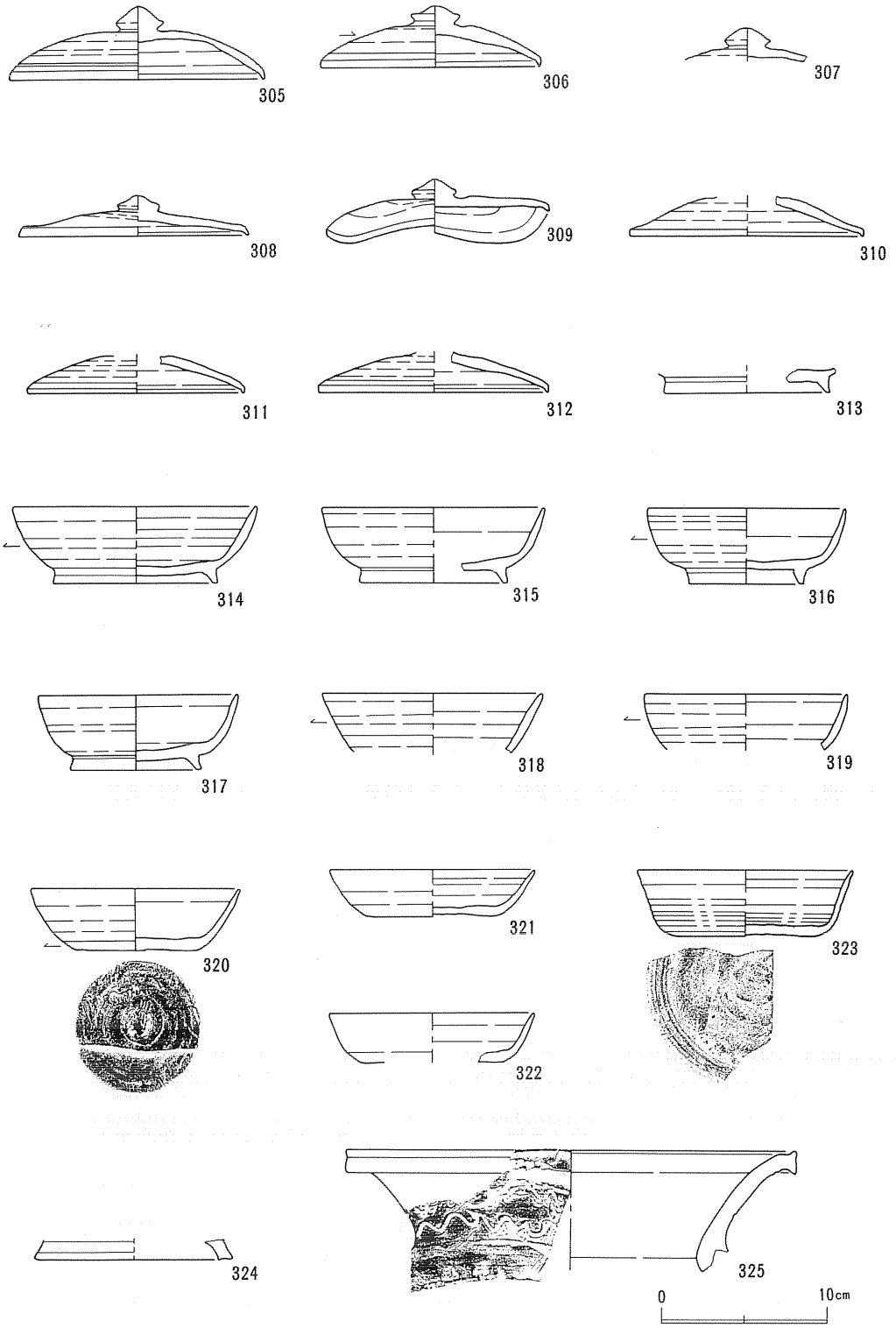








第29図　遺構内出土土器(15)　ＳＴ12



第30図　遺構外出土土器(1)　ＳＴ12関係土器

天井が丸く高いもの(305・306)、丸くやや高いもの(310～312)、丸く平坦なもの(307・309)があり、端部は明瞭に屈折するもの(308・311・312)、そうでないもの(305・306・310)がある。つまみは擬宝珠形で、回転篦削りは深く施されている。

高台付坏(314～319)(第30図、第18表、図版46-8～11)

口縁は内弯気味のものが多く、高台はやや高く断面は三角形状でしっかりしている。体部に平行な工具痕を認める。

壺(324)(第30図、第19表)

短頸壺の高台と考えられる。接地部はやや窪み、接合部には同心円状の凹凸が認められる。

甕(325)(第30図、第19表)

口唇部は垂直で、接合は体部に嵌め込んでいる。

坏(320～323)(第30図、第18・19表、図版52-6・7)

口縁が内弯気味のもの(320・321)と外反するもの(322・323)とがある。底部が回転篦切りで、体部下端に回転篦削りを施す。323の体部内外面には細かく平行な凹凸が認められ、321・322も釉や剝落で不明瞭だが、その可能性が高い。

ＳＪ05とＳＴ19（第31～36・52図、図版10～15)

ＳＪ05はＬＰ56・ＬＱ56～58区に位置し、等高線に直交するように構築された地下式窖窯と半地下式無階無段窖窯を含む窯跡である。本窯跡の長軸方向はＮ－40°－Ｅを指し、ＳＪ06窯跡を切りＳＤ28溝に切られている。下方には本窯跡の灰原ＳＴ19が広がっている。本窯跡は当初、幅1.3～1.65m、長さ7m以上(窯体の上半部は調査区外である斜面上方に延びている)の規模を持つと推定された。しかし、縦横断面および壁面の観察によって、少なくとも6期の窯が同一の主軸方向を取りながら重複したものであることが判明したため、新しいものからSJ05ａ～ｆとした。ＳＪ05ｅ～ａの構築に際しては、焚口部をＳＪ05ｆの焚口部よりも3～4mほど上方に移し、順次床面をかさ上げしている。これらの窯跡における最低の操業回数は、炭化物層を直接載せている床の数からＳＪ05ａでは1回、ＳＪ05ｂでは2回、ＳＪ05ｃでは1回、ＳＪ05ｄでは3回、ＳＪ05ｅでは2回、ＳＪ05ｆでは2回で、ＳＪ05全体では合計11回である。

ＳＪ05ｆの現状の規模は、長さが約7m、底面の幅が焚口で約1m、焚口から約3m先では最大となり1.3mで、焚口手前が袋状を呈している。この窯の底面は約8°の傾斜をもち、焚口から約50cm上方にはこれに伴うと考えられる長軸85cm×短軸55cmの浅い摺鉢状の窪みが検出された。また、横断面におけるＳＪ05ｆの横幅は(赤変している部分までの範囲)約1.4mで、ＳＪ05ｅ～ａの横幅1.4～1.75mと比較して極端に狭い特徴をもつ。ＳＪ05ｆの床面や壁は還元焔による青灰色を示すものの、床では1cm前後と薄い。また、焚口付近の床面径約1mの範囲には、炭化物が顕著に残っていた。

一方、ＳＪ05ｅ～ａは、縦断面(第31図)によって炭化物層と灰層が互層を成している部分と関連がある。それは、この重畳している炭化物層の斜面上方からさらに約2.5mの横断面(第33図)にＳＪ05ｅ～ａが存在していることから、重畳している炭化物の各層はＳＪ05ｅ～ａのどれかに該当すると考えられるからである。重畳している炭化物層の多くは斜面上方に向かって逆に傾斜する傾向にあり、この部分が焚口手前と灰原の接点と考えられる。この炭化物が途切れた状態は、ＳＪ05の新しい方の窯以降の改窯などに伴う攪乱と判断される。

さて、ＳＪ05ｅ～ａとＳＪ05ｆの間には、黄褐色を主体とした地山排土が厚く堆積し両者を分離している。この地山排土はＳＪ05ｅを構築する際に掘り出されたものと考えられる。そして、地山排土の広がりは、ＳＪ05ｆ焚口より斜面上方約2mの地点から8m下方に及び、窯内および窯外やや下方では約1mの幅がある。地山排土を除去した形態は、先端から斜面下方約6mでは断面が深い所で30～40cmの略Ｕ字状の溝状を示し、その後はわずかな窪みで不整形に広がっている。縦断面による底面は安定していない。この溝状部分とＳＪ05ｅに係わる掘削作業との関係は、ＳＪ05ｅ焚口手前付近から下方にかけて一旦溝状部分を掘り(①)、次に窯体となる部分を掘削し(②)、溝状部分を通じて掘削土を運び出す(③)、と大きく①→③の工程が考えられる。

ａを除くＳＪ05ｂ～ｅの構造は、窯体が深いこと壁に茹が確認されないことから地下式構造と考えられる。ＳＪ05ａについても茹は確認されていないものの、地山の掘り込みがかなり浅くなっていることから半地下式構造も考慮する必要がある。ＳＪ05ｆについては明確な茹が確認され、かつ窯体が最も深いにもかかわらず壁際には天井を構架するための構築材が焚口から斜面上方3mの地点まで確認できた。この事実は半地下式構造を示すものであるが、半地下式になった理由は、ＳＪ05ｆよりも上位に構築されているＳＪ06の床面とＳＪ05ｆ構築時点の天井が接近していたことにより、半地下式構造にせざる得なかったものと考えられる。以上よりＳＪ05ｆは半地下式無階無段窖窯とすることができる。このＳＪ05ｆ焚口部分の天井崩落土(床から約15cm上)からは、乳白色を呈した丁寧なつくりの高台付坏(422)が出土している。これと同様の特徴をもつ土器は、同焚口付近の覆土からも出土し(326・421・423)、後述するSJ05e以降の製品を含んでいない。したがってこれらの土器は、ＳＪ05ｆ覆土一括出土土器群(**一括土器群Ｃ**)として捉えることができる。

ＳＪ05ｅ以降の窯については、出土土器の点数は多いものの、まとまりのある検出状況を示す土器は少ない。この中にあって、ＳＪ05ｆ焚口付近にある窯壁粒と炭化物が含まれる20層(第31図縦断面)からは1ｍ×80cmの範囲でまとまった土器が出土した。(341・343～348・351・354・428・430・431・434・436・443・476・482・484・485・503・529・530)。この層は、ＳＪ05ｅの掘削土の直上にあたり、これらの土器はＳＪ05ｅ灰原一括出土土器群(**一括土器群Ｄ**)として捉えることが

できる。これらは黒色の部分をもち灰色の斑状を呈している特徴的な土器を含んだ土器群である。また、炭化物が互層になる部分の13層では青・灰色系の遺物が、さらにその上e層を中心とした層では、赤・橙色系の土器が出土する傾向にある。

ＳＴ19はＳＪ05ａ～ｆ各窯跡から掻き出された灰原であり、範囲はＬＯ53～56・ＬＰ53～56・ＬＱ53～56区とかなり広い。これは窯跡が急斜面に築かれてるため、窯の造変えに伴う遺物の移動が激しかったためと考えられる。この灰原は他の灰原と混在することが多いが、ＳＴ12のかなり上層であることは確認できた。しかし、ＳＪ05のａ～ｆ各々の単一層として認識することは不可能であった。

出土遺物

ＳＪ05からは坏蓋・高台付坏・坏埦・高台付坏・壺蓋・壺・鉢・横瓶・甕(326～570)が出土している。このうち、326・421～423は一括土器群Ｃとして、341・343～348・351・354・428・430・431・434・436・443・476・482・484・485・503・529は一括土器群Ｄとして捉えることができる。

坏蓋(326～420)(第37～39図、第19～23表、図版41-16、42-1～16、43-1、78-2)

326～328・333は天井が円く全体が三角形状をしている。端部は短く屈折し、天井部の回転篦削りの深いものがある(326～328)。329～332は天井がやや丸く平らである。つまみは、擬宝珠形で端部の鋭いもの(329・330)がある。334～338は天井が平坦で全体が扁平なタイプで、回転篦切りの後に回転篦削りを施さないもの(334・337)がある。端部屈折の丸いものが多い。339と340は、天井がやや丸く扁平である。341は天井がやや丸く扁平で、端部は長く外傾する。342～355は、天井がほぼ平坦で低く、端部の先端が比較的丸いタイプである。すべて、ボタン状のつまみである。すべてが灰色と暗灰色で斑状を呈する特徴がある。354はゆがんだ状態で実測してある。356～358は、天井が平坦でやや高い。つまみには亀頭形(356・358)、擬宝珠形(357)がある。359～364は天井が平坦でやや高く、大ぶりのタイプである。端部の屈折は明瞭で先端が高く青灰色系である。365～371はつまみの資料で、扁平(365)、ボタン状(330～368)、擬宝珠形(368～371)がある。372～380では天井が丸く高いもの(422・380)とやや高いものがある。383は低く平坦な天井で、端部は短く内傾する。つまみがややリング状を呈する特徴がある。381・382・384～393は天井が平坦でやや低く、体部が反るタイプである。これらは緑灰系の色調を呈している。先端は高く外傾するもの(387)や外に弯曲するもの(392)がある。394～396は天井がやや丸味をおび体部の反るもので、端部が高く立つもの(395・396)と外に弯曲するもの(394)とがある。395・396は天井が平坦(396)とやや丸味があるもの(395)で、やはり体部の反るタイプであるが、その色調は褐色～橙色を呈する。397～413は天井が平坦もしくはやや丸味をもつが、これらは灰白もしくは灰赤褐色系の色調で共通している。この中には、天井が平坦で大ぶりのもの(397～399)がある。414～420は平坦で低い天井部から丸味をもって体部に移行

するタイプであり、その中には内面中央に明瞭な渦巻きの凹凸をもつもの(416～418)がある。つまみは頭が丸く扁平な擬宝珠形を呈している。

高台付坏(421～478・533)(第40～42・44図、第23～27・30表、図版46-12、47-1～12、48-1、56-2)

421～425は内弯気味の大ぶりのタイプで、やや高く断面形が三角形状の高台がつく。すべて乳白色を呈する特徴がある。中には外面体部に横方向の明瞭な工具痕を、内面底部には途切れた撫でを認めるもの(423・425)がある。426と427は口縁がやや外反するものと内反するものであるが、色調や焼成状態が類似する。428～439は口縁が直線的かやや外反するもので、高台は高く断面形が三角形状を呈しているものが大半である。体部下端に回転篦削りの認められるもの(428・434)とそうでないものがある。すべて灰色が斑状を示しており、黒色を呈する部分がある。440と441は高台部の断面形が三角形状から、さらに外側にはみ出す特徴がある。442～449は青灰色系の土器で、高台が高く三角形状のもの(442～445)、高台を高くし屈曲するもの(446・447)、高台が高く断面形が逆台形状を呈するもの(448と449で、同一個体)がある。443の内面底部には「　」の篦記号がある。450～453はにぶい褐色系のもので、高台端部が丸味のあるもの(481・452)と角張るもの(450・453)がある。後者の高台接地部には明瞭な窪みをもつ。454～456は高台中央が細く先端で断面形が三角形状を示す特徴がある。457～472は灰褐色系の土器で高台は、高く先端の丸いもの(457～460)、やや高く接地部が平坦なもの(462)、短く接地部が窪むもの(463)、先端が四角状に張るもの(464～466だが465と466は同一個体)、先端が三角状に張るもの(468～470)がある。体部下端に回転篦削りを施すものが多い。474は明瞭な渦巻痕を留めている。533は口縁が大きく外反し深い。高台が高く接地部は窪む。底面表には「三」の篦書きを施している。

坏(479～517・519・520・524)(第42～44図、第27～30表、図版52-8～12、53-1～3、80-5・6)

479～487は全体が厚くつくられているタイプである。479と480は形態が類似するほか、明褐色を呈し焼成状態も同じである。481・485・487は口縁が外反し、他は内弯気味になる。487は青灰色系の色調をもつ。これらは総じて深いタイプである。488～498は青灰色系の土器で口縁が、内弯気味のもの(488・489)、直線的なもの(492・498)、外反するもの（496・497）などがある。499～501は釉が付着して光沢を放つもので、口縁が外反する。506は底部に篦記号をもつ。すべてについて体部下端に篦削りを施す例はない。507～517は橙色系の土器で、深いタイプ(507～509)とそれ以外のものとがある。口縁は、内弯気味で段のつくもの(508)、内反するもの(511)、直線的なもの(512)、外反するもの(516・517)などがある。516を除くと、すべて明るい橙色である。

埦(518)(第44図、第29表、図版55-5)

体部が反り口縁が大きく外反する。底部はやや突出気味になる。1mm前後の黒色斑点が顕著。

高台付埦(536・537)(第44図、第31表)

536・537も埦形と思われるが判然としない。536の底部端は直端に角張る。

壺蓋(525～530)(第44図、第30表、図版55-6～11)

口縁の突端が、内面側で短く突出するもの(528～530)とそうでないものがある。後者には口唇部の平坦なもの(525)、尖がるもの(526)、丸味をもつもの(527)がある。

壺(521・522・534・535・540・543～545)(第44～46図、第30・31表、図版81-8、56-4)

521は小形の短頸壺、522は長頸壺、535は高台部と考えられ底部との接合面で剝落したものである。534の内面底部には同心円状の掻目が施される。540は広口壺で肩が強く張る。543と544は、四つの耳をもつ四耳壺である。口縁はやや外反し、口唇部に窪みをもつ。545は短頸壺である。

鉢(531・541)(第44・45図、第30・31表、図版56-3)

531は鉄鉢である。回転篦削りが口縁にまで及ぶ。541は頸部がくの字状のタイプで、内外に平行な掻目を施す。

高坏(532)(第44図、第30表、図版56-1)

坏部は口縁がやや外傾する盤状で、脚柱部は長方形状を示す。脚柱部には平行な掻目を施す。

横瓶(538・539)(第45図、第31表、図版59-2・3)

538は口唇部が水平で、閉塞の状態が明瞭である。539の口唇部は平坦だがやや傾斜する。この土器は黒色の部分があり灰色の斑状が顕著である。

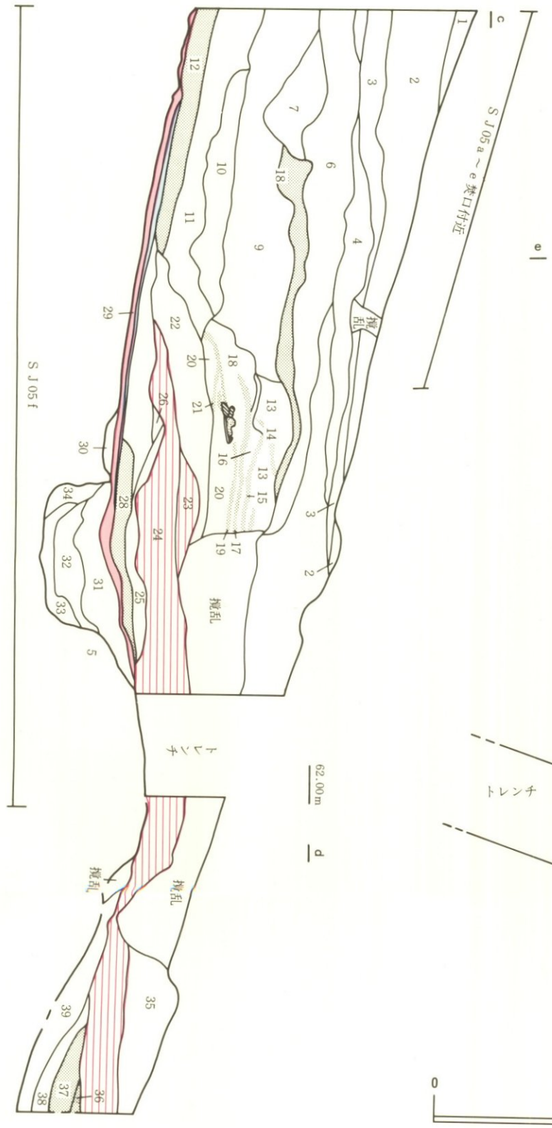
甕(542・546～570)(第45～51図、第31・32表、図版60-5・6、67-9・10、61-1～5、71-1、68-1・2)

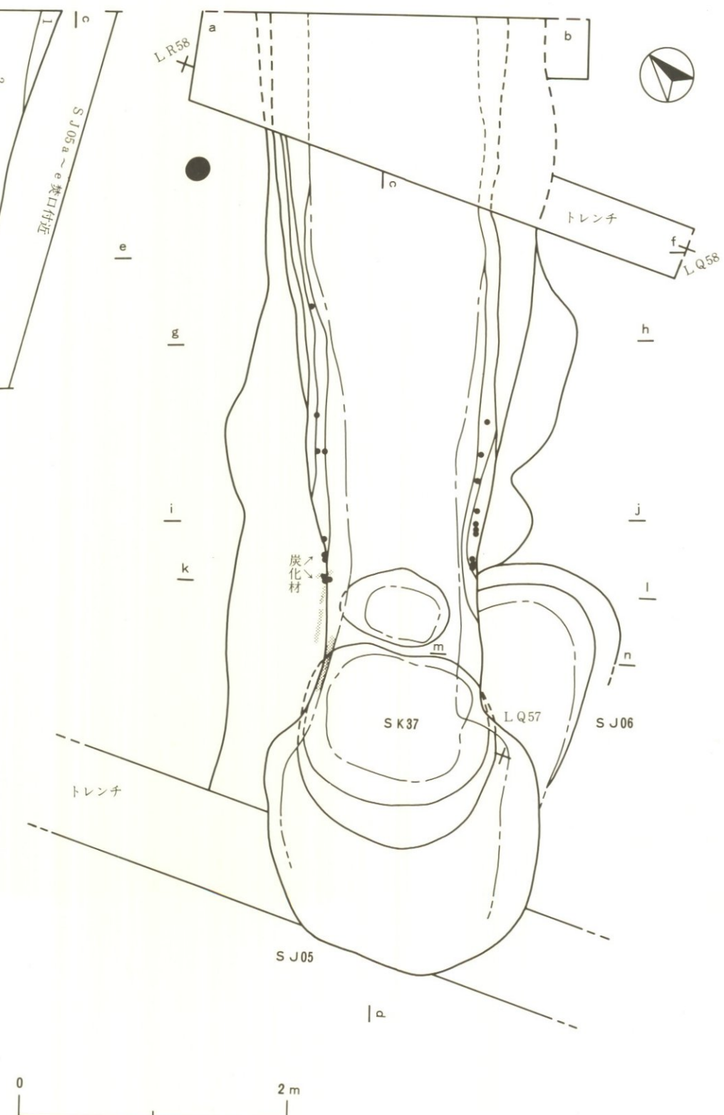
542は底部が平坦で口縁部が短い。556～561・567～570は口縁部だけの小破片である。また562～565は大型甕の口縁で566は体部も明瞭な例である。これらを除いた甕の口唇部には僅に窪むもの(546・547)、内側に強く稜をもつもの(548・554)、外側が強く張り出すもの(549～553)、丸味をもつもの(555)がある。底部は丸底を呈している(553・555)。大型甕の口唇部は、垂直なもの(566)、ハの字状を呈するもの(562・565)、逆ハの字状を呈するもの(563・564)があり、さまざまな付き方をする稜がある。

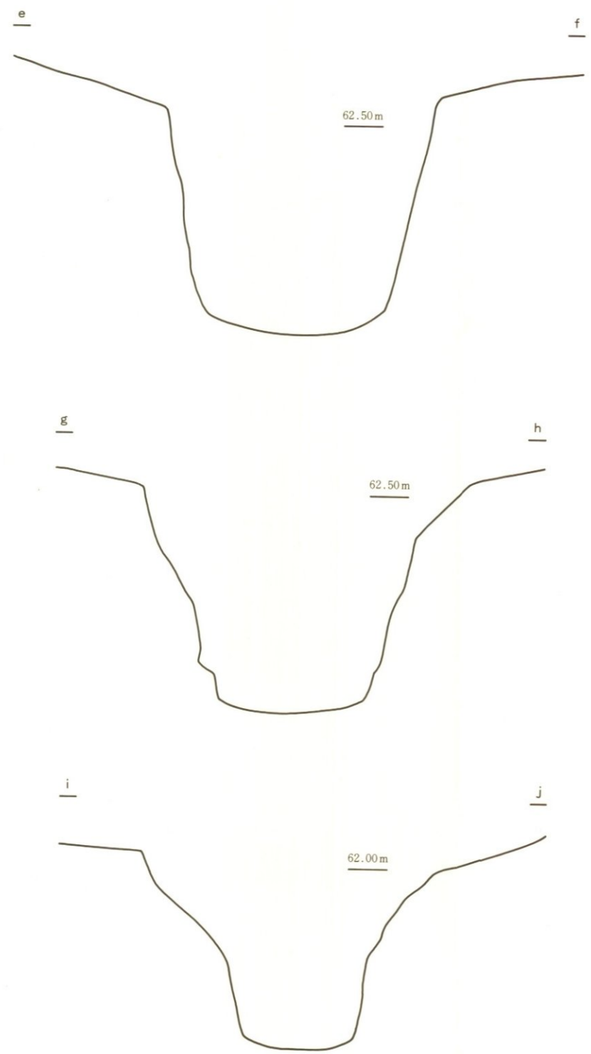
ＳＴ19からは、坏蓋・高台付坏・坏・壺・甕(571～627)が出土している。

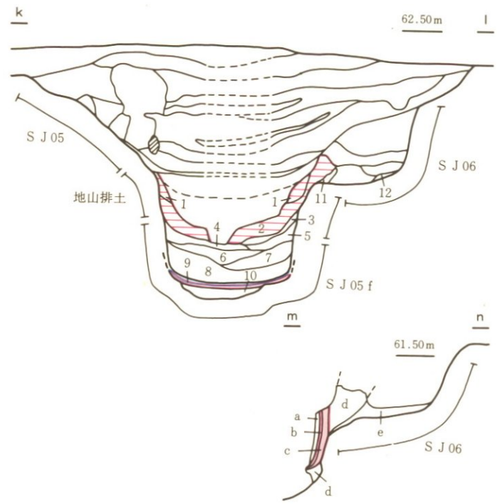
坏蓋(571～594)(第53図、第32・33表、図版43-2～5)

571～573は天井裏面の中央が極端に窪む例である。天井が三角形を呈するもの(571・572)とやや丸味のある低いもの(573)がある。571と572は乳白色、573は灰色を呈している。574と575は天井が平坦な丸味をもつ。575の端部はやや水平気味から屈折している。576は扁平な類である。577～587は天井が平坦で、体部が反り端部は丸くなっている。これらの土器は灰色の斑状を呈しつまみはボタン状である。この他、天井の丸いもの(588・591・593)、天井の平坦なもの









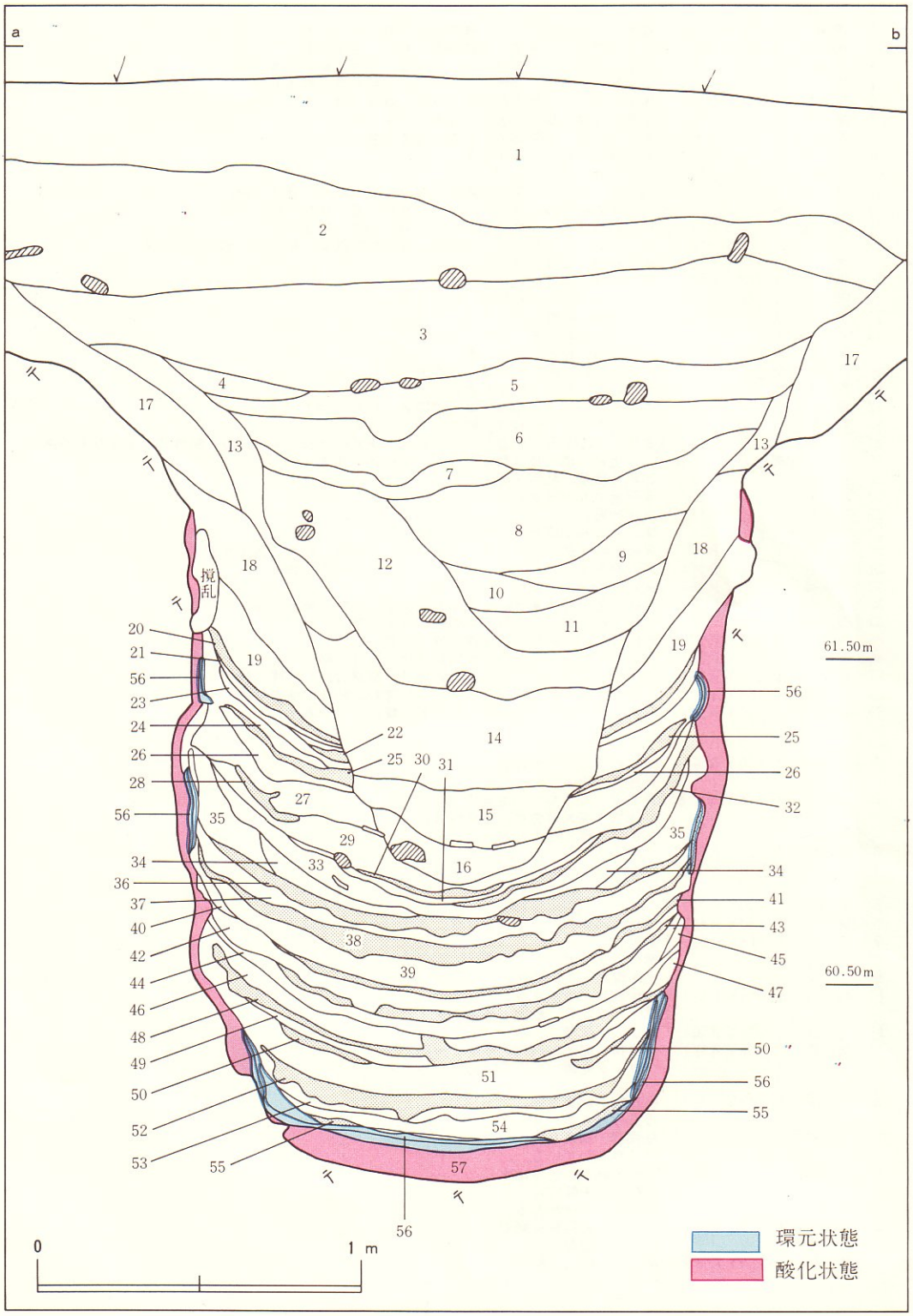
第31図　S J05・06、S K37平面図

ＳＪ05・06，ＳＫ37

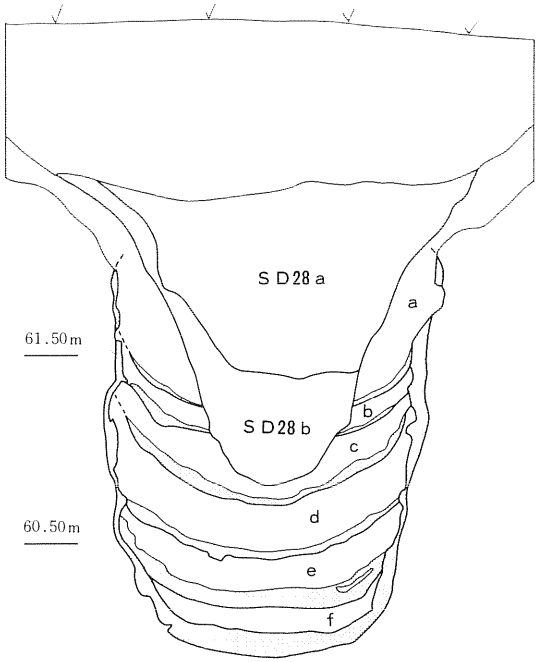
1　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　褐色土・地山ブロック・礫多量。粘性・締まり普。
2　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　小地山ブロック多量。小礫少量。粘性・締まり普。
3　黒褐色土（10ＹＲ3/2）　小地山ブロック・窯壁ブロック少量。粘性・締まり普。
4　褐　色　土（10ＹＲ4/6）　炭化物粒。地山・窯壁ブロック充填。粘性普。締まり強。
5　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　地山ブロック・焼土粒少量。粘性・締まり普。
6　褐　色　土（10ＹＲ4/6）　小窯壁少量。炭多顕著。粘性普。締まり強。
7　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　炭・地山粒・窯壁顕著。粘性・締まり強。
8　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。粘性・締まり普。
9　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　小炭化物・窯壁含む。
10　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　小地山ブロック・炭化物顕著。窯壁少量。粘性・締まり強。
11　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）炭化物粒多量。地山ブロック・窯壁少量。粘性・締まり普。
12　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　炭化物粒多量。少窯壁ブロック少量。粘性・締まり普。
13　明黄褐色土（10ＹＲ6/6）　やや砂質。小窯壁ブロック顕著、炭化物粒微量。粘性弱。締まりややあり。
14　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。粘性・締まり普。
15　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。部分的に環元状態。
16　明黄褐色土（10ＹＲ6/6）　13層とほぼ同じ。粘性弱。締まり普。
17　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。粘性・締まり普。
18　赤褐色土（5ＹＲ4/6）　窯壁粒・炭粒少量。粘性・締まり普。
19　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。粘性・締まり普。
20　にぶい赤褐色土（5ＹＲ4/4）炭化物粒・地山粒顕著。粘性普。締まり弱。
21　黒　色　土（7.5ＹＲ2/1）　炭化物層。粘性・締まり普。
22　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　小窯壁ブロック・地山ブロック顕著。粘性・締まり強。
23　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　炭化物微量。やや砂質。粘性普。締まりややあり。
24　オリーブ土（5Ｙ6/6）と浅黄色土（5Ｙ7/4）の混合土　赤褐色・環元粒微量。やや砂質。粘性普。締まりややあり。
25　にぶい赤褐色土（5ＹＲ）　赤色粒・環元粒（窯壁）微量。粘性普。締まり弱。
26　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　赤色粒微量。粘性・締まり普。
27　環　元　土　窯壁層でザクザクしている。
28　黒　色　土（7.5ＹＲ1.7/1）　炭化物層。
29　環元・酸化土　床。上３cmが環元土。下５cmが酸化土。
30　褐　色　土（7.5ＹＲ4/4）　炭化物粒・地山ブロック・窯壁ブロック顕著。粘性・締まり普。
31　褐　色　土（10ＹＲ4/4）と明黄褐色土（10ＹＲ6/8）の混合土　粘性・締まり強。
32　明黄褐色土（10ＹＲ6/8）　炭化物粒微量。粘性・締まり強。
33　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　小礫・地山粒・窯壁粒・炭化物粒少量。粘性・締まり強。
34　浅黄色土（2.5Ｙ　7/6）　炭化物粒・焼土粒微量。粘性強。締まり普。
35　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　地山粒・焼土粒含む。粘性・締まり普。
36　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　炭化物・赤色ブロック・地山粒少量。粘性・締まり普。
37　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　炭化物・赤色ブロック・地山粒顕著。窯壁含む。粘性・締まり普。
38　明黄褐色土（2.5Ｙ6/6～6/8）　やや砂質。小白色ブロック均一に含む。粘性・締まり弱。
39　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　明黄褐色土の地山粒少量。粘性普。締まりややあり。

1　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　炭化物微量。やや砂質。粘性普。締まりややあり。
2　オリーブ土（5Ｙ6/6）と浅黄色土（5Ｙ7/4）の混合土　赤褐色・環元粒微量。やや砂質。粘性普。締まりややあり。
3　明黄褐色土（7.5ＹＲ6/6）　窯壁。
4　にぶい赤褐色土（5ＹＲ）　赤色粒・環元粒（窯壁）微量。粘性普。締まり弱。
5　黄褐色土（10ＹＲ5/4）　炭化物・地山土含む。
6　褐　色　土（10ＹＲ4/4）　赤色粒微量。粘性・締まり普。
7　橙　色　土（7.5ＹＲ6/6）　窯壁。
8　環　元　土　窯壁でザクザクしている。
9　床　上が環元、下が酸化。
10　褐　色　土（7.5ＹＲ4/4）　炭化物粒・地山ブロック・窯壁ブロック顕著。粘性・締まり普。
11　橙　色　土（7.5ＹＲ6/8）　ＳＪ05ｆ窯壁。
12　褐　色　土（7.5ＹＲ4/4）　炭化物・環元と酸化の窯壁・地山ブロック充填。粘性普。締まりややあり。

a　暗灰黄（2.5Ｙ　5/2）　粘性弱。締まり強。カリカリしている。
b　明黄褐色土（2.5Ｙ　6/6）　粘性弱・締まり強。カリカリしている。
c　赤褐色土（5ＹＲ4/6）　２～３㎜の白色地山土が粒状に未酸化になっている所がある。
d　明黄褐色土（10ＹＲ6/8）　２～３㎜の白色粒顕著。炭化物粒微量。
e　褐　色　土（7.5ＹＲ4/4）　炭化物・環元と酸化の窯壁・地山ブロック充填。粘性普。締まりややあり。

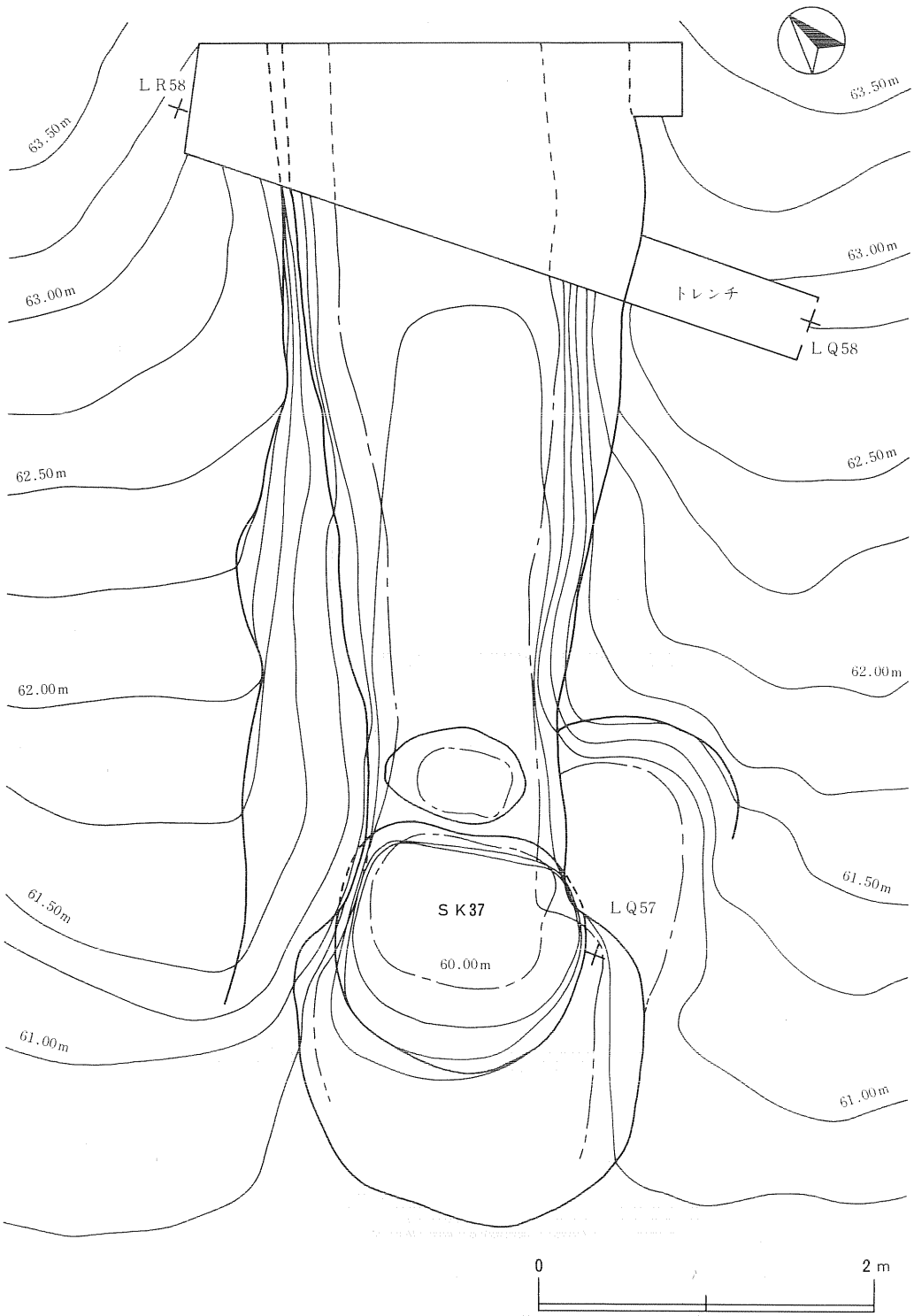


第32図　ＳＪ05、ＳＤ28横断面図

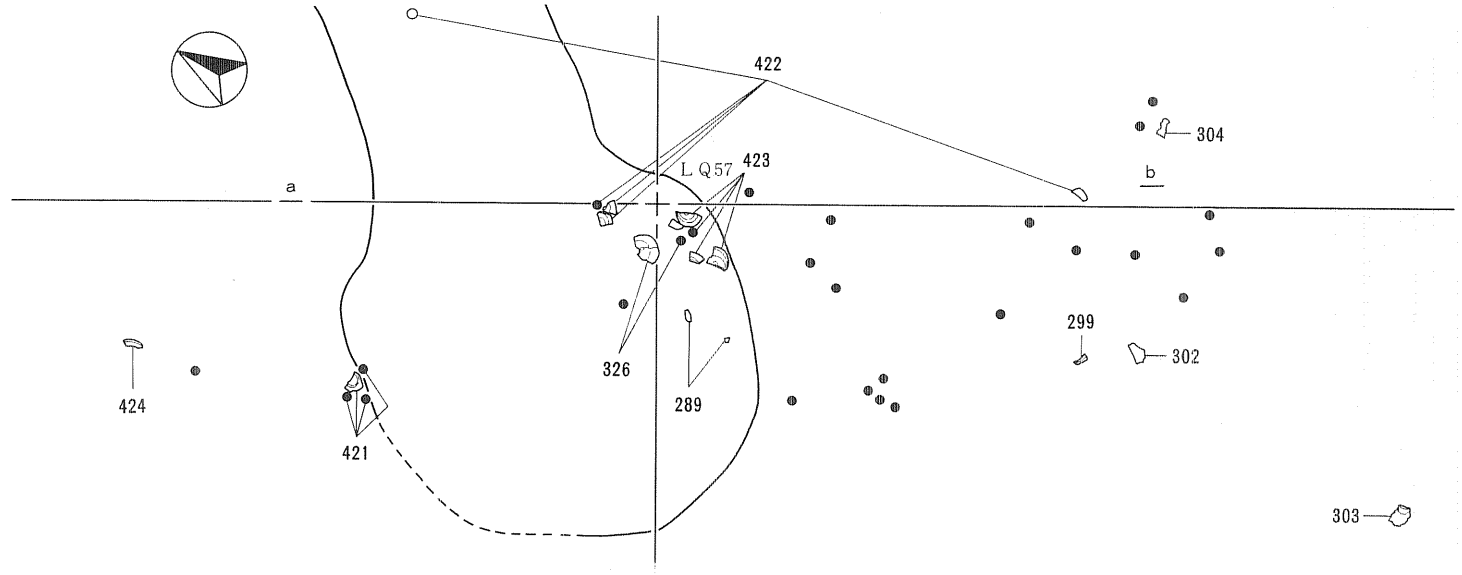


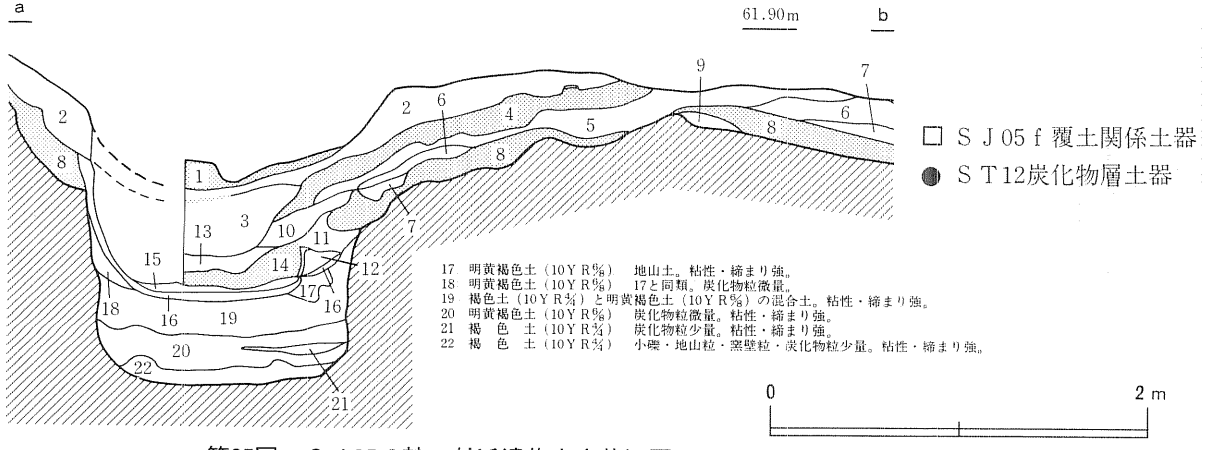
第33図　ＳＪ05、ＳＤ28横断面模式図

1　浅黄色土（2.5Y　7/4）　褐色土含む。礫・地山ブロック含む。粘性・締まり普。
2　褐　色　土（10YR4/4）　礫・地山ブロック顕著。粘性・締まり普。
3　黄褐色土（10YR5/6）　小礫微量。粘性・締まり普。
4　暗褐色土（10YR3/3）　地山粒少量。粘性・締まり普。
5　黄褐色土（10YR5/6）　窯壁含む。地山ブロック・礫顕著。粘性強。締まり普。
6　褐　色　土（10YR4/4）　地山ブロック顕著。粘性・締まり普。
7　褐　色　土（10YR4/4）　地山粒少量含有。粘性・締まり普。
8　黄褐色土（10YR5/6）　小地山ブロック微量。粘性・締まり普。
9　黒褐色土（10YR3/2）　地山粒微量。粘性・締まり普。
10　暗褐色土（10YR3/4）　白色地山粒微量。粘性・締まり強。
11　明黄褐色土（10YR6/6）　小窯壁・地山ブロック充填。粘性普。締まり強。
12　黒褐色土（10YR3/2）　小窯壁・地山ブロック少量。粘性・締まり強。
13　黒褐色土（10YR2/2）　地山粒微量。粘性・締まり普。
14　黒褐色土（10YR3/2）　小地山ブロック顕著。粘性・締まり普。
15　黄褐色土（10YR5/6）　小窯壁ブロック少量。地山粒・窯壁多量。粘性・締まり普。
16　褐　色　土（10YR4/4）　窯壁粒・地山粒・炭化物粒充填。粘性弱。締まり強。
17　暗褐色土（10YR3/4）　粘性・締まり普。
18　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒微量。粘性・締まり強。
19　褐　色　土（10YR4/4）　炭化物粒顕著。焼土粒少量。粘性・締まり普。
20　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。地山粒微量。粘性弱。締まり普。
21　明黄褐色土（10YR6/6）　ＳＪ05ａ床。焼土層。炭化物粒少量。粘性・締まり普。
22　黒　色　土（7.5YR2/1）　焼土粒・地山粒微量。粘性・締まり弱。
23　明黄褐色土（10YR6/6）　ＳＪ05ｂ二次床。粘性弱。締まり強。
24　赤褐色土（5YR4/6）　炭化物粒・焼土粒少量。粘性・締まり普。
25　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
26　明褐色土（7.5YR5/6）　ＳＪ05ｂ一次床。粘性弱。締まり強。
27　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物粒少量。小赤褐色ブロック少量。粘性普。締まり強。
28　黒　色　土（10YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
29　褐　色　土（10YR4/6）　炭化物粒・焼土粒・地山粒少量。
30　黒　色　土（10YR1.7/1）　炭化物層。小炭化物多量。粘性・締まり弱。
31　暗赤褐色土（5YR3/6）　地山粒微量。粘性・締まり普。
32　暗赤褐色土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
33　上が黄灰色土（2.5Y5/1）　下が黄褐色土（2.5Y5/6）　ＳＪ05Ｃ床。粘性弱。締まり強。
34　黒褐色土（2.5Y　3/2）　炭化物少量。粘性・締まり弱。
35　暗赤褐色土（2.5Y　3/3）　炭化物ブロック顕著。粘性・締まり普。
36　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
37　上が黄灰色土（2.5Y5/1）　下が黄褐色土（2.5Y5/6）　ＳＪ05ｄ三次床。粘性弱。締まり強。
38　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
39　上が灰オリーブ（5Y5/3）　下が明黄褐色土（2.5Y）　ＳＪ05ｄ二次床。粘性弱。締まり強。
40　明赤褐色土（2.5YR5/6）　炭化物微量。粘性・締まり普。
41　暗赤褐色土（5YR3/3）　炭化物多量。粘性・締まり普。
42　黄褐色土（2.5Y　5/6）　ＳＪ05ｄ一次床。粘性弱。締まり強。
43　黒　色　土（2.5Y　3/1）　炭化物層。窯壁多量。粘性・締まり弱。
44　赤褐色土（5YR4/6）　ＳＪ05ｅ二次床。焼土層。炭化物微量。粘性・締まり普。
45　浅黄色土（5Y　7/3）　地山粒微量。粘性・締まり強。
46　黒褐色土（5YR3/1）　炭化物充填。粘性・締まり弱。
47　黄褐色土（10YR5/6）　地山粒微量。粘性・締まり強。
48　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
49　橡暗赤褐色土（5YR2/4）　粘性・締まり普。
50　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　炭化物層。粘性・締まり弱。
51　上が灰オリーブ色土（5Y5/3）下が明黄褐色土（2.5Y）　ＳＪ05ｅ一次床。粘性弱。締まり強。
52　黒　色　土（7.5YR1.7/1）　粘性・締まり弱。
53　上が灰オリーブ色土（5Y5/3）　下が明黄褐色土（2.5Y6/6）　粘性弱。締まり強。
54　にぶい赤褐色土（5YR5/4）　ＳＪ05ｆ二次床。炭化物粒顕著。粘性・締まり弱。
55　黒褐色土（5YR2/1）　炭化物層。窯壁粒含む。粘性・締まり弱。
56　上が明褐色土（7.5Y5/6）　下が黄褐色土（10YR5/6）　粘性弱。締まり強。
57　赤　　色（10R　4/6）　ＳＪ05ｆ一次床。粘性・締まり普。

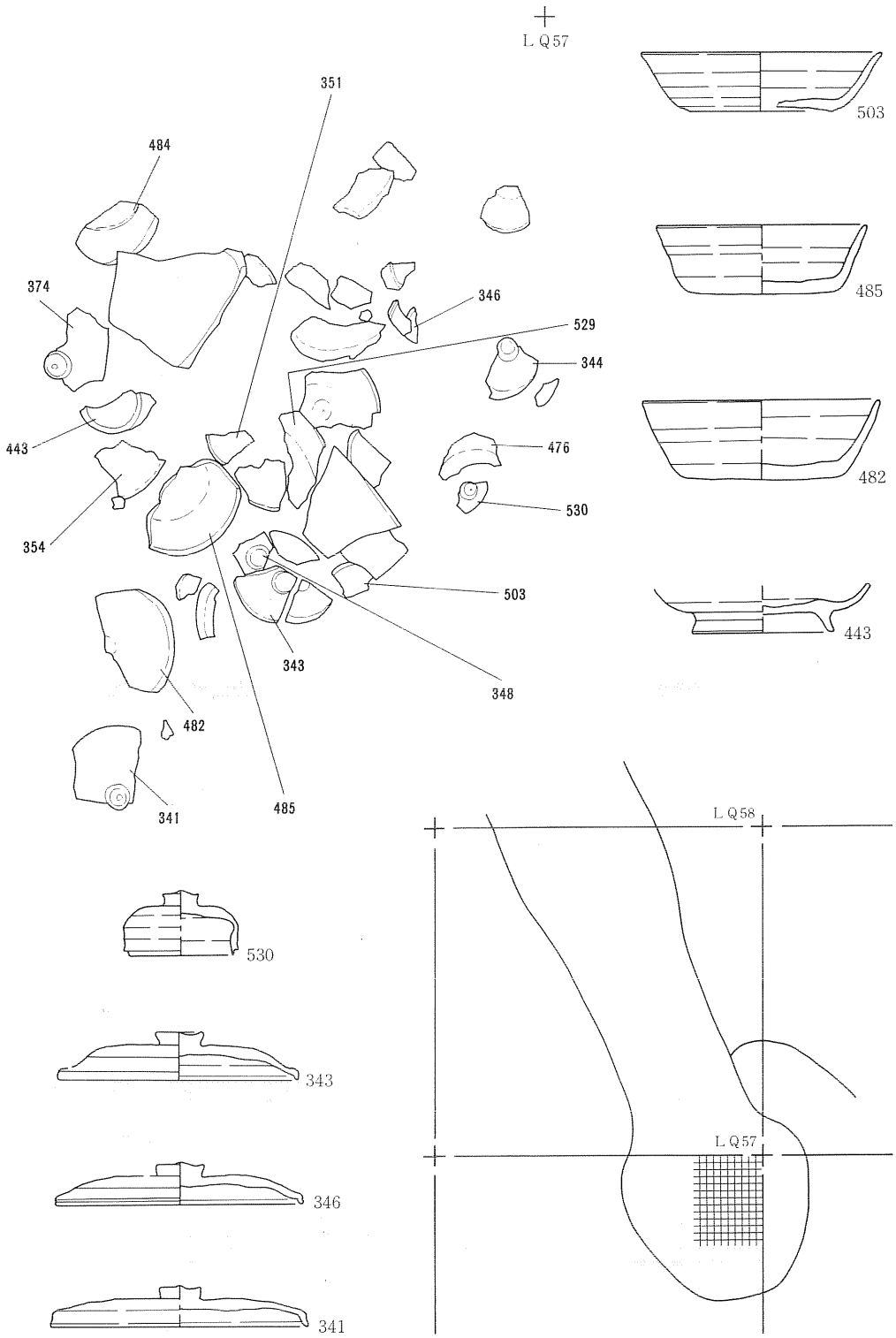


第34図　ＳＪ05･06、ＳＫ37等高線図

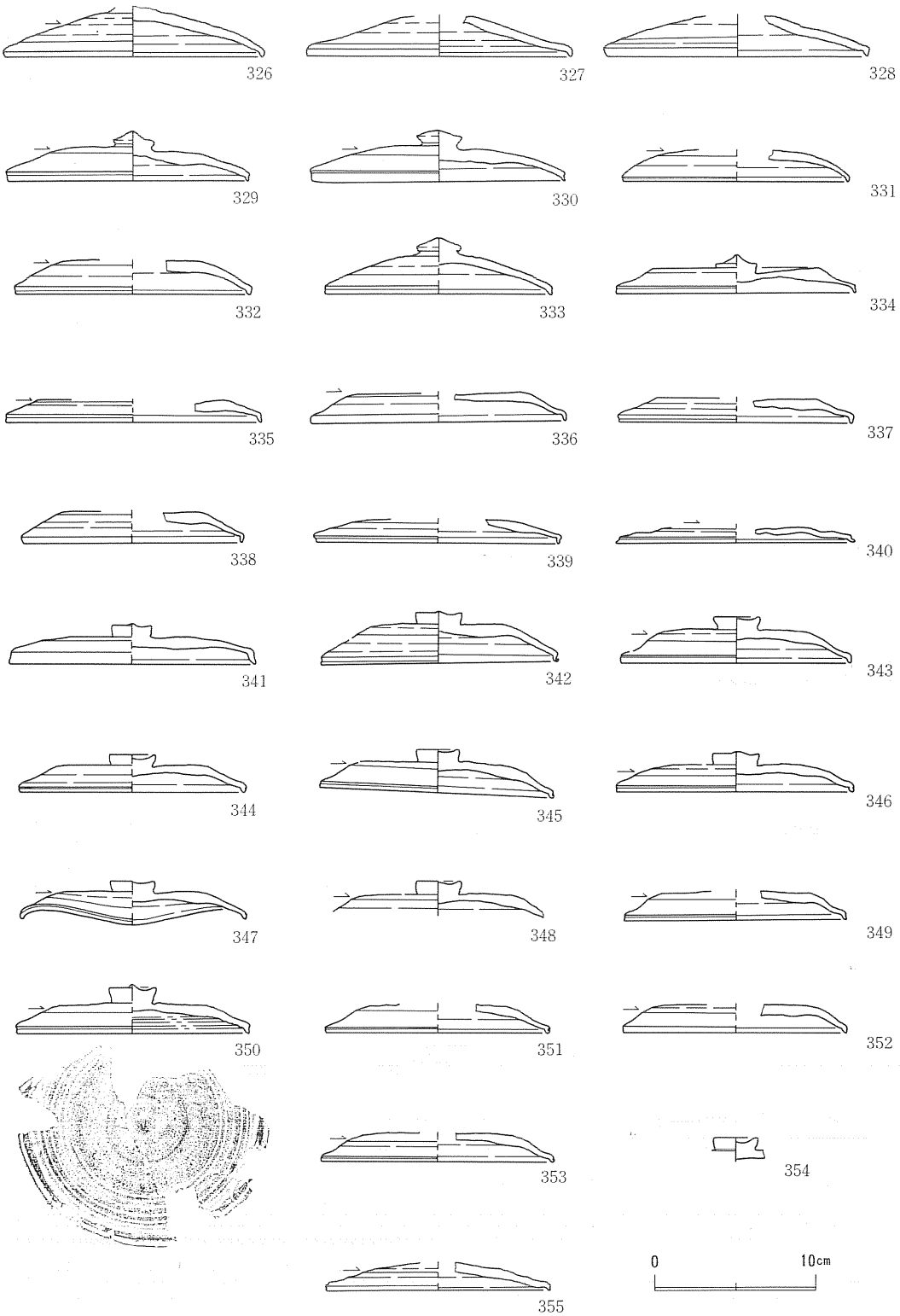




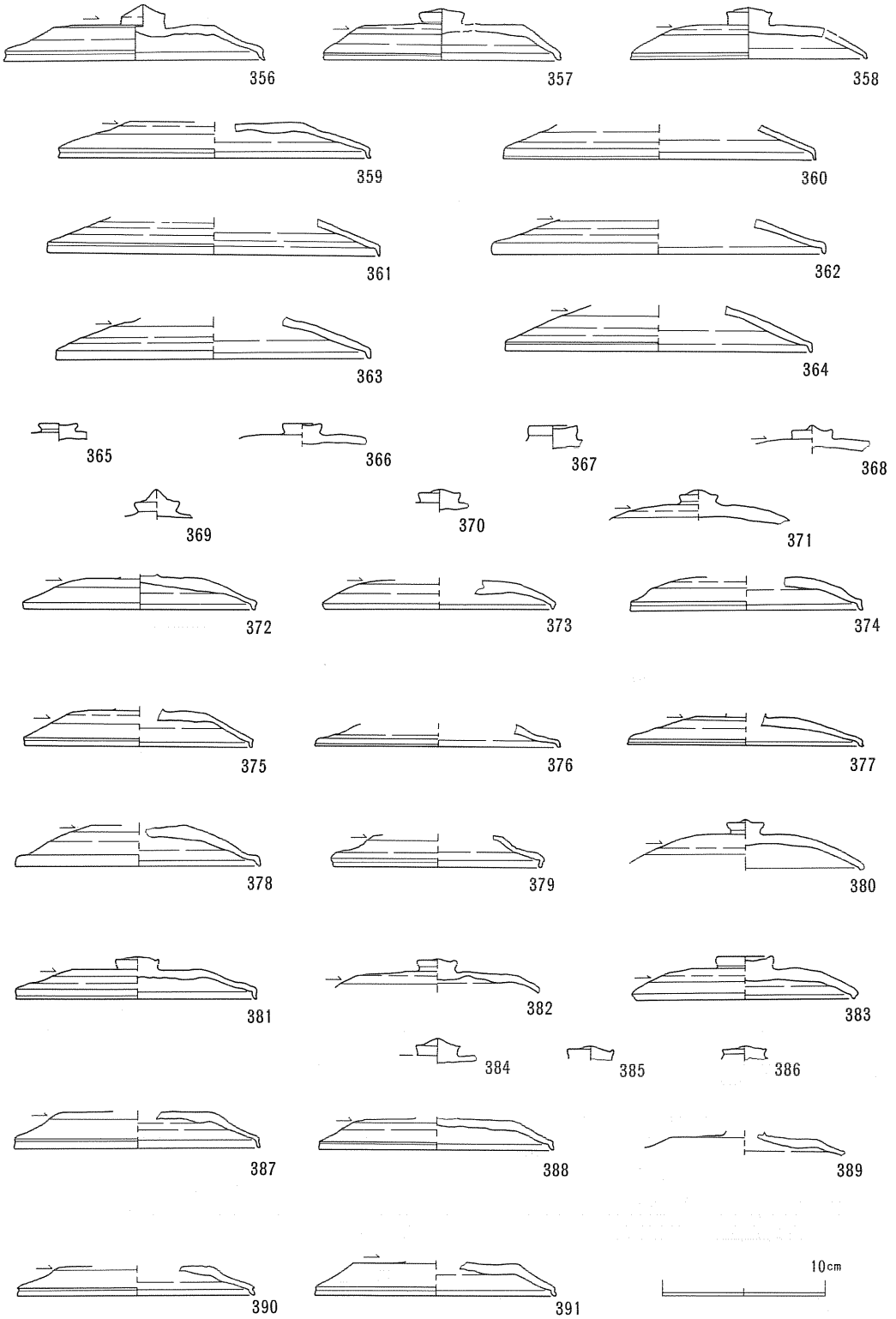
第35図　ＳＪ05ｆ焚口付近遺物出土状況図



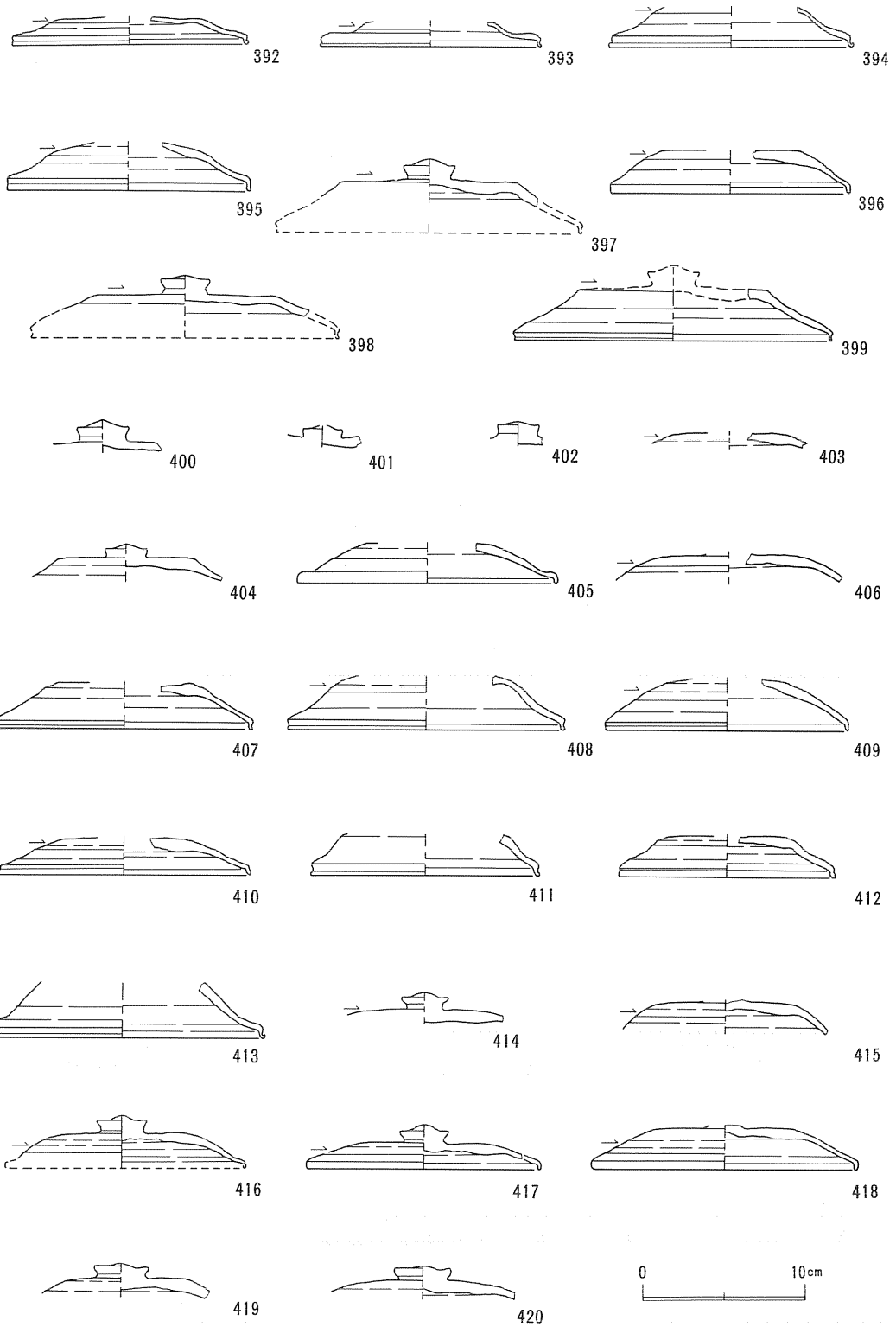
第36図　ＳＪ05ｅ遺物出土概念図



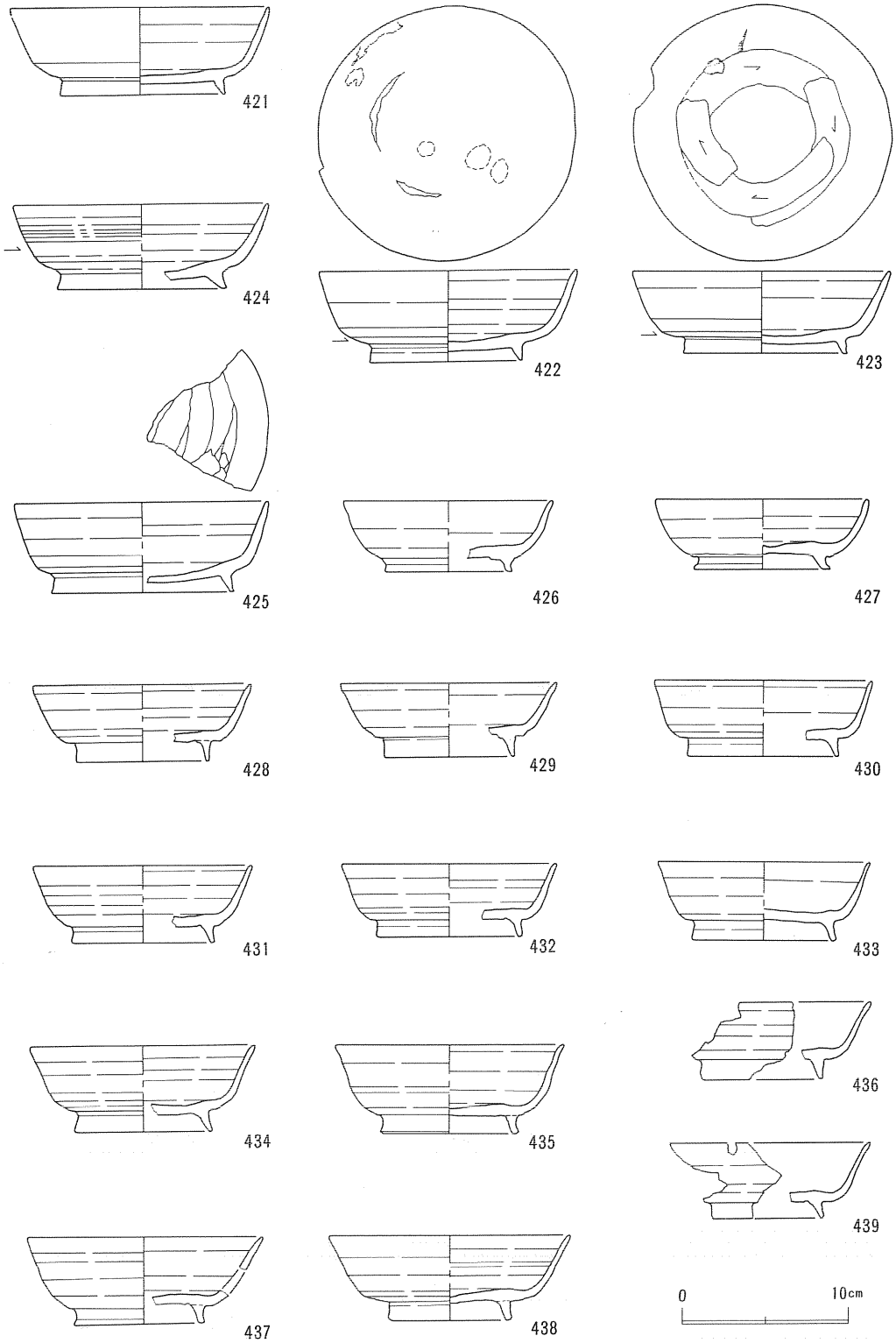
第37図　遺構内出土土器(16)　ＳＪ05



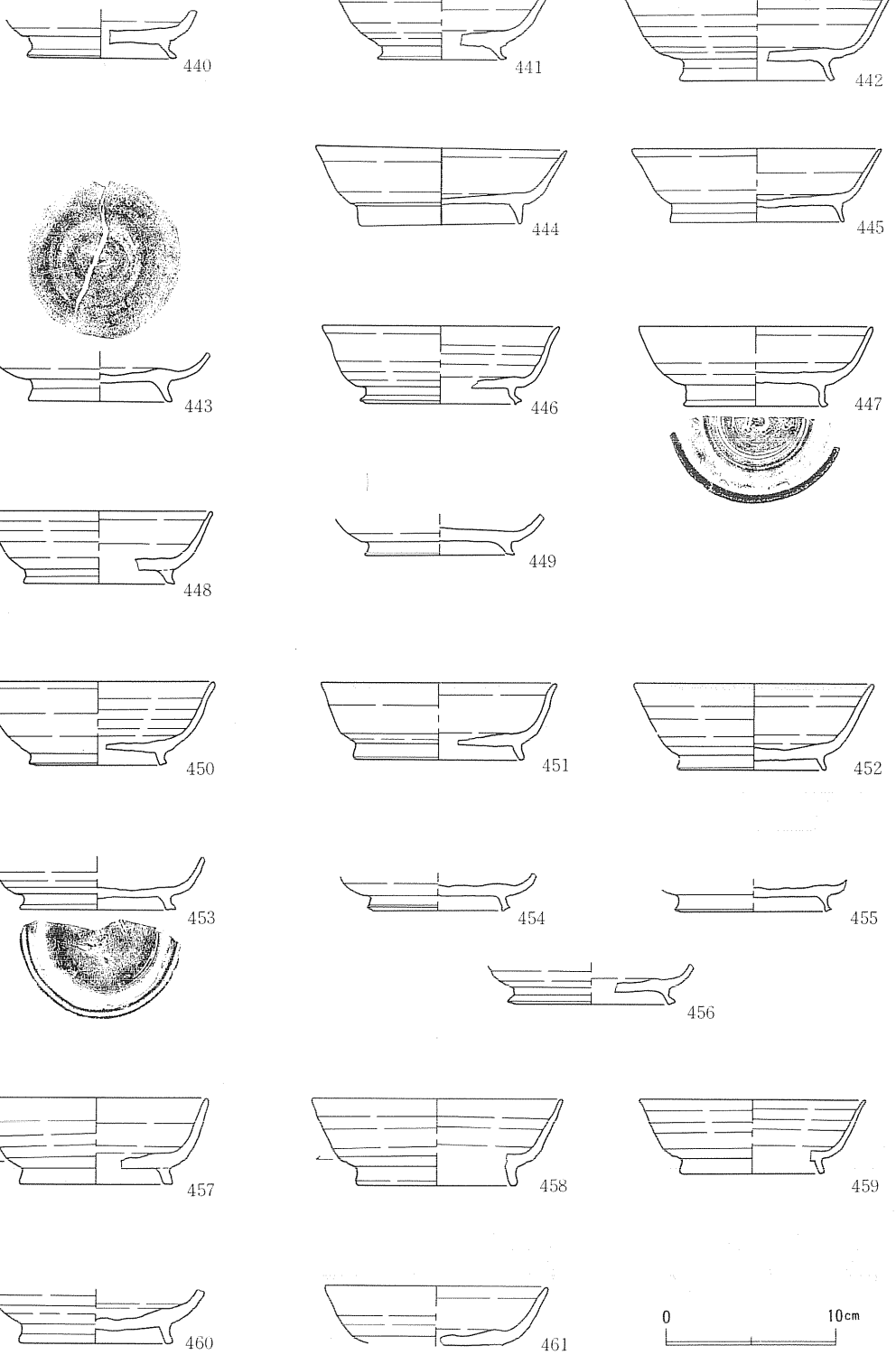
第38図　遺構内出土土器(17)　ＳＪ05



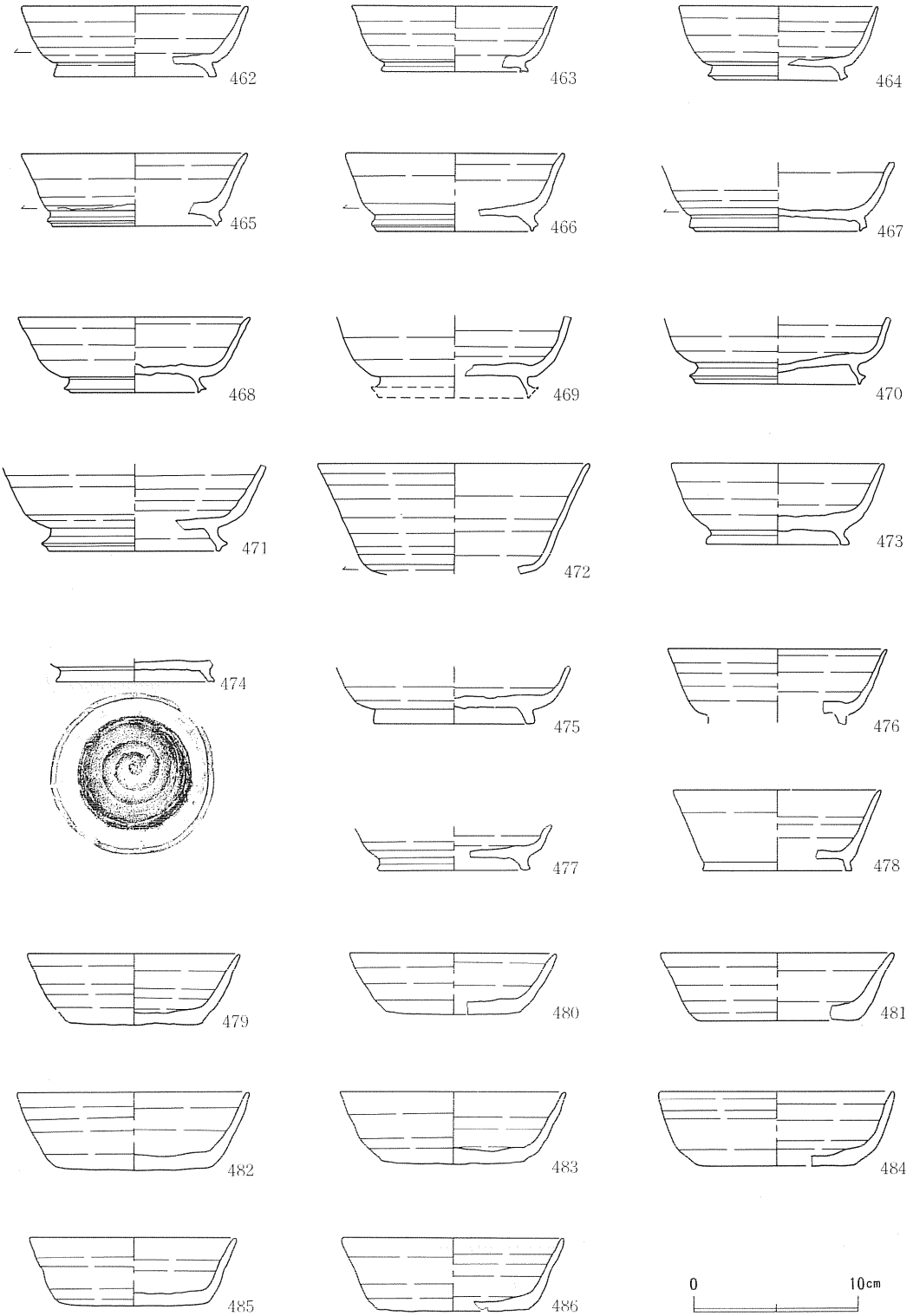
第39図　遺構内出土土器(18)　ＳＪ05



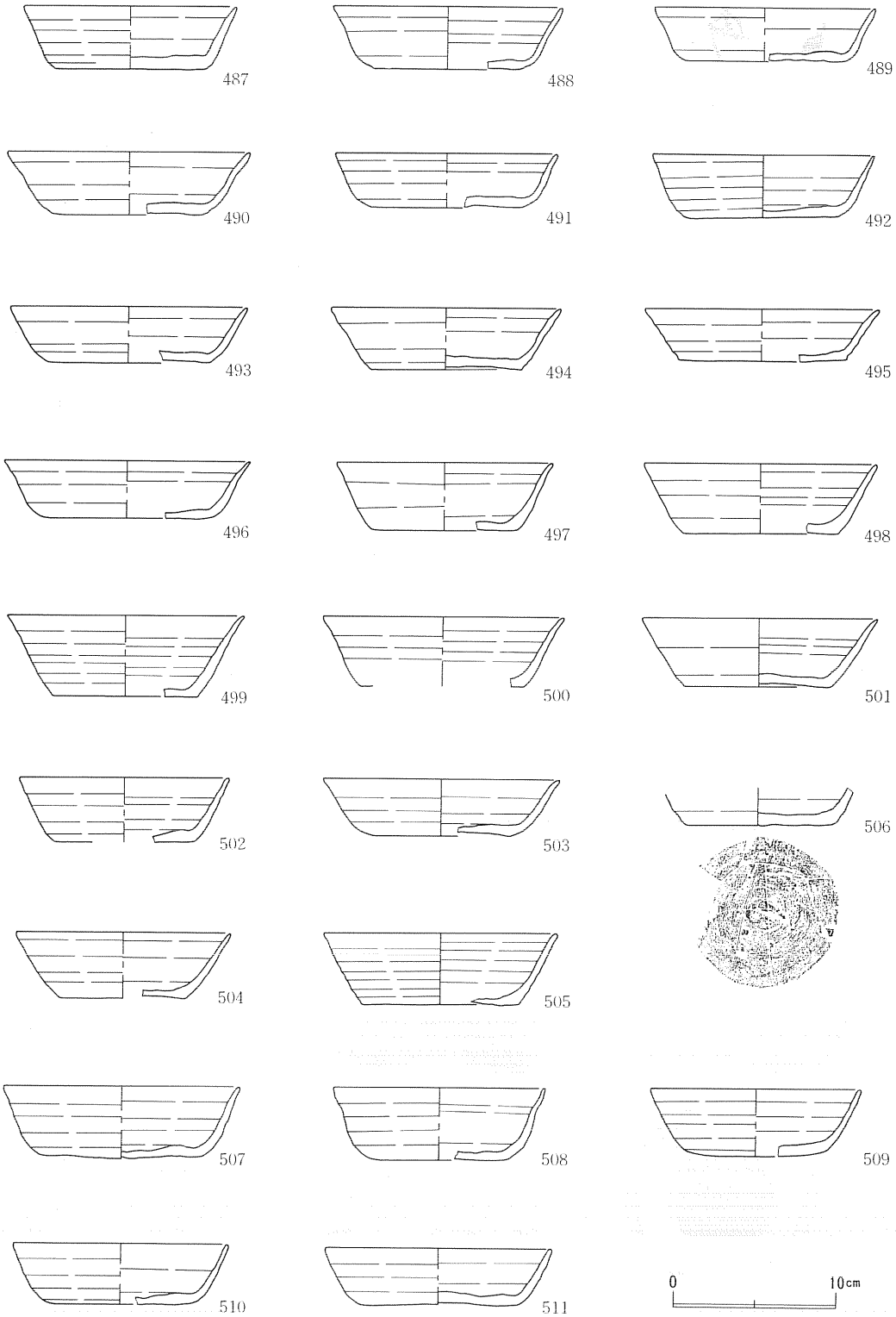
第40図　遺構内出土土器(19)　ＳＪ05



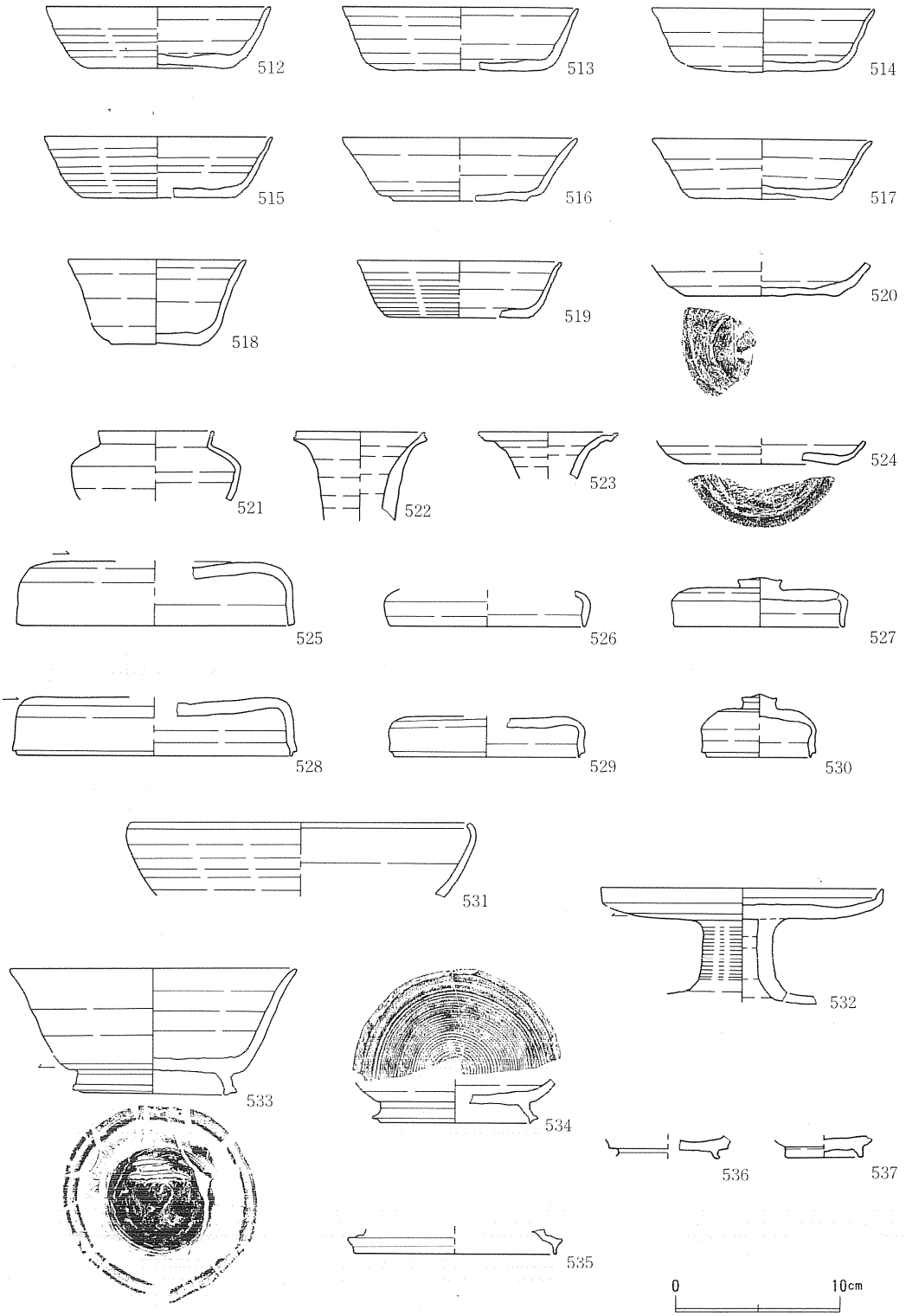
第41図　遺構内出土土器(20)　ＳＪ05



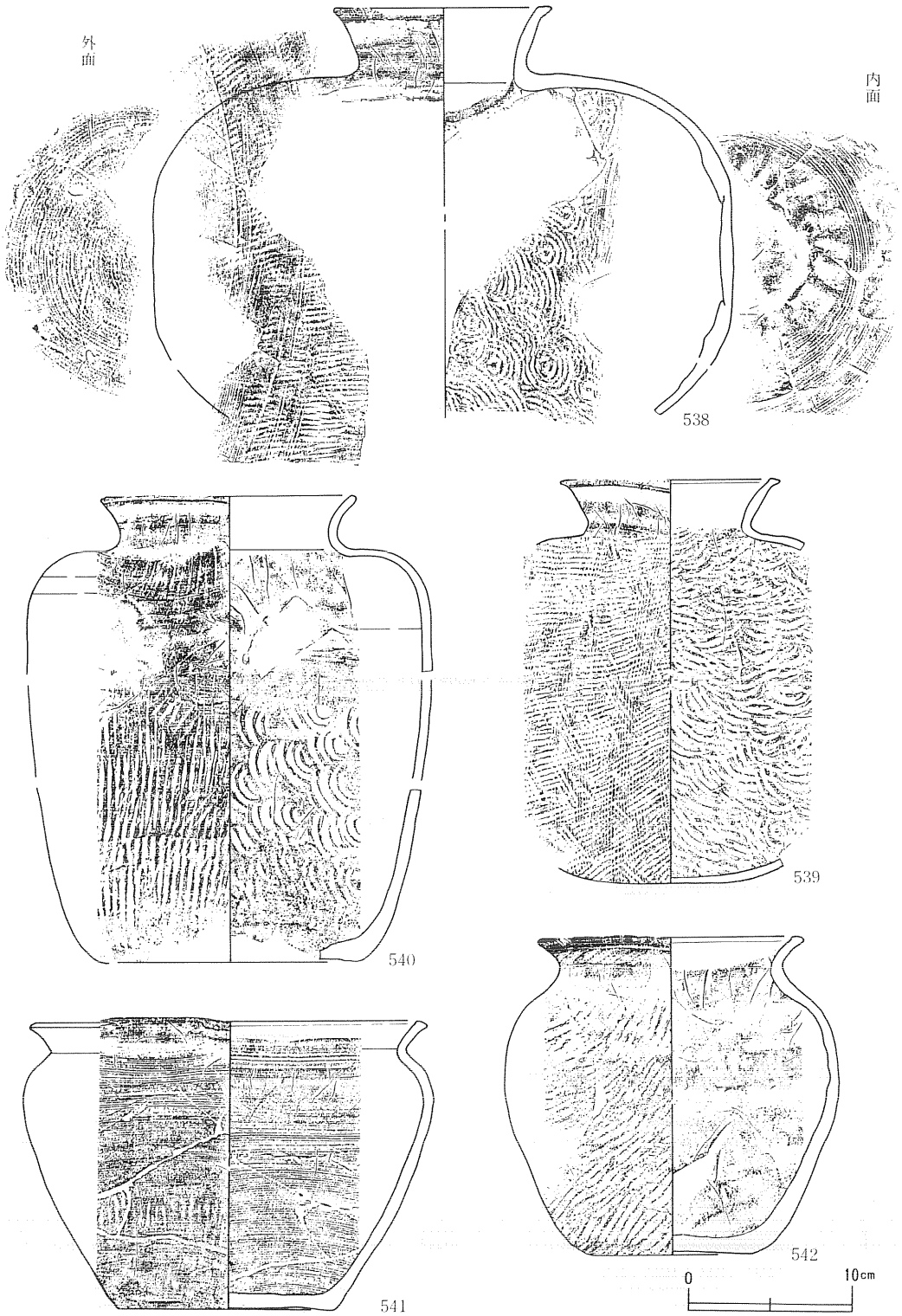
第42図　遺構内出土土器(21)　ＳＪ05



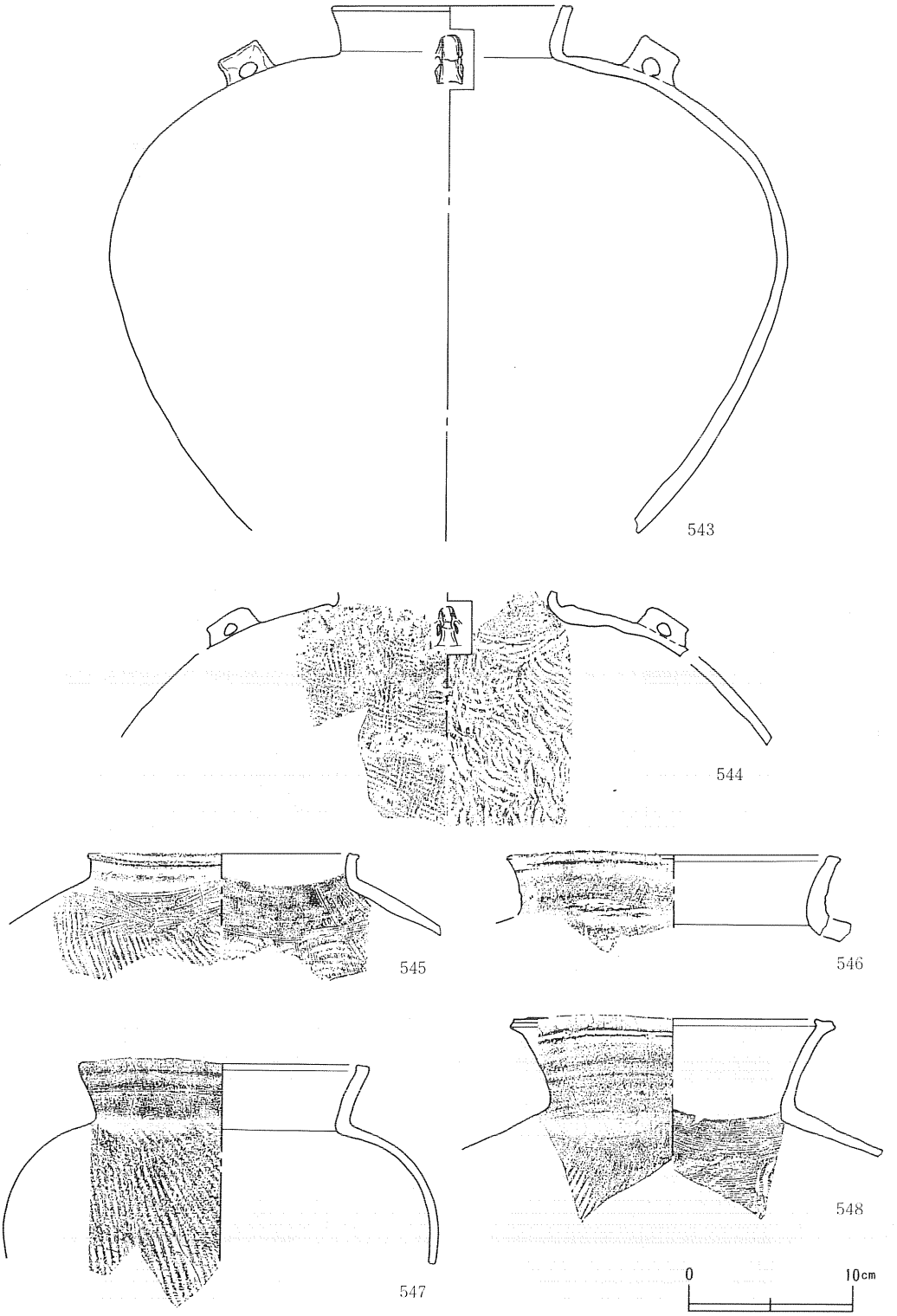
第43図　遺構内出土土器(22)　ＳＪ05



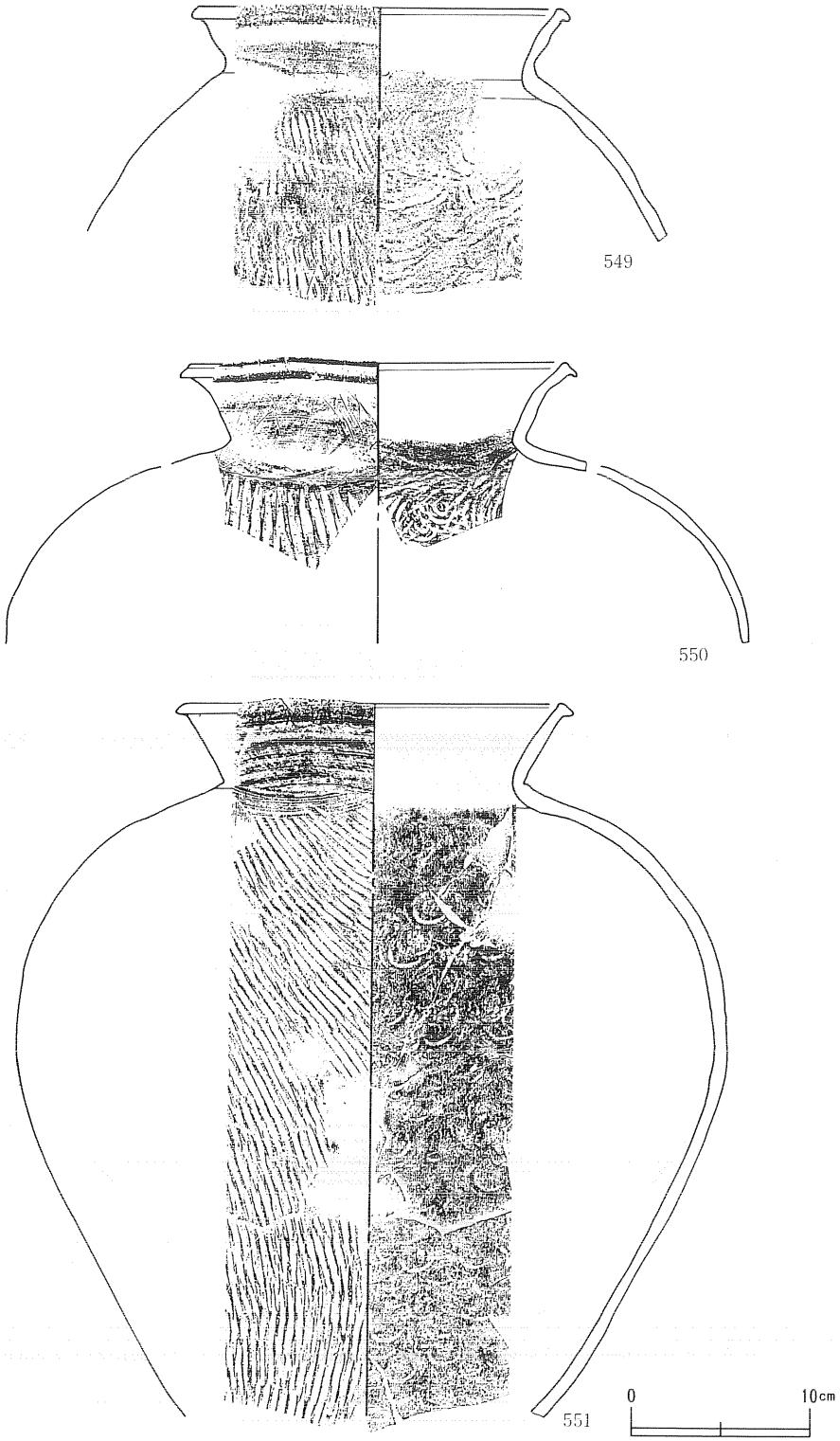
第44図　遺構内出土土器(23)　ＳＪ05



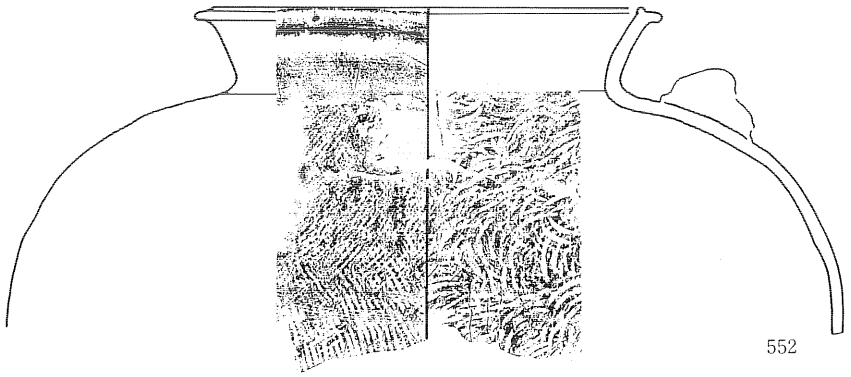
第45図　遺構内出土土器(24)　ＳＪ05

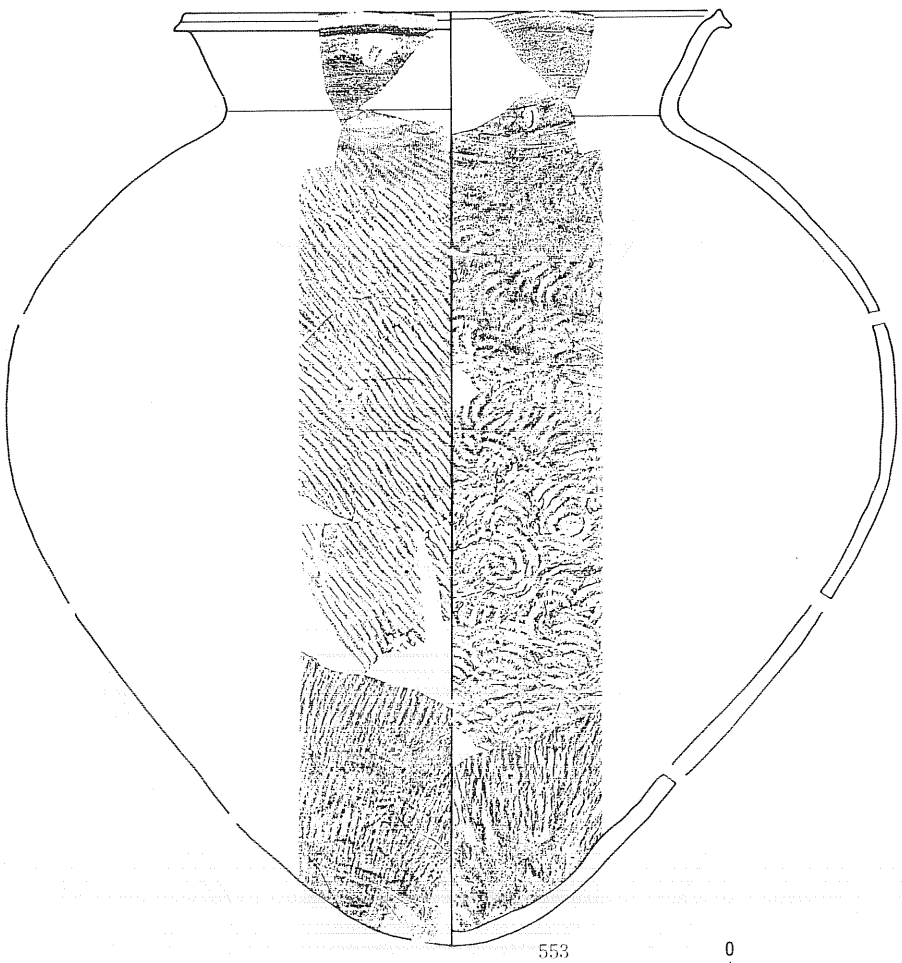


第46図　遺構内出土土器(25)　ＳＪ05

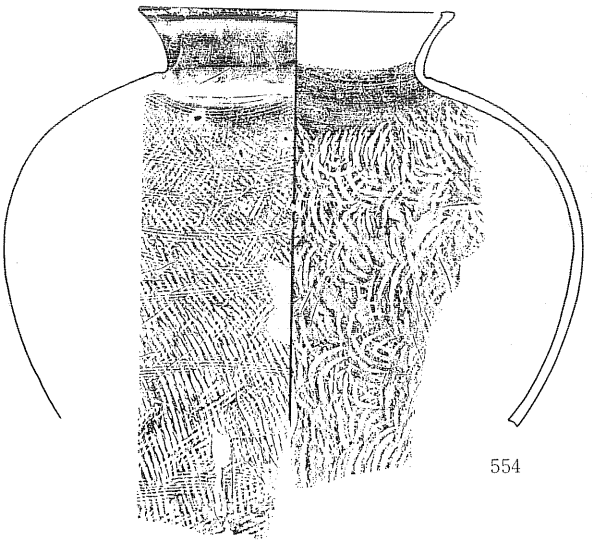


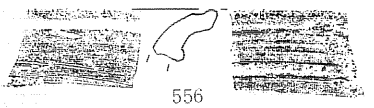
第47図　遺構内出土土器(26)　ＳＪ05

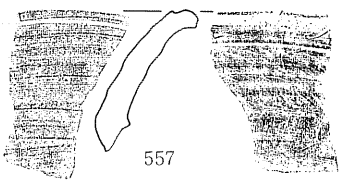


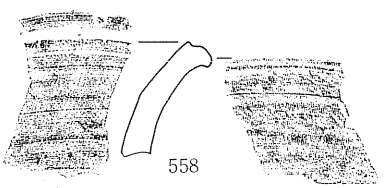


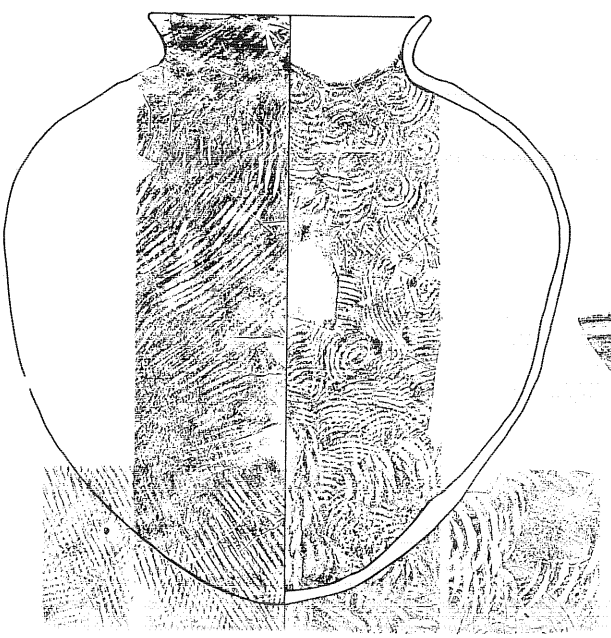
第48図　遺構内出土土器(27)　ＳＪ05

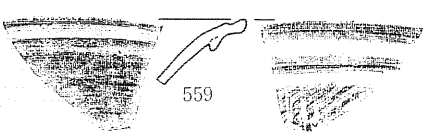


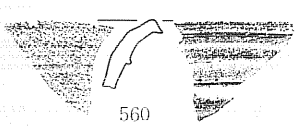


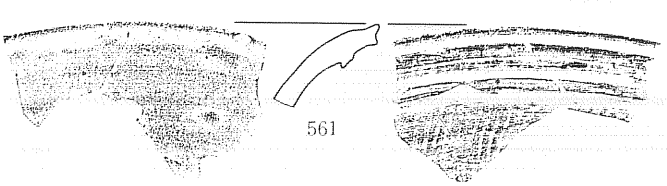


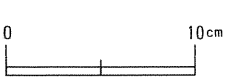




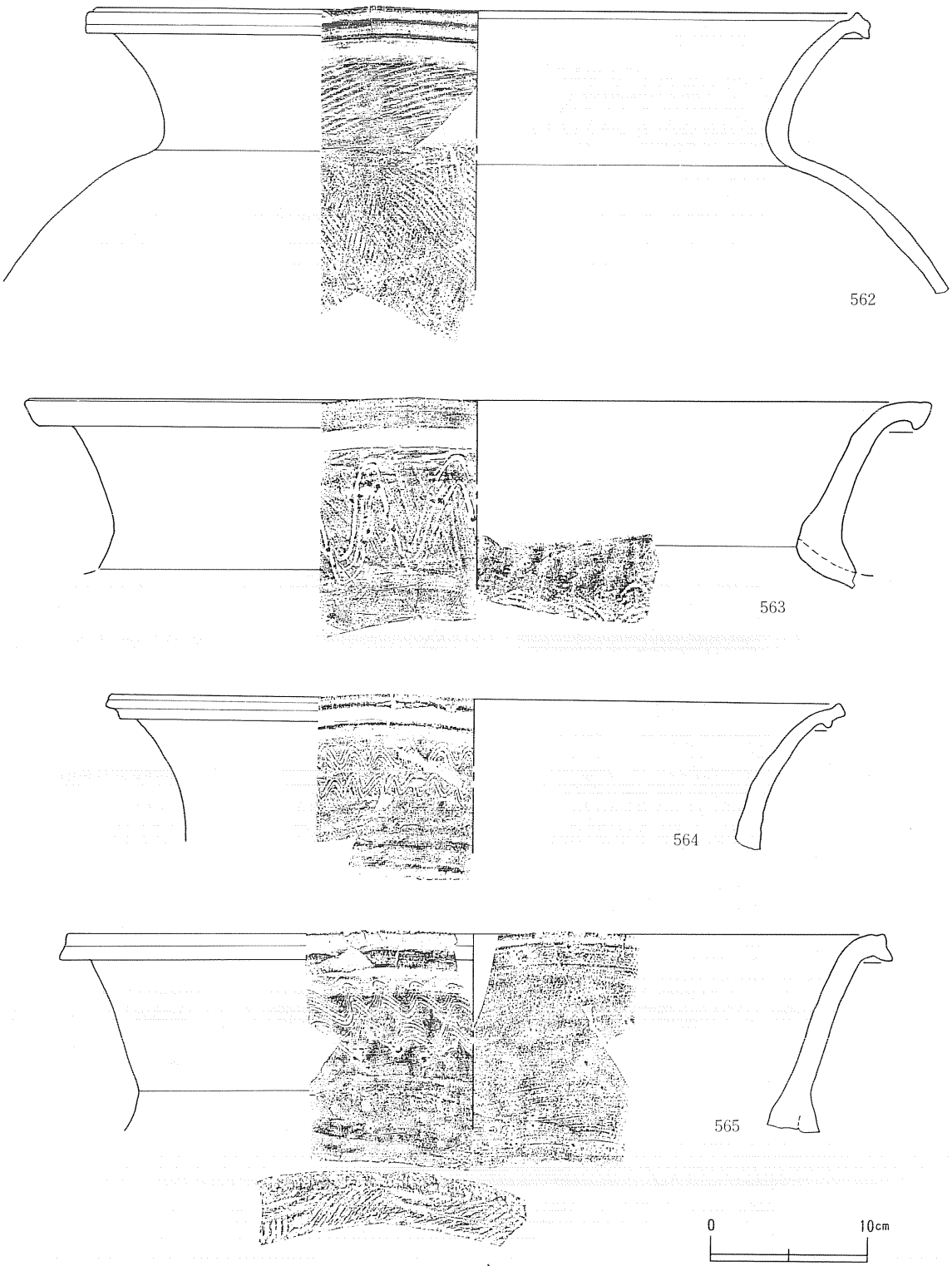




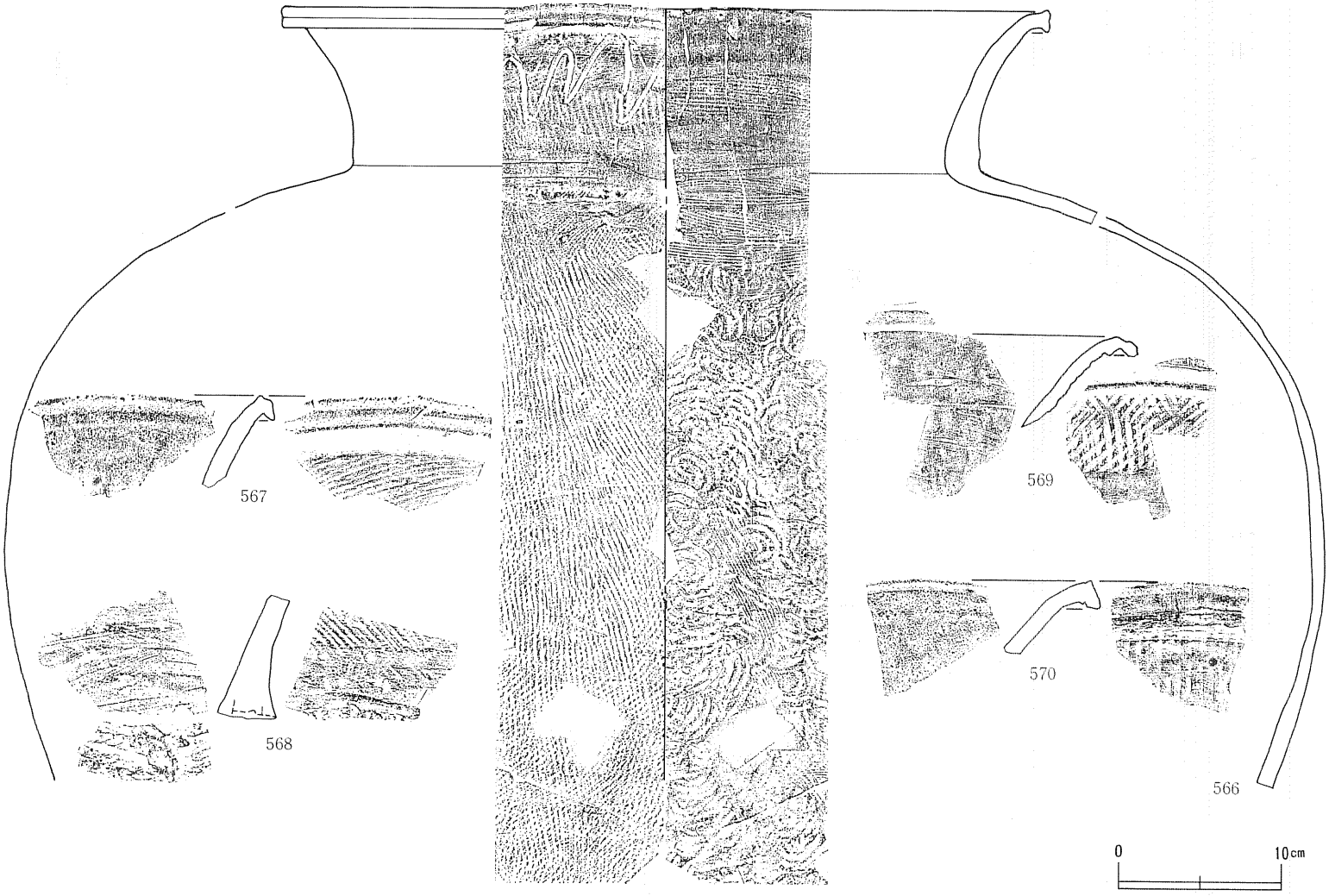




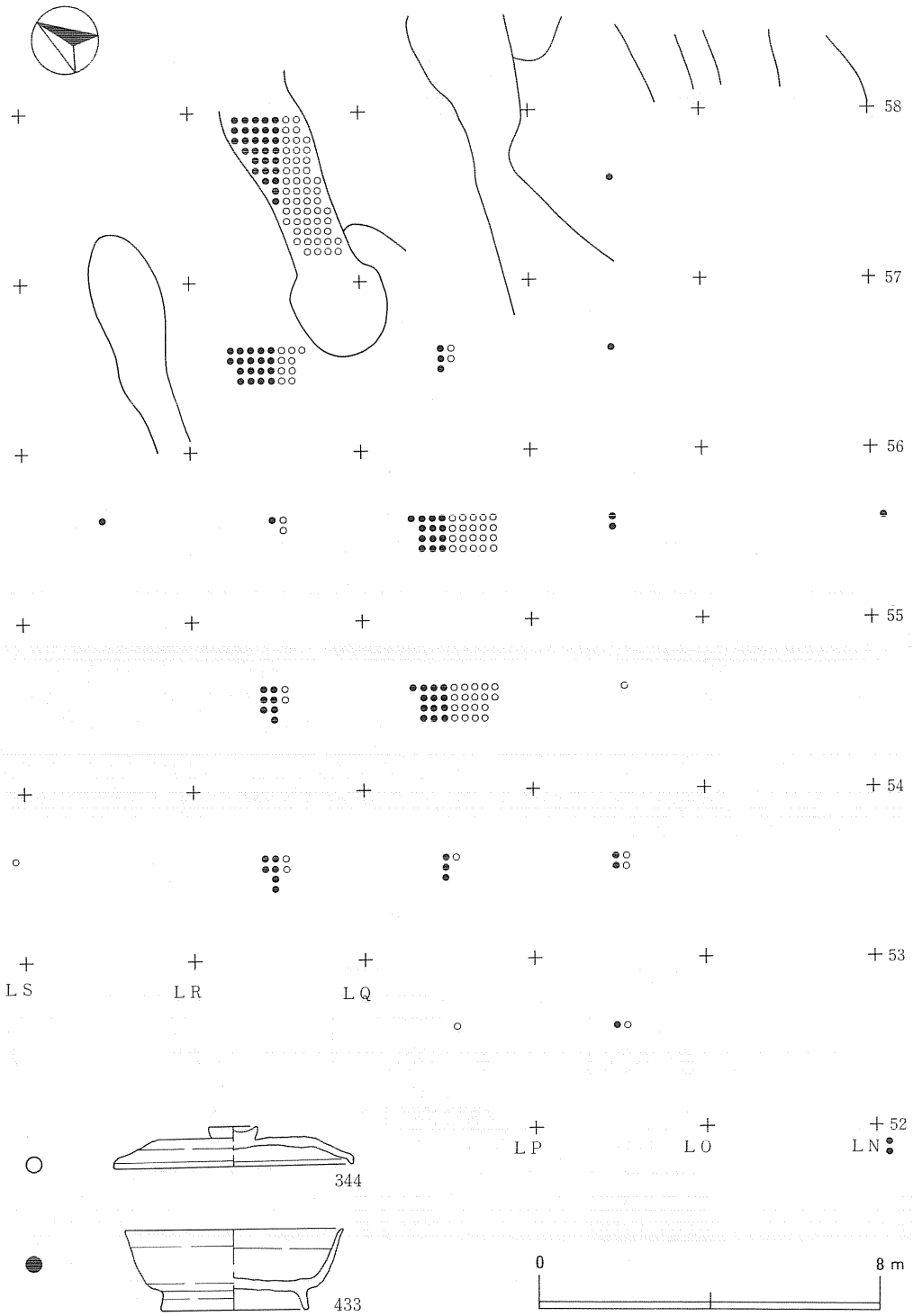
第49図　遺構内出土土器(28)　ＳＪ05



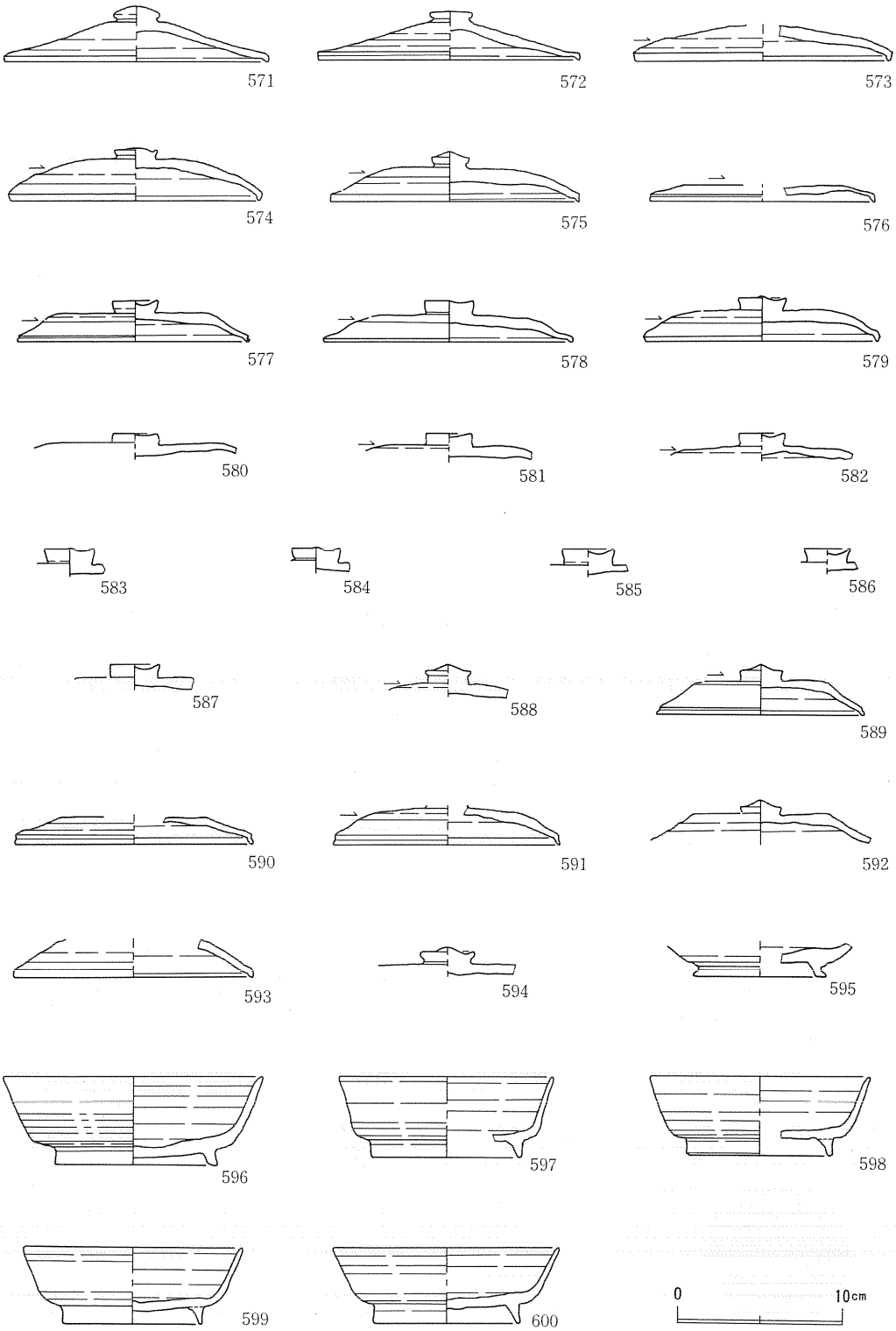
第50図　遺構内出土土器(29)　ＳＪ05



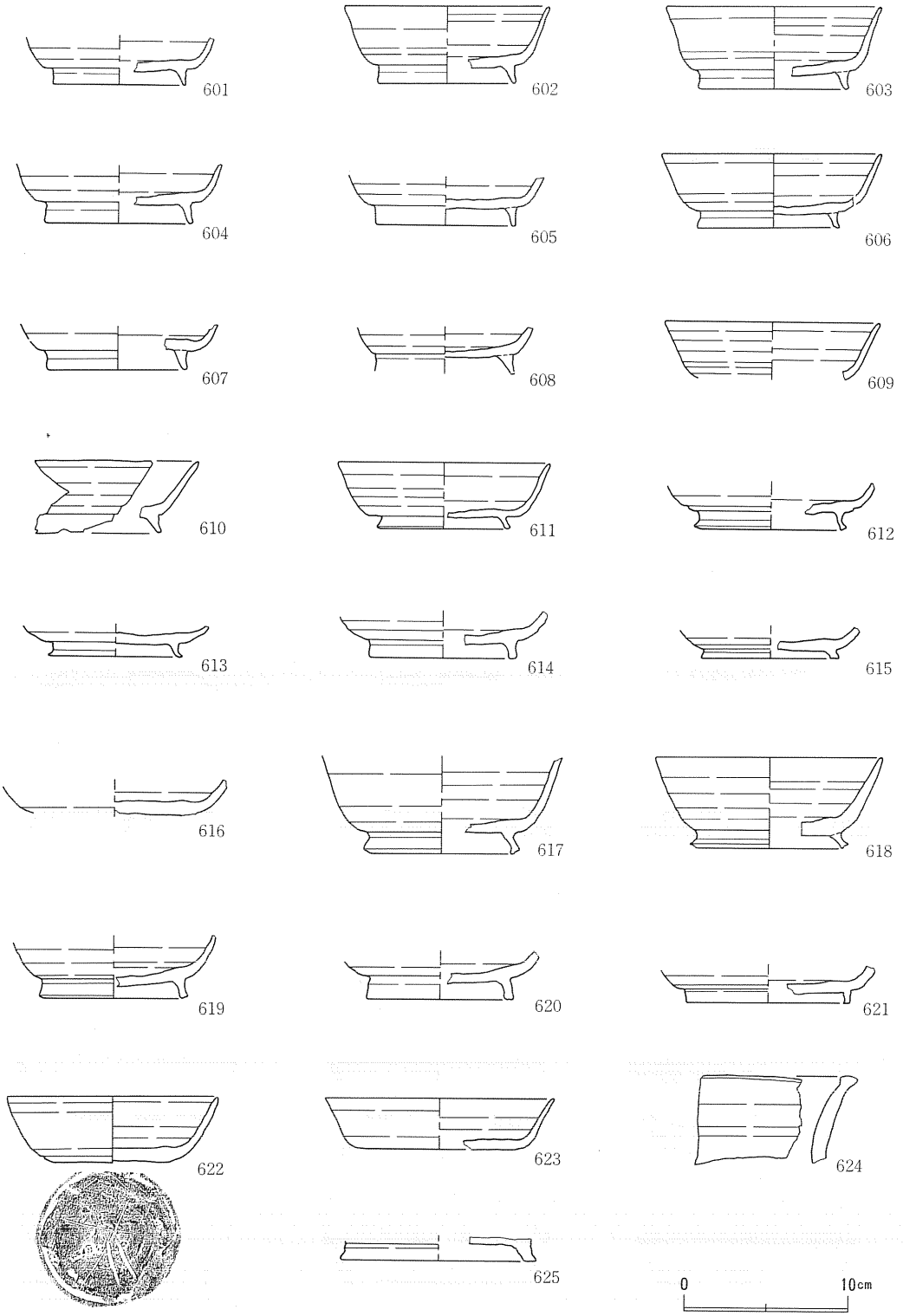
第51図　遺構内出土土器(30)　ＳＪ05



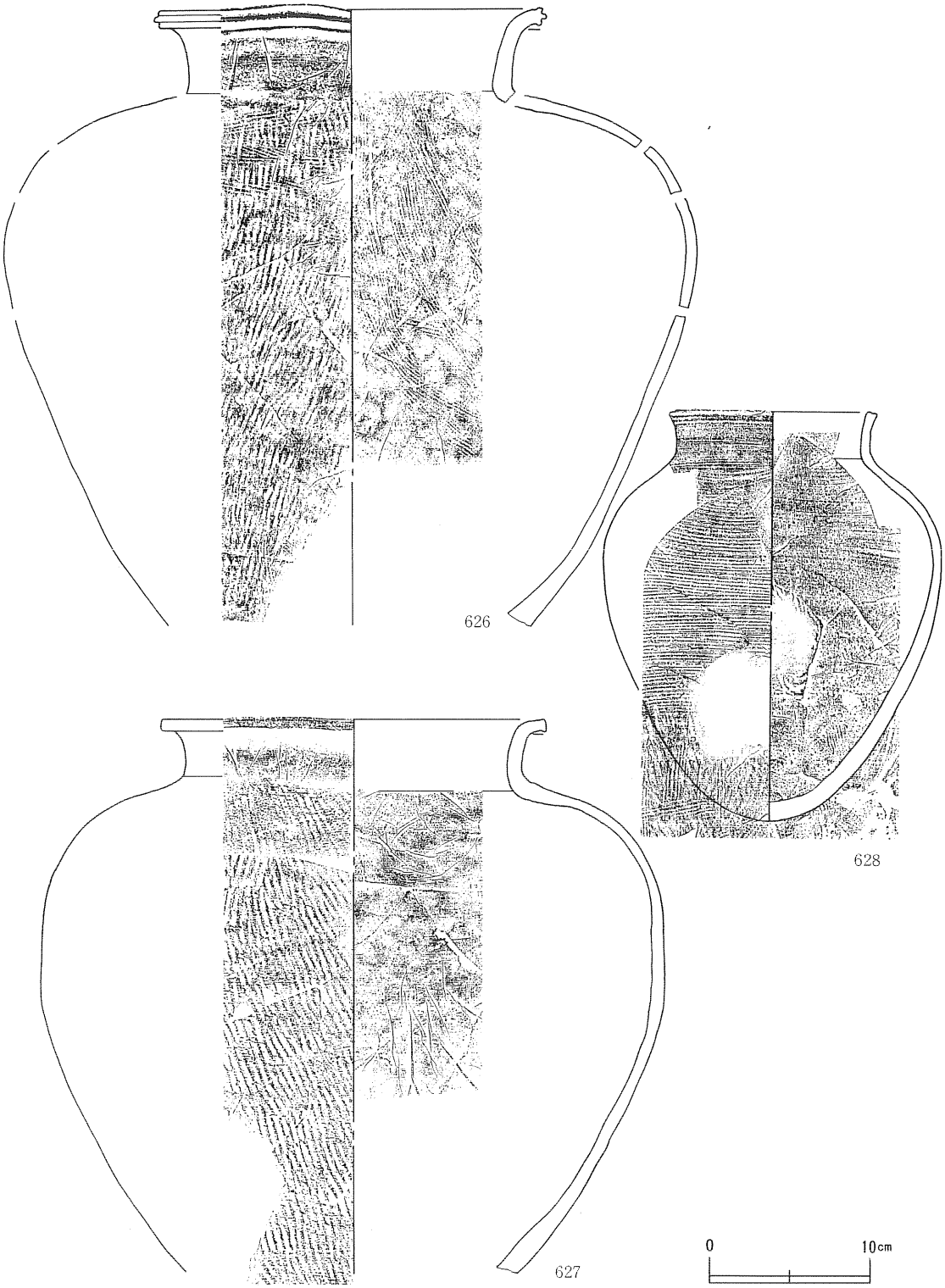
第52図　ＳＴ19関係遺物出土状況図



第53図　遺構内出土土器(31)　ＳＴ19



第54図　遺構内出土土器(32)　ＳＴ19



第55図　遺構内出土土器(33)　ＳＴ19

(589・590・592・594)がある。

高台付坏(596～621)(第53・54図、第33～35表、図版48-2)

596は口縁がやや内弯気味で、乳白色をした大ぶりのタイプである。体部下端には平行な工具痕を認める。597～610は口縁は直線的かやや外反するもので、断面三角形状の高い高台が付く。これらは黒色を呈する部分をもち、灰色が斑状を示していることで共通しているタイプである。その他高台が高く細いもの(611～613・621)、高く太いもの(614・620)、太く短いもの(615)などがある。

坏(622・623)(第54図、第35表)

622は口縁が内弯し、底部が厚い。体部最下端には沈線状の窪みがつき、底面に「大」の篦記号がある。623の口縁は外反し、青灰色を呈している。

壺(625)(第54図、第35表)

壺の底部資料と考えられる。高台は外に踏ん張り接地部は平坦である。乳白色を呈する。

甕(624・626～628)(第54・55図、第35表)

624は甕の口縁部と思われ、乳白色を呈している。626と627は口縁が直立して口唇部付近で外反する。口唇部は3つの稜をもったり(626)、垂直気味を示したりする。628は口唇部が僅かに窪み、体部には平行な掻目を施している。

ＳＴ17(第56～58図、図版16)

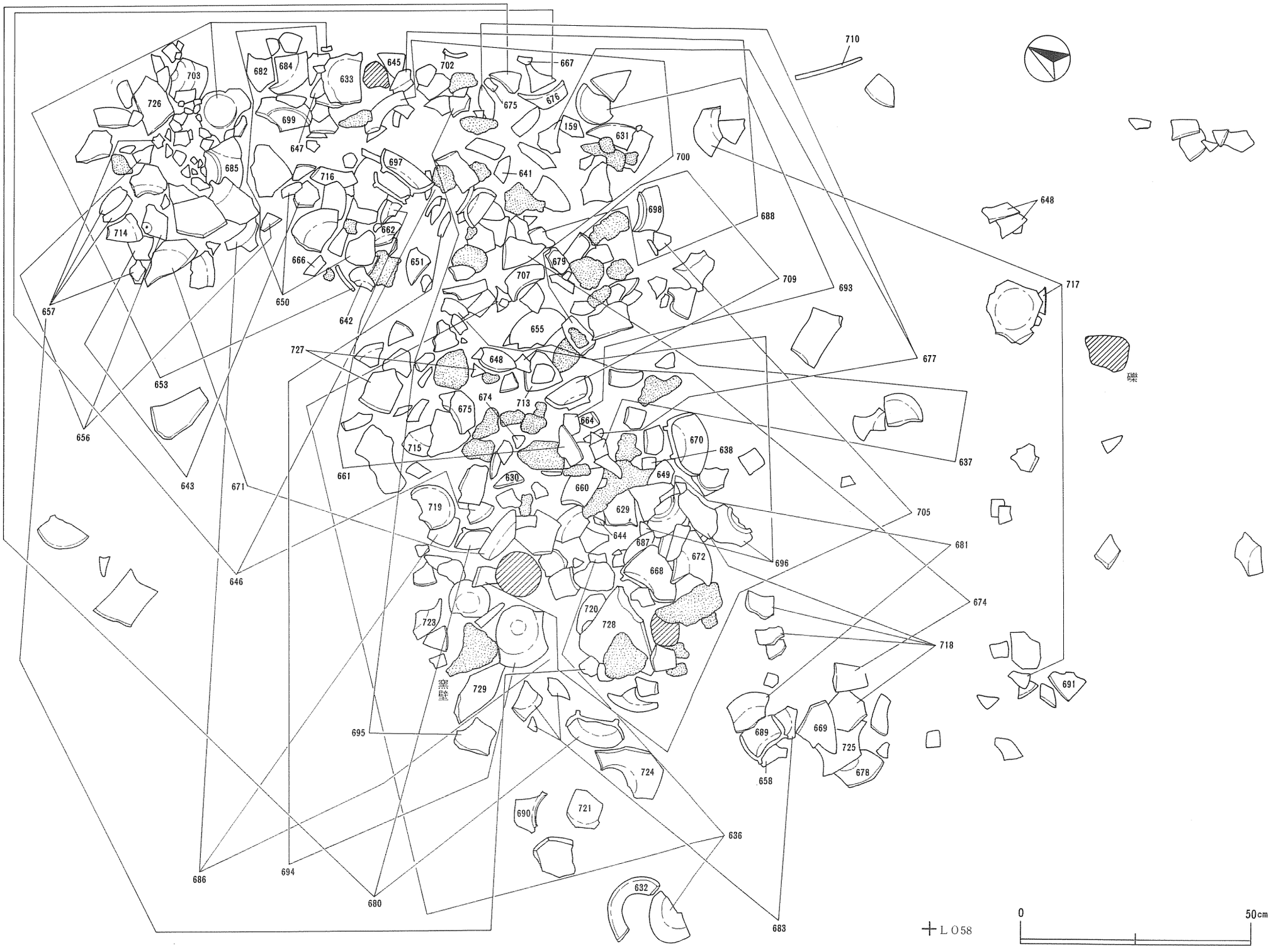
ＳＪ07・08の南ＬＯ58区を中心に180点余の土器片が約2m四方の範囲に集中して検出されたため、これを灰原ＳＴ17とした。さらに限定して言えば、下方の幅が70cm上方の幅が1m、その間約2mである。土器は坏・蓋類の大きな破片が多く甕類が少ない。そしてそれらは重なるように出土し、茹の入った窯壁や炭化物・灰が混在していた。このＳＴ17から出土した土器と同様の土器は、さらにＬＯ55・56、ＬＰ54～56、ＬＱ56区を中心にＬＮ55・56、ＬＯ53・54、ＬＰ53、ＬＱ53～55区まで存在し広範な広がりを見せている。ＳＴ17から集中して出土した遺物は、地山排土に直接覆われており、自然堆積土の茶褐色土上面から出土した一括土器群である。したがって、これらの土器はＳＴ17茶褐色土上面土器群(**一括土器群Ｅ**)として捉えることができる。以上よりＳＴ17は、失敗品を局所的に集めた土器溜的な性格が考えられる。ＳＴ17を形成した窯跡は、調査区外である斜面上方に存在すると思われる。

出土遺物

ＳＴ17からは、坏蓋・高台付坏・坏・壺蓋・壺・鉢・甕(629～729)が出土している。これらのすべては、一括土器群Ｅとして捉えることができる。

坏蓋(629～660)(第59図、第35～37表、図版43-6～11)

622は天井が三角形状を呈し、端部屈折裏面には沈線状の窪みをもつ。回転篦削りが深く及



第56図　ＳＴ17遺物出土状況図

んでいる。630～655までは表面端に環状の黒色部分をもち、それ以外は主に灰色で共通している。これらには630を除くと、天井が丸い大ぶりのタイプ(630～634)とそれよりもやや小ぶりのタイプ(635～655)とがある。つまみは前者では扁平な擬宝珠形(632・633)、後者ではボタン状のもの(636・647)、扁平なもの（645・646)、擬宝珠形のものがある。654・655はゆがんだ土器をそのまま作図してある。656～660には天井が丸く低いもの(656)と高いもの(659)、天井がやや丸味のあるもの平坦なもの(657・658・660)とがある。両タイプとも回転篦削りは中央まで及ぶものがほとんどである。

高台付坏(661～709)(第60・61図、第37～40表、図版48-3～9)

661～663は高台が高く断面三角形状を呈するタイプである。口縁部は直線的で(661～663)、底部先端が角張る特徴をもつ。すべて火熱によってただれており、ひしゃげたり(661・662・664～666)、亀裂の入るもの(663)がある。これらは焼台として使用されたと考えられる。667～675は器高が高く大ぶりの形態を示すタイプである。高台は外に踏ん張ってやや短めに付き、667を除くとすべての体部中央に2本の平行な沈線をもつ。また表面は、全体的に黒色を、他は主に暗い灰色を呈して特徴的である。676～681・684～709は、器高が低く小ぶりのタイプである。高台はやや短く外に踏ん張るものが多い。口縁は、内弯するもの(678・691)、直線的なもの(686・701)、外反するもの(687・693)などがある。高台接地部には、明瞭な沈線をもつもの(709)がある。これらの土器の表面は、全体的に黒色を他は主に灰色を呈している。682と683は高台が細く、接地部が外反している。

坏(710～720)(第62図、第40・41表、図版53-4～8)

710～712は口縁が内弯気味で、口唇部と底部が丸い特徴をもつ。713～716も底部は丸く口唇部が細くなる。これらは内外に火襷の痕跡をもつ。717・718は口縁が直線的なもの(717)とやや外反するもの(718)とがあるが、焼成状態や色調が共通している。719・720は生焼け状態。

壺蓋(721～723)(第62図、第41表、図版56-5～7)

口縁端部が丸いもの(721・722)と内面に稜をもつもの(723)とがある。723の内面は全体的に黒色を呈している。

壺(724)(第62図、第41表、図版56-8)

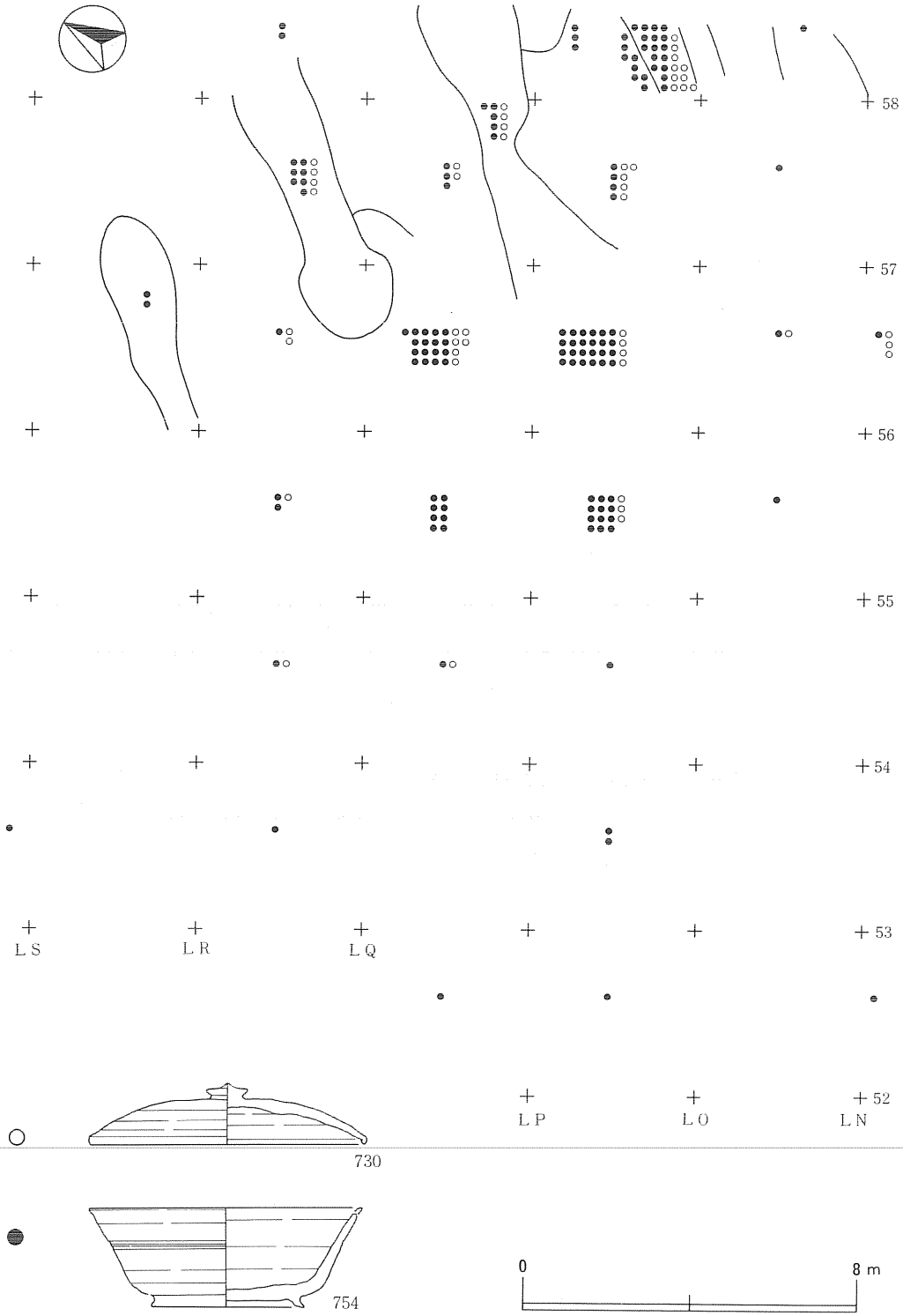
短頸壺で、口縁部は直立しその端部は丸い。

鉢(726)(第62図、第41表)

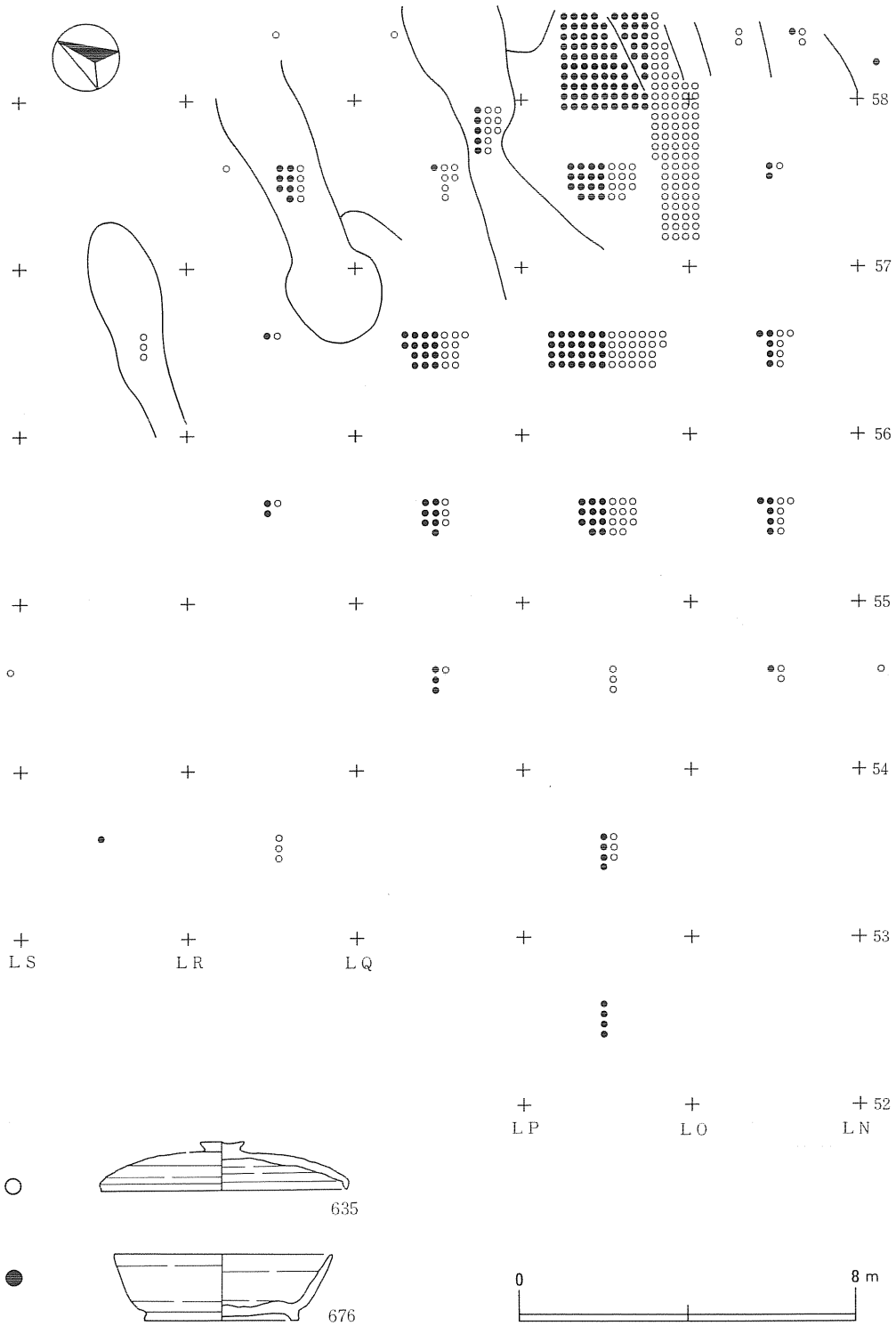
頸部がくの字に屈折し、体部は強く張る。内外面が黒色を呈している。

甕(725・727～729)(第62図、第41表、図版68-3、83-8)

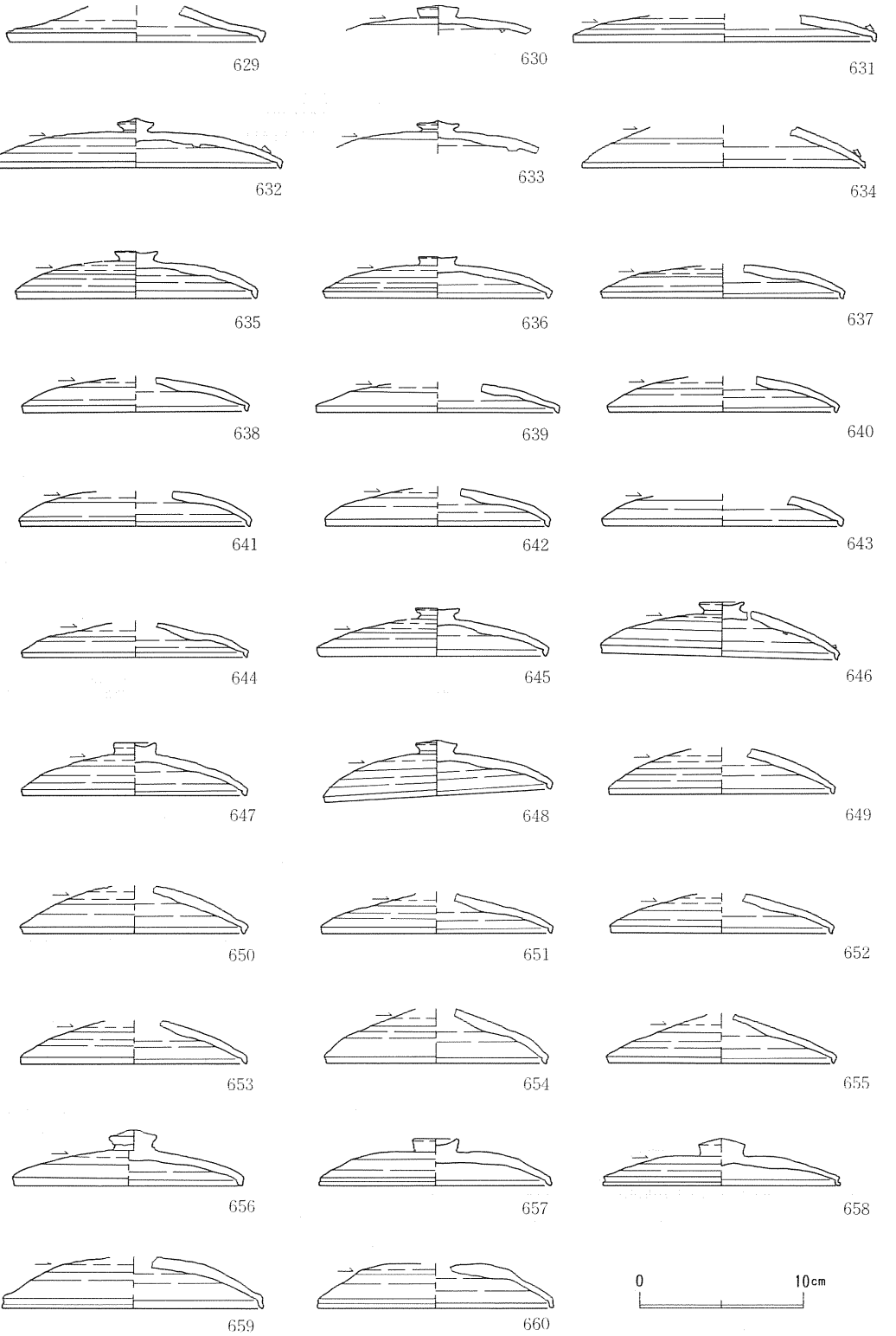
725の口唇部はやや丸く傾斜している。外面には緑色の自然釉が付着している。727～729は体部の破片であり、728には劫入りの窯壁が内側に付着している。727は薄い。



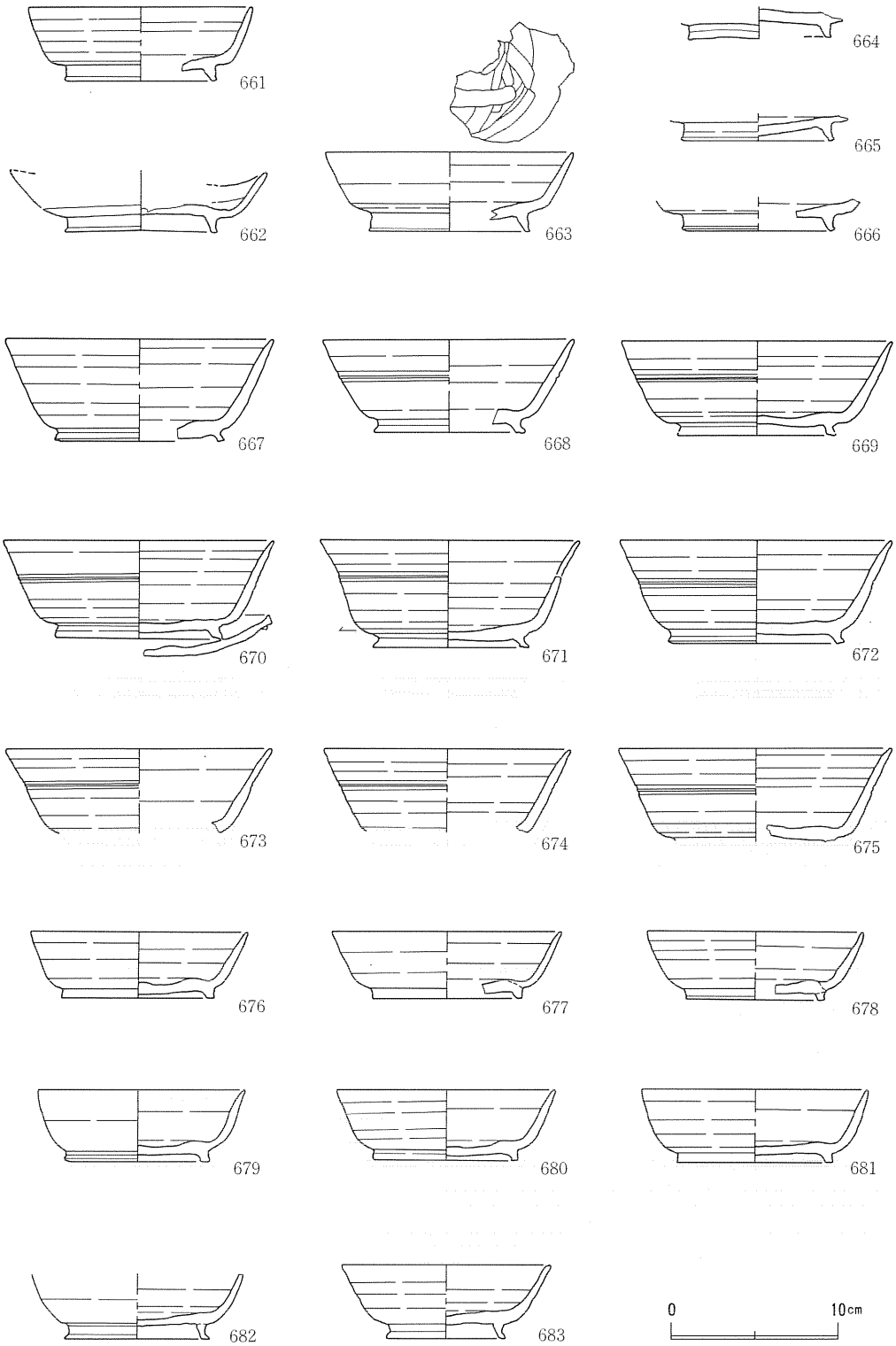
第57図　ＳＴ17関係遺物出土状況図(1)



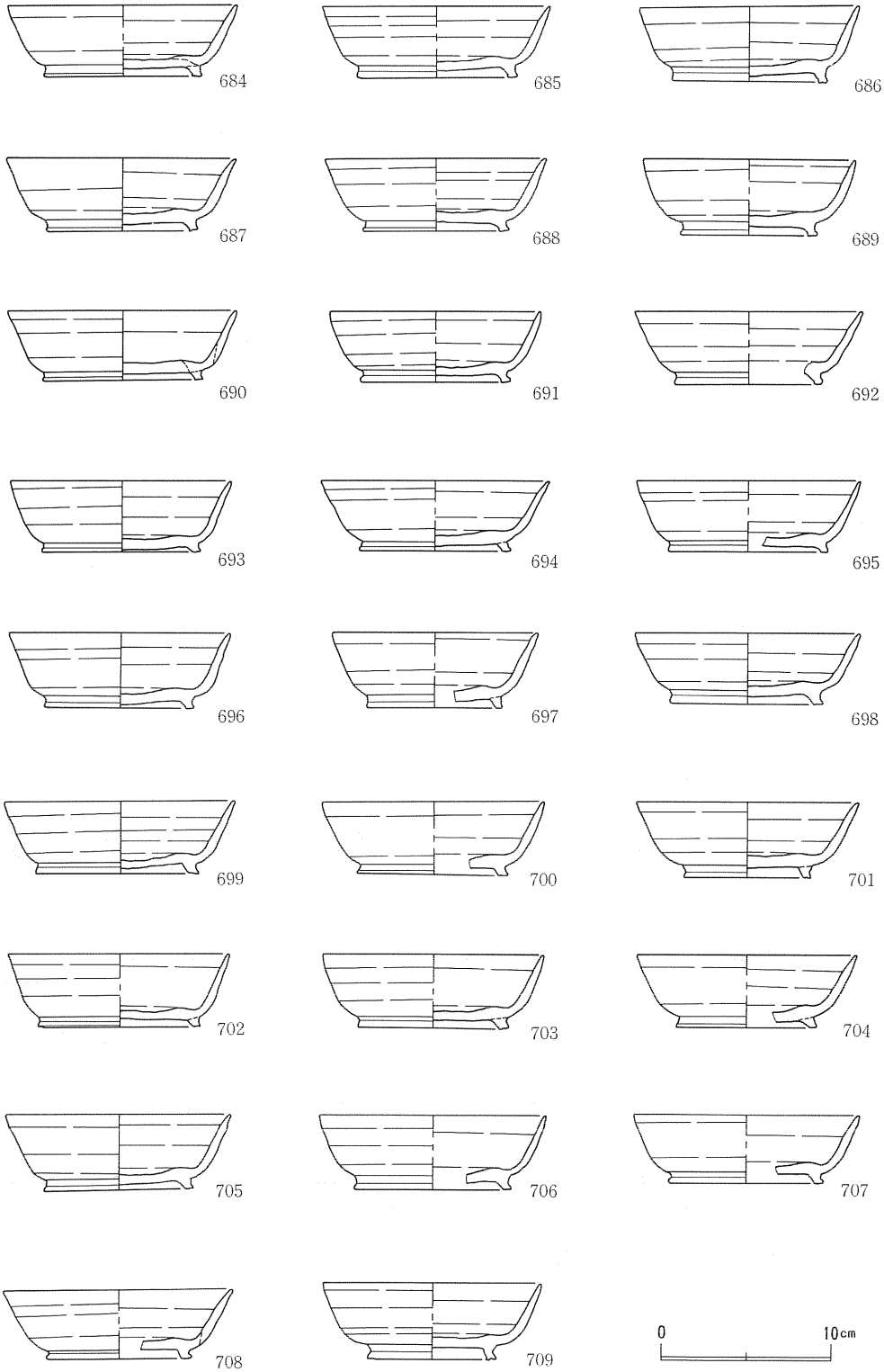
第58図　ＳＴ17関係遺物出土状況図(2)



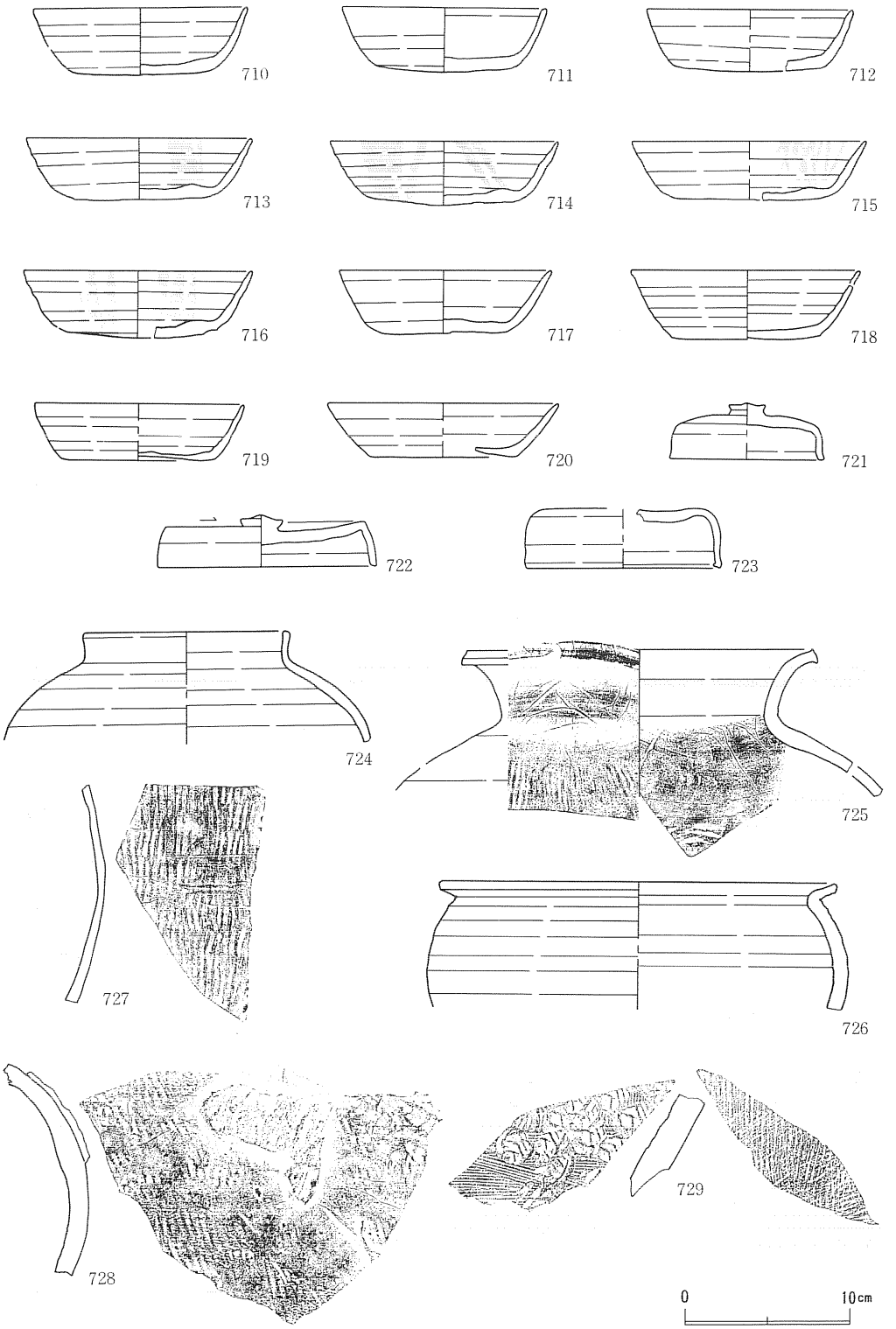
第59図　遺構内出土土器(34)　ＳＴ17



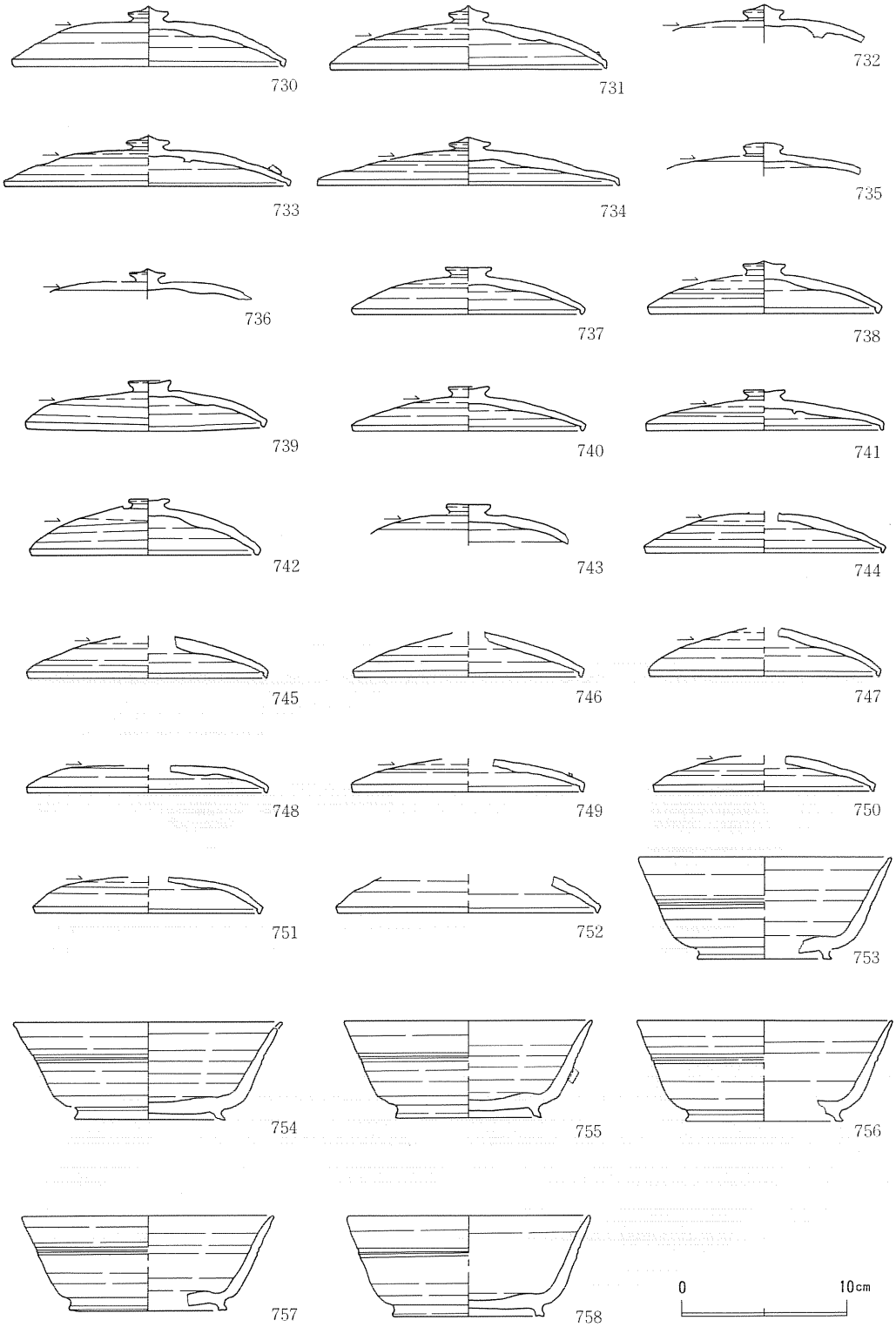
第60図　遺構内出土土器(35)　ＳＴ17



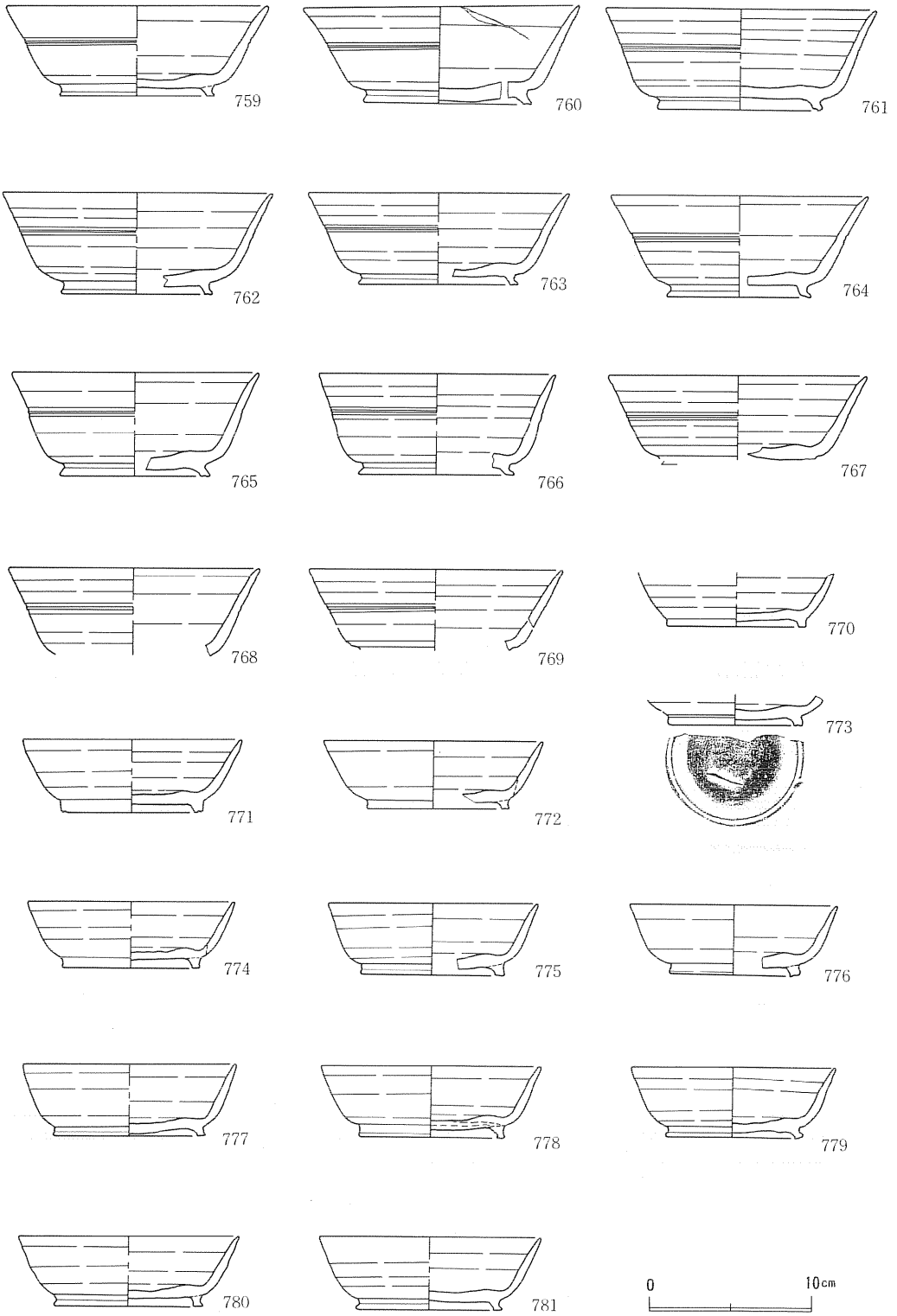
第61図　遺構内出土土器(36)　ＳＴ17



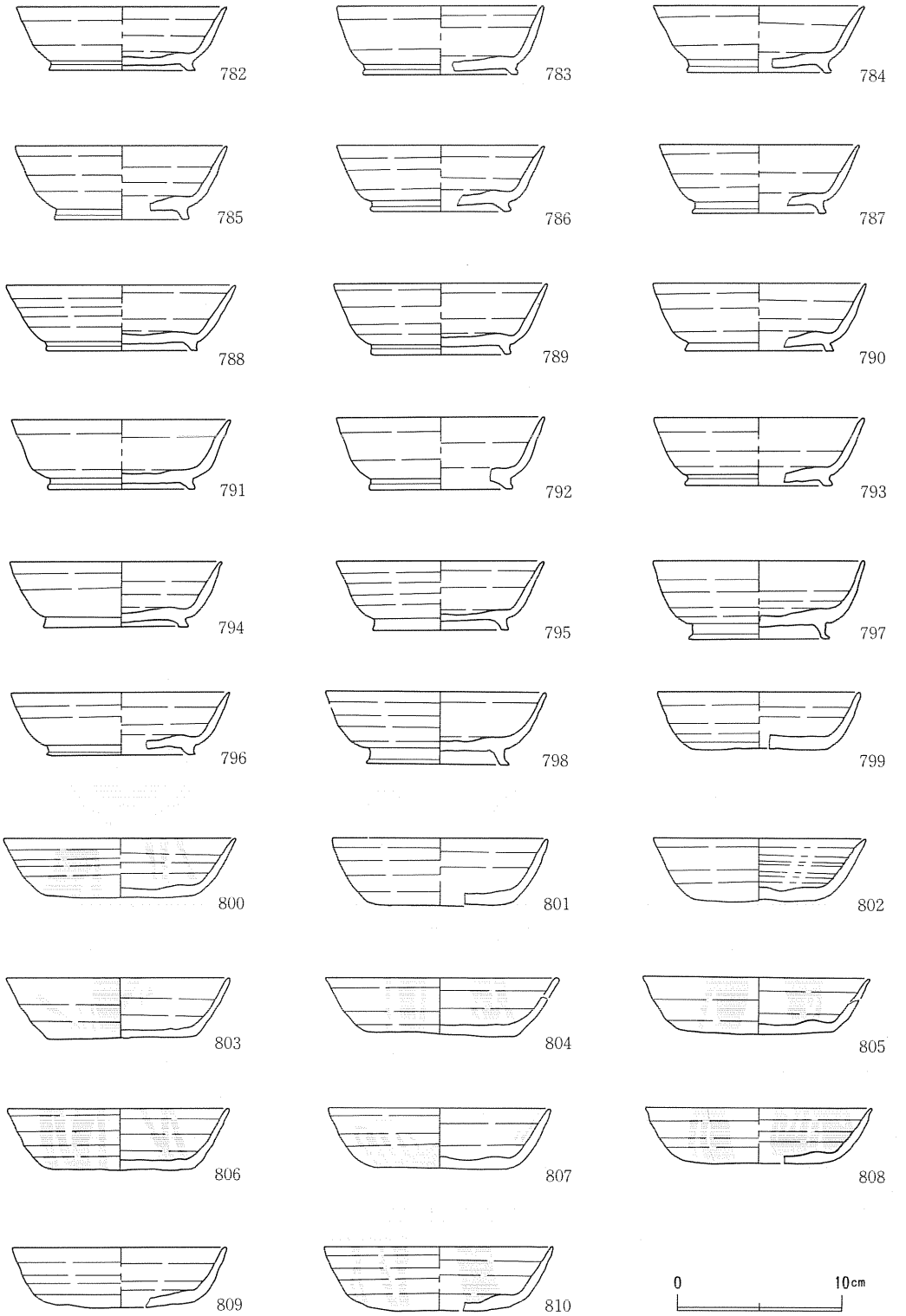
第62図　遺構内出土土器(37)　ＳＴ17



第63図　遺構外出土土器(2)　ＳＴ17関係土器



第64図　遺構外出土土器(3)　ＳＴ17関係土器



第65図　遺構外出土土器(4)　ＳＴ17関係土器

ＳＴ17関連遺物と見なされるものには、坏蓋・高台付坏・坏(730～810)がある。

坏蓋(730～752)(第63図、第41・42表、図版43-12)

730～752までは表面端に環状の黒色部分をもち、それ以外は主に灰色を呈する特色をもつ。これらには天井が丸い大ぶりのタイプ(730～736)と、同じくやや小ぶりのタイプ(737～752)とがある。前者ではつまみが扁平な擬宝珠形のもの(730～734・736)や碁石形を呈するもの(735)がある。後者ではすべてが扁平なつまみを有している。両タイプとも回転篦削りは中央まで及ぶものがほとんどである。

高台付坏(753～798)(第63～65図、第42～45表、図版78-8、48-10・11)

759～769は器高が高く大ぶりのタイプである。高台は外に踏ん張ったやや短めのものが付き、すべての体部中央には2本の平行な沈線をもつ。また表面が全体的に黒色を、他は主に灰色を呈している。770～796は器高が低く小ぶりのタイプである。これらの口縁部は、外反するもの(775・776・779・784・791)を除くとほとんどが直線的である。高台は短く外に踏ん張るものが多く接地面に沈線をもつもの(770～773)がある。また表面が全体的に黒色を、他は主に灰色を呈している。797と798は口縁が内弯し、高台は高く接地部が外へ僅かに張り出す。797は口縁がゆがんだ部分を実測してある。

坏(799～810)(第65図、第45・46表、図版81-4、53-9～11)

799・801・809は口縁が内弯気味で、口唇部と底部は丸い。このうち799・809は体部最下端に篦削り調整をもつ。802は口縁が尖り底部は丸い。体部内面には平行する明瞭な沈線をもつ。800・803～808・810のすべてに火襷が認められる。これらには口唇部が尖って底部端に丸味をもつもの(805・808・810)、口唇部を丸くおさめるもの(803・804・806・807)がある。

ＳＪ07・08とＳＴ18(第66～70・80図、図版17～19)

ＳＪ07はＬＱ57・58に位置し、標高61.5～63.5mの等高線に直交して構築された窯である。下方には、同窯及びＳＪ08に共通の灰原であるＳＴ18が広がっている。ＳＪ07の窯体の大部分は、調査区外にあり、従って、ＳＪ07の調査は焚口付近と下方の、灰原をかぶった溝状部分に限られた。この窯の主軸方向はＮ－48°－Ｅである。第67図はＳＪ07焚口付近における横断面図であるが、これによるとＳＪ07は大きく3期あり、新しい方からＳＪ07ａ～ｃに分けることができる。ＳＪ07は南東側で主軸の異なるＳＪ08と重複しており、ＳＪ07ａの操業後の窪みが灰原ＳＴ35になっている。ただし、この断面ではＳＪ07ａとＳＴ35の間に２つの遺構が入り込むように見えるが、その内容が不明瞭なのでここでは遺構の可能性を指摘するだけに留めておく。ＳＪ07ａ～ｃと、ＳＴ08の関係は古い方からＳＪ07ｃ→ＳＪ07ｂ→ＳＪ08→ＳＪ07ａである。横断面におけるＳＪ07窯跡の現状幅は、ＳＪ07ｃが１ｍ、ＳＪ07ｂが1.5m、ＳＪ07ａが1.8mで、地山上面からＳＪ07ｃ窯底までは約1.8mの深さがある。ＳＪ07ａは、今回の検出範

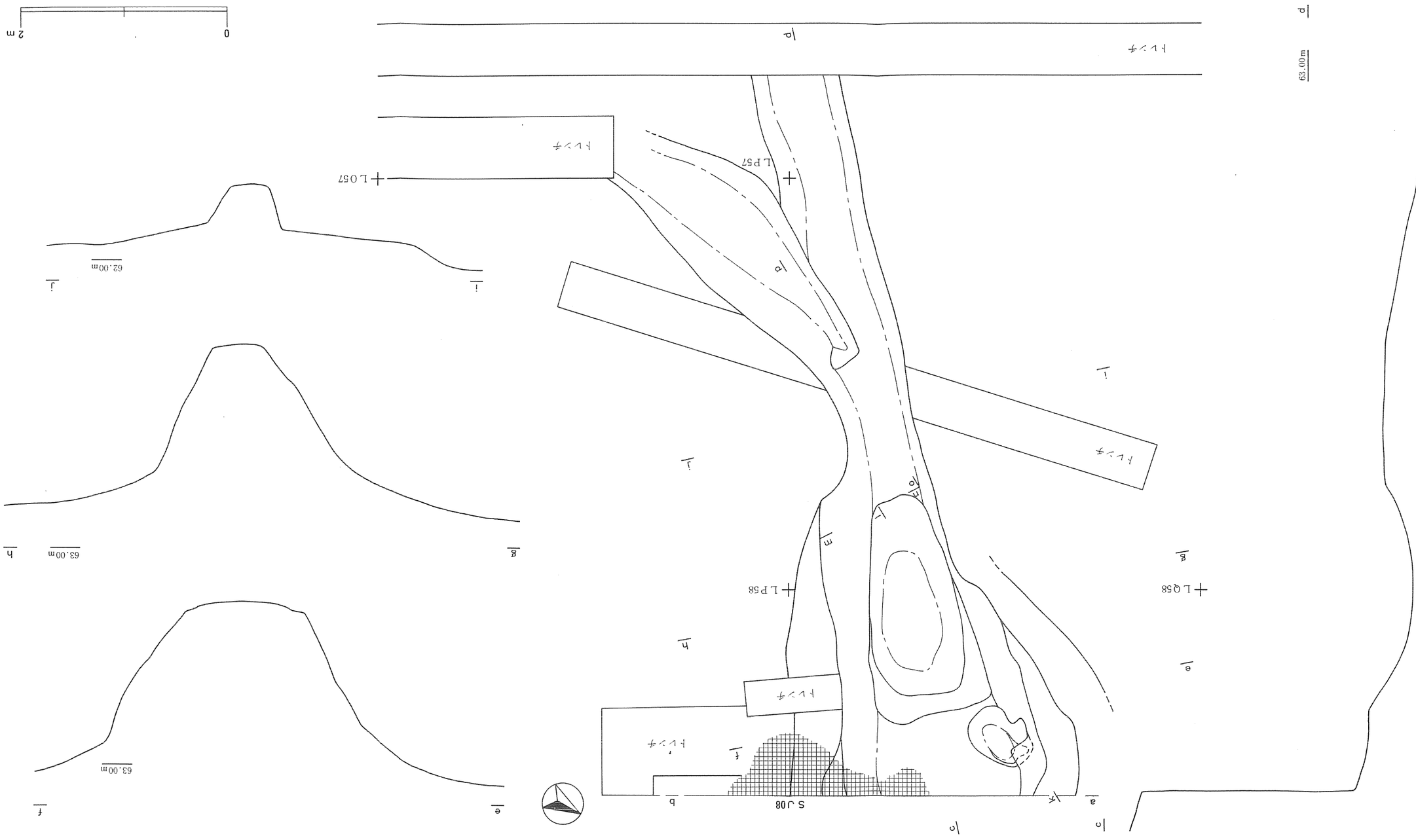
囲の床や壁では焼成部分を確認できなかったが、底面に多量の炭が検出されたことと深く掘り込まれていることから窯の焚口付近と判断した。ＳＪ07ｂ・ｃの窯の構造は地山上面から床面までの深さや竈を認めないことから地下式窖窯と考えられる。ＳＪ07の下方に延びる幅80～110cmの溝状部分は灰や遺物を掻き出すためのものと考えられるが、直線的に延びる溝状部分ａ(旧)と等高線に沿って大きく南に曲がる溝状部分ｂ(新)とがある。ａ・ｂの接点部分は一部攪乱され明瞭な切り合いが確認できていない。溝状部分ａの覆土はＳＪ07各窯の覆土から連続しておりＳＪ07に伴うとすることができる。そして、この溝状部分ａの始まりを除く底面Ａは地山土で形成されているが、これはＳＪ07ｃ構築の際に掘削された排土と考える。なお、溝状部分ｂがＳＪ07に伴うか否かは不明である。

またＳＪ07では、第69図Ａの⑧層は整地した地山土の直上にありＳＪ07ａかＳＪ08の覆土と考えられるが、ＳＪ07ａがＳＪ08を大きく掘りこんでいることから⑧層はＳＪ07ａに帰属すると考えられる。そして同図の⑩層がＳＪ07ｂ、⑫層がＳＪ07ｃにそれぞれ対比されると思われる。一方、第69図Ｂでは④層がＳＪ07ａもしくはＳＪ08に、⑥層がＳＪ07ｂに、⑨層がSJ07cにそれぞれ対比されるものと考えられる。このうち、ＳＪ07ａの炭化物層(炭化物層ａ)では、形態が特徴的な蓋を中心にいくつかの土器が同一層内から出土した。したがってこれらを炭化物層ａ土器群(**一括土器群Ｆ**)として捉えることができる(822～831・833・851・880～882)。また地山整地土の下の炭化物を含む層を炭化物層ｂとして捉えてあるが、堆積層がまばらで安定性を欠くため出土遺物をまとまりのある群として捉えることができなかった。

ＳＪ08はＳＪ07の南側に切り合って位置するが、焚口部分を検出したのみで、窯体の大部分は斜面上方に延びている。主軸方向はＳＪ07の主軸からはかなり東に向いていると考えられる。第67図Ａでは整地された地山直上に真赤に焼けた床面があり、かつ、この床面と地山土には2～10mmの白色粒を含む共通点がある。本窯跡の構造は、床の上の覆土が竈の入らない窯壁と地山土が混在したものであることから地下式窖窯と考えられる。検出部分の床の長さは約1.5ｍで、地山上面から底面までは約1ｍの深さがある。

ＳＴ18はＳＪ07ａ～ｃとＳＪ08から掻き出された灰原で、ＬＯ55～57区、ＬＰ55～57区を中心に広がっている。溝状部分よりも下方においては、土器を含む明確な層位を捉えることはできなかった。一方ＳＪ07の南側脇には、炭化物層と地山排土が複雑に互層をなす部分があり、そこから、坏・蓋類の大型破片が約1.5ｍの範囲にまとまって出土した。この部分は、灰原ＳＴ17出土土器と同様の土器が散在している箇所であるが、その中にＳＪ07ｃおよびｂの土器が混在している可能性があり、それらを一括土器群として捉えることができなかった。また溝状部分の両側には、ある程度の広がりをもつＳＪ07ｃの地山排土が広がり、その上の灰原からは炭化物や小さな土器片が多量に出土している。

第66図　S J07・08平面図



ＳＪ07・08にあってはそのどちらに属するか不明のものがある。したがって、両者をいっしょの項目で扱うことにする。

出土遺物

ＳＪ07・08からは坏蓋・高台付坏・坏(811～833、849～854、863～882・893)が出土している。このうち、822～831・833・851・880～882は一括土器群Ｆとして捉えることができる。

坏蓋(811～833)(第71図、第46・47表、図版43-13～16、44-1～8)

811～822の天井部は、扁平なもの(811)、丸いもの(812・813・816)、平坦なもの(814・817・818)などがある。つまみはボタン状(814・817)のほかに中央が高く突出した擬宝珠形のもの(815)がある。823～831は天井が平坦で高く、端部は水平から屈折して外傾するタイプである。これらの内面は、コテ状の工具で撫でられている。つまみはボタン状を呈している(823～828)。832と833は天井が平坦で、つまみは扁平な擬宝珠形を呈している。

高台付坏(849～854・863～876)(第72図、第48・49表、図版48-12、78-7、49-1)

849～851の高台は端部が四角張り内面に短く鋭い稜をもつ。849・850・854は体部下端に回転篦削りを施す。

863から876は淡黄色～灰白色系の土器である。口縁は直線的なもの(863・869)、外反するもの(868・871)、などがあり高台断面形が四角で外反するもの(866・867)、三角形状を呈するもの(870～876)などがある。

坏(877～882)(第73図、第50表、図版53-12、54-1)

878・879・881・882は緑灰系の色調を呈しておりやや深いものが多い。882は明瞭な回転篦削りを体部下端にもつ。

壺(893)(第73図、第50表)

短頸壺の高台と考えられる。

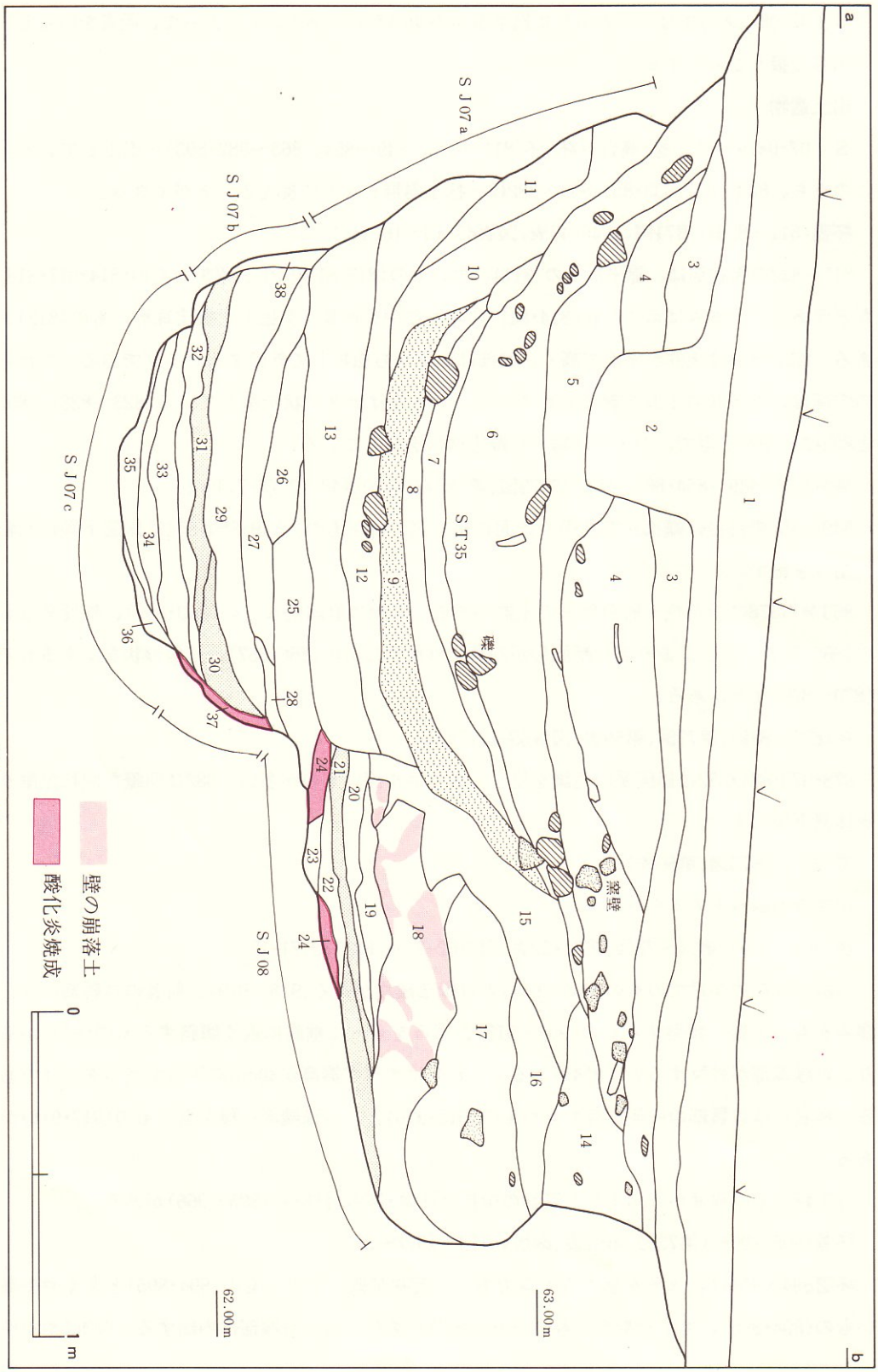
甕(909～919)(第74～77図、第51・52表、図版62-3～6、63-1・2、71-1)

口縁～体部にかけてのもの(909～914)と口縁部破片がある(915～919)。前者の口唇部には、窪みをもって緩く傾斜するもの(909～912)、窪みをもって垂直に近く傾斜するもの(913)があり、口縁端部が外反するのに914がある。これらはすべて器高が40cm前後の中型のタイプである。後者には口唇部の内側に稜をもつもの(915・916)と、口縁端部に稜をもつもの(917・918)がある。

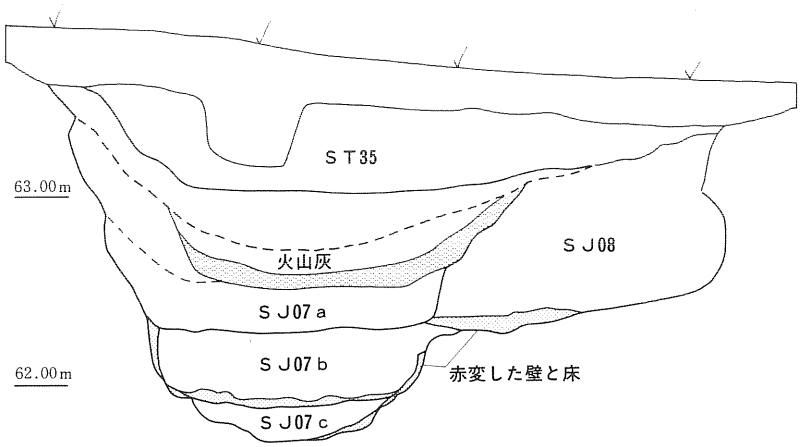
ＳＴ18とその周囲から出土した遺物の中には坏蓋・高台付坏・坏(895～966)がある。

坏蓋(895～908)(第73図、第51表、図版44-12～15、78-3)

坏蓋894～904は緑灰色を呈する土器である。天井が低く平坦なもの(894・895)と丸くやや高いもの(894・895)、丸くやや高いもの(896～902)がありどちらも端部は内傾する。903はややゆ

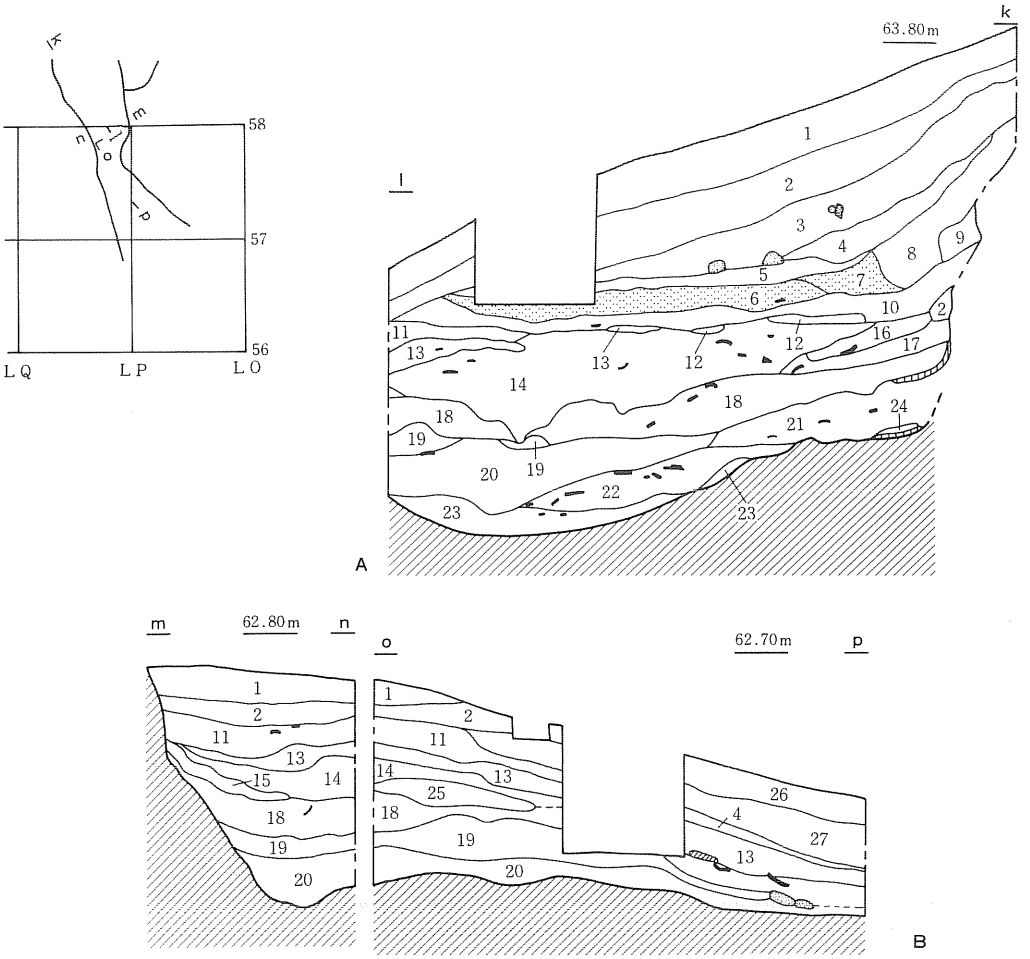


第67図　S J 07・08、S T 35横断面図



第68図　ＳＪ07･08、ＳＴ35横断面模式図

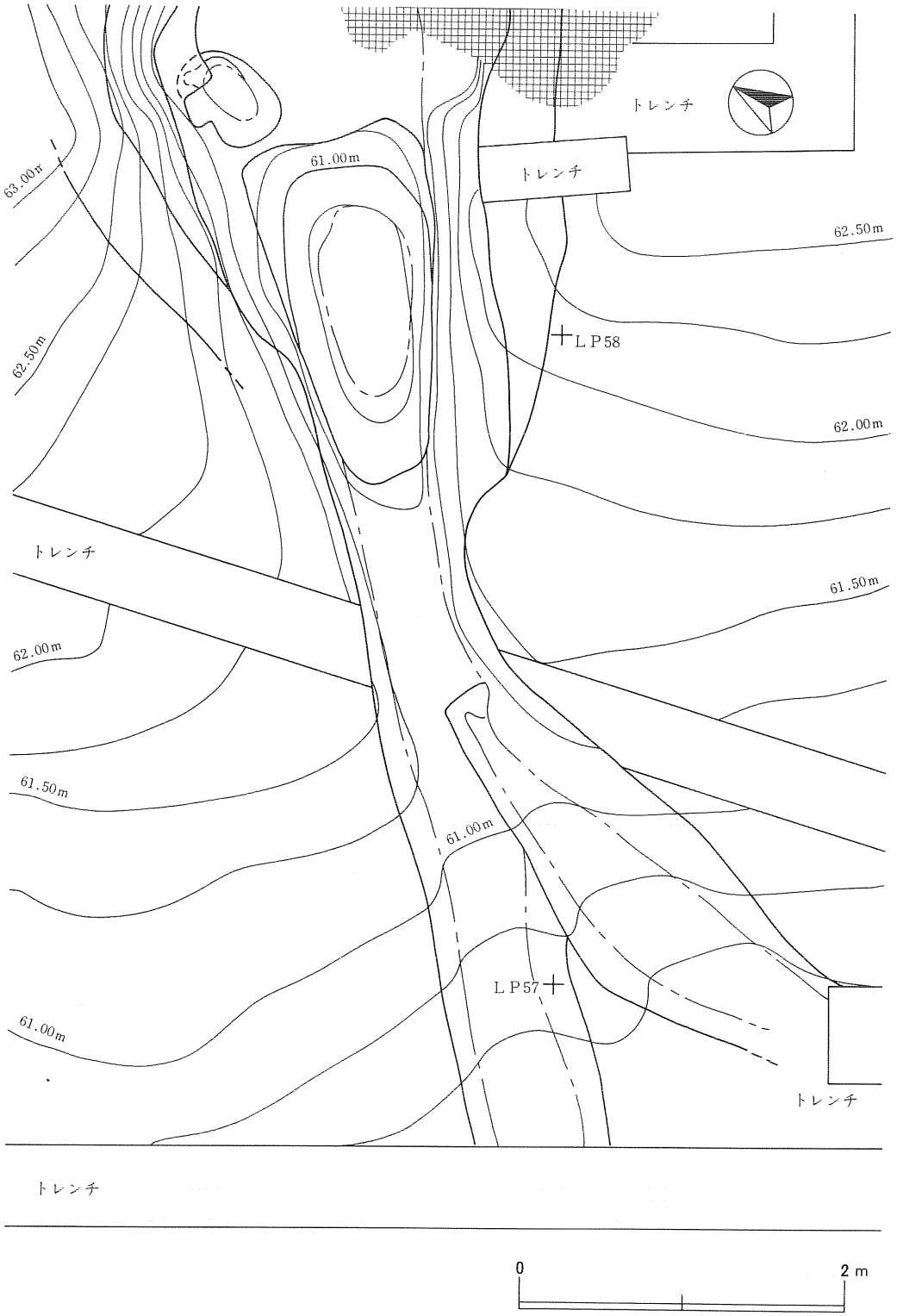
1	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	地山ブロック多量。小礫少量。粘性・締まり普。
2	黒褐色土（10ＹＲ3/2）	地山ブロック少量。小礫少量。粘性・締まり普。
3	黄褐色土（10ＹＲ5/8）	微小礫少量。地山土含む。粘性・締まり強。
4	褐　色　土（7.5ＹＲ4/6）	ＳＴ35。焼土層。窯壁粒・地山粒・炭化物多量。粘性普。締まり強。
5	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	ＳＴ35。焼土層。窯壁粒・地山粒多量。炭化物少量。粘性普。締まり弱。
6	明黄褐色土（10ＹＲ6/8）	地山土。炭化物粒顕著。粘性・締まり強。
7	暗褐色土（10ＹＲ3/4）	炭化物粒顕著。粘性・締まりやや有。
8	黄褐色土（10ＹＲ5/6）	地山土。炭化物粒少量。粘性・締まり強。
9	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	火山灰（2.5Ｙ8/4）を小ブロック状に含む炭化物少量。粘性・締まり普。
10	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	炭化物粒微量。粘性・締まり普。
11	暗褐色土（10ＹＲ3/4）	炭化物粒微量。粘性・締まり普。
12	暗褐色土（10ＹＲ3/4）	窯壁粒・炭化物粒顕著。粘性・締まり普。
13	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	ＳＪ07ａ底面直上。赤色粒・炭化物粒充填。
14	暗褐色土（10ＹＲ4/4）	地山粒・炭化物粒・焼土粒少量。粘性普。締まり強。
15	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	地山粒・炭化物粒・焼土粒少量。粘性普。締まり強。
16	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	地山粒・炭化物粒・焼土粒微量。粘性普。締まり強。
17	褐　色　土（10ＹＲ4/4）	16と同じであるが窯壁を含む。
18	黄褐色土（10ＹＲ5/6）	地山土の中に窯壁をブロック状に含む。
19	明黄褐色土（10ＹＲ6/8）	炭化物粒微量。粘性・締まり普。
20	暗赤褐色土（5ＹＲ3/3）	焼土層、焼土・炭化物顕著。粘性・締まり普。
21	暗赤褐色土（5ＹＲ3/3）	ＳＪ08底面直上。炭化物層。焼土・地山土少量。
22	暗赤褐色土（5ＹＲ5/8）	焼土ブロック状。地山粒・炭化物粒微量。
23	暗赤褐色土（5ＹＲ5/8）	22と同質で軟い。
24	赤褐色土（5ＹＲ4/8）	白色地山粒顕著。粘性・締まり強。上面カリカリに堅い。
25	明黄褐色土（10ＹＲ6/8）	白色地山粒含む。炭化物粒微量。粘性・締まり強。
26	褐　色　土（10ＹＲ4/6）	地山粒・炭化物粒・焼土粒充填。粘性・締まり普。
27	明黄褐色土（10ＹＲ6/8）	窯壁粒ブロック状に含む。粘性・締まり強。
28	にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）	窯壁顕著。炭化物粒・焼土粒多量。粘性普。締まり弱。
29	にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）	窯壁顕著。炭化物粒・焼土粒多量。粘性普。締まり弱。
30	炭化物層	地山ブロック・赤色粒少量。粘性・締まり普。
31	炭化物層	暗赤褐色土少量。粘性普。締まり弱。
32	ＳＪ07ｂ床	炭化物粒・窯壁粒・地山粒充填。粘性普。締まり強。
33	暗赤褐色土（5ＹＲ3/3）	炭化物粒顕著。粘性普。締まり弱。
34	暗褐色土（7.5ＹＲ5/6）	炭化物・地山ブロック顕著。粘性・締まり普。
35	明褐色土（7.5ＹＲ5/6）	ＳＪ07床。窯壁粒・地山粒充填。炭化物微量。
36	明黄褐色土（2.5Ｙ　6/2）	火熱で変色。
37	赤褐色土（2.5ＹＲ4/8）	粘性・締まり普。表面はカリカリに堅い。
38	白色地山土（7.5Ｙ　8/3）	淡黄色の中でまだらで筋状に赤色化。



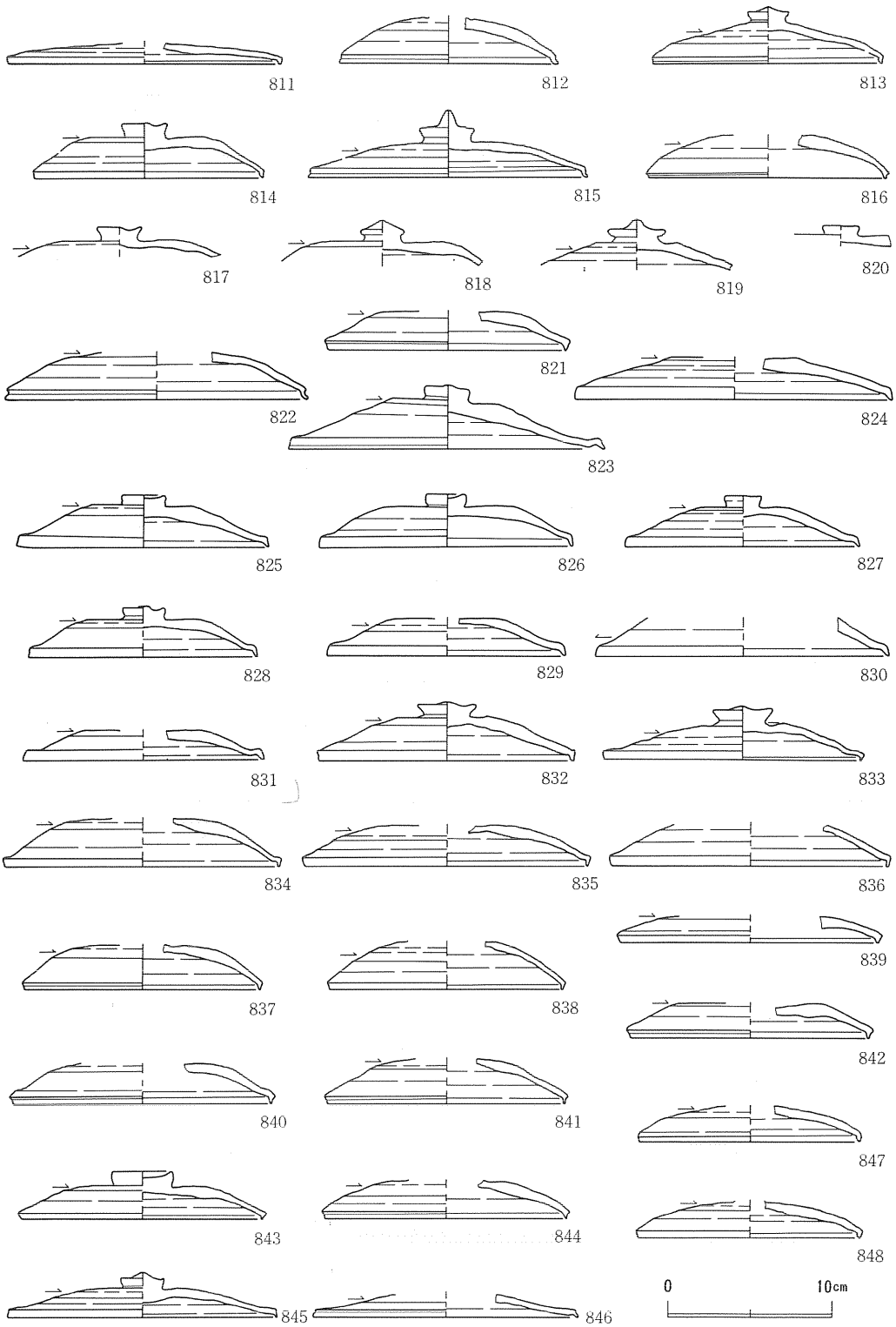
1　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）小礫少量。地山粒顕著。粘性・締まり普。
2　黒褐色土（10ＹＲ2/2）　小礫少量。地山粒顕著。粘性・締まり普。
3　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　焼土層。窯壁多量。小赤色・黄色土顕著。粘性・締まり普。
4　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　淡黄色・黄橙色・小地山ブロック少量。粘性普。締まりややあり。
5　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）火山灰含む。地山粒顕著。炭化物粒微量。粘性・締まり普。
6　火山灰　上から黄褐色土（10ＹＲ5/6）、浅黄色土（2.5Ｙ7/4）、暗灰黄色土（2.5Ｙ5/2）、浅黄色土（2.5Ｙ7/4）。
7　褐色土（10ＹＲ4/4）　火山灰含む。炭化物粒少量。粘性・締まり普。
8　褐色土（10ＹＲ4/4）　炭化物粒・焼土粒少量。粘性・締まりややあり。
9　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　地山土。粘性・締まり強。
10　暗褐色土（10ＹＲ3/4）　炭化物層ａ・小焼土ブロック・炭化物ブロック充填。粘性・締まりややあり。
11　暗褐色土（10ＹＲ3/4）　10層と同類だが炭化物やや少ない。
12　明黄褐色土（10ＹＲ6/6）　純粋地山土。粘性・締まり強。
13　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　焼土粒・炭化物粒・窯壁粒少量。
14　褐色土（10ＹＲ4/4）　小地山ブロック顕著。焼土粒・炭化物粒充填。粘性・締まり強。
15　明黄褐色土（10ＹＲ6/6）　焼土粒・炭化物粒少量。粘性ややあり。締まり普。
16　褐色土（10ＹＲ4/4）　小焼土ブロック充填。炭化物粒含む。粘性・締まり強。
17　黒褐色土（10ＹＲ2/2）　炭化物層。粘性・締まり弱。
18　褐色土（10ＹＲ4/4）　焼土粒・炭化物粒・地山粒少量。窯壁多量。粘性・締まり強。
19　黄褐色土（10ＹＲ5/8）　純粋地山土。粘性・締まり強。
20　褐色土（10ＹＲ4/4）　小炭化物多量。小焼土・地山土少量。粘性・締まり強。
21　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　20と同類。窯壁含む。
22　明褐色土（7.5Ｙ Ｒ5/6）　焼土・地山・窯壁粒顕著。砂質。粘性・締まり普。
23　明褐色土（7.5Ｙ Ｒ5/6）　炭化物充填。地山含む。粘性・締まり普。
24　黒褐色土（10ＹＲ2/2）　窯壁・炭化物充填。
25　赤色地山ブロック
26　褐色土（10ＹＲ4/4）　小地山ブロック少量。炭化物粒少量。粘性普。締まり弱。
27　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　炭化物粒・地山粒顕著。小地山ブロック少量。粘性普。締まり強。

0　2 m

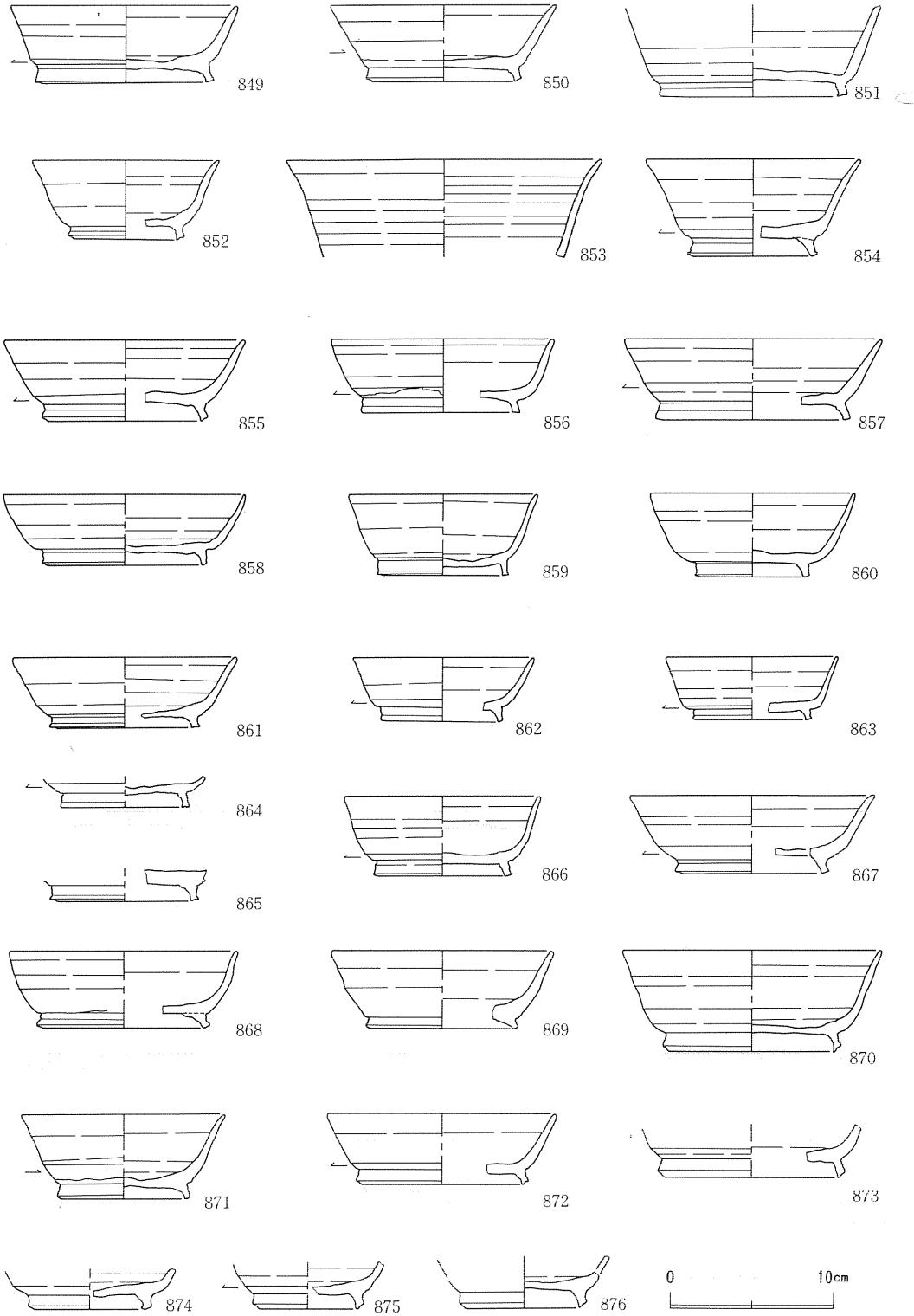
第69図　ＳＪ07・08、ＳＴ35縦・横断面図



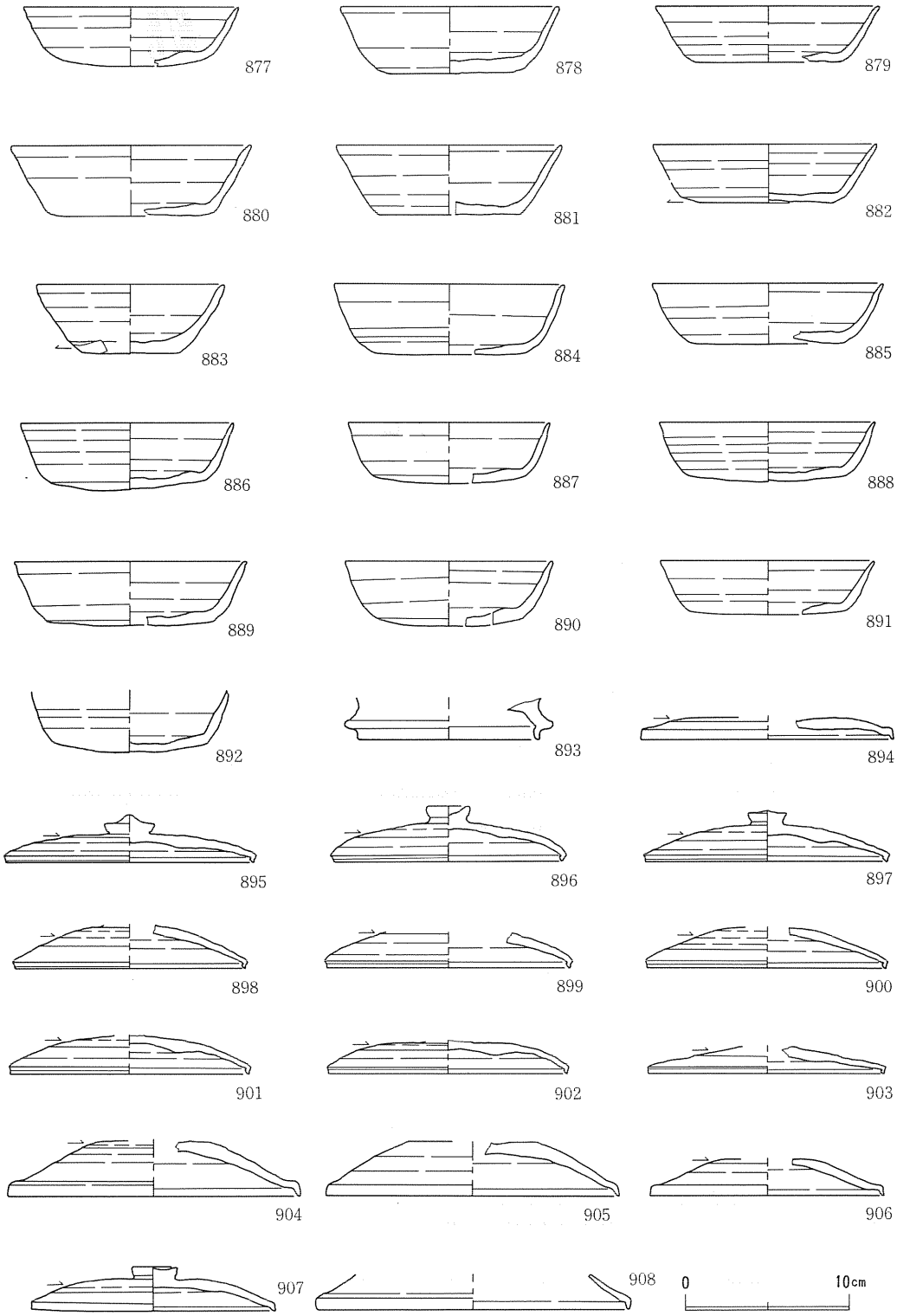
第70図　ＳＪ07･08等高線図



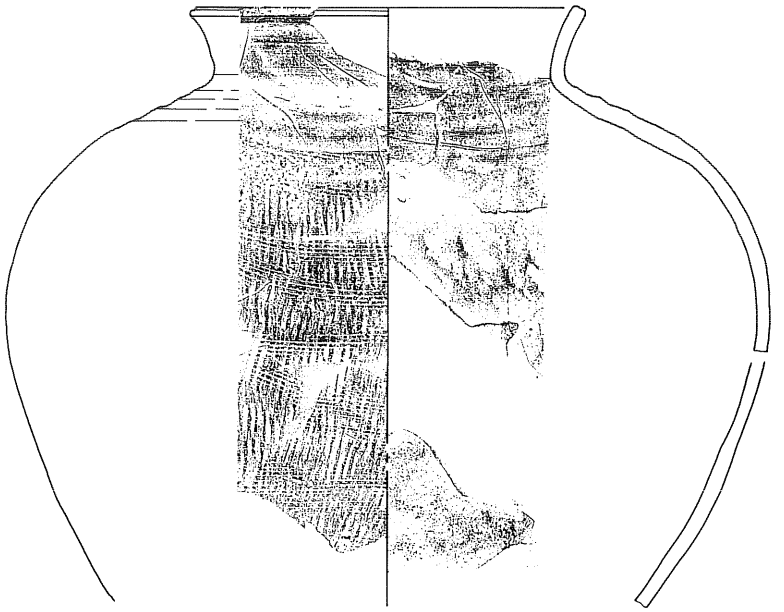
第71図　遺構内出土土器(38)　ＳＪ07･08、ＳＴ35



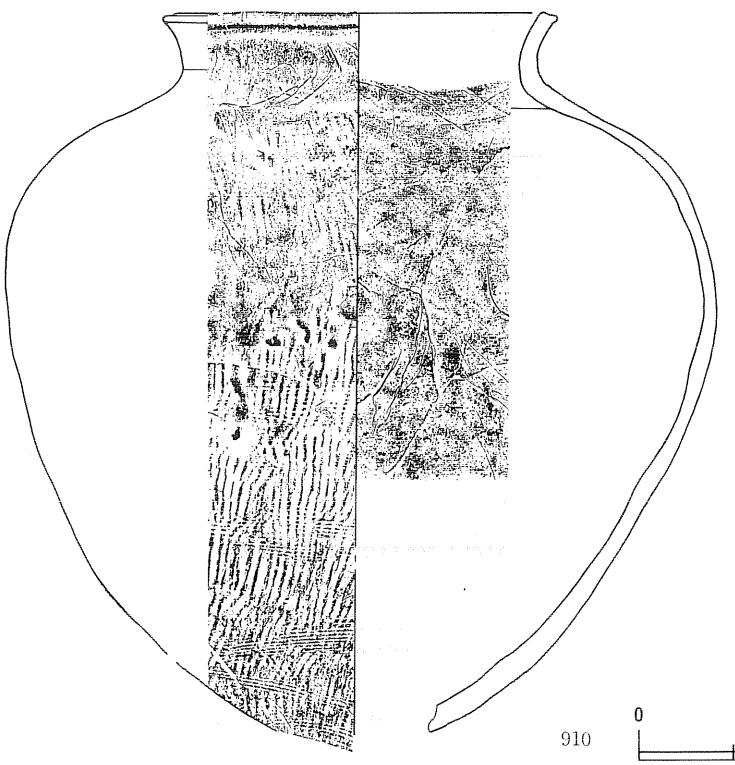
第72図　遺構内出土土器(39)　ＳＪ07･08、ＳＴ35



第73図　遺構内出土土器(40)　ＳＪ07･08、ＳＴ35･18



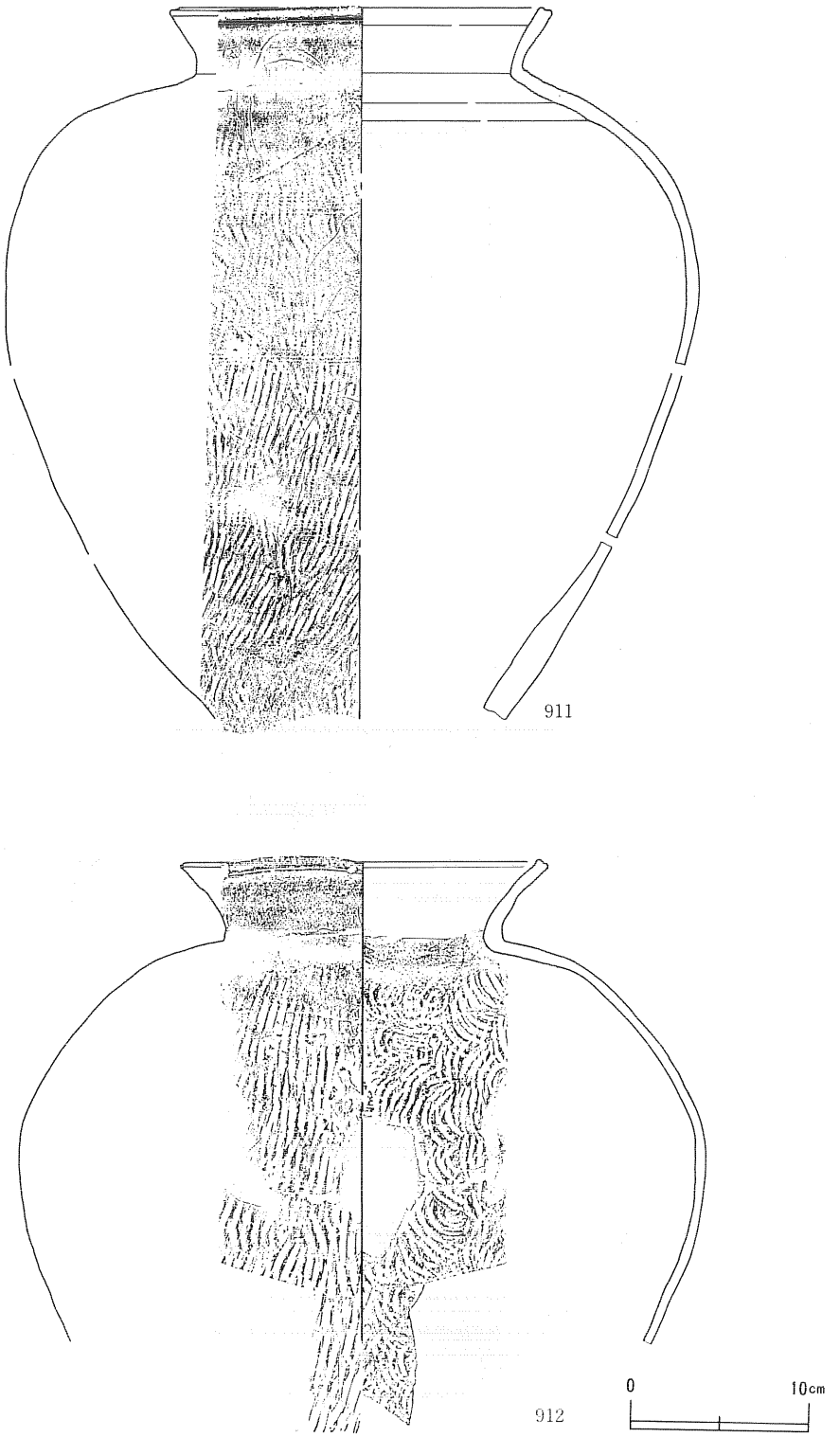
909



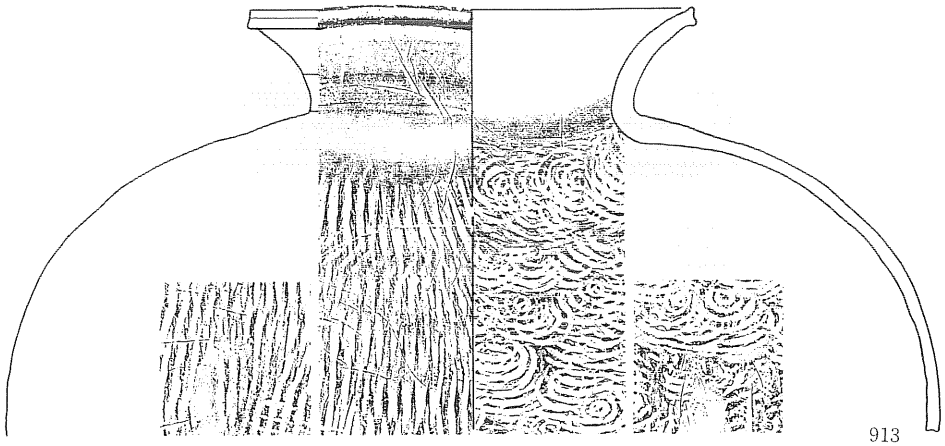
910

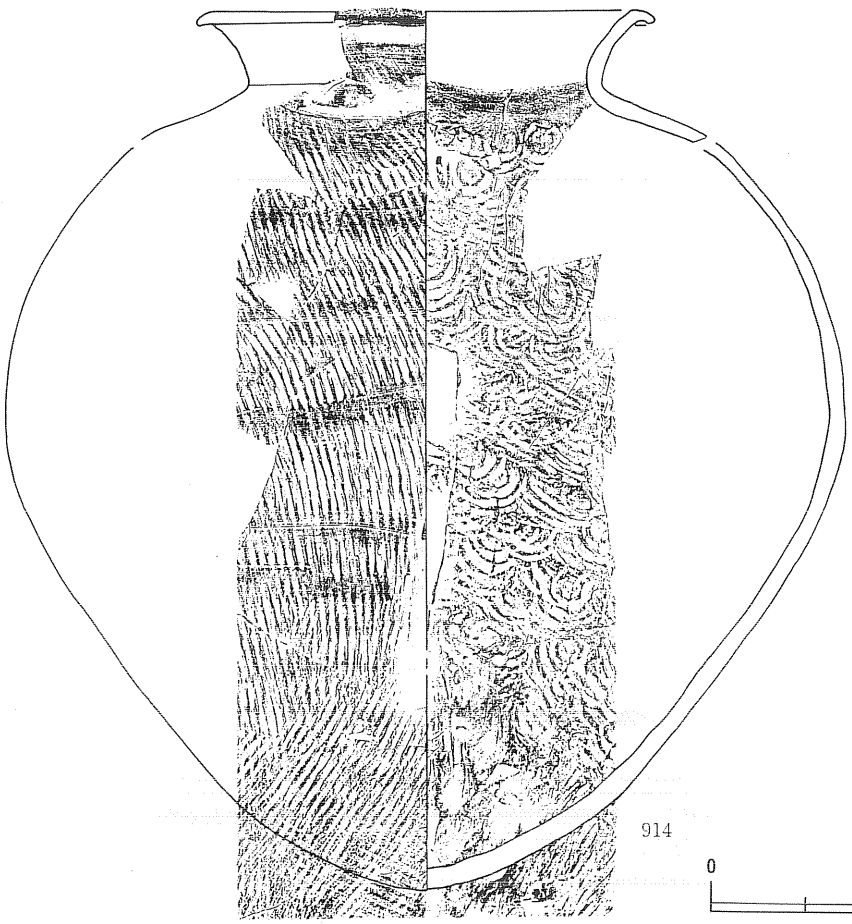
0　10cm

第74図　遺構内出土土器(41)　ＳＪ07･08

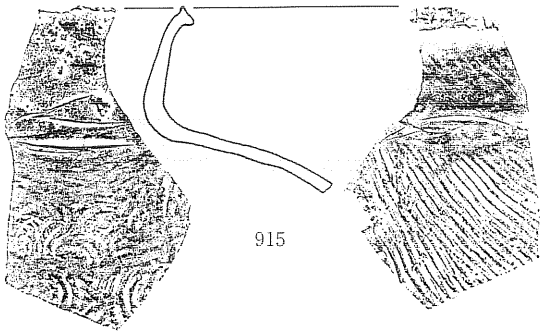


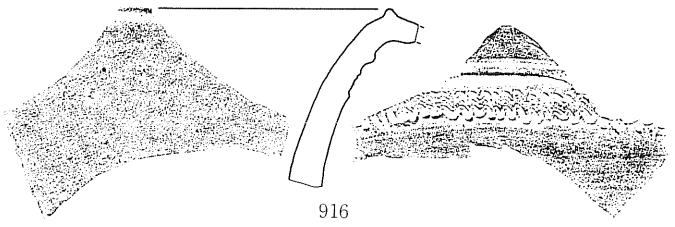
第75図　遺構内出土土器(42)　S J 07・08

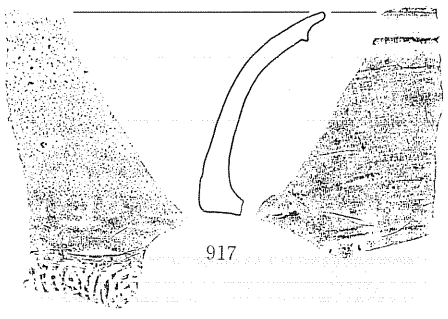


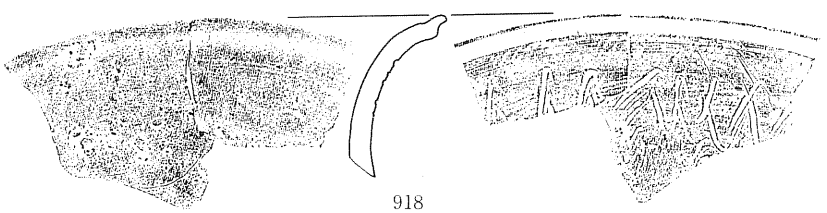


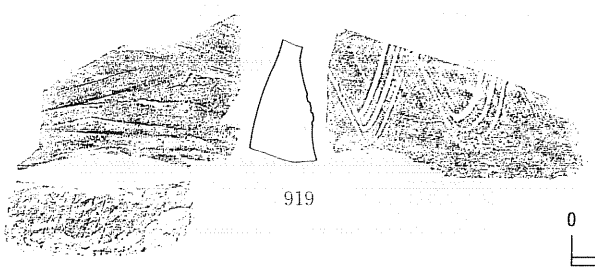
第76図　遺構内出土土器(43)　ＳＪ07･08



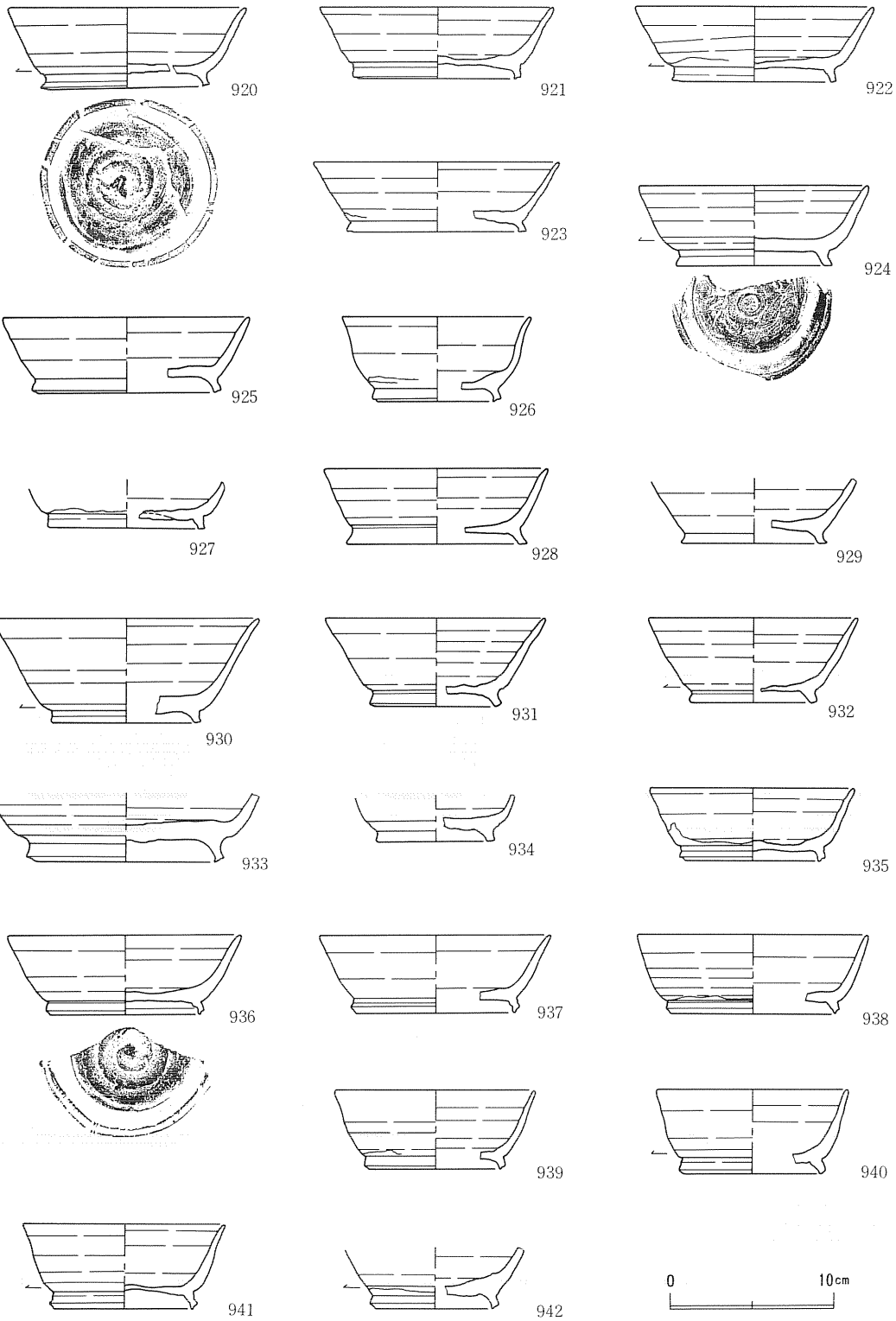




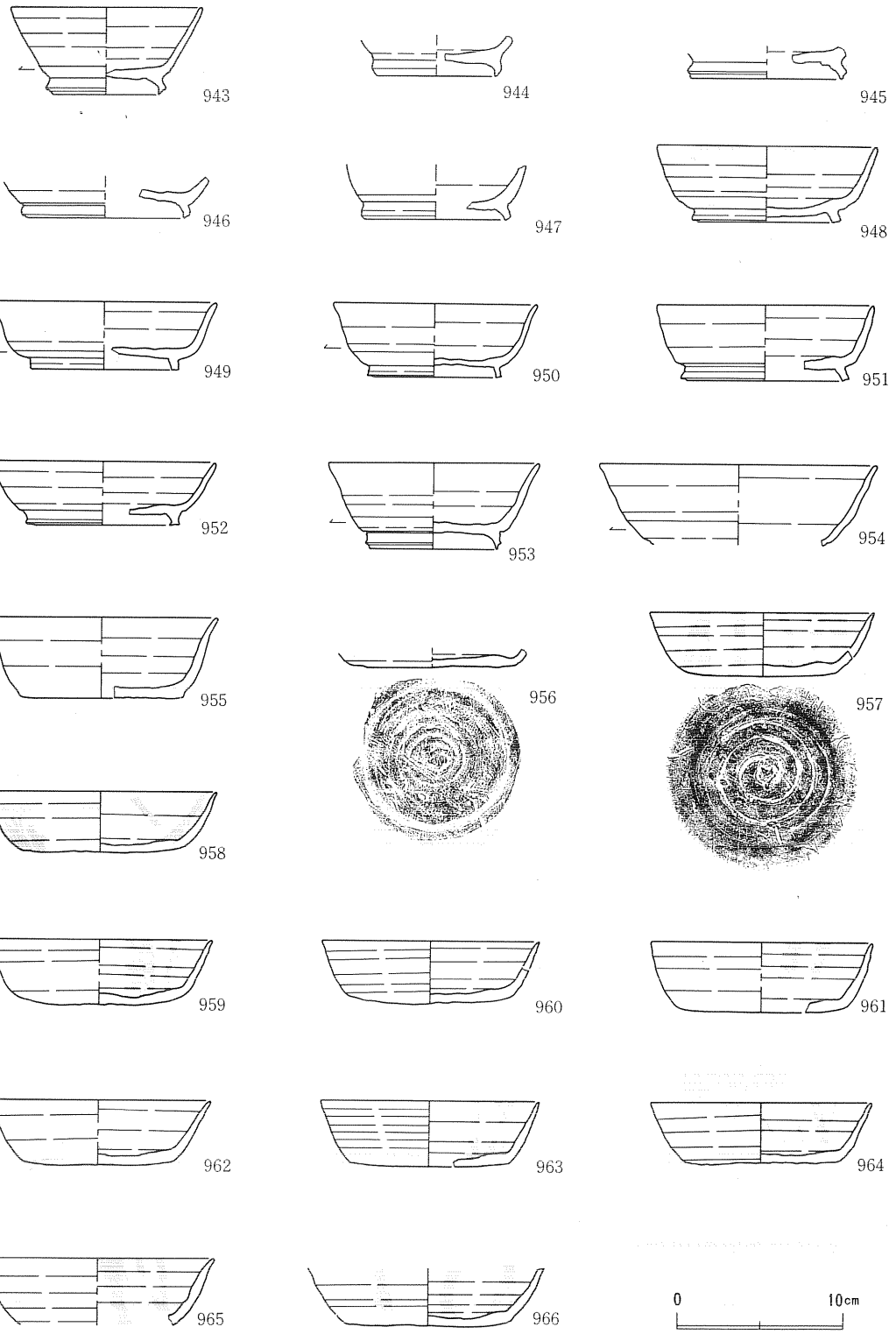




第77図　遺構内出土土器(44)　ＳＪ07･08



第78図　遺構内出土土器(45)　ＳＴ18



第79図　遺構内出土土器(46)　ＳＴ18

がんでいるのを実測してある。904～907には天井が平坦で端部が水平気味から屈折して外傾するものと、水平なもの(907)がある。908は淡黄色を呈している。

高台付坏(920～954)(第78・79図、第52～54表、図版49-6～12)

高台は端部がやや高く断面四角形で外傾するもの(922・928)、同様に丸味をもって外傾するもの(931・932)、三角形状で外傾するもの(936・945)、同様に直立するもの(944・953)、幅が細く外傾するもの(950)、太く外傾するもの(948)などがある。920の底部には明瞭な渦巻がある。

坏(955～966)(第79図、第54・55表、図版54-2・3、81-2・3)

956は青緑灰を呈する。957～966は底部が丸くすべてに火襷をもつ淡黄色系の土器である。口縁端部は細く外反し、底部の内面端には工具痕と思われる同心円状の筋をもつ。底部外面には明瞭な渦巻をもつものが多い。

ＳＴ36(第80図、図版20)

ＳＴ36はＬＭ・ＬＮ56区を中心に、検出された灰原である。この付近における土層は下位から、自然堆積土である茶褐色土→ＳＴ36→遺物を含まない地山排土→赤色地山排土(土器を含む地山排土に赤色の窯壁や淡黄色系の土器が覆うような土層で、ＳＴ18にＳＴ35と同じような土が覆った状況と思われる)→黒色土の順に堆積しているものの、その広がりは一様ではない。このため、ＳＴ36を外れたＬＭ56付近の茶褐色土上面からは、散在するものの同一層の上面として捉えられる一群の土器がある(967・969・970～977・983～989)。しかし、これらはすべてが同一層で覆われていないので一括出土土器としては扱えない。赤色地山土中からは多量の土器が出土し、さらに上層の黒色土中からも多量に出土している。茶褐色土上面を覆う地山排土は、大甕出土地点一帯から斜面上方に厚く堆積し最大で約80cmの厚さがある。この地山排土の上には、ＳＴ13～15などの一連の灰原が形成されている。

出土遺物

ＳＴ36からは坏蓋・高台付坏・坏・高台付埦・壺・横瓶・甕(967～989)が出土している。

坏蓋(967)(第81図、第55表、図版44-16)

天井が平坦で、端部は外傾し外に弯曲する。

高台付坏(968・969)(第81図、第55表)

口縁が内弯するもの(968)と外弯するもの(969)がある。高台は断面形が太く逆三角形である。

坏(972・978～981)(第81図、第55表、図版54-4～6、81-1)

すべて器高の深いもので、978～981の底部は厚い。

高台付埦(970・973)(第81図、第55表)

970の口縁は内弯気味で底部端が角張るのに対して、973は外反し底部では丸い。973には体部中央に稜がつく。

第80図　ＳＴ18･36遺物出土状況図

盤(976)(第81図、第55表、図版56-10)

器高と脚の高さがほぼ同じで、脚部は外傾する。

壺(971・974・975)(第81図、第55表、図版56-9)

971は長頸壺、975は短頸壺と思われる。974はミニチュアの短頸壺。

平瓶(977)(第81図、第55表、図版57-1)

天井が正円を描き、その端に朝顔形に開いた口縁が付く。

甕(982～989)(第81～85図、第55・56表、図版68-4、63-3～6、64-1～3)

高さが60cm以上の大型(982・986・988・989)と40cm前後の中型(983・985・987)とがある。前者には稜端部に大きな稜のつくもの(982・986)と口唇が垂直になるもの(989)とがある。後者には口唇が垂直なもの(983)・外傾するもの(984・987)、丸いもの(985)がある。

ＳＴ35(第67～69・85、図版21)

ＳＴ35は、ＬＰ58区にあるＳＪ07・08窯跡の上に形成された焼土層とその上の黒色を含んだ灰原である。この灰原は、ＳＪ07ａ窯跡の上に存在する灰白色の火山灰とは間層を隔ててさらに上位に位置しており、窯壁や炭化物を含む焼土層が摺鉢状に堆積した狭い範囲である。この焼土層からは淡黄色の坏蓋・高台付坏・坏類を中心にした土器がまとまって出土している(834・836～846・855～857・860～867・869～873・884～888・891・892)。これらは焼成状態や形態的に共通する特徴があり、ＳＴ35焼土層土器群(**一括土器群Ｇ**)として捉えることができる。同様の土器は焼土層の上の黒色土からも出土している。

出土遺物

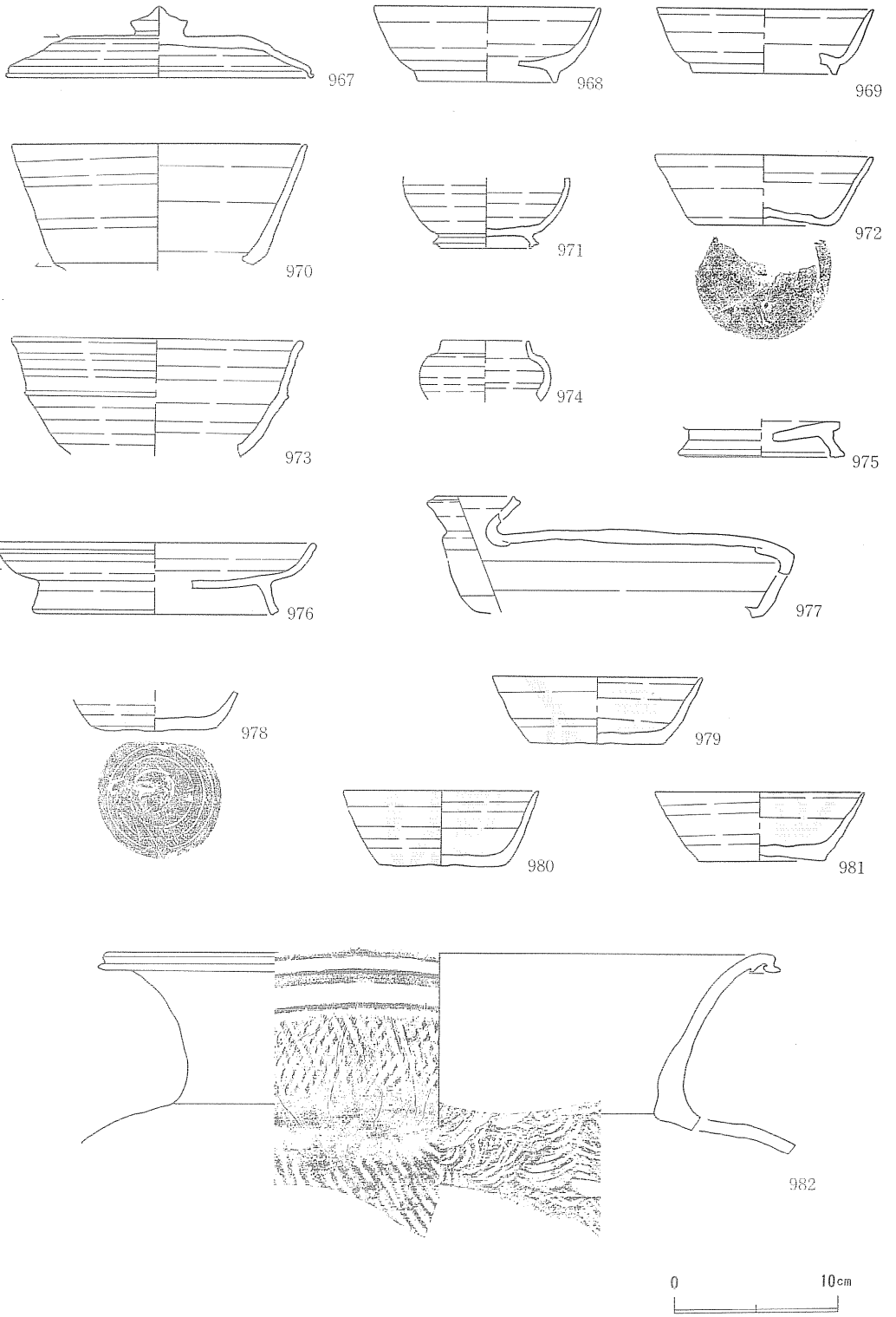
ＳＴ35からは坏蓋・高台付坏・坏(834～848、855～876、883～892)が出土している。このうち、834・836～846・855～857・860～867・869～873・883～888・891・892)は、一括土器群Ｇとして捉えることができる。

坏蓋(834～848)(第71図、第47・48表、図版44-9～11)

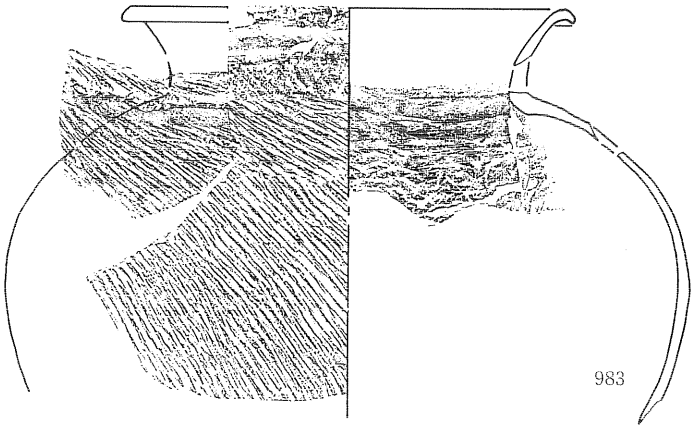
834～841は天井が高く丸いもの(834～838・840・841)、低く丸いもの(452)、平坦なもの(842)があり、端部は鋭く内傾する。843と844は端部が短く付くものであるが、天井の平坦なもの(843)と丸いもの(844)がある。845と846は天井が丸く低いものであるが、端部が短く外傾する。834～846は淡黄色を呈する土器である。847と848は天井が丸く、端が環状に黒くなり他は灰色を呈するものでＳＴ17に関する土器である。

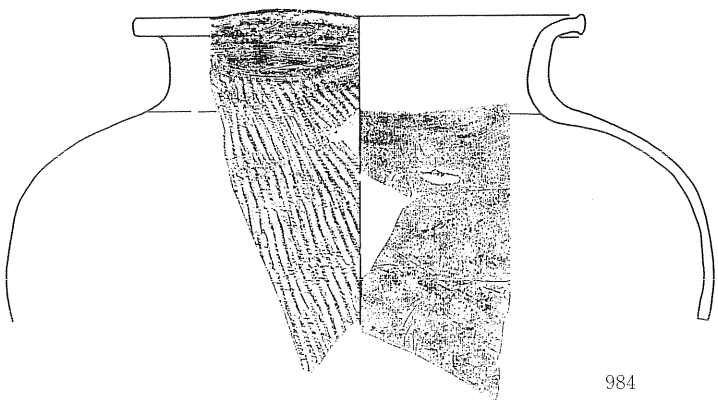
高台付坏(855～862)(第72図、第48・49表、図版49-2～5)

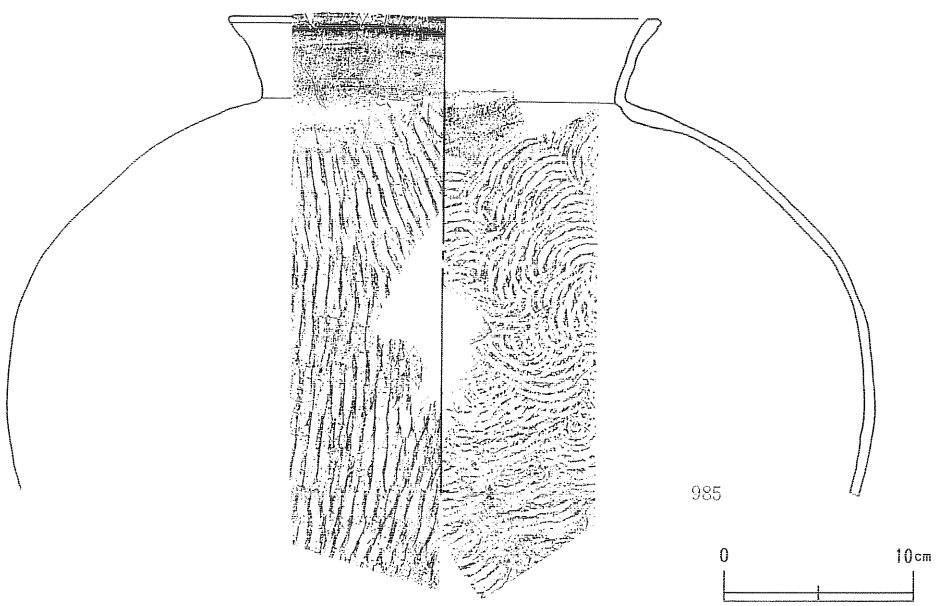
855～862は淡黄色～灰白色系の土器である。口縁が内弯するもの(858・860)、外反するもの(866・870)などがある。高台は断面形が四角形で直立するもの(859)、同じく外傾するもの(855)などがある。これらには体部下端に回転篦削りを施すものが多い(855～857、862)。



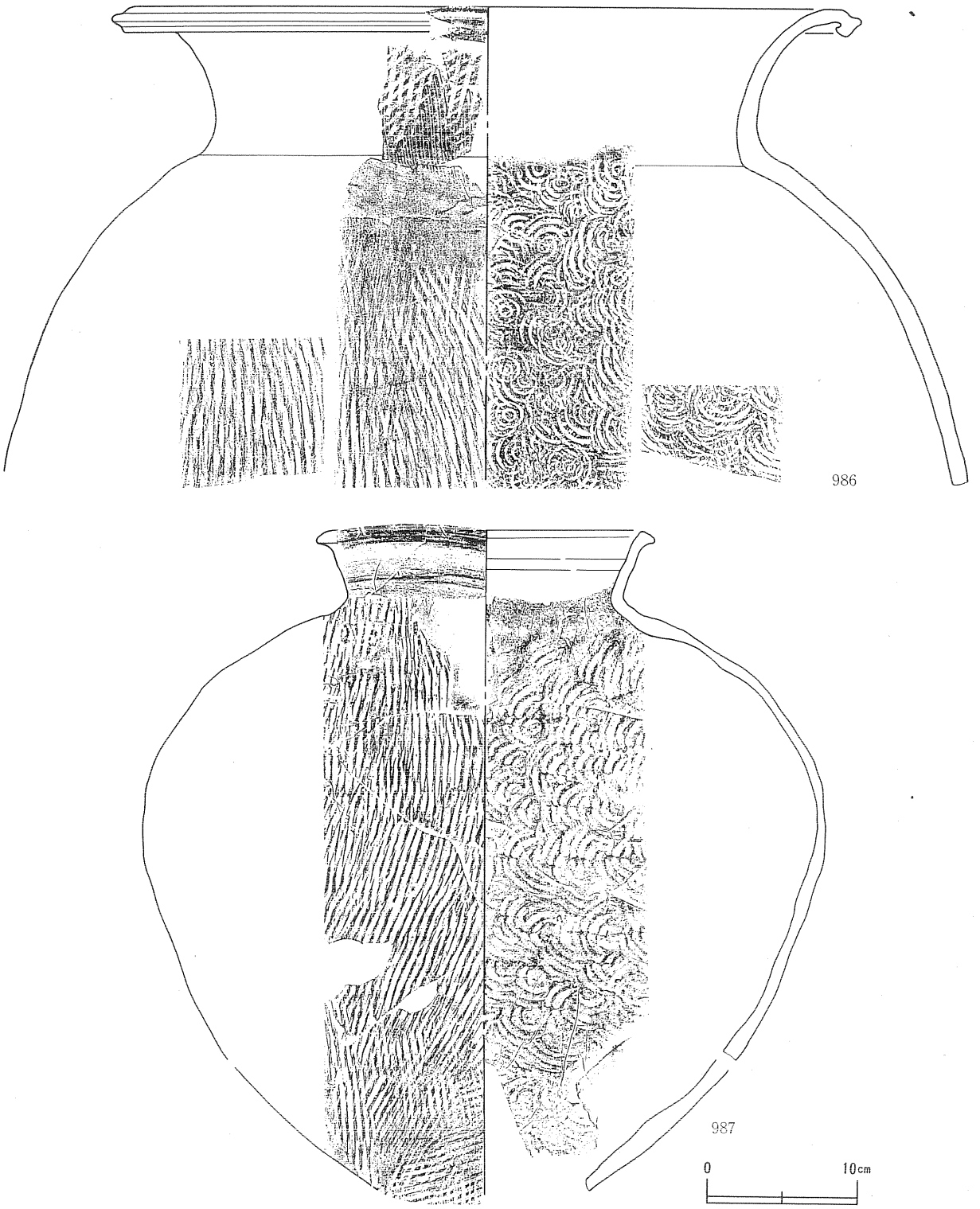
第81図　遺構内出土土器(47)　ＳＴ36



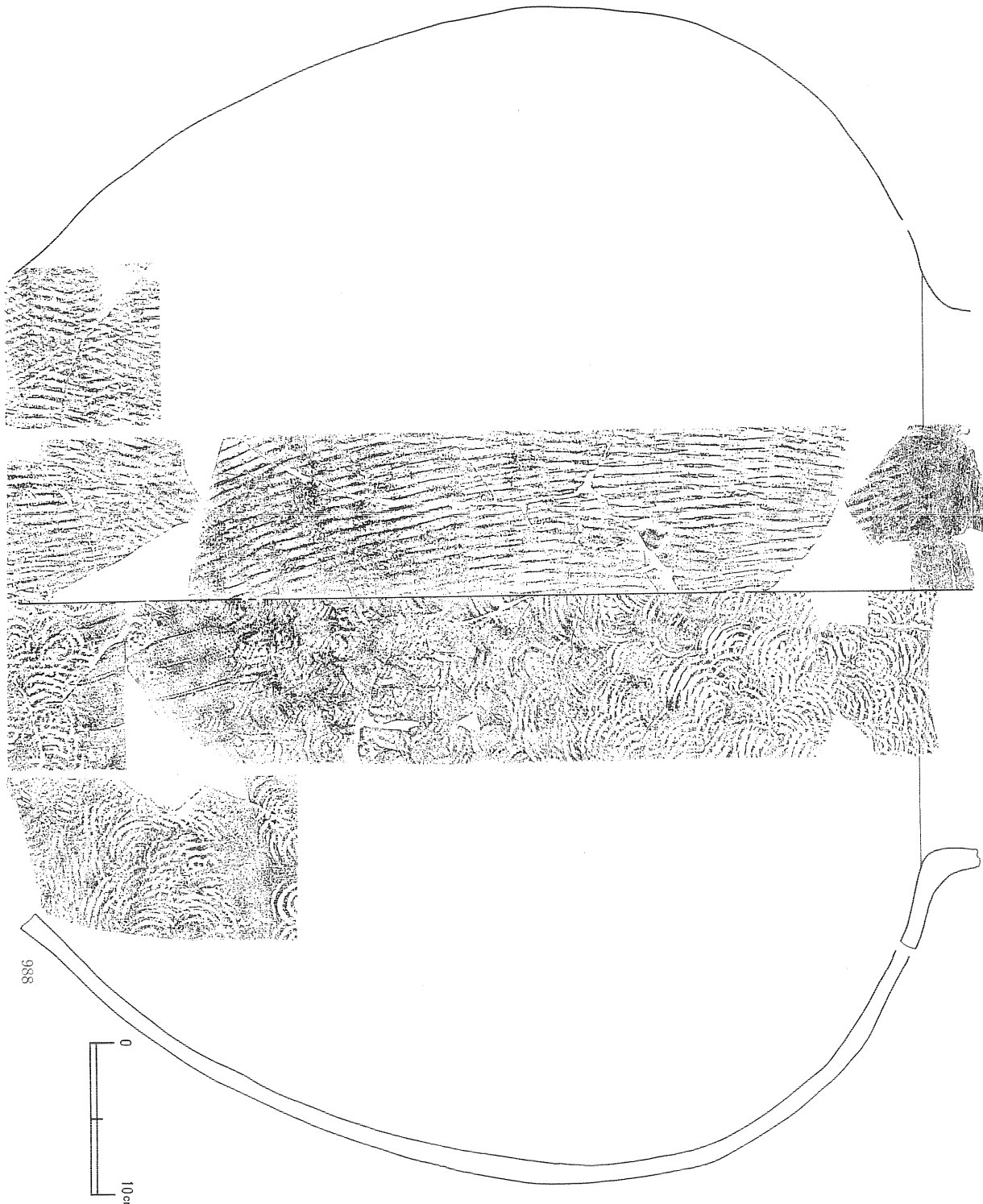




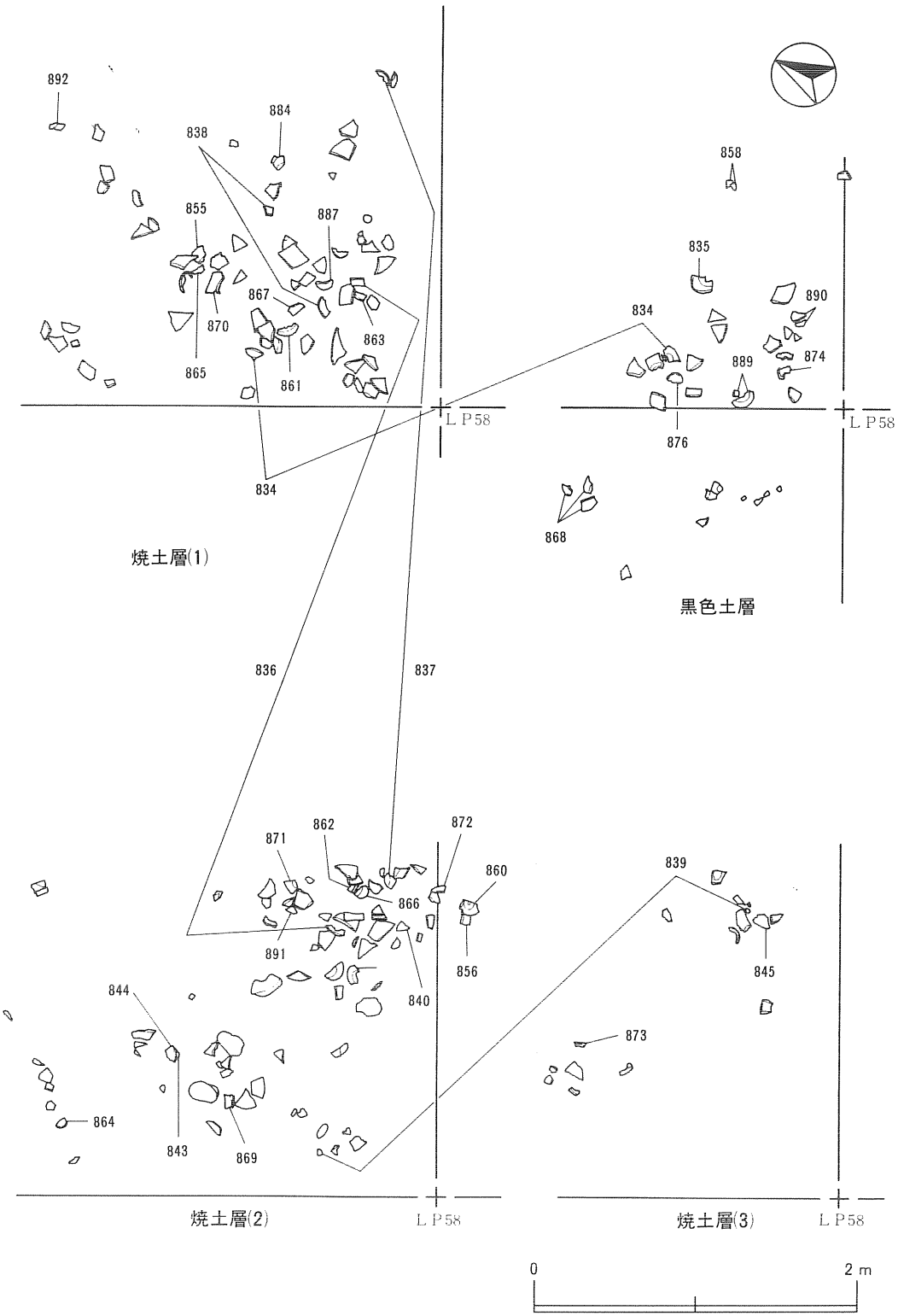
第82図　遺構内出土土器(48)　ＳＴ36



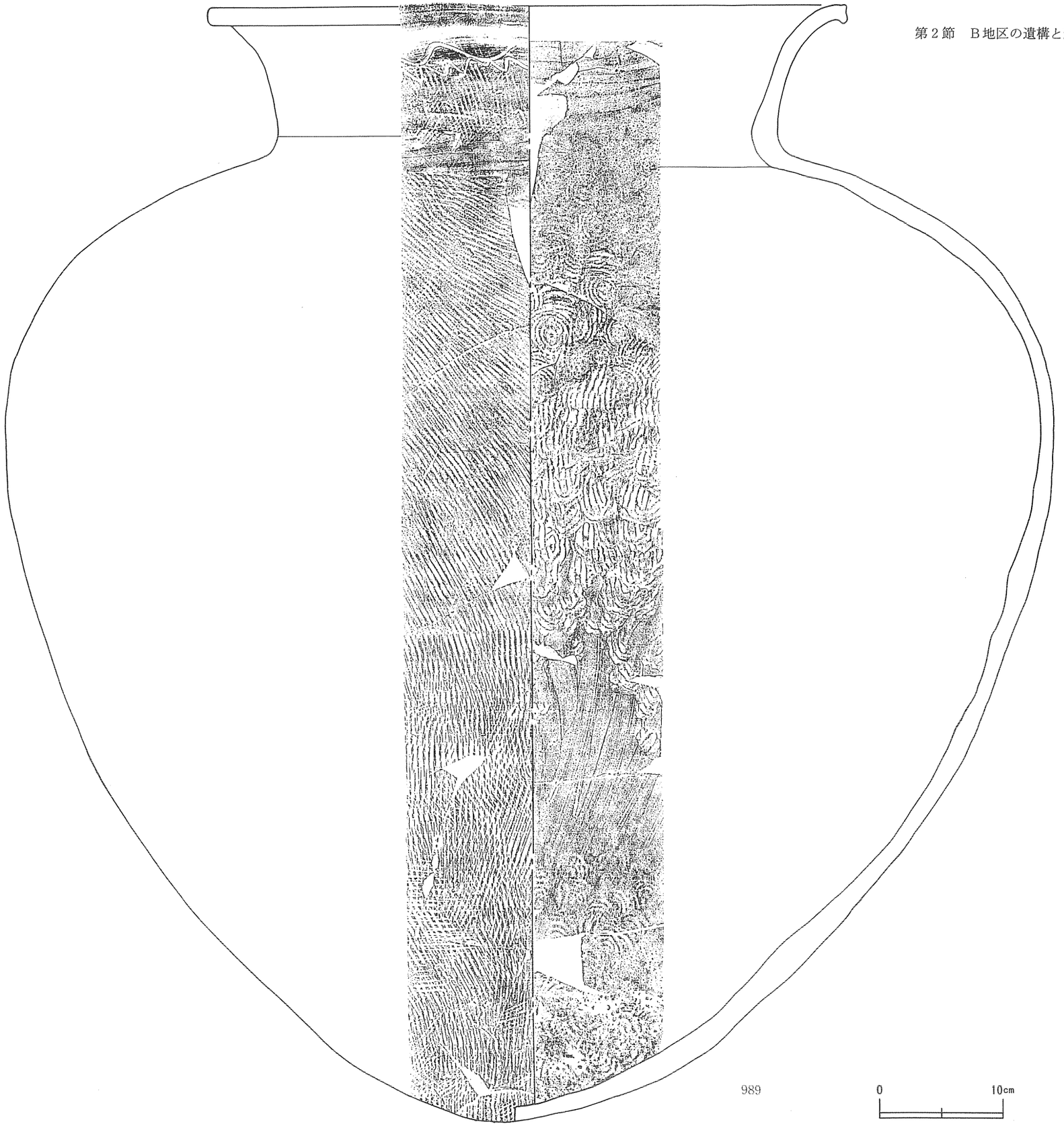
第83図　遺構内出土土器(49)　ＳＴ36



第84図　遺構内出土土器(50)　ＳＴ36



第85図　ＳＴ35遺物出土状況図



第86図　遺構内出土土器(51)　ＳＴ36

坏(884～892)(第73図、第50表)

884～892は底部が丸く淡黄色～灰白色系の土器である。このうち884～886を除いたものは、口縁部が尖り底部内面端に工具痕と思われる同心円状の筋をもつ。また火襷の認められるもの(887・889)がある。

ＳＴ13(第87図、図版22)

ＳＴ13は、ＬＮ58区北側にある窯体掘削土の堆積した斜面が、幅1.45m、深さ約40cmの溝状に掘り込まれた部分に形成された灰原である。検出された溝状部分(主軸方向はＮ－50°－Ｅ)の長さは約1.5mであるが、これは調査区外である斜面上方にも延びている。従って、その形態および位置などから、この溝状部分はＳＪ05ａ～ｅやＳＪ07などの焚口下方に見られた溝状施設と同様のものである可能性があり、その場合には、斜面上方に窯跡が存在しているものと思われる。ＳＴ13の埋土中からは、炭化物とともに細かい破片が集中して出土した。この中には、焼成状態や形態に共通するものが多くこれらをＳＴ13覆土土器群(一括土器群Ｈ)として捉えることができる(990～994・996～998・1000～1003・1007・1010～1014)。

出土遺物

ＳＴ13からは、坏蓋・高台付坏・壺・甕(990～1018)が出土している。このうち、990～994・996～998・1000～1003・1007・1010～1014は一括土器群Ｈとして捉えることができる。

坏蓋(990～993)(第88図、第56表、図版45-1)

天井は平坦で稜に丸味をもち、端部の屈折部外側は丸い。また先端は短く折れ三角形状を呈している。灰白色系の色調をもつ。

高台付坏(994～998)(第88図、第56表、図版57-2)

坏部の深い高台が四角形状に外傾し、先端は短く折れた三角形状を呈している。灰白系の色調をもつ。

坏(999～1005)(第88図、第56・57表、図版54-7・8、80-3)

底部が丸くやや浅い形態である。1000～1003は灰白系の色調をもつ。1004は底面に不定方向の手持篦削りが施されており、本遺跡ではめずらしい例である。

壺(1006・1009)(第88図、第57表)

1006は短頸壺と思われ、1009は長頸壺である。

長頸瓶(1008)(第88図、第57表、図版66-4)

体部が丸く卵形を呈している点や、成形時の三段構成で作られる頸部幅が狭いことから長頸瓶と推定される。

甕(1007・1010～1018)(第88・89図、第57表、図版68-5～7)

小型の甕(1007)、中型の甕(1010～1014)、大型の甕(1015～1018)に分けられる。1007は口縁

断面が逆の字を呈し灰白系の色調をもつ。1010～1014は口唇部に窪みをもち、1015～1018は口唇の下位に稜の付く形態である。

ＳＴ14(第87図、図版23)

ＳＴ14はＬM58区北側にあり、ＳＴ13とＳＴ15の中間に位置している。この灰原もＳＴ13と同じように再堆積した地山排土を掘り込み、底面が傾斜している溝状を呈している。検出できた規模は、幅長さとも約１ｍ深さは約20cmである。長軸方向はＮ－48°－Ｅで、ＳＴ13と類似している。ＳＴ14の上には、厚さ20cmの黄褐色地山土が北に厚く南に薄い堆積状態を示していた。ＳＴ14からはいくつかの土器がまとまって出土しているが、そこには焼成状態が白色から淡黄色で類似している土器がある(1019・1020・1022～1027)。

出土遺物

ＳＴ14からは坏蓋・高台付坏・坏・壺・横瓶・不明器種(1019～1030・1038～1040)が出土している。

坏蓋(1019～1022)(第90図、第58表、図版45-2～4、78-1)

天井の丸いもの(1019～1021)と平坦なもの(1022)がある。前者では端部が内側に鋭く屈折するもの(1019・1020)と屈曲し外傾するものがある。

高台付坏(1023～1026)(第90図、第58表)

接地部がやや窪む特徴があり、外傾度の強いもの(1023)と弱いもの(1024)がある。

坏(1027～1029)(第90図、第58表)

底部は丸く、底面に渦巻を明瞭に残すもの(1028)もある。

壺(1030)(第90図、第58表)

壺の底部と思われる。外面底部には、砂が顕著に認められる。

横瓶(1038)(第90図、第58表)

口唇部が窪む特徴をもつ。

不明器種(1039)(第90図、第59表)

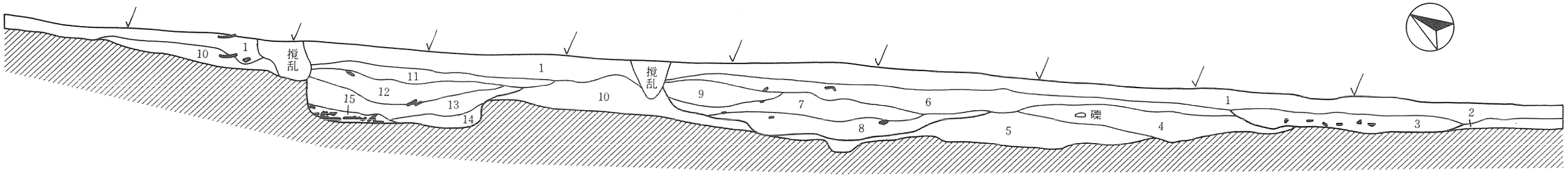
図上の下面は粘土が重なったり調整の傷が付いたりしているので、その平坦面を下にした形態の脚部と思われる。

ＳＴ15(第87図、図版23－2)

ＳＴ15は、ＬＬ58区の標高62.5ｍの僅かな窪み部に形成された灰原である。一部黄褐色の再堆積した地山排土を掘り込んでいるものの、多くは自然堆積層上にある。このため明確な灰原とは言い難いが、遺物が傾斜に沿って小さな炭化物や地山土粒子とともに出土したことから灰原として扱った。

出土遺物

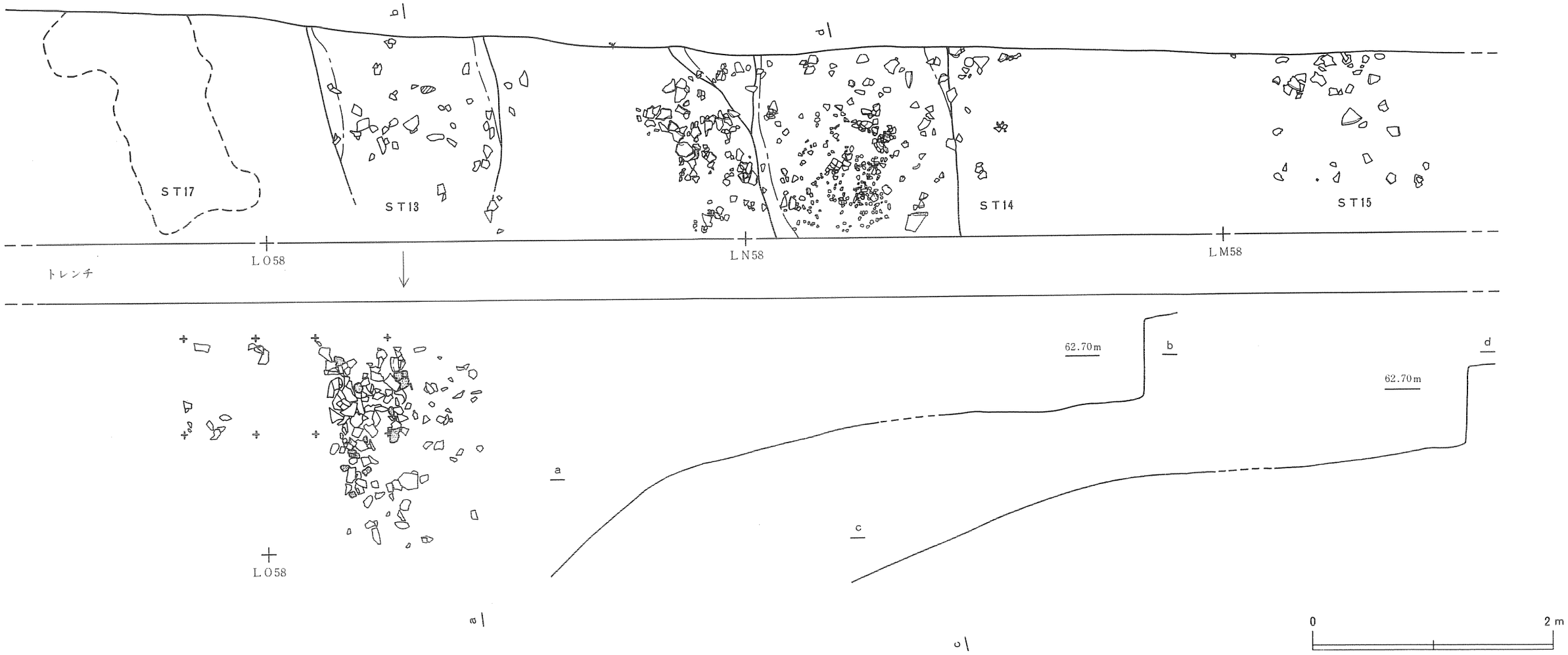
ＳＴ15からは坏蓋・坏・蓋・甕(1031～1037・1041)が出土している。



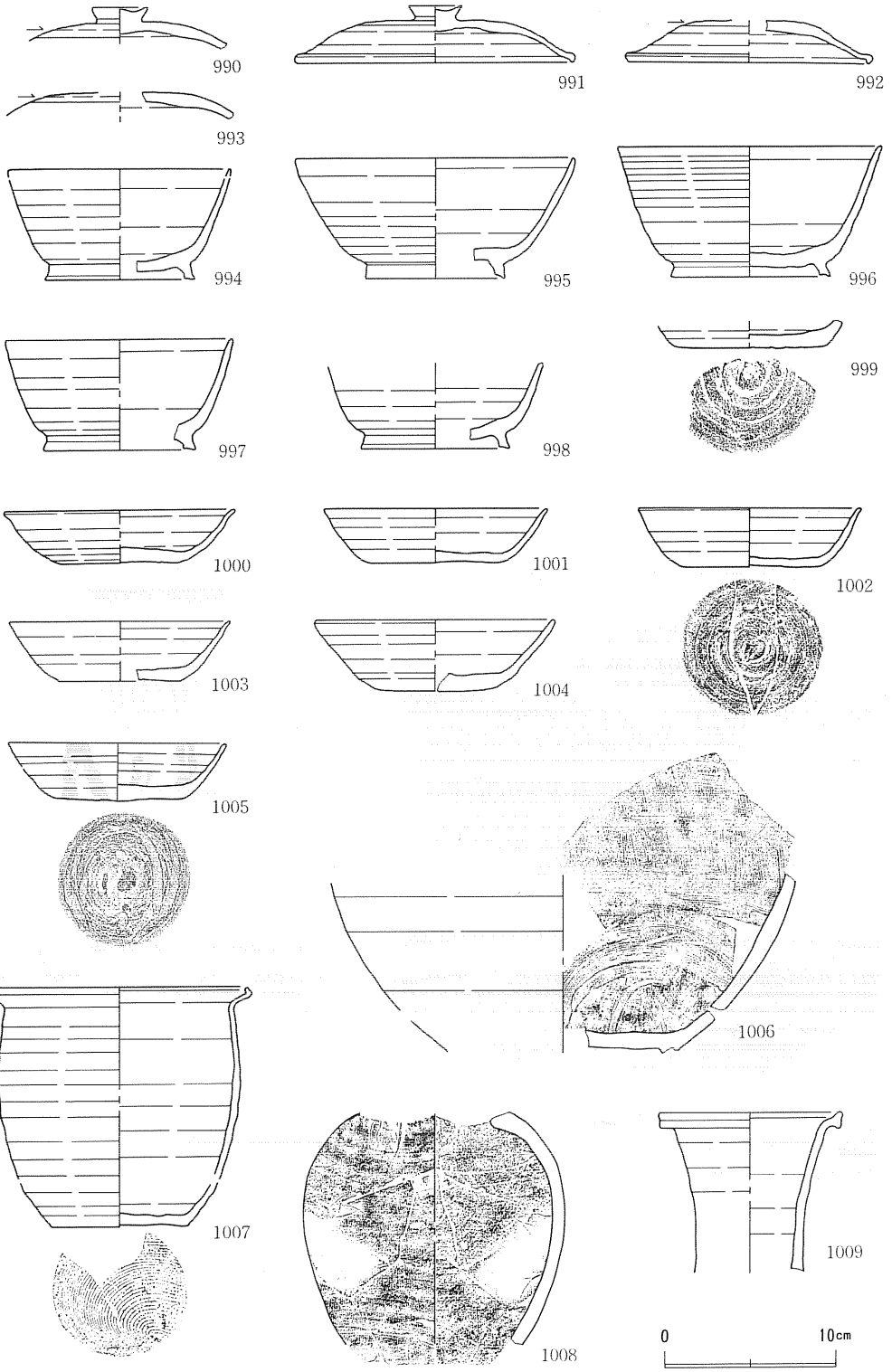
ＳＴ13・14・15

1	暗褐色土（10ＹＲ3/3）	地山ブロック含む。粘性普。やや締まる。	6	黒色土（7.5ＹＲ2/1）	炭化物粒微量。粘性・締まり普。
2	黒褐色土（10ＹＲ2/3）	粘性・締まり普。	7	明黄褐色土（10ＹＲ6/8）	炭化物粒小量。粘性・締まり強。
3	黒褐色土（10ＹＲ2/2）	地山粒・炭化物粒含む。粘性・締まり弱。	8	暗褐色土（10ＹＲ3/4）	炭化物顕著。粘性強。締まりややあり。
4	黄褐色土（10ＹＲ5/6）	礫・地山ブロック含む。粘性・締まり強。	9	褐色土（10ＹＲ4/4）	明黄褐色土がブロック状に含む。粘性・締まり普。
5	明黄褐色土（10ＹＲ6/6）	小地山ブロック顕著。粘性強。締まり普。	10	黄褐色土（10ＹＲ5/6）	小地山ブロック微量。粘性・締まり強。

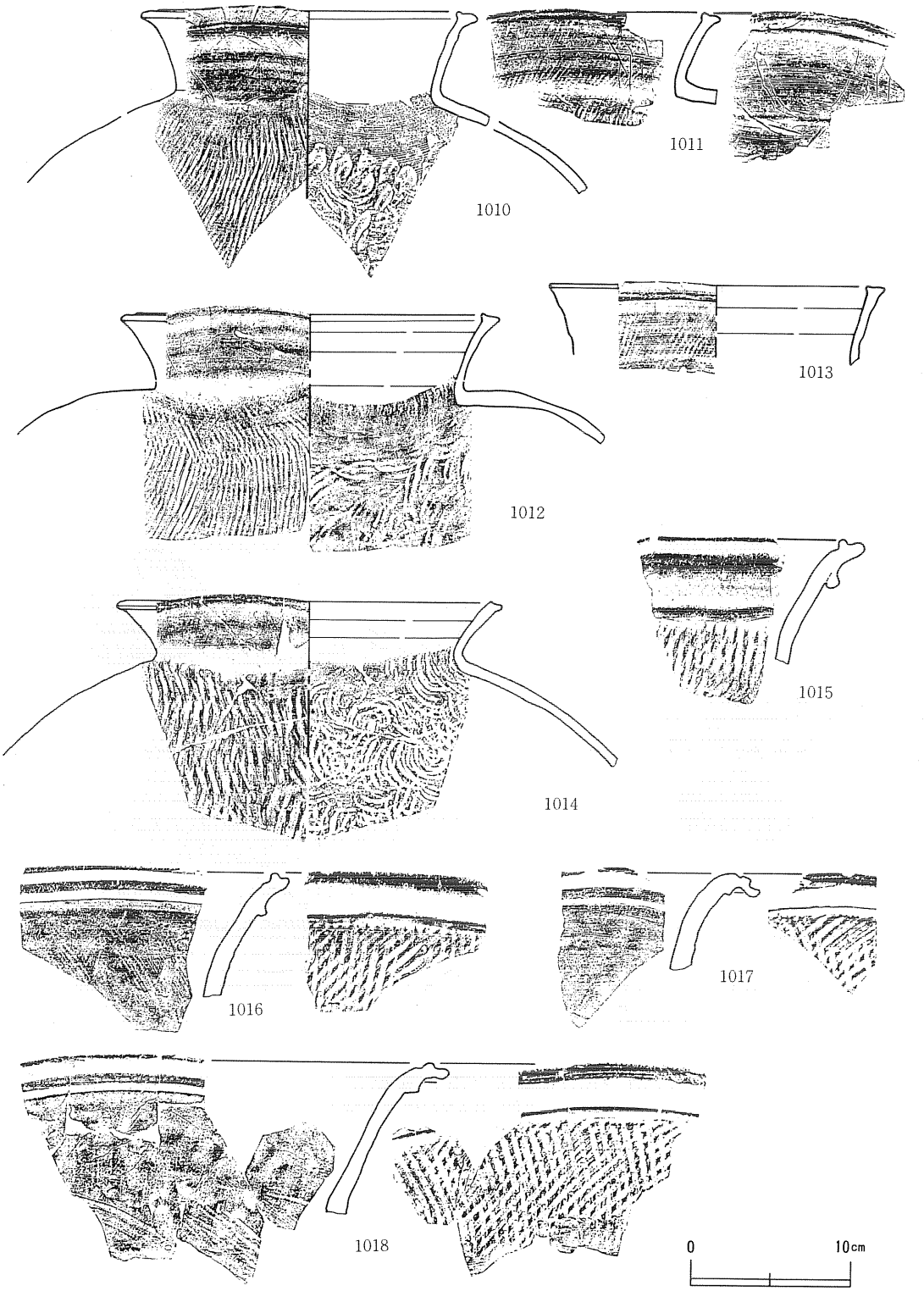
11	黒褐色土（10ＹＲ3/1）	焼土・炭化物粒顕著。粘性・締まり普。	14	黒色土（10ＹＲ1.7/1）	炭化物多量。焼土粒微量。粘性・締まり弱。
12	黒色土（10ＹＲ2/1）	焼土・地山・炭化物微量。粘性・締まり普。	15	黒褐色土（10ＹＲ3/2）	焼土粒・地山粒少量。土器がつまっている。
13	暗褐色土（10ＹＲ3/3）	焼土・地山・炭化物粒顕著。粘性・締まり普。			



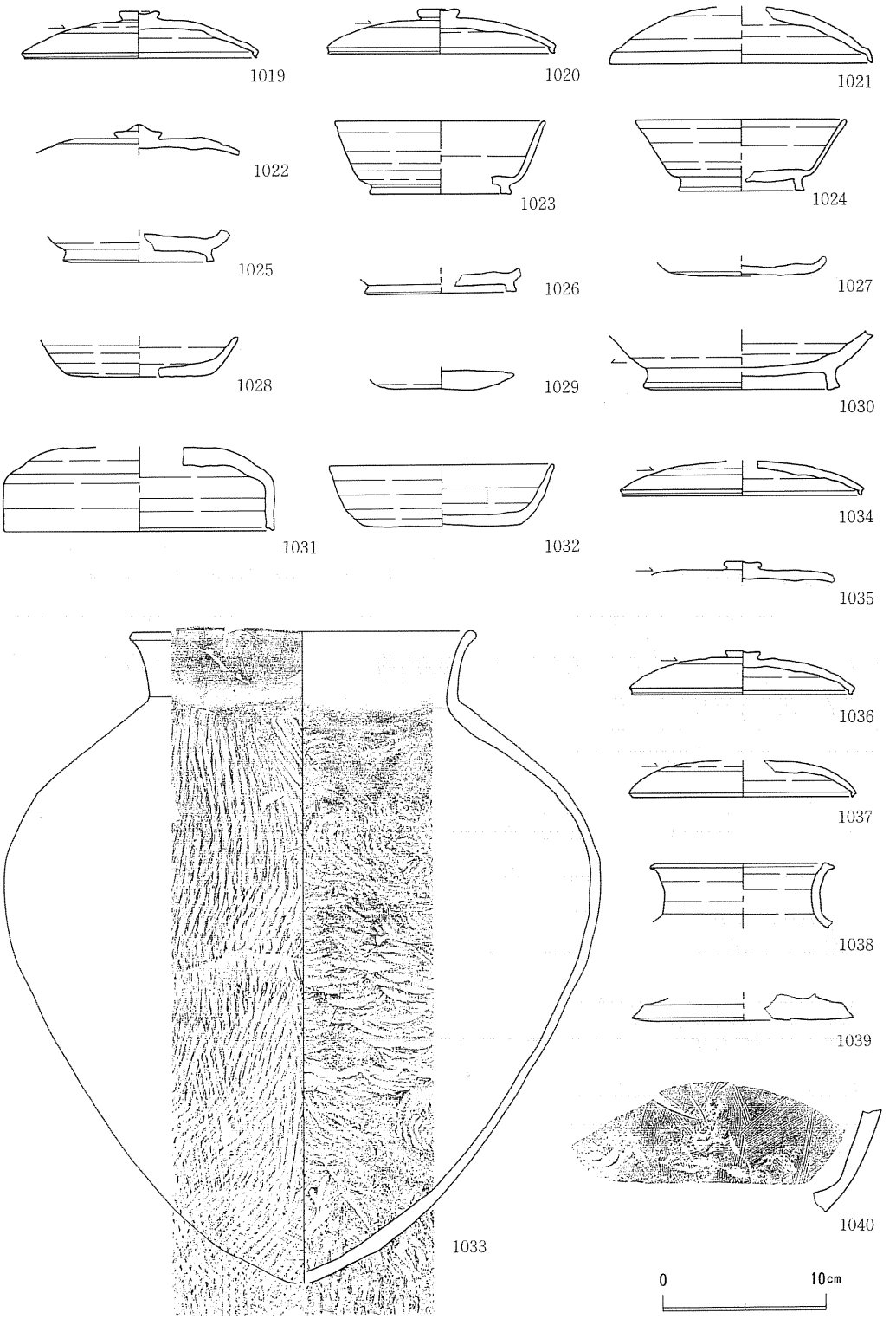
第87図　ＳＴ13・14・15平面図



第88図　遺構内出土土器(52)　ＳＴ13



第89図　遺構内出土土器(53)　ＳＴ13



第90図　遺構内出土土器(54)　ＳＴ14･15

坏蓋(1034～1037)(第90図、第58表)

天井が丸いもの(1034・1036・1037)と平坦なもの(1035)がある。つまみは、扁平である(1035・1036)。

坏(1032)(第90図、第58表)

褐色灰を呈し、火襷をもつ。

壺蓋(1031)(第90図、第58表、図版57-3)

短頸壺の蓋で口縁外部は黒色を呈している。

壺(1041)(第91図、第59表)

広口壺である。頸部径と高台径が同じで、体部に篦削りを施している。胎土が黄白色で外面に鮮やかな緑の釉が付く。ＳＪ06の製品と思われる。

甕(1033)(第90図、第58表、図版64-4)

中型の甕で口唇部の丸いものである。底部は丸底であるがやや尖り気味になる。

ＳＴ30(第3図)

ＳＴ30は標高58m前後のＭＣ55区を中心として、数少ない土器が散在している灰原である。これらには特に目立った灰層はなかったが、Ｂ区の土器が集中する区域から隔てた斜面変換部に当たること、またＢ区ではめずらしく回転糸切り痕をもつものが集中して確認されることから独自の灰原と判断した。遺物の少ない点からして、本灰原の中心は斜面上方にあり、この部分は灰原の末端に近いと考えられる。

出土遺物

ＳＴ30からは坏蓋・高台付坏・坏・壺・甕(1065～1083)が出土している。

坏蓋(1065～1071)(第92図、第60表、図版45-9)

天井は平坦で肩部が丸味を帯びている。天井部の切り離しはすべて回転糸切りで、1071はつまみの取れた跡にそれが明瞭に確認できる。

高台付坏(1072)(第92図、第60表)

切り離しは回転糸切りで、高台部の断面形は先端が鋭い三角形状を呈している。

坏(1073～1077)(第92図、第60表)

1073～1076は回転糸切りの痕跡をもち、1077は回転篦切りにより幅の広い渦巻の痕跡をもつ。

壺(1078～1080)(第92図、第60表、図版57-4)

1078は短頸壺で内面に同心円状の掻目をもつ。1079・1080は長頸壺で、1079は成形時の三段構成を示す資料である。

甕(1081～1083)(第92図、第61表、図版64-5)

口縁部は、口唇が稜をもって膨らむもの(1081)とやや窪んでいるもの(1082)がある。

2　窯状遺構

SN11(第25図、図版24)

SN11は標高61.5mのLM57区に位置し、ST14下方の再堆積地山排土上に造られている。規模は長軸1.15m×短軸80cm深さが約30cmあり、長軸方向がN－13°－Wを指す隅丸長方形を呈している。凹凸のある床はやや丸みをもって窪むが、斜面に沿って少し傾斜する。壁は東側がやや緩く傾斜するのに対して、3方の壁はきつい傾斜を示す。底面には炭化物層が薄く敷かれたようにあり、その上に焼土がブロック状に厚く堆積している。壁は焼壁が剝がれた状態と思われる。覆土の上面には混在した火山灰層が約10cmの厚さで堆積していた。遺物は、他から混入したと考えられる土器片が上層で数点出土している。

3　溝状遺構

SD28(第32・33図、巻頭図版2)

SD28はSJ05aに重なって、それより新しく、さらに斜面上方に延びている。前後2期存在し、新しい方がa古いほうがbである。SD28bは、底面に窯壁・炭化物・地山土が充塡している。その検出された部分の規模は上端で約2.6m×下端で約40cmあり、深さが約1.8mと深く断面形が漏斗状の形態を呈している。SD28aは底面に炭化物はないものの、窯壁がブロック状に充塡している。その規模は上端で約2m×下端で約40cmあり、深さがおよそ90cmで片側がU字状になっている。以上よりSD28a・bは灰層を底面にもつ溝の可能性があるが、その全体的な在り方は捉えることができなかった。したがって、ここでは灰原の可能性があるものの一応溝として捉えることにした。

4　土坑

SK37(第31図、図版25)

SK37はSJ05f焚口付近の床下に位置している。形態は坑口部が径75cm前後の略円形、底面が長軸55cm×短軸45cmの隅丸方形状を呈し、SJ05床下の最も深いところで80cmである。この土坑は斜面下方に段状の法面が付き、それ以外の3つは底面で丸味をもち連続した傾斜を示している。この土坑の機能は不明であるが、本土坑はSJ05fの床面に完全に覆われていること、本土坑の覆土がSJ05f窯壁面の裏側まで達していること、堆積状態が自然堆積と考えられる点などから、SJ05と無関係な別の遺構と考えられる。ただし、SJ05fがそのような状態の場所を焚口に選定した可能性は考えられる。SJ06との関係も不明である。遺物は不明瞭な小破片が数点出土した。

SK16(第93図、図版26)

SK16はLJ58・59区にまたがって位置し斜面上方側が調査区境界で画されている。標高63.5～64mの急斜面に位置している。本土坑は等高線にほぼ直交する方向に掘られ、平面は溝

状を呈するがやや曲がっている。底面は斜面の傾斜とは逆に、斜面上方側が深くなっている。両側の壁は急傾斜を示し凸凹がある。遺物は覆土から甕の破片が1点出土した。この遺構の性格は判然としないが、底面が傾斜する不自然さや斜面に構築されているところから、窯構築途中で作業を断念したか、地山の状態を知るために掘った穴ではないかと考えられる。

5　性格不明遺構

ＳＸ09(第94・95図、図版27・28)

ＳＸ09はＬＴラインに沿うようにしてあり、55～58区までの範囲に位置している。ＳＸ10を切り込んでおり、標高59～63mの斜面に構築されている。全長13.5mのうち斜面上方の半分は急斜面を横穴状に掘り、下方はその横穴状部分の床がスムーズに移行した底面をもち溝状に掘られている。横穴状部分の入り口付近は、長軸4m×短軸3mにわたって楕円形の摺鉢状に浅く抉られている。横穴状部分の規模は奥行5.55m、最大高は1.3mあり、幅は中央で1.6m、入口付近では約1mである。床の4箇所には不定形の浅い穴があり、側壁左奥と奥壁下には不定形の段状部分がある。また右側壁下には幅10～20cm深さ5cm前後の溝が掘られ入口まで達している。壁面には手斧の痕跡が明瞭に残されている。横穴状部分の覆土の状態は、入口を塞いで中央までなだらかに流れ込み、それ以外は掘り出した際の排土もなく空洞になっていた。そして床には須恵器片が敷いたように散在していた。その中の1片は近世以降と思われる摺鉢の破片である。溝状部分の幅は35～60cmで、深さは横穴状部分側で約2m、斜面下方の末端で約30cmである。埋土中には須恵器や土器を含む層があり、ＬＴ56区のグリッド杭や下方には量的には少ないが灰白色の火山灰を検出している。以上のことと調査中に水が涌いたり浸み出したりする状況から、ＳＸ09は作業途中で断念した古代の造りかけの穴と考えられるが、近世以降に再利用されたか、近世以降に入口が部分的にでも開口しそこを通して摺鉢の破片が流れ込んだ可能性がある。この遺構が古代において造られたとすれば、須恵器窯の可能性は薄いが、炭窯の可能性があるかもしれない。

出土遺物

ＳＸ09からは高台付坏・鉢・甕(1042～1047)が出土している。

高台付坏(1043～1045)(第91図、第59表)

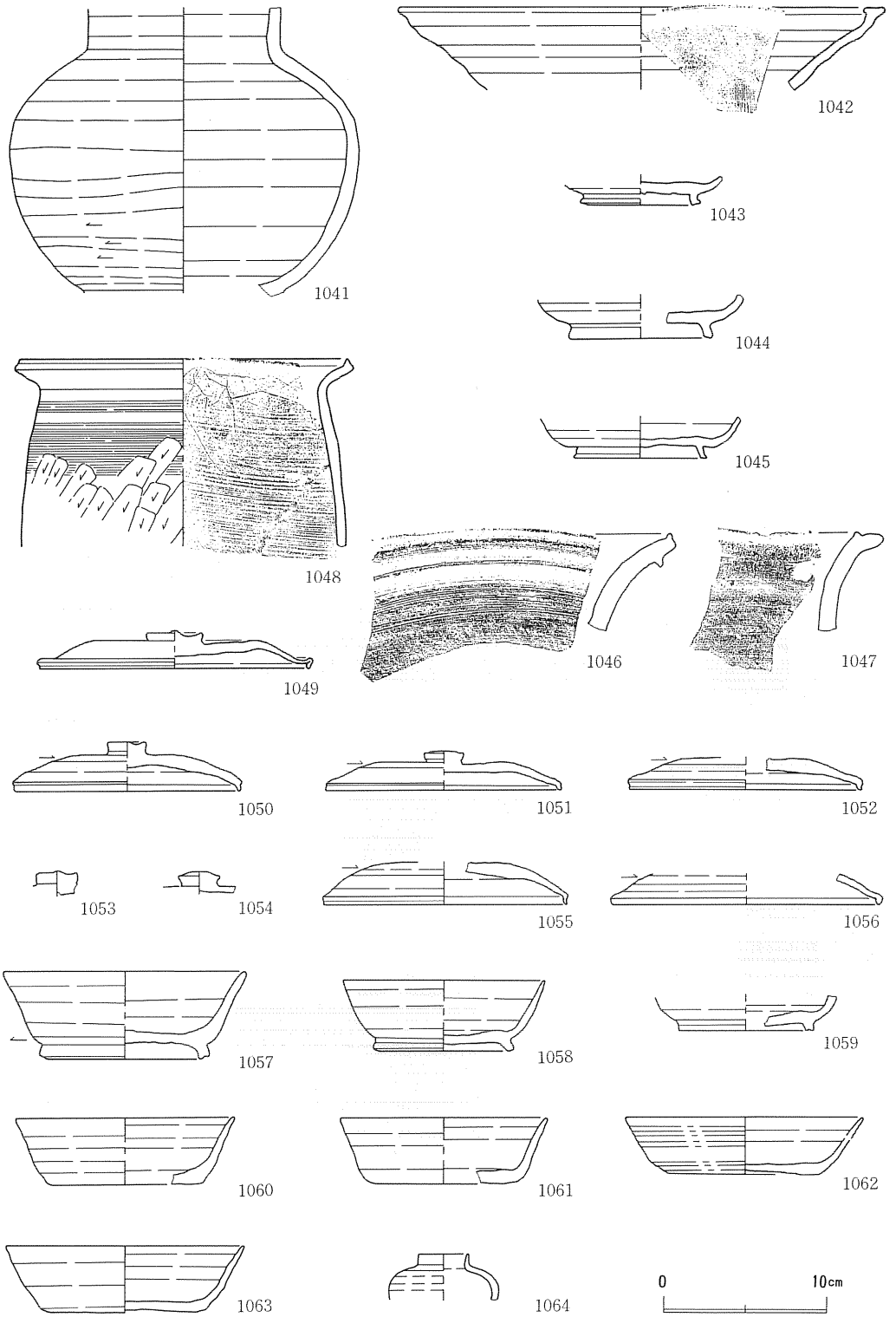
高台は外傾し、高く幅が太いもの(1044)、同じく細いもの(1045)がある。

鉢(1042)(第91図、第59表)

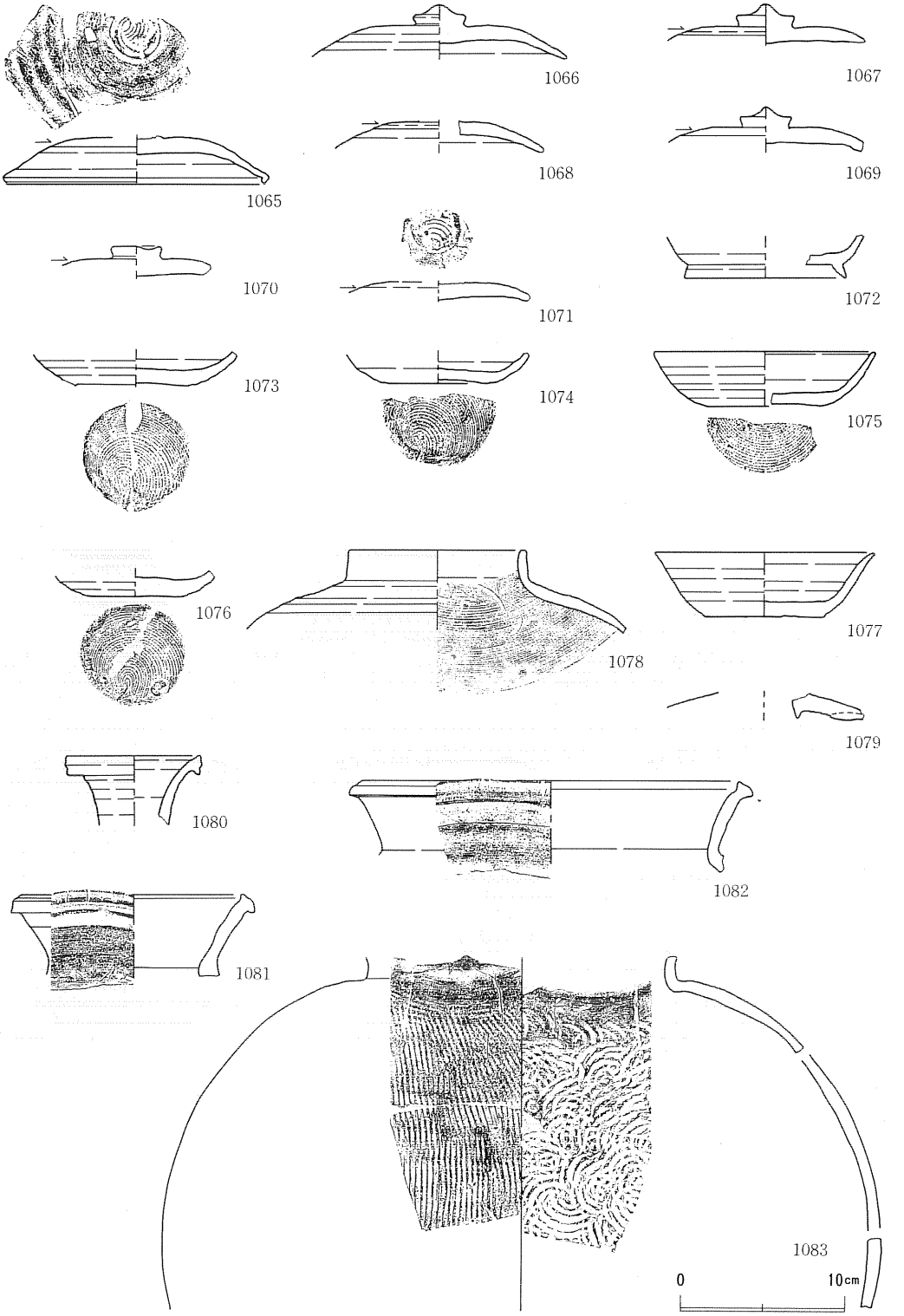
近世以降と思われる摺鉢である。口縁部内外に黒褐色の釉が付く。また口縁外面には重ね焼きの跡が付く。

甕(1046・1047)(第91図、第59表)

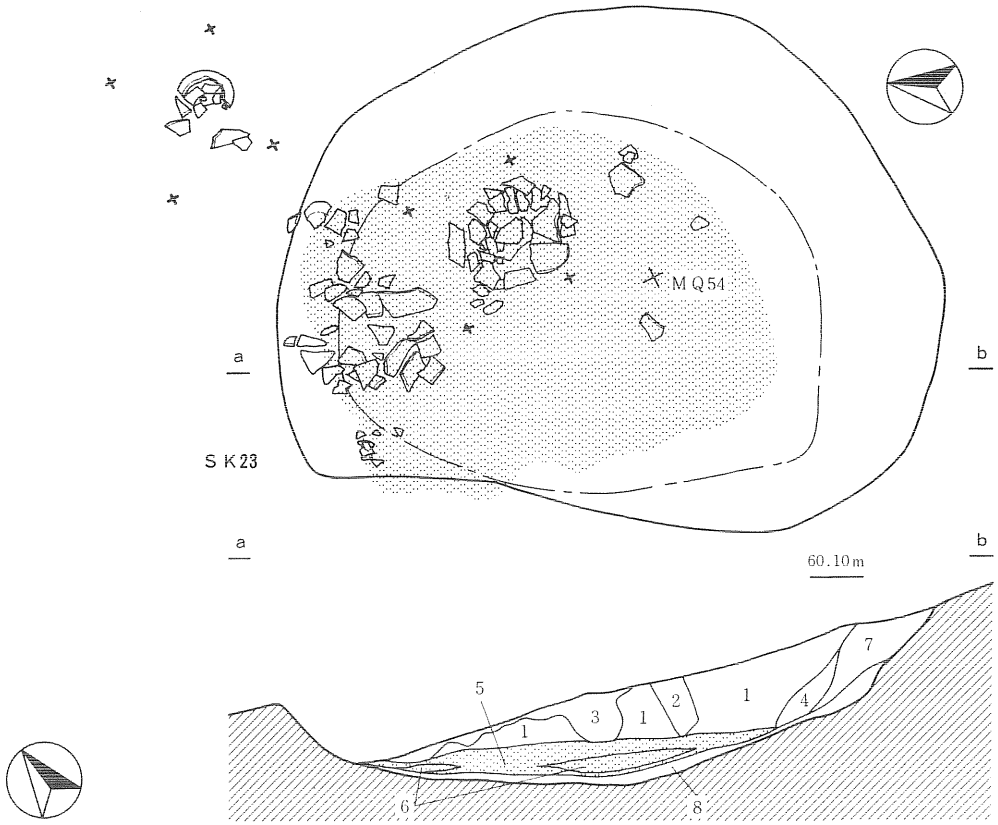
大型と思われる口縁部破片である。



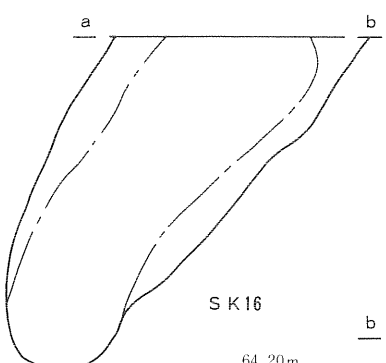
第91図　遺構内出土土器(55)　ＳＴ15・ＳＸ09・10・29

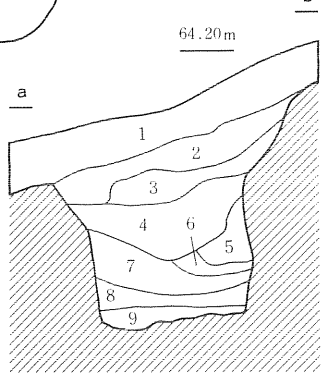


第92図　遺構内出土土器(56)　ＳＴ30



SK23
1　黒　色　土（7.5YR$^{1.7}/_{1}$）　粘性・締まり弱。
2　暗褐色土（10YR$^{3}/_{4}$）　粘性・締まり弱。
3　暗褐色土（10YR$^{3}/_{4}$）　粘性・締まり普。
4　黒褐色土（10YR$^{3}/_{2}$）　粘性普・締まりややあり。
5　明黄褐色土（10YR$^{6}/_{8}$）　火山灰。粘性弱。締まりややあり。
6　にぶい黄橙色土（10YR$^{7}/_{4}$）　火山灰。粘性弱。締まりややあり。
7　暗褐色土（10YR$^{3}/_{4}$）　粘性普。締まりややあり。
8　褐　色　土（10YR$^{4}/_{6}$）　粘性・締まりややあり。





SK16
1　にぶい黄褐色土（10YR$^{5}/_{4}$）　表土。地山粒顕著。粘性普。締まり強。
2　にぶい黄褐色土（10YR$^{5}/_{4}$）　地山粒微量。粘性普。締まりややあり。
3　にぶい黄褐色土（10YR$^{5}/_{4}$）　地山粒顕著。締まりややあり。
4　明黄褐色土（10YR$^{6}/_{6}$）　地山粒の集合。粘性・締まり弱。
5　明黄褐色土（10YR$^{6}/_{6}$）　地山土。粘性・締まり強。
6　にぶい黄褐色土（10YR$^{5}/_{4}$）　地山粒微量。粘性普。締まり弱。
7　明黄褐色土（10YR$^{6}/_{6}$）　地山粒の集合。粘性普。締まり弱。
8　明黄褐色土（10YR$^{6}/_{6}$）　粘性・締まり弱。
9　にぶい黄褐色土と明黄褐色土が半々。粘性・締まり弱。

第93図　土坑平面図(1)

ＳＸ10(第94図、図版27)

ＳＸ10はＬＴ55･56･57区を中心に位置し、一部がＳＸ09によって切られている。確認面での平面形は斜面上方がやや狭い卵形を呈し、長軸が6m以上、短軸が斜面上方で約2m、下方で約3.5mであるのに対し、底部の平面形は中央やや上方でくびれた下ぶくれのダルマ形を呈する。底面は、僅かな窪みが見られるものの略水平である。壁のうち３方はやや急斜度であるが、上端部では中以下がオーバーハングしている。底面近くには、厚さ15～20cmの火山灰が水平に堆積しており、火山灰よりも上の層から小破片のみの土器が少量出土している。

出土遺物

ＳＸ10からは坏蓋･甕(1048･1049)が出土している。

坏蓋(1049)(第91図、第59表、図版45-5)

天井が平坦で低く、端部は内側に折り返されている。

甕(1048)(第91図、第59表、図版68-8)

長胴で、口縁部がくの字状を呈する。色調は橙色である。

ＳＸ29(第96図、図版29･30)

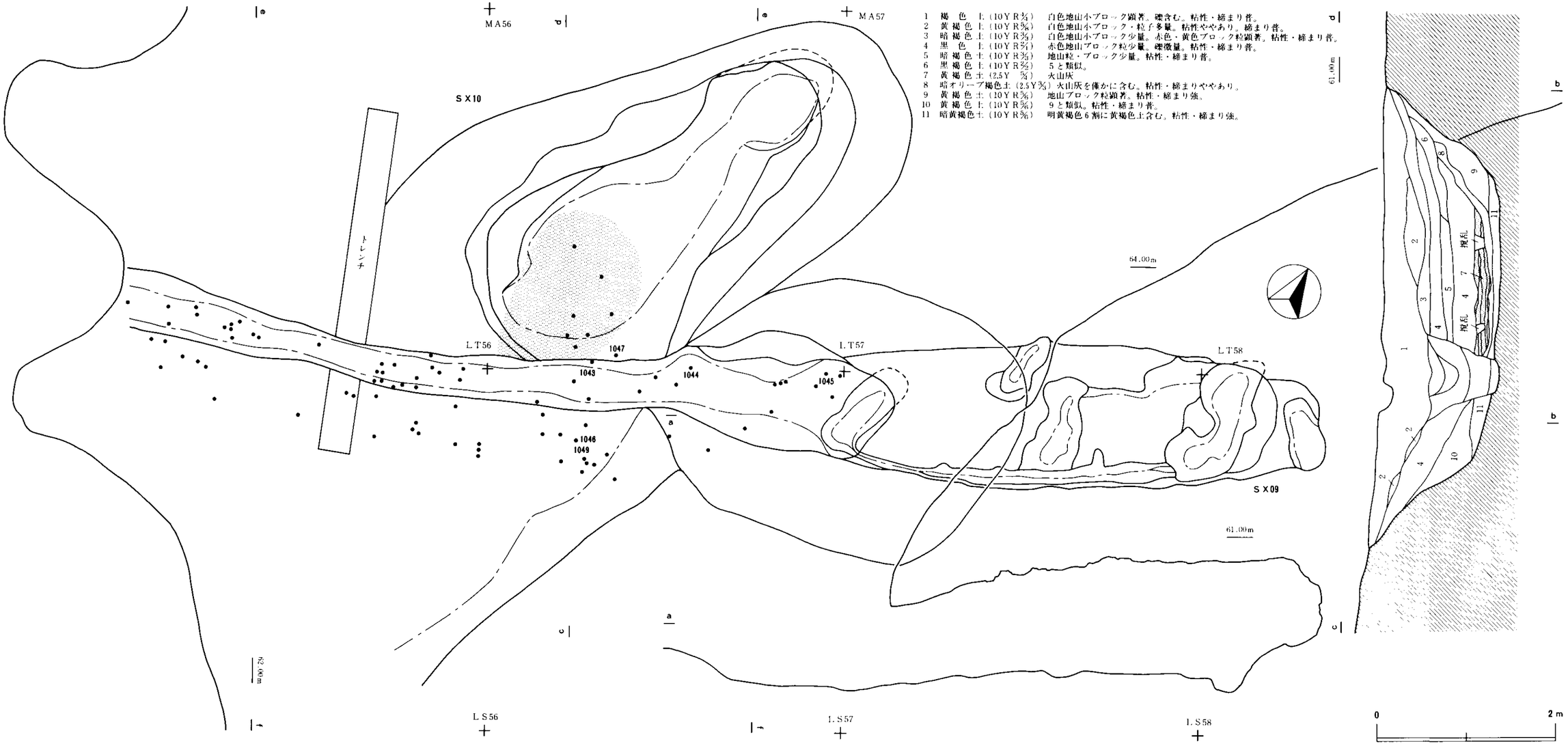
ＳＸ29は、ＬＲ56･57区を中心としてＳＪ05窯跡とＳＸ09との中間に位置し、等高線に直交して構築されている。本遺構の上面における規模は、全長約5m最大幅1.5mで、斜面下方(手前側)が開口する細長い飯篭状を呈するが、底面における形状はこれと異なっている。すなわち、手前側から奥壁側に向かって3.5mまでは平面形に沿う形であるが、その奥側は長さ約1.5m×幅70～90cmの長方形を呈している(この部分を奥部とする)。この奥部の三方の壁は、直線的でほぼ垂直に掘られており、全体の形状は長さ1.5m×幅70～90cm×高さ1～1.4mの箱形である。奥壁からその手前側3.2mにかけての床面はほぼ平坦で、特に踏みしめられたような状況ではなく、前述の壁を含めて火熱を受けた痕跡はない。奥部を含めての埋土は、本遺構周囲に存在する二次堆積土の流入土が主体で、自然堆積土と考えられる。また、奥部との境から手前側2.2mの床面上には小窯壁･礫を含む土器破片がやや密集して厚さ約5cmで分布しており、この下部と奥部床面上には木炭片が見られる。これらの土器片は、その出土状況から一括資料として捉えられるものである。なお、奥部の入口に当たる両側の地山土は、幅約30cmのやや斜めに切り立った面をなしており、手前側と奥部を仕切る構造であった可能性もあるが判然としない。

出土遺物

ＳＸ29からは坏蓋･坏・高台付坏･壺(1050～1064)が出土している。

坏蓋(1050～1056)(第91図、第59表、図版45-6～8)

天井が平坦なもの(1050～1052)、丸いもの(1055)がある。つまみはボタン状のものが多い。



1　褐　色　Ⅰ:（10YR⅗）　白色地山小ブロック顕著。礫含む。粘性・締まり普。
2　黄褐色　Ⅰ:（10YR⅝）　白色地山小ブロック・粒子多量。粘性ややあり。締まり普。
3　暗褐色　Ⅰ:（10YR⅜）　白色地山小ブロック少量。赤色・黄色ブロック粒顕著。粘性・締まり普。
4　黒　色　Ⅰ:（10YR⅔）　赤色地山ブロック粒少量。礫微量。粘性・締まり普。
5　暗褐色　土:（10YR⅜）　地山粒・ブロック少量。粘性・締まり普。
6　黒褐色　Ⅰ:（10YR⅔）　５と類似。
7　黄褐色　土:（2.5Y　⅔）　火山灰
8　暗オリーブ褐色土:（2.5Y⅗）火山灰を僅かに含む。粘性・締まりややあり。
9　黄褐色　土:（10YR⅝）　地山ブロック粒顕著。粘性・締まり強。
10　黄褐色　Ⅰ:（10YR⅝）　９と類似。粘性・締まり普。
11　暗黄褐色　土:（10YR⅝）　明黄褐色６潮に黄褐色土含む。粘性・締まり強。

第94図　ＳＸ09･10平面図

高台付坏(1057～1059)(第91図、第59表、図版50-1)

高台が太くやや高いもの(1057)と同じく低いもの(1058・1059)とがある。1059は接地部に沈線をもつ。

坏(1060～1063)(第91図、第60表、図版54-9・10)

深く箱型のもの(1060・1061)とそうでないもの(1062・1063)とがある。両者の焼成状態および色調は共通している。

壺(1064)(第91図、第60表)

短頸壺のミニチュア品である。

6　遺構外出土遺物

遺構外からは坏蓋・高台付坏(埦)・坏(埦)・壺・硯・甑・鉢・横瓶・長頸瓶・甕・器種不明土器(1084～1399)が出土している。

坏蓋(1084～1153)(第97・98図、第61～64表、図版45-10～15)

天井が平坦でやや高いもの(1087・1088)、丸く高いもの(1090)、扁平なもの(1093)、端部は屈折して立つもの(1091・1145)、外傾するもの(1133・1148)、弯曲するもの(1093・1151)などさまざまな形態がある。つまみも擬宝珠形、亀頭形・ボタン状などさまざまである。

高台付坏(1154～1183)(第98・99図、第64～66表、図版50-2～10)

口縁は外反するもの(1163・1164)、直線的なもの(1174・1176)、内弯気味のもの(1161)などさまざまな形態がある。高台も外傾するもの(1157・1158)、短く立つもの(1171)、端部が内傾するもの(1176・1178)などさまざまである。

坏(1185～1199・1203)(第100図、第66・67表、図版54-11・12、81-5・6)

口縁が内弯するもの(1186)、直線的なもの(1189)、外反するもの(1193)などさまざまな形態がある。1203の底部外面には、箆書きした木の葉の絵が上手に描かれている。

埦(1201・1202)(第100図、第67表)

埦形になる可能性のある資料。

高台付埦(1205)(第100図、第67表、図版57-5)

高台が高く外傾し、接地部が窪む。

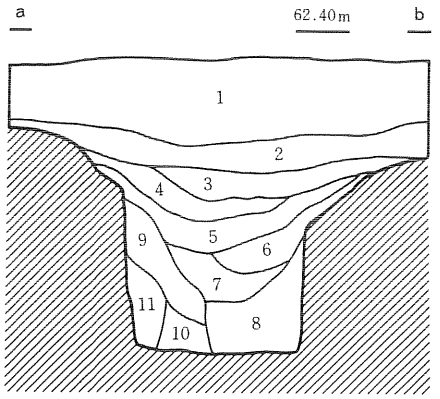
壺蓋(1207～1214)(第100図、第67表、図版57-6～10)

口唇部は内面が鋭く立つもの(1207)、やや窪むもの(1210)、尖るもの(1211)、丸いもの(1212・1213)などがある。つまみは擬宝珠形(1207・1210)、扁平なもの(1208)がある。

壺(1204・1215～1226・1237・1239・1240)(第100～102図、第67～69表、図版57-11・12、58-1・2・5・8、66-5)

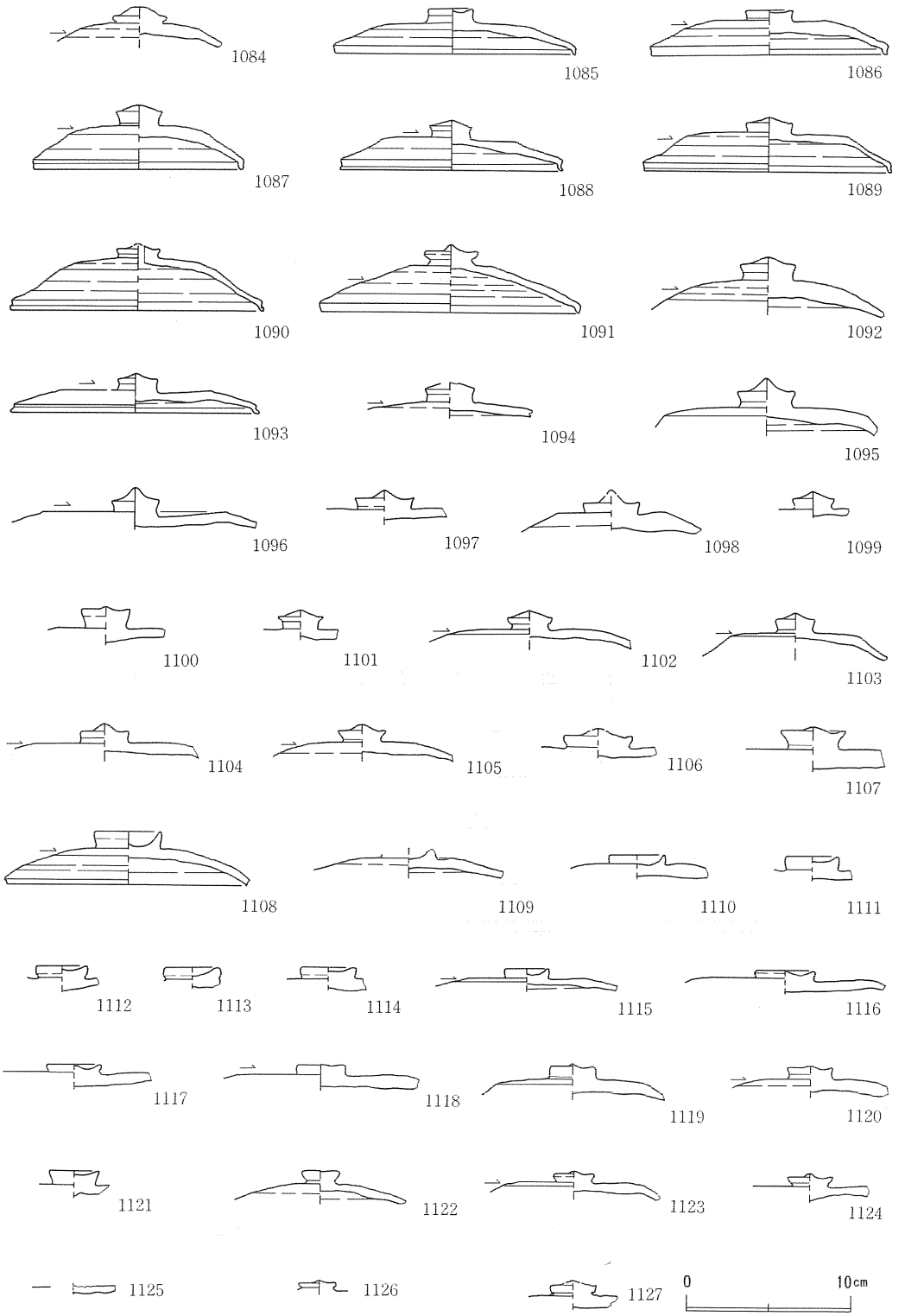
短頸壺(1215～1218)、長頸壺(1239・1240)、小壺(1220)、ミニチュア土器(1219)、底部資料

第95図　ＳＸ09遺物出土状況図および工具痕正面図

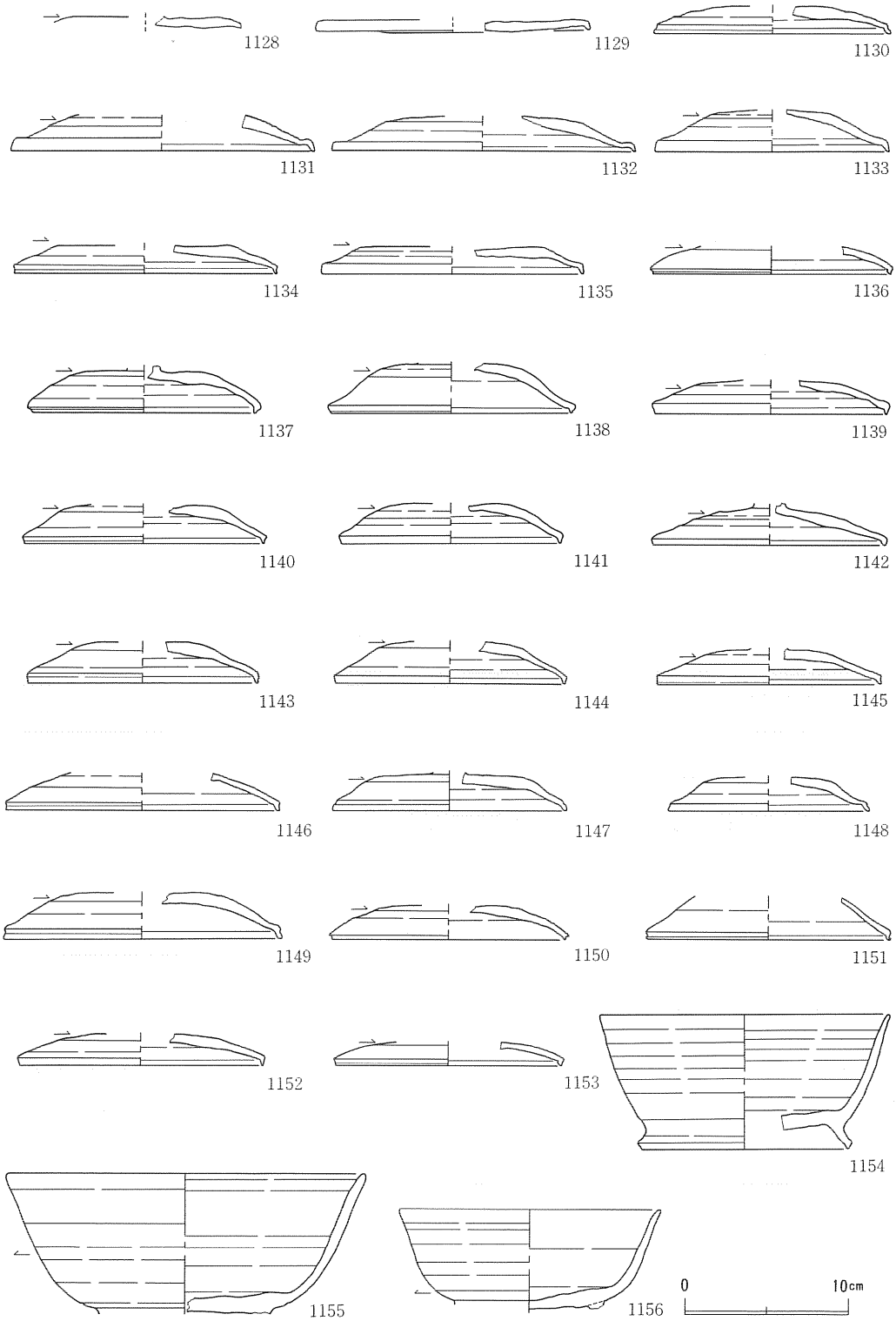


1	褐　色　土	(10YR4/4)	小地山ブロック・小礫顕著。粘性・締まり弱。
2	黒褐色土	(10YR3/2)	礫粒顕著。粘性・締まり普。
3	暗褐色土	(10YR3/4)	小礫・小礫粒少量。粘性・締まり強。
4	暗褐色土	(10YR3/3)	３層と同類。やや暗い炭化物粒徴量。粘性強。締まり弱。
5	褐　色　土	(10YR4/4)	小礫顕著。炭化物粒徴量。粘性・締まり強。
6	褐　色　土	(10YR4/4)	５層と同類。小礫少量。炭化物徴量。粘性・締まり普。
7	暗褐色土	(7.5YR5/6)	砂粒・炭化物粒徴量。粘性・締まり強。
8	暗褐色土	(7.5YR5/6)	炭化物粒徴量。粘性強。締まり弱。
9	黄褐色土	(10YR5/6)	地山土少量。炭化物粒徴量。粘性・締まり強。
10	黄褐色土	(10YR5/6)	淡黄色粒少量。底面に炭化物粒含む。粘性強。締まり弱。
11	明黄褐色土	(10YR6/8)	淡黄色ブロック含む。粘性・締まり強。

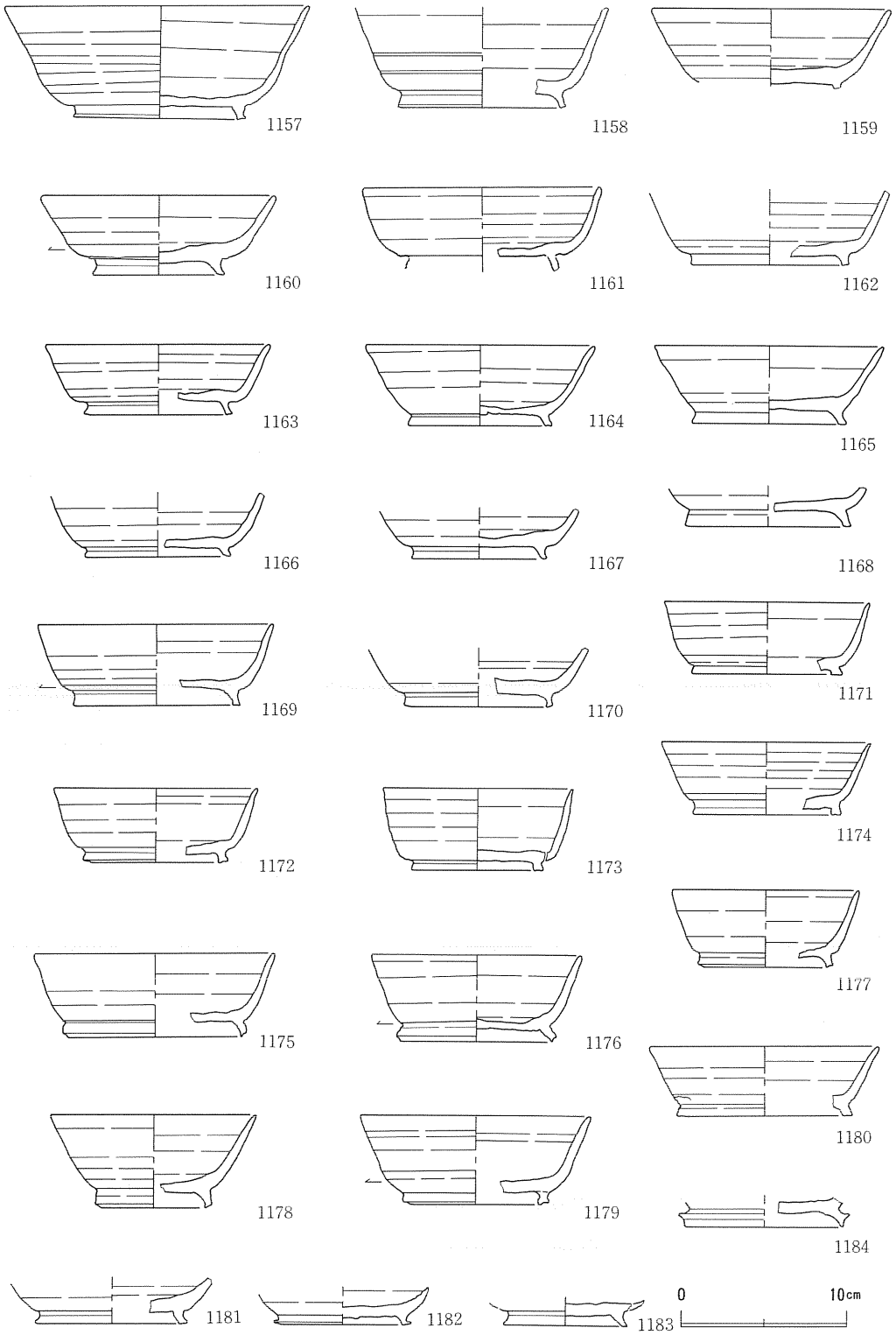
第96図　ＳＸ29平面図



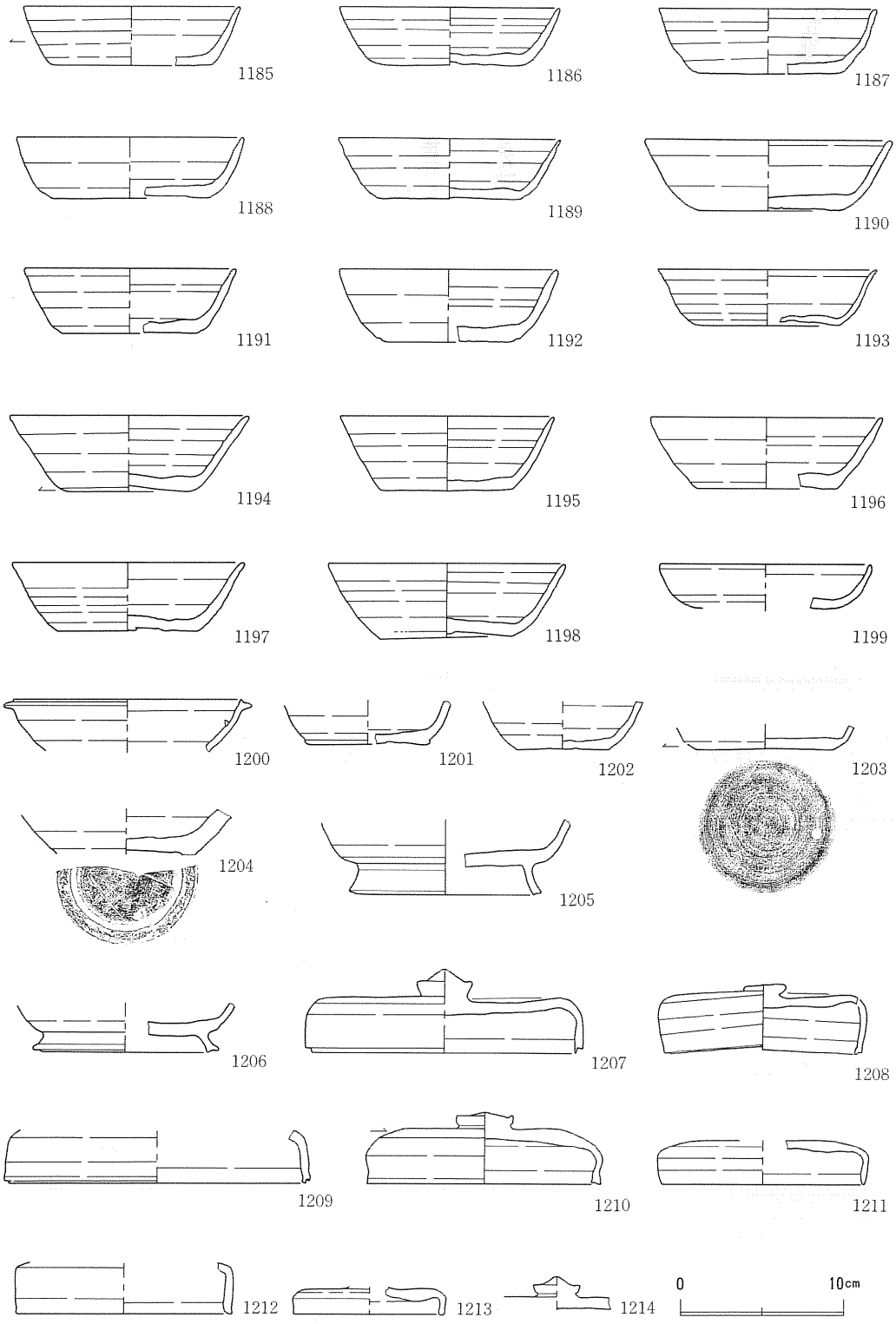
第97図　遺構外出土土器(5)



第98図　遺構外出土土器(6)



第99図　遺構外出土土器(7)



第100図　遺構外出土土器(8)